
Magic of Kingdom

萌黄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c o f K i n g d o m

【Nコード】

N 4 2 9 6 E

【作者名】

萌黄

【あらすじ】

少女は、夜毎夢に見る養母の遺言を頼りに幻の王国を捜し続ける。共に旅するのは幼なじみで魔法使いの少年と、腕は立つが正体不明の剣士。遺言の真相、そして王国の魔法とは？剣と魔法の異世界ファンタジー。

プロローグ - Prologue

風が強い夜だった。

薄く色づいた木の葉は舞い踊り、地に敷き詰められた枯葉たちは力サカサと鳴いている。

遠くにやわらかい光が見えた。民家の灯りは少し離れたこの雑木林にも細々と届き、足元を照らす。壊れた街灯が頭上でわずかに光を漏らしていたが、それより月の光のほうが目立つて見えた。

ふと、暗闇に人影が紛れた。

黒のマントを羽織った男が灯りの下に立っている。同色の帽子を鼻の辺りまですっぽりかぶっているため顔は見えず、シルエットだけが鮮明に木の葉の上に浮かび上がる。妙齡の男である。

あの娘は、まだ泣いているのだろうか。

男は遠くに見える村の灯りをぼんやり眺めて思った。頭上で街灯が、じじじ、と鳴る。

葉を踏みしめる音がした。慌てて男が振り向くと、驚いた野うさぎが林の中へ駆けていくのが見えた。男は困惑とも安堵ともとれないため息をついて、村の反対方向に向かって歩き出した。

林の下のおげ道を抜けて、大きな丘にたどり着いた。村の灯りを見下ろせる大きな丘だった。その中央に張り巡らされた柵をくぐり抜けると、小さな墓地に出た。男の行く先には先客がいた。

少女は、泣いていなかった。

一等高い場所にある小さな墓石の前で、静かに寝息を立てている。目尻に残る涙の痕が、痛々しかった。

男はそっと少女に触れ、その小さな頭を撫でた。ゆっくり、慈しむように少女を抱いて、墓前に腰掛ける。少女は男の腕に体を任せたまま、なおも寝息を立てていた。

「朝になれば、すべてもと通り」

男は宙を見上げ、誰にもなく呟いた。

「君は、また彼に会えるよ」

男の眩きは、少女の耳には届かない。

第一章 一

フブリ・トリバンドラムは、夢を見ていた。

死んでしまうの？ 私をひとりおいて、行ってしまふの？

夢の中の少女は、真っ白なベッドに突っ伏して金切り声に近い泣き声で喚いていた。

フブリはそれを見ている。部屋の隅に浮かび、靈魂のような存在で少女を見下ろしている。

そのときフブリは、何もできない。

夢の中で彼女は、何度も養母が息を引き取る瞬間を見ている。それなのに第三者のフブリはただ息を呑んでそれを見つめるだけで、何もできないのだ。

あんたはどうしてそんなに無力なの

フブリは幼い自分に吐き捨てるように言う。けれど夢の中ではそんな言葉も届かない。

大きくしゃくりあげる幼いフブリに白く細い手が伸びる。それは優しく頬に触れ、あふれ出る涙をすくった。白いシャツからわずかに覗く青白い顔が微笑んでいる。

養母シルヘット・トリバンドラムは強い女だった。流行り病の熱病にかかっても、フブリに心配をかけさせないようにと平然を装う。病がその身体を蝕み、そして今、生きるか死ぬかの状況にあってもなお、フブリに優しい笑顔をくれる。

汗だくの顔をフブリに向けたまま、シルヘットは重たそうにまぶたを閉じた。

フブリはシルヘット、シルヘット、と半ば狂気したように叫んだ。幼い自分の声なのか、夢を見ている自分の声なのか、もうわからなかった。

フブリは知っている。

シルハットが死んだ後、瘦身の少年が勢いよく扉を開けてやっ
てくることを。

そして、もうすでにこと切れたはずのシルハットが二人に奇妙な遺
言を残すのだ。

『カラア……カラア……を……』

呪文のように繰り返されるその言葉を、フブリは恐ろしく思った。
やがてシルハットの閉じたままの口から流れていた言葉は、機械音
のようなものにならなくなっていく。

すると、突然シルハットの顔がぐにやりと歪む。この世のものとは
思えない醜悪な姿でフブリ、フブリ、と呟きながら近づいてくる。

フブリは腕を掴まれそうになり、ひっ、と漏らして後ずさり、どこ
へともなく走り出す。

幼いフブリはもういなかった。少年も、シルハットも。部屋だった
はずのここはどこを見ても真っ暗で、どこまで走っても終わりがな
い。まるで宇宙空間に一人取り残されたようだった。

フブリは走った。次から次へとやって来る正体不明の恐怖から逃れ
るために。

逃げなくちゃ……

ひたすら夢中に走るフブリは、いつの間にか暗い森の中に入ってい
た。

さっそうと生い茂る黒い葉の樹木を掻き分け、枝に切り傷をつけら
れようと走り続ける。奥へ進むと小川があり、周囲で色鮮やかな
花々が、のんきに茎を上下しながら歌っている。

その先には 光があった。

フブリは恐れずにその光に飛びこんだ。すると辺りは突然真っ暗な
闇に包まれ

フブリは崖から落ちるのだ。

闇に彩られた奈落の底が、抵抗できないフブリを呑みこむ。

私はまた、ひとりになるの？

第一章 二

「っは……！ はっ……はぁ……は……は……」

勢いよく起き上がると、ふいこのように息を吐き出す。心臓の音が、早鐘のごとく頭を打つ。まるでつい先ほどまで動くのを忘れていたかのような速さだった。

「はぁ……はぁ……」

額に無意識に触れ、びっしょりと肌を濡らす汗に気づく。その感触で、フブリは夢を見ていたことを思い出した。とても恐ろしい夢だった。

窓からはもう朝日が差しこんでいた。眩しさに目をそばめると、ようやく現実に戻ってきたように感じる。自分を落ち着けようと大きく息を吐くと

「大丈夫？」

目前に、突然コップが現れた。目覚めたばかりで混乱していたため、状況を理解するのに時間がかかる。フブリは呼吸に体を支配されながら、しゃべるコップを眺めた。

「ぼくだよ。……落ち着いて、さあしつかり深呼吸して」

コップを差し出した少年の顔が水面に映り、フブリは苦笑した。

「……あ……うん……。ありがと、ルビー。もう大丈夫」

「ずいぶんうなされてたみたいだ」

心配そうに紫の瞳が覗きこむ。

フブリはコップに口をつけた。手も唇もまだ震えが止まらない。羽織っていた一枚きりの毛布を引き剥がし、呼吸を整える。

「この女将さんに温かいものでも頼んで、持ってきてもらおうよ」

フブリは、急いで出て行こうとする少年の服の袖口を掴んだ。

「……いつものことだから大丈夫。もう朝だし、私もすぐに起きるから。朝ごはん、まだでしょ」

微笑んでベッドから出ると、震えが収まった。

「あんまり無理はするなよ……」

「お客さん。申し訳ないんですけどエントランスもお願いできないかねえー」

階下から突然大きな声が響いた。ルビーは扉の隙間から顔だけを出して、今行きます、と言った。下は目を覚ました客たちが騒いでいるのか、人の声が入り混じって聞こえた。

「昨日の『あれ』を直してるんだよ。じゃ、ぼく行くから……食堂でね」

フブリの傍に駆け寄ってそれだけを伝えたルビーは、矢継ぎ早に階段を下りて行った。

それを見送り大きく背伸びをして、フブりは窓を開けた。穏やかな町並みを眺めていると、夢のあとの不快感がすべて風と共に吹き消されていくようだった。

着替えてギシギシ音を出す階段を下りると、数人の宿泊客が円陣を組んでひそひそ話をしていた。中年の婦人たちだった。

「突然宿に押し入ってきたと思ったら刃物でドスツ、ですものねえ」

「でも、五号室の旦那さんも軽症でよかったわよね。ただ女将さんには気の毒ねえ……こんなに宿中荒らされたんじゃ、大変でしょう」

「あら、それなら大丈夫よ。ほら……」

婦人の一人が指差すのとほぼ同時に、フブりは円陣に割って入った。

「あの、ちよつといいですか」

いきなり話しかけられ、婦人たちは怪訝そうに少女を見つめた。フブりは構わず話し続ける。

「その、昨夜ここを荒らした人たちって今どこにいるかわかりますか？」

「さあねえ……と一人が口にするのみな揃えて首を傾げたので、フブりはありがとうとだけ言い残してさっさとその場を去った。あまり長居したくない雰囲気だった。

階下には食堂があるため、周囲は朝食に起きてきた宿泊客たちでざわめいている。心なしか、先ほどよりも人が増えたようであった。

小さいながら、町に一つきりしかない宿である。そのため宿泊客は多い。

ところどころに小さな染みのある壁に必要最小限の白熱灯、ぎしぎし音を立てる螺旋階段はクラシックな雰囲気を漂わせる。装飾は少なく簡素であったが、その中で灯りを反射させて輝く翡翠のカウンターだけが場違いな雰囲気醸し出していた。……昨夜までは。

喧騒の中に人だかりを発見し、フブリは駆け寄った。群衆は少年を取り囲んでいた。

そこには、見るも無残に破壊されたカウンターや、観葉植物のプラントナーが転がっていた。翡翠のカウンターは表面に傷がつけられている上、割れた破片が周囲に飛び散り変形してしまっている。最もひどいのは出入り口で、変形どころかそこにあるはずのドアがないという惨状であった。おかげで玄関からの風通しはよく、朝日がエントランス全体を明るく照らしていた。

少年は、破損した物品に触れただけだった。彼が指に触れただけで倒れていたプラントナーは立ち上がり、割れた翡翠のカウンターは瞬きする間もなくもとの姿に戻るのだ。ルビーがものを一つひとつ修復させる度に、人ごみからは喚声が上がった。

「ルビー、お疲れさま」

フブリは驚くこともなく群れを割って前に出ると、彼の肩を叩いた。「う……うん……でも、なんていうか背後からの視線が熱いって言うか……」

「ごめんねー、お客さんにこんなことさせちゃってさ」
奥で食事の準備をしていた女将が、客の波を掻き分けながら戻ってきた。

「はい、お客さんがたすみませんねえ。遅くなりましたけど朝食は食堂のほうで……」

こちらです、と若い女中が大きく手を振っていた。宿泊客たちは名残惜しそうにルビーを一瞥してから食堂へ向かった。人に注目されることが苦手なルビーは、ほっと息を吐いた。

しかし彼が胸を撫で下ろしたのも束の間、今度は街の通りを歩いている近所の住人たちが、扉のない宿を不思議そうに覗きこみ、ルビーに注目を集めた。そのおかげでまだ朝方だというのにもかかわらず野次馬の数は一気に増え、宿は見物客でいっぱいになった。

「な、何か緊張するな……」

ルビーが赤面しながらちらちら後ろを気にしていると、女将が大きな体軀を反り返してげらげら笑った。

「ここら辺、田舎だからさあ。魔法使いなんて珍しいんだよみんな…… お兄ちゃん綺麗だしね」

綺麗といわれてルビーは更に顔を赤くした。

ルビーは、他人が見ても美しい少年だった。すらりとした瘦躯に整った顔立ち、肌も雪のように白い。色素の薄い茶髪はフブリよりも長く、えりあしが肩にかかっている。

「すげーなー、これが魔法だべー」

「生きてるうちに見れて儲かったなあ」

「兄ちゃん、俺さも魔法かけてくれー」

「……………」

背後のどよめきが大きくなってくると、ルビーはいよいよ閉口してしまった。その額に汗が滲んでいるのを見て、彼の気持ちをフブリが汲み取る。

「……あの、連れはちょっと気が弱いつて言うか、プレッシャーに弱いんで……」

女将はすぐにフブリの真意を看取したようだった。

「ほらあんたたち、泊まる気がないんならさっさと出て行きな！」

この一喝で、多くの見物客は去って行った。残ったのは、食事を終えて戻ってきた宿泊客だけである。彼らはルビーによって修復されたばかりの談話室で、このなりゆきを眺めていた。

「ありがとう、女将さん」

「こんなことお客さんにやってもらうことじゃないんだから当然さね。あ、そうだ。宿代はいららないからね」

フブリは黙って首を横に振った。

「……………私の……………かもしれないから……………」

小さく呟いたが、その声は女将には聞こえていないようだった。

残すはすっかり外れた玄関扉のみだったが、ここでルビーは立ち尽くした。

「これが、言うことを聞かないんです」

首を傾げた女将に、フブリが説明する。

「魔法は、ものや生物に『こうなって頂戴』と呼びかけることなの。カウンターの破片に、もとに戻つてと伝えれば、人間が手を加えなくても戻ってくれる……………ものには命があるんだよ」

「へえ……………。じゃあ、この戸は嫌がつてるのかい？」

「このほうが風通しも日当たりもいいだろ、と言ってます」

女将はまた反り返り、宿中に響きそうな大声で笑った。

「さすがあたしの宿なだけあるね！ そうだねえ……………うん」

周囲を見渡し頷くと、女将は手を振って宿泊客の視線を集めようとした。しかし彼らの視線はすでに、彼女の笑い声によって集められていた。

「お客さんたち、どうでしょうね。ここの扉、なくなってますっきりしたと思います？」

いいんじゃないの？ と誰かが言って、連鎖するように周囲から同じ声が上がった。やがてそれは歓声に変わり、ルビーに向けた拍手に変わった。ルビーは恥ずかしそうにうつむいて、ひたすら周囲の関心が自分たちから離れるのを待っているようだった。

「昨夜、ここを襲った人たちって今どこにいるんですか」

しばらくして宿が穏やかな雰囲気に戻ると、フブリは隅で伝票を整理している女将に小声で尋ねた。ロビーはチェックアウトする客でこった返し、カウンターにはひっきりなしに客が並んだ。

「気になるのかい？」

フブリは黙って頷いた。

「ありゃ、ただの町外れのならず者さ。最近はああいう若者が増え

てきて困るねえ……今流行りの二トって奴かね」

女将はため息をつき、伝票の束で机を叩いた。

「しかし夜中に宿に押し入って金品あさるなんて……」

「何か盗まれたの!？」

「あ、いや……被害はなかったけどね」

少女の必死の形相に、女将は目をぱちくりとさせた。

「しよつぴいた町の警備隊の話じゃ、金目的だった、って自白して
るらしいから。実際ほら、あの翡翠のカウンター、挟り取られてた
る。あたしが駆けつけたときにはレジからお金も抜き取るうとして
いたし」

思い起こせば、確かにカウンターには挟られたような跡があった。

旅の途中でたまたま立ち寄った片田舎 普段なら物取りすら珍し

いこの穏やかな町が、一時騒然となった。フブリが宿泊した宿に、

深夜正体不明の男たちが押し入り、宿中を荒らしていったのだ。し

かし、フブリは犯行のすべてを目撃してはいないため、彼らの目的

がわからなかった。大きな物音と悲鳴がして目を覚ましたときには

すでに階下を荒らした男たちは捕まって宿にはいなかったのである。

女中に呼ばれ、女将はフブリたちに目配せして去っていった。

「……お金目的だった」

「違った……ね」

フブリは遠くを見つめながら、深く息を吐いた。

「よかつたじゃない。最近気を張り詰めすぎなんだ、フブリは」

「夢のことなら心配しないで。大丈夫、もう慣れたって言ってるじ
ゃない」

少女は笑顔を作ったが、それはルビーに余計な心配をかせかせない
ための、事務的な笑顔だった。本当は彼の言う通り、心身ともに緊
張状態を解けない日が続いている。それを暗示するかのように、夜
は毎晩のように悪夢にうなされる。終わりの見えないこの旅は、自
分の肉体も精神も確実に蝕んでいるのだ。

「行こう、ルビー」

客足がまばらになってきたため、カウンターを離れようとしている女将のもとに慌てて駆け寄る。

「あ、チェックアウトします!」

女将は二人の出した宿代を断り豪快に笑った。

「いいのいいの。それより気をつけなよー。ここら辺田舎の割にあいいう変なの多いから!」

ありがとう、と大きく手を振り、宿を後にした。

女将がカウンターから離れようとする

「ふーん……男のほうは魔法使いねえ……」

ロビーの長椅子に腰掛けていた宿泊客の男が、遠ざかる二人の男女を眺めて呟いた。腰まで伸びる金髪を煩わしそうに掻き揚げている。

「……あの子たち、この客? おばちゃん宿帳見せてよ」

もうほとんどの客がチェックアウトを済ませたというのに、出て行った彼らをまだ目で追っている。

「あんた怪しいねえ……まさか今流行りのストーカーじゃないだろうね」

「げほっ!」

男は、口をつけていたコーヒーを吐き出した。

「な、な〜に言ってんだよおばちゃん! この美青年がそんな変人に見える? はっはっはっ」

「凶星のようだね……」

ぎくり、と男は身を硬くして真剣な表情を作った。

「いいかい、あたしがそんなに気になるんなら正々堂々と口説きな
!」

「ぶほっ!」

男は、今度は吐き出した勢いでコーヒーのカップを落とした。

第一章 三

機関車の蒸気を出す音に合わせ、近くの路地がかすかに揺れている。フブりは、広い駅の構内を見渡した。都会風のそこは一面ガラス張りになっており、宿のあった中心部に比べるとおしゃやれな雰囲気が漂っている。それほど多くない改札口からは、大きな荷物を持った人の波が間断なく出入りしていた。

「ねえ、さっきの宿にいた男の人……気づいた？」

「え？ 誰のこと？」

足早にホームを歩くルビーが後ろを振り返った。喧騒が激しいため、声のトーンを高くしている。

「あ、ううん。何でもない」

金髪の男が自分を見ていたような気がした、と言いかけてやめる。気のせいだろうかとは思っていたが、確認せずにはいられなかった。執拗に誰かの視線を感じると、どうしても過敏に反応してしまう。ルビーは嘆息して立ち止まると、フブリの肩を叩いた。

「また……。気を張り詰めすぎだつて言つたる」

「うん……。あー、駄目だね私。ごめん気にしないで」

「いいよ。じゃあぼく、チケット買ってこるから。待ってて」

振り向きざまに言い残し、窓口に向かったルビーの後ろ姿を見送る。

「西行きだろ？ ええと……次は夕方に一本しか出てないねえ」

「次の町までどのくらいかかりますか……」

駅員とのやり取りを遠目に見ながらホームの中をぶらぶら歩いていると、フブりは急な悪寒に襲われた。

視線だ。

誰かの視線を感じる。

フブりはルビーのもとに駆け寄ろうとしたが、その方向から視線の主が近づいてくるのに気づき躊躇する。ルビーは駅員と話しこんでいるようでフブリの異変に気づいていない。大声を出して叫ぼうと

も思うが、これだけ離れた場所から、しかもこの喧騒の中では届かないだろう。

灰色のコートに身を包んだ若い男が近寄ってくる。フブリはじりじりと後退し、やがて駅の入り口に向かって走り出した。するとちりぢりだった視線が一斉にフブリに向かって収束した。フブリはその気配を後ろ手に感じ、全速力で走った。

「はあっ……、はあ、はあ……」

ホームを出て貨物の隙間に身を隠した瞬間、何かが目の前を掠めた。「っ!？」

フブリは反射的に上半身を反った。鳥が数羽飛び去る音が聞こえる。目の前に、大きな影が差している。しばらく日の光で目をそばめていたフブリは、それを人影だと判断するのに時間を要した。

ちくり、と頬に鈍い痛みを感じた。生暖かい血液が垂れている。先ほど掠めた何かは刃物だったようだ。

「また……」

二人の男だった。一人は先ほど目にした灰色のコートの男で、何本かのナイフを手に行している。もう一人は剣を携えた屈強そうな、体格のいい中年の男であった。二人とも背景に紛れるような目立たない格好をしている。

「お金が欲しいの？ ……なーんて……違うよね……」

フブリの問いに、答える者はいなかった。一人の体が動いたのを見ると、フブリは慣れた動作で身を屈めた。背後で、ナイフが積み置きのコンテナに当たって落ちる音がした。

ただの賊ではない、とすでに確信していた。

「ただじゃ殺されてやらないんだから……!!」

吐き捨てて走り出す。男たちは身をかわしたフブリが予想外だったのか、逃げた彼女を追うまで時間がかかった。

実は、このような事態は初めてではない。

フブリは何者かに追われていた。それは、単に金銭目当てで徘徊する賊などとは異なった。彼らはフブリを殺すことだけを目的として

いる。そのため、こと逃げることに關しては旅の中で多くを学んだ。人ごみの多い場所を選んで、その中に紛れる。フブリは背負っていたリュックから白いシヨールを取り出し、慣れた手つきで頭からすっぽり被った。

どれだけ走ったのかわからないくらい走り、ゆるゆると速度を落とすし立ち止まる。額の汗が髪の毛に絡み付いて鬱陶しかった。

「撒いたかな……」

初めて後ろを振り向き、男たちが追ってこないのを確認して、ほっと息をつく。

「どのくらい離れちゃっただろ。ルビー、気づくかなあ……」

駅に置き去りにしてきたルビーが気がかりだった。彼はフブリがいないことに気づけば、大慌てで探しに来るだろう。しかし、周りを見渡せばそこが未知の場所であることは一目瞭然だった。そもそも、一夜を過ごすために一泊しただけの町である。この辺りの地理はまったくわからない。

とりあえず、人気のない路地裏に身を隠した。

「迷ってなきやいいんだけど……」

方向音痴な同行者を案じつつ、フブリは民家の壁にもたれかかった。すると、ふいに誰かが自分を呼んだ。

「ルビー？」

すぐさま周囲を確認するが、誰もいない。

息を凝らし、フブリは身を構えた。先ほどの男たちが追いついて来たとも限らないからだ。これも、長い旅の中で身についた習性の一つだった。しばらく体を強張らせていると、声が、今度ははっきりと耳元で聞こえた。

「こんにちは、お嬢ちゃん」

「誰!？」

ルビーの声ではなかった。急速に心拍数が上がっていくのを感じる。

「おれ? おれは麗しの美青年剣士さまです。なぐんて」

フブリの緊張に反して、妙に垢抜けた能天気な返答が帰ってきた。

しかしフブリは、依然姿の見えない声に気の緩みを許さない。

「どこにいるの？ 出てこい！」

怒声と同時に、目の前にある街路樹の葉から突然顔が現れた。フブリが思わず小さな悲鳴を漏らす。顔を出した本人は、目を丸くしてフブリを覗きこんだ。

「あつ、ごめんごめん。びっくりした〜？ いやー、出て来いって言うからさあ」

男は、木に足をかけ宙吊りになっていた。

さすがにこれには、フブリの緊張も一瞬で解けた。フブリは何を思ったか、逆さの頭を掴むと、それを引っ張りはじめた。

「あいたたた！ ちょ、待って！ 自分で降りる……痛えっ！」

「あ、あなた宿の……！」

その長く垂れる金髪には見覚えがあった。宿で自分のことを見ていた男だ。間違いない。

「おつ、覚えててくれたの？」

男は嬉しそうに微笑んだが

「近づくなー！」

フブリに顔を思いつき殴られた。

「……な……ナイスパンチ……」

「あんた何！？」

男の顔をしっかと掴み引き寄せると、落ち着きのない声で口をついて出た。あまりの怒声に、男の耳が壊れそうな勢いだった。

「シルヘットが何をしたって言うの！？ 私が何だって言うんだ！」

男はただ呆然と少女を見つめた。

「シル……私が何だって……、何？」

「…………え？」

フブリはようやく、男の顔をまじまじと見つめた。声を張り上げたせいで息は上がっていたが、同時に冷静な思考も徐々に戻ってきていた。

「人違いじゃねえの？」

よく見てみると、彼は今まで襲ってきた男たちとはどことなく毛色が違うようだった。

体つきはしっかりしているとはいえ、全体的に細く、力がありそうには見えない。身なりも目立たないようにしている彼らとは異なり、黒を貴重としているもののラフで明るくい出で立ちだ。人目を引く金髪は、自分の存在を誇示するかのように腰の辺りまで伸ばされている。極めつけに、彼のノリは暗殺者にしては軽すぎた。

「……人違いみたい」

よくよく考えてみれば、襲撃者が自分に声をかけてくること自体おかしい。フブリを殺すことだけを考えている人間が、そんな馬鹿な真似をするはずがない。

フブリは急に体の力が抜け、路面にへたりこんだ。

「なあ、それだけ？」

「はあ？」

先ほどとは打って変わって、適当に返事を返す。

「人違いのお・詫・び」

木から降りた男は、恭しくフブリの手を取り、握りしめた。図々しくも詫びを要求してくる男に、フブリは眉をひそめる。男は何を考えたのか突然口を尖らせて自分の頬を指差しはじめた。

「ほっぺにちゅーって……」

「あー！」

男が言い切る前に、フブリが開口した。

「私、行かなきゃ。連れが私を探してるところから」

「え」

「間違つてごめんなさい。じゃー！」

男が何か口にする間も与えず、フブリは脱兎のごとく立ち去った。

その後ろ姿を、人差し指を頬に埋め、唇を尖らせた状態のまま呆然と見送る男。情けなく落ちたその肩は、心底寂しそうであった。

「ちゅーって……」

通りすがりの町民が不審な目つきで、間抜けに立ち尽くす男を見て
足早に駆けていった。

「あーあ……振られちゃった」

遠くなる少女を眺めながら、ポツリと呟く。

「あれが、フブリ・トリバンドラムねえ……」

男は不敵に微笑んだ。

第一章 四

フブリは当てもなく街を徘徊していた。駅のホームに戻ったはいいものの、そこにルビーの姿はなかったのである。

「いつものことだけど……この調子じゃ、今日も汽車に乗れそうにないなあ」

フブリが一人できるときは襲撃は珍しいことではない。しかし、ルビーと一旦はぐれると、お互いを探すのにどうしても時間がかかる。自分たちの都合は、襲撃者に完全に振り回されていた。

すれ違いを避けるためにも、フブリはへたに動かないことにした。しかし、それが逆に仇となった。フブリに襲い掛かってきた二人の男が、駅に戻って来たのである。男たちはフブリを見つけるや否や、足早に駆け寄ってきた。

「しつこい！」

フブリもそれに呼応するように走り出した。緊張の連続で疲れてはいたが、彼らを再度撒く自信はあった。どんどん距離を引き離していく。

「人ごみに紛れれば、追いつけないよね……」

聞こえないと知りつつも、声に出した。群衆の中にもう彼らの姿は見えなかった。

「追いつくんだよ！」

耳元に男の声。

フブリは咄嗟に建物の陰に隠れた。刃物が壁にあたる音が響く。

「嘘！」

大きく距離を引き剥がしたはずだった。こんな近くまで急に追いつけるはずがない。まるで一瞬で、移動したような……。

『魔法使い』という単語がフブリの頭をぐるぐる回る。しかし魔法で移動できる使い手は、ほんの一握りだと聞いたことがある。ルビ―ですらそんな芸当はできない。

その答えは簡単に見つかった。陽を遮るように足元に奇妙な形の影が落ちていた。見上げれば、頭上には民家同士をつなぐ掛け梯子が。迂闊だった。これを使えば町中の移動も短時間で済むだろう。「静かにしろよ、譲ちゃん……」

若いナイフの男に羽交い絞めにされ、口を覆われてしまった。人が多すぎたため、フブリが路地裏に押しこまれたことに気づく者はいなかった。

中年の男が歩み出た。帯剣の切っ先が、まっすぐフブリに向けられる。

彼が構える帯剣だけではない。フブリの首筋には、背後からナイフが当てられていた。容赦のない彼らの姿勢に、フブリは初めて恐怖した。

「私に何の……恨みがあるの？」

口を覆う指の隙間から震える声を漏らす。

答えが返らないことは知っていた。沈黙に、フブリの生唾を飲みこむ音だけが響く。

今までも、この問いに答えてくれる襲撃者はいなかった。人から恨まれるような覚えはなかったが、少なくとも、自分に知る権利はあるはずだ。理由もわからないまま殺されるのだけは嫌だった。

「私をどうするの」

じりじりと距離を縮めてくる中年の男の気を逸らそうと、言葉をつないだ。しかし近距離に追い詰められてしまえば逃げ出すことは難しい。この状況では、むしろ体格のよい男たちのほうが有利だ。いや、それ以前に、もう体の自由すらままならないのだ。首元に当たるナイフの切っ先がそれを物語っている。

フブリの口元を塞ぐ手のひらに力が入る。悲鳴を上げさせないためだろうか。そのごつごつした固い手の感触に、フブリは顔を歪めた。こんなことになるなら、護身用の剣を離さないでおくべきだった。いや、それよりもルビーと逸れたのがまずかったかもしれない。彼がいれば、魔法である程度相手をかく乱することもできた。

そんなことをとりとめもなく後悔しているうちに、男が気だるそうに帯剣を持ち直した。金属独特の錆ついたような臭気が鼻を突く。もう、自力ではどうにも手の施しようがない。体温が急速に冷えていく。

「すぐに終わる」

男が帯剣を振り上げ　フブリは祈るように目を閉じた。

頭が真っ白になった。

痛みはなかった。

苦しまずに死ねたのだろうか、と考えていると、呼吸の音が耳に入った。しばらくして、それが自分の呼吸だということに気がつく。

そつと薄目を開けて、自分の手を、足を、頭を確認する。

切られたような跡は、どこにも見当たらなかった。

「生きてる」

フブリは、間の抜けた声で呟いた。声が出たことで、自分の口を覆っていた男の手が消えていることに気づいた。

「お前、誰だ!？」

突然の怒声に、我に返った。

先ほどの男たちが誰かと剣を交えている。長い金髪の、長身の男だった。

その男には、見覚えがあった。

「女の子一人相手におっさん二人でかかるなんて、恥ずかしいと思わねえのかよ」

金髪の男が、細身の剣を軽い身のこなしで扱っている。二人の屈強な男たちを、たった一人の青年がまるでダンスを踊るかのようになんかに難しいことかはわかる。剣技に覚えのないフブリにも、それがど

襲撃者たちは、完全に金髪の男に翻弄されていた。

「……な、なんなんスカこいつ!」

「だからー、麗しの美青年剣士さまだっつーの」

若い男が軽く斬りつけられ、悲痛な叫びを上げた。男たちの会話か

らは、先ほどまでの緊迫した雰囲気がるで想像できない。フブリは硬直したまま彼らのやり取りを眺めていた。

「こいつ言ってること意味わからねえし、つええよ！ かなわねえ」
「意味わかれよてめーら。おれ一人でアホみたいじゃん……って…

…」

中年の男は舌打ちをすると、踵を返して人ごみの中に足早に消えていった。若いナイフの男は一瞬躊躇したが、すぐに諦めて後を追った。

「待て！」

金髪の男が素早く彼らを追ったが、もう群衆の中にその姿は見えなかった。

「ちっ……逃げ足早えな」

ブツブツ呟く金髪の男は、息すら乱してはいなかった。

「あいつらこの町の地理に詳しくさうだったから、追ってもなかなか見つからねえかもな。……って、聞いてる？」

「えっ？」

男に疑問符を投げかけられて、ようやくそれが自分に向けられていた話であることに気づいた。しかし、まだ現実が把握できていないフブリは、ただただぼんやりするだけである。

「なあ、生きてる？」

「えっ？」

二度も返ってきた間抜けな返答に、男は苦笑した。

「あつ、うん……！ 生きてるみたい、私」

ようやく事態が呑みこめたフブリは、しかし興奮冷めやらぬ調子の声を出した。

「ん、よかった。よかった」

「ありがとう……えーと」

「ツバル」

「ツバル。ごめんね、さっきは頭引っ張って」

まだ混乱しているらしい。助けてもらったことよりも、彼の頭を引

つ張ったことのほうが先に浮かんだ。

「ああ、うん。あれは痛かった……」

「今の人たちの仲間だと思って……。本当にごめんなさい」
へえ、とツバルの唇が動いた。

「ほら」

ツバルが手を差し伸べた。男たちに追い詰められたとき、座りこんでしまったらしい。フブリは彼の手を支えにして、がくがくいつている足を何とか持ち上げた。膝小僧が軽く擦りむけていた。

「あいつら何？」

「それは……」

フブリはうつむいた。自分の声のトーンが落ちていることで、興奮も徐々に去っていく。

「お嬢ちゃんは、近くの町の人……じゃないよねえ。宿に泊まってたし」

「うん、旅してるんだ。ああいう変なのに追われてるから、細心の注意は払ってたつもりだったんだけど……」

「あんな正体不明の奴らに狙われながら、女の子一人で旅してんの？ 何か危ないねえ」

「あつ、一人じゃないよ。はぐれちゃったんだけど、魔法使いの……」

フブリは訂正しようとして、遠くに人影を見つけた。人影は少女に大きく手を振っている。

「ルビー！」

フブリが走り出すと、ルビーも歩幅を広げて駆けてきた。

「フブリ！ どこに行ってたんだよ。……もしかして、またあいつらが！？」

尻餅をついたときに汚れたフブリの衣服と頬の切り傷を見て、ルビーは目を見開いた。ルビーが、自身の背負っているリュックからはみ出している護身の剣に気づいて、更に慌てた。

「剣！ フブリの、ぼくが持ってたんだ！ けっ、怪我は？ あい

つらは？」

フブリの衣服と切り傷だけでパニックを起こし、本人以上に慌てている。どうしたらよいかわからないらしく、両手を所在なさに宙に浮かせたままだ。

「大丈夫、ちよつとほつぺたかすっただけ。それがね、助けてもらつて」

「助け？」

ルビーは視線を動かし、フブリの後ろに見慣れない男を発見した。

「オッス！」

「……………」

軽いノリで話しかける謎の男に、ルビーは一瞬閉口した。その気持ちはすぐよくわかる、とフブリは心中でルビーを察した。

「……………あなたが、フブリを助けてくれたんですね。ありがとうございます」

深々と頭を下げる。ルビーは、こうした礼儀にはうるさい男だった。「どういたしまして」

へらへら笑う男をルビーは凝視していた。フブリも改めてツバルの風体をまじまじと見つめてみた。腰に剣を携えてはいるものの、彼の身なりからしてそれは飾り太刀にしか見えない。ひよろつとした体型には、力強さすら感じられなかった。

「失礼ですが、旅人ですか？」

「いや、おれ傭兵」

これには二人同時に驚きの声漏れた。

「浮浪者かと思つてた……………」

フブリが呟く。ツバルは、少しむっとしたようだった。

「聞け！」

ツバルはフブリたちの前に仁王立ちになると、突然大声を出した。びくつ、と二人の体が痙攣する。

「おれが、『自称「凄腕」』の剣士ツバル・リアノーラだ！」

自信満々に言い放つその男に、二人は一瞬で固まる。

「自ら自称って言うてる……」

「変な人……」

何と続けてよいものかわからず、ルビーとフブリはお互い顔を見合
わせた。

「お前ら！ 名を名乗れ！」

「はっ、はい!？」

一人盛り上がっていたと思いきや、男は唐突に声をかけてきた。

「フ、フブリ・トリバンドラム！」

「クイルビー・ヴォルケツトです！」

二人とも相手に感化され、要らぬ大声を上げていた。

「フブリに、クイルビーな。ようっし、覚えた」

頷くツバルに、ルビーは一抹の不安を感じたようであった。確かに
これは、あまり深く係わり合いにならないほうがよさそうなタイプ
だ。

「えー……、ツバルさん。ぼくら、急ぎますのでこれで失礼します」
ルビーはフブリの頭を掴むと、強引に頭を下げさせた。

「えっ、えっ、ルビー?」

「いいから、行くよ。今行けば夕方の汽車に間に合う」

いつの間にか日は暮れ、民家は夕焼けの色に染まっていた。フブリ
は即座に相槌を打った。簡単に体裁を整えると慌ただしくその場を
去る。ルビーはツバルには目もくれなかった。

「ツバル、ありがとう!」

フブリがルビーに半ば引きずられながら、何とか後ろを振り返って
それだけ告げた。

「いえいえ」

振り返ったフブリは、ぎょっとした。すぐ傍に、彼の顔があったの
である。

「な、何でついてくるんですか!」

ルビーもツバルに気づき、驚きの声を上げた。

「いや、また襲われたら大変だろ? フブリが心配だからな」

「は、はあ……」

「ぼくがいるから大丈夫です」

呆気にとられているフブリの代わりにルビーが語気を強めた。

「魔法使い一人じゃ心許ないだろ。だから」

自称『凄腕』の傭兵はにっこり笑った。

「おれを雇わない？」

幕間 - Interval

私は、彼女を殺した。

彼女の寝室に入るのは、とても簡単なことだった。

それもそうだ。実の妹が姉の部屋に入るのに、誰の許可が要るうか。衛兵たちも、まさか私が、彼女の命を奪うとは考えもしなかったろう。何の疑いもなしに、私を寝室に入れてしまった。

あの、国王側近の近衛の少年たちが揃っていれば、何かが変わっていたかもしれない。

彼らは姉も一目置く、優秀な近衛であったから。

私は、静かに寝息を立てている姉に、最後のお別れを言った。今となってはもう、何を口にしたのかは覚えていない。私を許してくれる？ とは聞いたような気がする。殺す相手に疑問を投げかけるとは、何とも笑える台詞だ。

私は、彼女の首筋にそつと触れた。生暖かい感触を確かめたかったのかもしれない。一瞬、その体が動いたように見えたが、気のせいだった。

けれど彼女は、目覚めてくれなかった。一向、自分に気づいてくれる気配が無い。彼女は、すでに深い眠りに落ちていた。目覚めて、私を叱咤してくれたら、どんなにこの心臓も落ち着くことだろう。私の鼓動は、今や私の目になり、手になり、足になっていた。

いや、姉は私を叱りつけてはくれないのではないか。

そうだ。きつと、私を憐れむように見つめるに違いない。そうして私は一人、惨めに崩れ落ちるのだ。

なんて、喜劇だろう。

私は、短剣のグリップを握り締めた。

汗ばむ手に力を入れる。

もう、これ以上待っても、何も変わらない気がした。

頭を空っぽにした私は、彼女に短剣を突き刺した。

突き刺した、気がしていた。

私の腕は、誰かに止められていたのだ。

姉の寝室に入るのは、とても簡単なことだった。

ただ、一つだけ誤算があった。

姉の近衛が一人、まるで私の行動を見透かしていたように、部屋の隅に潜んでいたのだ。

第二章 一

「少年少女の二人旅か……。あ、わかった！ 両親に交際反対されて勢いで駆け落ちしちゃったってタイプだろ」

ツバルは誰にともなく疑問を投げかけ、大げさなジェスチャーを交えながら一人納得して頷いた。

「今多いよなあ……。若者たちの甘酸っぱい青春が引き起こす若さゆえの過ちっつーの？ うん、とりあえず男のお前がしっかりしなきゃだめだぞ」

な？ と馴れ馴れしく肩を抱いてくる隣の男に、ルビーは冷たい視線を投げかけた。

「どうでもいいですけど、何で一緒に汽車乗ってるんですか」

「え……。だつておれ、お前ら守らなきゃ」

「いらないうって言ったんですけど……。何なんだこの人」
襲撃者から逃れたあと、フブリとルビーはどうか夕方発車の汽車に間に合った。

ところが、思わぬおまげが……。そう、ツバルが何故か二人につき添って汽車に乗りこんできたのである。そればかりではなく、あまつさえフブリたちと同じ車両に相席してきた。彼の自分たちに向けられた独り言を、必死に無視しようと努めるルビーの努力も虚しく今に至る。

「あのね、ツバル。好意は嬉しいけど私たちお金もないし、雇ってあげられないんだよ」

フブリがやんわりと割って入った。

「いらねー」

「は？」

「金なんていらねーよ。おれはお前ら貧乏人の味方だからな！」

やけに『貧乏人』を強調した物言いだった。金銭的余裕がないのは真実であるが、そこまではつきり言われるとむしろ可笑しい。しか

し、ルビーは彼の言葉をそのままの意味で受け取ったようで、あからさまな嫌悪をツバルに向けた。

「何かイチイチ人の神経逆撫でますねあなた」

二人の掛け合いが何だかおかしく思えてフブりは笑った。

今朝の夢から続いていた憂鬱な気分が一気に吹き飛んだ気がする。

ルビーは心底嫌がっていたが、思いがけない三人旅がフブりは少しだけ楽しかった。窓ごしに外を見れば、そんな自分の気持ちを反映するかのようには、暗闇に浮かぶ明るい町の灯りが見えはじめた。

結局、有無を言わせぬ勢いでツバルは二人に同行した。汽車が隣町に到着してから、降車する二人の肩を抱いて離さなかったのである。

「今夜はもう遅いし、ここで一泊しよう」

荷物を上段の棚から下ろしながらルビーは目配せした。荷物は生活するための必要最小限のものしかない。

「そだね。ひゃっ！」

フブりが突然頓狂な声を上げた。

「いただき〜」

肩にかけようとしたリュックを、ツバルにもぎ取られたのである。

ツバルはあっけらかんと笑いながら軽々とそれを持ち上げた。

「ツバル!？」

「ただの物取りだったんですか!？」

「おいおいおい。レディーに対するただのマナーだろ。このおれが泥棒なんていう低俗なもんにみえるか？」

充分見える、という言葉をつぶりは呑みこんだ。

町に下りると、もう夜だというのに、明かりの消えた民家は一つも見つからなかった。近くに城があるようで、なかなか活気のある都会であることは見て取れた。遠くからでもはつきりと形のわかる中心部の噴水は、きらびやかな光彩を放っている。

「大きい町だねー」

「人も多いぜ〜。あー最近の若者は元気だねえ」

街頭を通り過ぎる若者たちを、ツバルは細目をして見ていた。

「年寄りみたいなこと言わないでくださいよ。えーと、駅員さんによるとこの町は……」

「温泉街ですよ」

街の大通りに出ると、突然誰かに声をかけられた。

「お客さん今夜の宿もう決まった？ 寄ってって」

「おいでませ。今なら温泉入り放題のフリーパスつきだよ」

「美人の湯、あるぜ。誰でもお肌びかぴか！」

宿の煙突からは暖かい湯気が揚がり、足元の斥候にはお湯の流れる音が響く。そこは一面の温泉宿だった。どこの宿も客寄せに躍起になり、身を乗り出して自慢の宿をアピールする。ルビーが何か口に出す間もなく、次の宿の客寄せ声が耳に入った。

その活気はもちろんのこと、イルミネーションの洪水にフブリは目をしばたいていた。夜だというのに町中が明るい原因はこれだったのだ、とルビーは納得した。

「そこのおにーさん！ 混浴もあるぜよー！」

「おっ、おれあそこオススメ！ 混浴だって」

「入ったこともないくせにお勧めも何もありませんよ！ ほら、何あの値段……馬鹿高っ！」

店主の掲げていた看板に記されていた法外な値段に、ルビーは目を白黒させた。

「これだけ宿があるとどれがいいのか……人がいっぱいよくわからないな。フブリ、大丈夫？」

大通りは宿の従業員だけではなく、街頭を往来する多くの宿泊客で賑わっていた。人ごみで離れ離れになることのないように、ルビーはフブリの腕をしっかりと掴んだ。おれもおれも、という男の声の後ろ手に上がったが、ルビーは聞こえないふりをした。むしろ彼には一刻も早くはぐれて欲しかった。

すべての宿を見定めている時間も気力もなく、結局三人はフブリが選んだ無難な値段の宿に潜りこんだ。

「温泉街だ〜やっほー」

宿帳に記帳して部屋に案内されると、ツバルは子供のようにベッドに体を投げ出した。真っ白な寝台のスプリングが彼の体重によってぎし、と鳴った。

「どうしたよ？ 騒ごうぜ〜。だって温泉だよ温泉!？」

「悪いですが、そのテンションについていけません」

「何お前温泉知らねえの!? 不憫だなー。あのな、温泉ってのはな……」

「……………」

ルビーはもはや黙って首をうなだれるしかなかった。

この男には人間の言葉じゃ通じない。

「せつかくだし、早く温泉入ろうよ!」

「えーと、女湯は今ちようど清掃中みたいだね。あ、その荷物こっちに置いてください。その前に何か食べて……いや、先にほくらがさっさと入ってきたほうが効率いいかな。すみませーん、朝食は何時ですかー」

ルビーは部屋の中を散策しながら、荷物を運んできた女中にてきぱきと指示を出した。ツバルはベッドの上を転がり、立ったままのフブリに近づいた。

「クイルビーってさーいつもあぁなん? ……痒いところに気が利く男だねえ」

「昔からあぁいう性格なんだ」

ツバルたちの会話を後ろ手に聞きながら、ルビーは眉根を寄せた。

「ツバルさん。ぼくら先に入っちゃいましょう、温泉。十分後くらいに女湯が開くらしいから、フブリはもうちょっと待ってて」

「おっ、いよいよだな〜。脱ぐとすごいよ、おれ」

見とれるなよ、と一人盛り上がっているツバルを置いて、ルビーは部屋を後にした。

温泉は町全体を見下ろせる高層の露天風呂で、かすかにひのきの香りが漂っていた。足元には天然の岩が無造作に敷かれている。タイ

ミングがよかつたのか、二人の他に入浴客はいなかった。

「あーいい湯だ！ 疲れが取れるな、な！」

「ええ……気持ちいいですね」

ルビーは満足そうに頷いた。隣の男は相変わらずうつるさかつたが、それすら気にならないほど心地よい気分だった。こうしてのんびりお湯につかるだけで、旅の疲れが癒されていく。部屋で一人待っているフブリにも、早く温泉に浸かって体を休めて欲しいと思った。

「お前……キレーな体してんな」

「は？」

暖かさに陶然としながら景色を眺めていたルビーは、ツバルの一言に硬直する。その男の顔を見ると、突然現実に引き戻されたような気分になった。ツバルはルビーの顔をまじまじと見つめ、値踏みするように頷いた。

「男のくせに、その真つ白な肌といい、長い睫毛といい」

「何近寄ってきてんですか！」

ルビーはお湯の中を這ってくるツバルに悪寒を感じて後退した。反射的に、近寄ってくる男に湯をかける。

「いや、おれ全然オツケイだから」

ツバルが言つて、ぐっ、と親指を立てて見せた。

「何が!？」

ルビーは喉の奥から搾り出すような声を上げた。

「変なこと考えないでくださいよ！ ……気持ち悪いなあ、もう」

「いや、オツケイだから……ホント。考えといて」

何を考えるというのか。

ルビーは温泉に入る前よりも更に疲労がひどくなったように感じた。軽くうなだれると、きゃつきゃつ、と薄い壁越しに女性客の黄色い声が聞こえてきた。女湯の清掃が終わつたのだ。

「あー、女湯いいな。おれも入りてえ」

「フブリも入つたかな……。ぼくらはもう上がりましょうか」

後ろで、えー、という声が聞こえたが、ルビーはすたすたと脱衣所

へ上がった。

二人が湯を出て着物に袖を通したとき

「……きゃあー！……」

隣の壁からか細い声がかすかに漏れた。先ほどとはニュアンスの異なる黄色い声である。

ツバルとルビーが顔を見合わせた瞬間、

「きゃああああああー！」

今度ははつきりと、女の悲鳴が聞こえた。その合間に数人の女性の声が飛び交っている。

重い事態を悟った二人は、適当に浴衣をまとうと慌てて外に飛び出した。……飛び出したはいいものの、女湯の前で立ち尽くしていた。簾越しでは中の様子は見えないが、喧騒が一層激しくなっていることは充分すぎるほど伝わってくる。腰掛けて牛乳を飲んでいた老夫婦が、不思議そうに近寄ってきた。

「こりや緊急事態だ……！ 女湯見てこなきや」

いそいそと目の簾をくぐろうとしているツバルの腕を、ルビーが反射的に制止する。

「ちよっ……！ 何言ってますか、この変態！」

「じゃーどうすんだよ。あ、お前どさくさに紛れて女のふりして入る、とか思ってたのか！？」

「あんと一緒にしないでください！ フブリ！ フブリ、いるのかー！？」

ルビーはとにかく、一人外に置いてきたフブリが気がかりだった。

彼女は自分たちと入れ違いに入浴する予定だった。もしかしたらちようど今、何かが女湯で起こっているこのときに、フブリが中に入らないという保証はない。

しかし、フブリの声は聞こえない。というよりも、何人もの女の声が入り混じっていて、何を誰が言っているのかさっぱりわからない状態だ。

「おーい！ 女湯のおねーちゃんたちー！ 何があっただー！？」

「モーサイテー！」

ツバルの言葉と同時に、一人の入浴客が勢いよく飛び出してきた。
「あの……何があつたんですか？」

最初の女性客が出てきたのを皮切りに、しかめ面の女の子たちがぞろぞろ出てきた。ルビーはその先頭に恐る恐る話しかけた。

「のぞきよ、のぞき！ 気色悪いオッサンが！」

「すっげえムカつくんだけど！ 何あのオヤジ」

「超キモかったよねー！」

数人の女の子たちは各々が文句をブツブツ漏らしながら、さっさと去って行ってしまった。その集団の中にフブリの姿は見えない。

ルビーとツバルは、すっかり静まり返った女湯に足を踏み入れた。

がらんとした脱衣所にもフブりはいない。……代わりに、ボコボコに暴行されて顔の形を変形させた中年の男が丸裸で転がっていた。

その顔は人間と思えないほど腫れ上がり、どこが目なのか口なのか一見してわからない。広い脱衣所に転がる姿はとても小さく惨めに見えた。おそらく先ほどの彼女たちが彼に報復し、その衣服を剥いたのであることは想像に難くない。

「ひでえ……」

「女って……」

ふと、ツバルが男の顔を凝視した。

「どうかしました？」

「……あれ……。おれ、こいつ見覚えあるぞ。おい、オッサン」

しゃがみこんで男に近づき、ツバルは何かを確認したように頷いた。男の耳たぶを引っ張り、そこにはつきりと話しかけている。

男は、恐らく意識が朦朧としているのだろう。薄くまぶたを開けるが、しばらく黙ったまま己の耳を引っ張る男を見つめていた。しかし、その金髪の男　ツバルを認識すると、

「……………ヒッ！ おま……………！？」

「おれのこと覚えてるよなあ？ オッサンまゝた懲りずにフブ리를追ってきたの？」

ツバルは硬直してしまった男を、憐れむように微笑んだ。男は耳を離されると、必死に両手を動かして床をかき、座ったまま後退した。

「また、ってこいつですか？ 今朝フブリを襲った奴は」
立ったままのルビーは、やはり憐れみの目を彼に向けた。ここまで追ってくるその根性は認めるが、今の惨状は敵とはいえ同情を感じざるを得ない。

男は何か意を決したのかツバルを上目使いに睨みつけると、うつむいたまま黙ってしまった。何を言っても微動だにしない。

「あ……しまったかも」
ポツリとツバルが漏らした。男の反応に困り果て、一旦フブリのもとに戻るうとルビーが提案した矢先だった。

「いや、もう一人いたなあと思って。昼間フブリを襲ってきた奴」

第二章 二

「もう、何でそれを早く言わないんですかー!?!」
ルビーは、宿中を駆け回っていた。軽い歩調でツバルがそれを追いかける。

女湯にいた男は、晒しておきたいと言う女の子たちの要望により、縛り上げてそのまま転がしておいた。しかしその後慌てて部屋に戻るも、フブリの姿はそこになかったのである。

フブリの荷物がなくなっていることから、彼女が入浴に行ったのか、または誰かが部屋に侵入してきたのか、仮説はいくらでも湧いて出てくる。とにかくフブリの身が現在危険な状況下にあることだけは確かだった。

「仲居さん!」

酒を運んでいる女中を見つけると、ルビーはすぐに呼び止めた。フブリを探しはじめてからもう八人目になる。

「銀髪のショートカットで、これくらいのピアスをしてて、十五・六くらいの中肉中背の女の子です」

ジェスチャーを交えながらの説明を、女中は真剣な顔で頷きながら聞いていた。

「……あ、あの娘ね! 何か慌ててあつちに走っていききましたよ」
「裏手のほうですね!?!」

ルビーは瞳を輝かせると、簡単に頭を下げてすぐまた走り出した。それをのんびりしたツバルが追う。

「さんきゅ〜。おねーちゃん」
ツバルは振り向きざまにウインクした。こんな状態であってもこの能天気な挨拶に抜かりはないらしい。

二人は板敷きの渡り廊下を抜けて、外へ出た。ガラス張りのフロントでは、数人の客が談話しているところが見えた。ぐるりと迂回して裏手に回るが、そこには貯水庫や温水のメーターがあるばかりで

人影は見当たらなかった。

仕方なくもと来た道を引き返すと

「あっ、ルビー！」

渡り廊下で、反対側から走ってくるフブリにばったり遭遇した。息を切らしながら駆けてくる。

「フブリ！」

フブリは勢いよくルビーの胸元に飛びこんだ。

「誰か追いかけてきてる！ 温泉に入ろうとしたら、昼間のおじさんが空から降ってくるし……！」

「大胆だなオツサン……！」

フブリはルビーにしがみつきながら、周囲をきよるきよる気にしていた。

「今もほら！ あっ、あの人ー！」

少女の指差す方向に、その男はいた。フブリを見つけるや否や、「コートからナイフを取り出して向かってくる。

「おおっ、誰かと思ったら昼間のナイフ野郎じゃん」

二人の間を縫って、ツバルが前に躍り出た。彼が構えると、男は一瞬たじろいだ。

「げっ……！？ あんた……！」

「麗しの美青年剣士さまだよ。よっしゃ、来い！」

店のマネキンのような決まったポーズをとって手招きをするその姿に、ルビーは息を呑んだ。ツバルは押しも押されもしない、余裕の表情を見せている。三人の間に緊張が走る。

すると向かってきていた男は急に速度を緩め、Uターンするともと来た方向へ全力疾走しはじめた。

「あっ、逃げた！」

「おいおいおい！ そこ逃げるとこじゃねえだろてめー！」

格好つけていたポーズを虚しく崩すと、ツバルは激怒して男を追いかけて行った。残された二人はぼかんとして、一瞬にして静かになった渡り廊下を眺めた。フブリはルビーにしがみついたまま、動く

こともしない。

それから二分も経たないうちに、ツバルが男を引きずって戻ってきた。

「ツバル、大丈夫？」

「こんな雑魚どもおれにかかれば楽勝よ……」

前髪を掻き揚げながら眉を吊り上げ、格好つけてみせるが、なまじ先ほどの彼を見ているルビーには何とも思えなかった。

それから三人は部屋に戻った。ツバルが捕まえた男は部屋のシートで後ろ手に縛り上げ、拘束した。時計を見ると、もう深夜の二時を回っていた。フブリは椅子に腰掛け、ツバルはベッドに体を投げ出した。ルビーに至っては、もう椅子を引く気力もなく、壁にもたれかかってそのままずると床に座りこんでしまった。各々が、しばらくそのままぐったりとしていた。

しかしフブリは気持ち昂ぶっているのか、すぐに立ち上がった。

長い旅の中で、襲撃者を捕らえたのはこれが初めてだった。

「捕まえちゃったね……」

「……うん」

神妙な面持ちで男を見据える二人に対して、ツバルは楽しそうにまじまじと彼を検分していた。

「オッサンかと思ってたらお前は結構若いな……いくつ？」

「二十五っス」

言って、男ははっとしたように唇を結んだ。

「おれより年下じゃ〜ん。あのね、おれって若く見えんだろ？ 特別におれの年齢を教えてやるけど、実はな……」

「いや、その付加情報はどうでもいいですよ。…………？」

ルビーが素早く突っこんだ。その瞬間、何か部屋の空気が変わったような不思議な感覚に襲われる。訝しげに男に視線を落としてみるが、ぼんやり何かを感じはするも特に変わったところはなかった。

それは漠然とした気配のようなものだった。ルビーは首を傾げたが、誰も何も言わないため気のせいだと思うことにした。

大きく息を吐き、フブリは男の前に立った。しっかりと彼の目を見つめている。

「……………どうして私を狙ってるのか、はっきり答えて」

男は、じつと座りこんだまま何も答ええない。凍りついたように、まるで微動だにしない。

「私が殺されなきゃいけない理由って何？」

彼の口が動くことはなかった。それどころか、女湯を襲った中年の男のように目を逸らし、うつむいてしまった。

「ねえ、答えてよ！」

沈黙に苛立ちを覚えたのだろう。フブリは衝動的に掴みかかったが、男はされるがままに従うだけで、一向に口を開く気配はなかった。

「フブリ……………」

ルビーは感情の昂ぶりはじめたフブリをなだめた。自分も、怒りを感じていないといえは嘘になる。しかし、相手がここまで強情だとしてもにもお手上げである。ルビーは途方に暮れてしまった。

「……………なあ、お兄ちゃん。吐けば楽になるぞう。おれも手荒なことはしたくねえしよ……………」

静まり返った部屋の中に金属が擦れあう音が響いた。それが抜刀した音だとルビーが気づいたときには、ツバルは男に対してその切っ先を向けていた。男は一瞬体を震わせたが、やはりまたうつむいて沈黙してしまった。

「駄目だねこりゃ。脅しもきかねえよ」

「……………あれ……………？」

じつと男を見つめていたルビーは、先ほどの不思議な気配を彼の体から感じた。

「どうしたの、ルビー」

「……………あ、わかった！」

ルビーは突然ツバルを押しつけ前に出ると、男の袖を捲り上げた。そこに印された模様のような痣をツバルが不思議そうに覗きこむ。

「なんだあ？」

「魔法ですよ！何か変な空気感じるなーと思ってたら……！この人、魔法がかけられてます！」

勢いよく立ち上がったルビーが二人に叫んだ。ツバルはまだ痣を覗きこんでいる。

「人体にも魔法つてかけられんの？」

「魔法つていうのは契約なんだ。ものも人も、かけられる相手が納得したことならかけられるんだよ。……じゃあ、もしかしてさっきのおじさんも……」

ルビーは視線だけを合わせて頷いた。

「別の場所に魔法使いがいて、そいつがこいつらに魔法かけて指示出してる……なんてとこかね？」

ツバルがルビーに囁くと、それまで黙っていた男が急に頭を上げた。依然無言だったが、目を丸くして、怯えるように首を横に振り続けている。その必死の形相にフブリはたじろいだ。

「な、……？言うなつてこと？」

「それは彼に聞いてみよう」

男に対峙し、痣に触れる。彼はこれから起こることを恐れているように見えた。ルビーの手を振り払おうと体をゆすっている。

「ぼくと新たに契約すれば大丈夫ですよ」

「ほ、本当っスか！？」

言つて、男はまた慌てて口を結び、その代わりに今度は満面の笑みで首を縦に振った。それが、契約をするという証なのだろう。

ルビーが痣に触れる。バチ、と何かが弾けたような音がして、一瞬男の肩から淡い光が漏れた。光が消えた次の瞬間には、彼の肩から痣が消えていた。

「おっ、おれは只のバイトなんスよ！」

痣が消えるや否や、男は勢いよく喋りだした。

「ナイフ投げが趣味で……地元じゃ、恋も決闘も狙った獲物は外さない、つていうキャッチフレーズで通っていたっス」

「バイトつて……じゃあ私を襲ったのは……」

「その銀髪の娘を殺したら金をやるって大金を積まれたっス。遺体の始末はこつちでやるからお前が捕まる心配はない、って言われて……。そんなオイシイ話、乗らないほうがおかしいっスよ！」

男は半泣き状態だった。喉を詰まらせながら必死に話している。

「あ、あんたみたいな剣士がいるなんて話聞いてないんす！ 何か余計なこと話したら全部あつちに筒抜けになるっていう魔法をかけられてたんで、裏切るに裏切れないし……」

「誰に雇われたの？」

「そんなん知りませんよう！ おれら二人、町中でスカウトされただけなんすから……。奴は顔も隠してたし、素性も明かしてはくれなかつたっス。とにかく終わったら金を払うって約束で……！」

男は瞳を潤ませてうなだれた。がっくり肩を下ろして抵抗する気力もないようだ。

「後払いねえ……なんつーか」

「胡散臭いよね」

フブリがツバルと目を見合わせた。

「ええ！？」

「正体を隠して暗殺を委託するような人間が、律儀に報酬を払ったりすると思えます？」

「よくあるよなあ。自分は手を汚さずに、後で秘密を知った暗殺者も始末する……みたいな話」

「ええ　！？」

何となくルビーは、この男に同情を覚え優しく微笑んだ。フブリも同じ心持ちのようで、憐れみのまなざしを彼に向けていた。

拘束は解いたが、全員一致で彼にはもうしばらく一緒にいてもらうことになった。外に出せば、魔法が解かれた彼を雇い主が始末しないとも限らないからだ。

もはや夕食をとる気力もなく、三人はすぐにベッドにもぐりこんだ。ツインルームだったため、床に敷かれた布団にはツバルが寝た。その隣にはナイフの男が、申し訳なさそうにちよこんと体を横たえて

いる。

「……しっかし、釈然としねえな」

「……え、何が？」

上掛を直しながら、フブりは首だけを下に動かした。

「お前ら、何に狙われてるんだ？」

フブりはツバルに向けて困ったような笑顔を見せた。

第二章 三

翌朝、朝食をとった後、三人は宿を出た。前日捕らえた可哀相なナイフ使いの男は宿に部屋番として置いてきた。話してみるとどうも彼は暗殺者というには頼りなく、意外と小心者のようで朝にはすっかりフブリたちに寝返っていた。

「荷物管理は自分に任せてくださいっス！ あ、クイルビーさん肩にゴミがつ！ ツバルさん、今日も決まっていますね！ 男前！ フブリちゃん、お気をつけて行ってきてくださいっス！」

深々と頭を垂れてごまをする男に、フブリは開いた口が塞がらなかつた。疲れがまだ残るメンバーの中では一番生き生きとしている。

「おお、ナイフ君なかなかいい心がけだな！ おれの格好よさがわかるやつに悪者はいねえって」

「……信用できる？」
ルビーは呆れていたが

「悪い人じゃないよ。……と思う」

その変わり身の早さがむしろ微笑ましく感じられて、フブリは苦笑した。

一応その後、女湯に置いてきたという中年の男の様子も見てきた。昨夜と変わらずに脱衣所に晒されていたので、フブリは見なかつたことにした。入浴客の女の子たちは、まるでそれがディスプレイの一つであるかのように素通りしていた。

宿を後にすると、これからのことを話し合うために近くのカフェに入った。

店舗の中は小さかったが、大きい町に相応のお洒落なカフェだった。入り口には植物の蔓が巻きつき、看板には錆びついたベルがいくつもぶら下がっていた。わざと古臭い雰囲気を出しているのか、店内の壁はわざとらしく黄ばんでいた。天井にはぼんやり淡い光を放つ裸電球が二つ、隅の大きなスピーカーからはジャズが流れている。

フブリたちは一番隅の四人席に腰掛けた。

「おねーちゃん、こっちこっち」

ルビーの横でうるさいくらいに手を振っているのはもちろんツバルである。笑顔で近づいてくるウェイトレスの制服も、一昔前に流行したような少し野暮ったいファッションだった。店内にぴったり窮気が合っている。

「おれ、これね。特大メロンパフェ。お前ら何にする？ あっ三種のベリータルトもうまそー」

お姉ちゃん可愛いねー、とウェイトレスを口説きはじめるツバルを見てルビーは頭を押さえた。

「聞く気ありますか？」

「もち！」

ツバルは両の親指を立ててウインクした。メニューは彼が一人で独占していた。

「……フブリ、やっぱりやめよう。この人信用できないよ」

「でも、なんて言っただ断るの……。絶対地獄の底までついてくるタイプだよ、ツバルは……」

「そういう話は本人のいないところで、小声でしろよお前ら……。なールビーおれら一緒に背中流し合った仲じゃーん。仲間はずれはやめようぜ〜」

馴れ馴れしく隣の肩を抱くも、もう慣れたのかその行動を先手に読んだルビーに簡単に払いのけられる。

「ぼくは流した覚えはありません。大体あなたが勝手に湯かけてきただけじゃないですか」

ルビーは本気で嫌そうな顔を作ったが、ツバルは気にも留めていないようだった。

「……ま、冗談は置いて。話に入るーか」

「うん……。えっと、何から話せばいいのかな……」

昨夜、フブリはツバルに核心を突かれた。ルビーと自分以外にそれを知る者はいない。これまで旅の経緯を誰かに話したことはなく、

それ以前に第三者を巻きこむことを避けてきた。

しかし、ツバルはこれまでの旅で出会った誰よりも親密になった人間といえる。ここまで関わってしまったのだ。むしろ何も話さないでいるほうが不自然な気がした。

ところがいざ、自分たちの旅の経緯を話そうと思っても、言葉が続かないことに気づく。この旅には狙われる本人にもわからないことが多すぎるのだ。

「とりあえず、これを見てくれる？」

フブリは胸元から、首に下げていた小さな袋を取り出した。色褪せた紙片をツバルに手渡す。不自然な形の紙片には、流麗な文字が罫線に沿ってびっしり書きこまれていた。

「……のことを話すべきかどうか迷っている。いや、話せばあの子は迷わずカラアへ向かうだろう。幸運なことに、何事もなく七年が過ぎた。」

私たちの存在を知られていないのなら、わざわざこちらから知らせることもないだろう。このまま何も知らずにこの村で生きることがフブリにとってよいことなのかどうかわからない。けれどフブリが幸せなら『「

そこで言葉が途切れていたため、ツバルは不思議そうに紙片を裏返したが、何も書かれていなかった。

「端っこ燃えてるっばいな。焦げてて読めねえ」

ツバルはフブリに紙片を返した。

「死んだ養母の日記……の一部。他は燃えちゃったから、シルヘットの形見はこれと、この写真しか残ってないんだ。あ、養母のシルヘットは六年前に亡くなったの」

フブリは先ほどの袋から、大事そうに布で包んだ写真を出して見せた。写っているのは幼いフブリとルビー、そして中央で二人を抱きしめているのが養母のシルヘットだった。日記ほどではないが、これも四角が焼け焦げていた。

「火事でも起こったのか」

フブリはルビーと顔を見合わせて視線を落とした。ルビーはフブリの気持ちを看取したようだった。

「……えー、それは置いといて」

ごほんとか咳払いをしたルビーが写真を再度包んだ。

「恐らくこの日記でシルヘットさんが言っていることは、フブリが狙われていることと関係があるとぼくらは思っています」

「初めて私が襲われたのは、一年前。私とルビーは幼なじみで、生まれ育った辺境の村で、あの日もいつものように学校から孤児院に帰るところだった……」

話しながら、当時を思い起こす。今もまぶたの裏に鮮明に浮かぶ光景。それは懐かしさと切なさが混じり合った、複雑な思い出だった。

「そしたら……銀色の、騎士が……」

苦しそうに途切れ途切れになる言葉をルビーが慌てて遮る。

「とにかく、フブリは一年前も昨夜のように襲われました。そのときに銀色の甲冑を着た襲撃者が言ったんです。『お前の養母は罪人だ』ってね。その後シルヘットさんの遺品を整理していたら、さっきの日記を見つけたわけです。襲われる理由も何もわからないままに逃げるように村を出て、ぼくらはこの手がかりに行く先々で尋ねていました」

「日記にも書いてあったけど、『カラア』って、シルヘットが死ぬ直前にうわごとで言っていてね。その『カラア』が何なのか、追手から逃げながら調べてたんだ。で……」

「『カラア』は国名であることがわかりました。ただ、国交が二百年以上前に絶たれていて、情報に乏しいのが現状です。滅んだとか、幻の国とか言われていますけど」

ふーん、と首を傾げながら、ツバルは運ばれてきたメロンパフェを口に運んだ。

「シルヘットさんのことも行く先々で写真を見せて聞いていますが、依然有力な情報は見つかってません。彼女がどこの出身で、フブリ

の本当の母親とどういう関係にあったのか……フブリの出生についても彼女は何も語らなかつたんです」

「はいはい、しつもん」

ツバルがスプーンを顔の前で振り回し、続きを遮った。

「その襲ってきた奴らって昨日の奴らとおんなじなわけ？ あいつらがずつと追いかけてきてたん？」

「違う、かな。昨夜みたいな毎回違うタイプの、多分ナイフ君が言ってたように、行く先々で雇われたアルバイターなんだと思う」

「……じゃあ、一年前に襲われたっていう銀色の騎士はそれ以来見てないわけだな？」

フブリは黙って頷いた。

「多分それはな、フブリを襲わせてる奴らが、フブリや他の人間に自分たちの正体を知られたくねえからだと思うんだ。昨夜みてえなどうでもいい奴ら雇って本人は高みの見物。フブリを襲う目的だけじゃなく、どこの誰が襲ってるのかも知られたくないわけだる奴さんは」

そう、確かに襲撃者たちは必要以上に目立つ行動は控えているようだった。顔を隠し、地味な服装で『暗殺』という任務の遂行だけを考えている。

「ってことは、直接襲ってきた人たちに聞いても、雇われているんじゃないわからないわけだよ。その、襲撃者たちに指示を出してるっていう指令塔に話を聞かなきゃいけないんだ……」

「そういうことだ。そいつが姿を現すように仕向けりゃ……」

「でも、本当にそんな人がいるとして、どうやっておびき出すんですか？ それに、昨日の二人を雇った魔法使いは、人体に魔法をかけることができる……ぼくより力のある人だと思います。まともに闘って勝てるとは思えないんですけど」

うーん、とツバルはわざとらしく唸って見せた。

「……じゃあな、こういふのどーよ」

肩をひそめて身を乗り出したツバルに二人は引き寄せられ、やがて

狭いカフェの末席で密談が行われた。

第二章 四

宿の別館にある簡素なバーは、真夜中だというのに大勢の宿泊客で賑わっていた。薄暗いカウンターの前には多種多様な酒瓶が並び、それぞれのラベルも凝ったもので目に留まった。カウンターでは一人のバーテンダーが酒を出し、数人の若い従業員が中に外にとせわしなく出入りしている。若者が多かったが、その辺りの居酒屋に似そな酔っ払いの中年たちも混ざっていて騒がしく、決して洒落た店内とは言えなかった。

人で埋め尽くされている小さなカウンターの片隅に、彼らは紛れた。「フブリ、大丈夫かなー……？」

ルビーは慣れない店内の雰囲気にもそわそわと体を動かした。視線はきよるきよる辺りを彷徨って定まらない。

「まあ、とりあえず飲めや」

「はあ……。つて、ツバルさん!？」

バーテンダーの差し出したカクテルグラスがルビーに手渡された。ピンク色の液体がなみなみと注がれている。見れば、ツバルは大ジョッキを片手にニヤリと笑っている。……足元には、すでに空になった酒樽が転がっていた。

「すっげえ楽しい気分なの〜ゲラゲラゲラ」

「酔っ払ってやがる……」

ツバルは聞く耳持たず、ぐびぐびと無遠慮に飲み続けた。

「ホラ見るよ、あのハゲオヤジの頭! 伸びて回って、変幻自在かよ! なかなかのエンターテイナーですなあ……えっ嘘、開くのそこ!?! ……いや〜ん、ぷふっ、おもしろ〜」

見渡すが、普通のハゲこそいれど、そんな面白い形体のハゲオヤジはいなかった。明らかに彼はどこか違う次元へトリップしている。

「しっかりしてくださいよ、ツバルさん! ハゲはいない! ……」

ああー……! 何でこんな人の計画を真剣に聞いちゃったんだ!

ぼくはバカだ、大バカだ　　！」

「まあまあルビー……、冗談はここまでにしようぜヒック」
頭を抱えるルビーの肩を、ツバルがいつものように馴れ馴れしく抱いた。

「そんな酒臭い息吐きながら言われても……。もう、大丈夫なんでしょうね本当に」

「そのために、お前の魔法があるんだろ。そっちこそどうよ？」
ルビーは自分の耳元に意識を集中させた。かすかな話し声が、ゆっくり近づいてくるように耳の奥に重く響きはじめる。

「……ナイフ君って出身はどのあたり？」

「おれは南部のほうっスねー。ポンカンが名産品なんスよ、ウチの実家も作ってたっス……」
ポンカンか……。

ルビーはナイフ青年に関するどうでもいい知識を一つ増やした。彼らの身にはまだ何も起こっていないようだ。

「そうですね。今のところまだみたいです……集中力切れるから、話しかけないくださいよ」

「いつもその魔法フブリにかけてりゃ、襲われたときに便利じゃねえの？」

「……こういう、遠方で人の声を聞くような魔法っていうのは使い手の精神力をひどく消耗するんです。常に集中していなければいけないので。だから、実はナイフさんにかけられていた魔法は、あのと時にはもうほとんど効力が切れかかってました」

「少しの間しかもたねえってことか？」

「ええ。よほどの魔法の使い手でも、せいぜい二日……それ以上は死にますよ。精神が衰弱して、眠らず食わずの飢餓状態のようなものに陥ります」

「ヒッ、ヒエエエ　　！？」

ツバルが突然恐ろしいものでも見たような悲鳴をあげたので、ルビーは身を硬くして構えた。

「なーんちゃって。ゲラゲラ」
この酔っ払い……。
ルビーは張り倒したい気持ちを必死に抑え、耳元に精神を集中させ続けた。

一方、ナイフの青年は緊張でかちこちに固まっていた。足元に転がっている大きな布の袋をちらちら気にしながら辺りを見渡す。バーの裏口には人気がなく、ひっそりとした薄暗い路地を街頭が不気味に照らしつけている。暗闇の中、青年はじつと息を潜めて時を待っていた。先ほどまで袋の中身と気楽に話していたのが嘘のように、恐怖は暗闇の隙間を縫ってやって来る。

雇い主が金の受け渡し場所としてこの時間、この場所を指定してきたことを青年は初めて恐ろしく思った。少女の遺体と引き換えに、という話だったが、もしここに自分が現れなかった場合はどうなっていたのだろうか。いや、もし少女を殺せなかったことがばれたら……。考えるだけでぞっとする。そわそわしていると、人影が闇に紛れて現れた。帽子を目深に被った男だった。

「……あ……ど、どうも……」

「……娘はその中か……」

男は、じろりと青年を睨みつけた。その横の袋に視線を移す。

この男は、袋の中で身を強張らせている人間が生きているとは考えもしないだろう。鼓動は心臓が張り裂けそうなほど鳴った。外にまで聞こえているのではないかと心配するほど大きかった。

「どうも、お前にかけて魔法が解けたようだ……」

男がポツリと漏らした。

「えっ、そうなんすか？ あれえ……どうなんすかね」

青年は声の調子を明るく努めたが、語尾が不自然に高く裏返った。汗が前髪を濡らして頬を伝った。

「……効力が勝手に切れたのかもしれない」

ナイフの青年がほっと息をつき、しかしすぐに次の緊張が走る。男

は早々と袋に手をかけた。

「確認させてもらっぞ」

「来ました。雇い主の魔法使いです！」

「よっしゃあ！ おとり作戦大せいこ〜う！ 行くぞルビー」

「はいはい、行きますよ！」

ツバルはジョツキを勘定と一緒に勢いよく置いた。先行するツバルの後を追いつながら、ルビーはバーの裏手にいる男たちの会話に集中していた。

「……………あれ？」

しばらくして、彼は予想外の会話の流れに首を傾げた。

本来なら、ナイフの青年が他の魔法使いと契約していることをすぐ気づかれる、と思っていた。同じ魔法使いであれば、魔法の匂いはすぐに感じ取れる。しかし男はそれを言及するどころか、気づいてすらいらないような話し振りを続けている。

「……………魔法使いじゃ、ない……………？」

「んあ？ どうした？」

「いえ……………もしかしたらこの人……………」

ツバルは、こっそり足を踏み入れた従業員控え室の窓を開け放った。その三階の窓から暗闇へ飛び降りようとしていると

「ルビー、ルビー！」

フブリが控え室の戸を勢いよく開けて入ってきた。

「！？ ツバルさん、ちよっ、待ってください！」

「え！？ 何よ！」

今まさに現場へ格好よく降り立とうとしていたツバルは、水を差されたことが癪に障ったのか、険しい顔でルビーを睨みつけた。

「フブリ、宿で待ってるって言ったる！ 狙われてるのは君なんだから」

「……………どうしてもおじさんが気になって……………」

「心配すんなって！ ナイフ君も覗きのオッサンもおれが助けてき

「てやつから」

言うと、ツバルは颯爽と飛び降りた。何も階段を下りて裏口から出ればいいものを、という言葉でルビーは呑みこんだ。この計画の要は彼に言わせればこれから行われる救出シーンにあるらしい。

そう、ナイフの青年と中年の男をおとりにして雇い主をおびき出すという計画だった。

フブリが入っているように見せかけた袋には、実は中年の男が入っている。雇い主が現れ、それを持ち去ろうとする瞬間に、ツバルが空から彼らを助けに現れる。強すぎる美青年剣士に雇い主は歯が立たず、その前にひれ伏す……というのがツバルのシナリオであった。上からではただ闇が見えるばかりで、何が行われているのかはわからない。路地裏に時折響く鈍い金属の音だけが、ツバルたちの闘いを物語っている。

「フブリ大丈夫……？ 疲れた？」

ふと横を見て、少女の顔がかすかに翳りを帯びているのに気づく。ここ数日、気の休まる暇もなく、十分な睡眠も取れていないことを思い出す。

「ルビーこそ……蒼白い顔して。すぐ貧血起こすんだから、気をつけなくちゃだめだよ」

フブリは微笑んだ。確かにルビーは、世の女性たちに負けず劣らず貧血を起こしやすい。体も弱く、流行の風邪は真っ先に引くタイプだった。

ツバルが控え室に戻ってきた。

「……逃げられた」

「はあ!？」

その第一声二人は顔をしかめた。

「ちげえよ！ おれが弱いわけじゃねえの！ 捕まえて話聞いたらそいつも雇われたって言うんだ。魔法使いだと思ってたら剣使つてきやがるし。おれが驚いてる隙について逃げやがるし」

「やつぱり、魔法使いじゃなかったんですね……」

「ってことは……えーと」

フブリは必死に思考を巡らせ、一つの単語に思い至ったようであった。

「失敗？」

「いやむしろ……危険が増したかも……」

しらけた目で見つめられ、ツバルはわっ、と顔を覆って泣き真似をした。まだ酔いが残っているようだ。とにかく予想外な展開の連続に三人が混乱していると、従業員が控え室に入ってきた。落ちこんでいるツバルを引きずりながら、急いでバーを出る。

渡り廊下を伝って宿に戻ると、もう深夜だから当然なのだが、通路はひっそりと静まり返っていた。忍び足で階段を上る。

フブリたちの部屋は二階だった。すぐ傍に豪華な造りの螺旋階段があり、そこからフロントが見下ろせる。預けていた鍵を受け取り、階段を上ったところでルビーは何気なく窓の外を眺めた。

「……？ あれ……」

何かを見つけて、窓に張りついた。

「どうしたの、ルビー？」

「気のせいかな……。誰かがこちらを見ていたように感じたんだけど」

「バーの従業員とか」

ツバルがひよい、とルビーの肩越しに顔を出した。

「そういえば、ナイフさんたちはどうしたんですか？」

「一応、町ん中を回って逃げた野郎を捜してもらってる」

窓の外には、もう人っ子一人見当たらなかった。毎晩のように躍起になって宿泊客を呼びこんでいた従業員たちも消えている。イルミネーションの光も見えなくなり、それがあつた場所にはわずかに街頭の灯りが浮かぶだけだった。

ルビーは首を傾げた。

「建物の影と間違えたのかもしれないね」

「いや、あながち見間違いじゃないかもしれないね」

「え？」

風が、急に入ってきた。否、誰かが戸を開けて宿に入ってきたのだ。
こんな真夜中に。

第二章 五

カランカラン。ドアのベルが鳴った。

従業員らしき制服を着た男が足早に駆けて行くのが見える。がらんとしたフロントに、彼の靴音だけが空しく響いた。

「お客様、申し訳ないのですが、本日は満室です……」

深夜の訪問者は、男の声に耳を貸そうともしなかった。

「銀髪の、フブリ・トリバンドラムという娘が泊まっているだろう。部屋はどこだ」

フブリの身が緊張に強張る。

「しっ……。動くなよ」

ツバルが耳打ちした。

三人は、階段の影に座り身を潜めていた。ツバルが一番端から階下を見下ろし、二人はその陰に隠れている。幸い二階にいたため、訪問者は気づいていないようだった。

「さっき逃げたって人じゃないですよね？」

「いや……。よく見えねえな」

フブリは手摺りの隙間から覗いて、恐る恐るその人物を確かめた。

男は黒いフードを頭まですっぽり被っている。痩せ型で、強そうなイメージはなかった。二人の背に隠れていたフブリは、声を出すことすらできなくなっていた。強張る体を、無意識のうちに両手で抱える。

「大丈夫？ フブリ」

「……平気……」

気丈に答えるが、内心怖くてたまらなかった。ここまでダイレクトに自分を探している人間に遭遇するのは初めてだ。

「さっきの奴じゃあないな……ん……？」

「どうかしたんですか」

ルビーがツバルの肩越しに下を覗いた。

何やら、訪問者は先ほどの従業員と口論しているようだ。彼は、制止する従業員に目もくれず、上がりこもつとしていた。困ります、という声がフブリの耳にも届いた。男も何か言っているようだったが、二階からは聞き取れなかった。

従業員がたまらず男に掴みかかった。すると男は、あるうことが彼に剣を振り上げた。ツバルが素早くフブリの両目を覆う。従業員の小さい悲鳴と、重いものが落ちたような、どさっ、という音がした。「あのヤロー……」

短く舌打ちしたのはツバルだった。「あいつ、相当ヤバいぜ……。おい、フブリ連れて窓から逃げろ」ルビーは口元を押さえて立ちすくんでいる。目の前の光景が信じられないようで、硬直したままだ。

「ルビー！ フブリ連れて逃げろってんだよ！」

「あつ……は、はい」

ツバルが、ルビーにフブリを押しつける。フブリは顔面蒼白になっていた。目にしなかったとはいえ、何が起こったか大体の見当がついたのだ。ルビーは無言のままのフブリを見て、ようやく我に返ったようだった。

男は、気づいたときには、もう階段付近まで来ていた。

「ツバルさんはどうするんですか」

「まあ何とかなるだろ、多分」

不安の残る適当な答えだったが、ルビーは頷くとフブリの手を無理に引いて外へ出た。二階の窓からの外出は、幼い頃のいたずらで何度も経験していたため、難しいことではなかった。

フブリとルビーは冷や汗をぬぐうと、誰もいない夜の街を走った。注意深く周囲を気にしてはいたが、二人とも無言だった。人影を見たような気がして、民家の陰に隠れる。誰もいないことを確認して、しばらくそこで様子を見ることにした。

夜の街は、恐ろしいほどの静寂に包まれていた。

「……あのひと、ひとを殺したんだよね」

はじめに口を開いたのは、フブリだった。

「あの人は、何もしてないのに。私が、私があそこにいたから」

フブリは涙声になっていた。寒気がして、反射的に体を小さく丸める。肩は小刻みに震えていた。

「私、どうして……」

「フブリ！」

その声が引き金となった。震える両手が、ルビীর体にしがみつく。

「ルビীর……怖いよ……。怖い……」

自分がどんなに弱い人間であるかを、幼なじみのルビীরはよく知っている。

強く見せてはいるが、内面はとても小さくて、脆い。ひとたび感情の糸が切れれば、際限なく心を沈めてしまうのだ。

「大丈夫。落ち着いて」

ルビীরが優しく、諭すようになだめる。

「ごめんね……。ごめんルビীর」

フブリは弱い自分が、心底情けなかった。こういふときはいつも、ルビীরに頼らないではいられない。喉元にこみ上げる嗚咽を押さえながら、しかしわからない、と思う。

これまで、襲撃者が自分を狙うことはあれども、他人に居場所を尋ね、あまつさえ傷つけるようなことはなかった。それは彼らがその存在や行動を表沙汰にしたくないためだと思っていた。それは、ツバルの『おとり作戦』に誘われた男もまた雇われた人間だった、というところからも証明される。しかし、その仮説に先ほどの宿の訪問者は当てはまらない。

フブリは、一年前に初めて襲われたときのことを思い出していた。

「お〜い！」

どこからか声が聞こえた。それがツバルのものだと気づいて周囲を見渡すと

「お前ら、無事か!？」

声は、頭上から聞こえた。見上げると、民家の屋根からツバルが降

ってきた。

「な、何てどこから来るんですか」

「仕方ねーだろ。あのおっさん、しつこいんだもんよ。それより…

…」

ちら、とフブリに視線を移す。

「大丈夫か？」

「だいじょうぶ……」

まだ気分は悪かったが、フブリは何とか体を起こした。

「よっしゃ。じゃ、逃げるぞ。ほら、荷物」

わざわざ逃げるときに回収したらしい。荷物を受け取り、ルビーも立ち上がった。

「宿はどうなつたんですか？」

「わかんねえ」

ツバルはさらりと答えた。

「じゃ、ただ逃げてきただけですか」

「うん。……あ、でもな」

フブリの顔色を窺って、しばし間を置く。

「さっきの従業員は軽傷だったみたいだぜ」

フブリが顔を上げた。

喉に刺さっていた骨が取れたような、急な開放感を感じる。涙が出そうになるのをこらえると、急に体中の細胞が動き出したようになくなった。フブリは、何に対してか頷いた。顔を上げると、本来の自分が戻ってきたように感じた。

そんなフブリにルビーは安堵したようで、彼の口元が緩んだ。

「落ち着いてる暇はないぞ。さっさと逃げないと」

「……うん！」

三人が家屋の隅から出ようとした瞬間、刃物が空を切り裂いた。しゅっ、という乾いた音が耳に焼きつく。

「おお！ 見つかったかー！」

どうも、ツバルの声は緊張感に欠けた。ひょうひょうとした動きで、

二人をかばうように前に出る。

「けっ、あんたもバイトか？」

慣れた手つきで剣を振り上げる男だが、ツバルはいとも簡単にそれを避けた。はじめは強気だった男は、幾度もかわされるうちに、苦い顔つきになっていった。

ルビーはそれを、ぽかんと口を開けて見ていた。ツバルの剣技を見るのは初めてなのだから無理もない。

「……フブリを助けたって言うのも、あながち間違いないんじゃないかね……」

彼のツバルを見る目は少しばかり変わったようだった。

「あ、やべ……」

ツバルの呟きは、フブリにもはつきりと聞こえた。しかし誰がどう見ても、彼が優勢であることは明白だ。

「剣、宿に置いてきちゃった」

「ええ！？」

思わず驚きの声が漏れた。ツバルは何事もなかったかのようにあっけらかんと笑っている。先ほどまでツバルに向けられていたルビーの尊敬のまなざしは、一瞬で消えた。

ツバルが後退したのを合図に、踵を返すと全力疾走する。後ろを振り向くと、男が眦を決し追いかけて来るのが見えた。

「ルビーよ、魔法でちゃっちゃつとお仕置きしてやりなさい！」

ツバルが、まるで自分のことのように誇らしげに言った。

「馬鹿言わないでください。無理です！」

「何お前、そんなに弱い！？ 『炎よー！』って言って人燃やせないの！？」

ツバルはどこで聞いたのだから、わけのわからない呪文を口走っていた。

「あっ、あのですね。弱いだとか、強いとかじゃなくて…… 『炎よー』なんて言わないし……。えー、魔法は万物が使い手の呼びかけに応えてくれるという原理で……」

「魔法は、人を傷つけることを許さないの」

長ったらしく講釈をはじめそうなルビーを、フブリがフォローした。「おいしいご飯を誰かに食べさせてあげたい、って魔法をかけたら、稲は早く伸びてくれるんだよ。でも、彼らは自分が納得したことにしか力を貸してはくれない。だから、守ることはできても傷つけることはできないってわけ」

走りながら話していたため、最後のほうは声がかすれた。

「へー。便利なようで、結構制限あるんだな」

「魔法が万能だと思ったら大間違いです」

感心するツバルを横目で流しつつ、ルビーが頷いた。

「ところで……」

息の切れてきたルビーが最初に後ろを振り向いた。

「撒いた、みたいだね……」

続いてフブリも振り向く。三人は余韻を残しながら、ゆるゆるとスピードを落とすはじめた。

いつの間にか町の外れまで出ていたらしい。夜の草原に、虫たちの鳴き声が静かに響いた。

「……い、今まで……あんな人はいなかったんですよ……。直接宿の人間にフブリのことを聞くんなんて……」

もともと体力のないルビーは、かなり息が上がっていた。草むらに座りこむ。

「雇い主も焦ってきてんのかもな……」

遠くから、男の声が聞こえた。

「おい。あんたら、旅人かい」

小太りの男だった。町のほうから走ってくる。

「あんたらも、逃げたクチかい？」

不可解な言葉にフブリは眉をひそめる。

「逃げたって……、町の人たち逃げてるの？」

「ああ、それが……おかしな連中が町中荒らしまくってるんだよ。誰か探してるみたいだね」

男は脂汗を拭きながら大仰に両手を広げた。

「町は今どうなってるんだ？」

「詳しいことはわからないが、町中の家に押し入ってるみたいだよ。火をつけられた家もあるとか……」

瞬間、フブリの瞳から色が消えた。

火……

フブりは、血の気が音を立てて引いていくのを感じた。

長く襲撃者から逃げてきたが、このような事態は初めてだった。

最近、襲ってくる人数も回数も少なくなってきた。ルビーと二人なら逃げられる自信もあったし、相手が雇われた人間ならなおさらだ。だが、まさか滞在する町を

ふと、幼き日に養母と暮らした村を思い出す。

一面、赤くなつた田畑と、声にならない悲鳴……。

あんなことは、二度とあつてはいけない。

体は勝手に立ち上がっていた。

「フブリー！」

ルビーが止めるのも聞かずに、フブりは、再度町へ向かって走り出した。

第二章 六

「フブリが戻ってもどうにもならないだろ！」

「じゃあ、ルビーは町の人たちがどうなってもいいって言うの!？」
金切り声が、夜の草原に響き渡った。

ルビーは町へ駆け出そうとするフブリの腕を掴んで放さない。フブリは形相を変え、それを振り払った。

「奴らは顔を知られるのを快く思っていないんだろ? 恐らく、無茶なことはしないとと思うぜ」

ツバルが、ルビーに出遅れて追いかけてきた。

「家に火をつけたんだよ!？」

フブリは目を見開いた。口元が震えているのが、自分でもわかる。

それをぎゅつ、と結ぶも、感情の波は収まってくれそうになかった。
「放火にどんな思い入れがあるかは知らないがなあ。今お前が出て行ったら、あいつらの思うつぼだろ」

ツバルの鋭い眼光が、フブリを射抜いた。肩をしっかと掴まれ、視線を離すことができない。流れる汗が髪の毛に絡みつき、フブリは言葉にし難い息苦しさを感じた。

「……………村が、燃やされたんだ……………」

視線をつきあわせたまま、口の端から漏らした。蚊の鳴くような声だった。

「私が住んでた村……………シルヘットの……………養母の思い出がすべて燃やされてしまった」

フブリの視線は、いつしか遠くに向けられていた。過去の光景がまざまざと思い起こされる。

「それで……………旅に出たのか？」

「……………それが一番の理由です。最初の襲撃者は銀色の騎士でした。

彼らはフブリ一人を狙ったのでしょうが、火をつけた家屋から村中に火が移り、結局たくさんものを焼き尽くしました。その後、と

にかく逃げないと、村の人を巻きこんでしまうからってフブりは……」
ルビーが言葉をつなげた。フブりは黙ってそれを聞いていたが、その瞳にはがんとした意思を宿している。

「だから私、こんなところでじっとしてなんかいられないんだよ……！」

力強い想いだった。ツバルをまつすぐに見つめる視線には、揺らぎがない。

「……なるほどねえ。気持ちはわかった。……が、フブりはやっぱり行っちゃ駄・目」

反論しかけるフブリの口を大きな手が優しく塞ぐ。

「おれが行くから、待ってる」

「っ、ツバル！」

フブリが反射的に掴みかかった。しかし、彼は変わらずつかみ所のない笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、ぼくも行きます」

ルビーが素早く前に歩み出た。

「ルビーは来るな。こんな奴が……」

言葉が不自然に途切れた瞬間、風が舞った。

ツバルが足を振り上げたのだ。その狙いは、フブリの背後にあった。

「いるかもしれないからなっ！」

風が頬の横を掠め、空を切った。フブりは、その勢いに目を閉じる。何があつたのか、と考える間もなく、ことは終わっていた。

小太りの男が草むらにうずくまっている。かたわらには、小刀が落ちていた。ツバルの蹴りが真正面からヒットしたようで、ぴくりとも動かない。

「この人……さつき町から逃げてきた人じゃないか」

ツバルを除く二人が驚きの表情を浮かべた。ツバルがぼりぼりと頭を掻く。

「あ……。恐らく、もう町に奴らはいないだろうなあ」

「で、でも、火をつけたって……」
慌てて町を指差す。

「嘘だと思っせう。今まで姿を見られることを極端に嫌ってた奴らが、急に自分をアピールするような行動に出るわけがない。で、町に火をつけた、人を捜してる不審者がいる、って話をしてわざとおれらを町の外へ出るように導いた……」

「そうになるとむしろ危ないのは、ここですね……」
冷や汗をぬぐったルビーは、周囲を見渡した。依然続く夜の静寂に、虫の声だけがやけに響いて耳に残る。

「ってことで、ルビー、お前が一人で町の様子を見てきてね」
軽く放たれた言葉に、ルビーは目を剥いた。

「はあっ？ ぼく一人ですか？」
頷くツバルは、やはり笑顔だった。

「ここが危険だとわかった以上、おれがフブリの傍にいたほうが都合いいだろ？」

そう言われれば、ぐうの音も出ないようで、ルビーはただうつつむいた。確かにツバルは、直接的な戦闘においてはルビーよりも遥かに強い上、頼りがいもある。何より彼はその腕を糧にして生きてきた傭兵なのだ。

それは、フブリも認めざるを得なかった。ところが……

「申し訳ないんですけど……ツバルさんが町に行ってもらえませんか」

「ルビー？」

フブリは目をぱちくりさせて驚いた。

ルビーは未だ、ツバルへの懐疑の念を振り切れずにいるようだった。じっと、何かを確かめるようなまなざしを彼に向けている。

「こんなときですが、はっきり言います。ぼくはまだあなたを信用していません」

「へえ……」

きっぱり言い放ったルビーを、ツバルは面白いものでも見るように

眺めた。

「ルビー。ツバルはそんな人じゃないと思うよ。……変な人だけど」
「いいんだ、フブリ。おれが妖しいっつーか妖艶な美しさを醸し出して
るっつーの？ それはもう、生まれたときからのおれの宿命だ
つたのさ……」

誇らしげに豪語するも、ツバルは『怪しい』の意味を明らかに取り
違えている。

「しかしよ。今の状況じゃ、そんなことも言ってもらえないんじゃ
ねえの？ 事実、昼間のように襲われたら、お前じゃフブリを守れ
ないだろ」

「それは承知の上での提案なんですけどね……」

フブリが心配そうな顔つきで、小さく呟くルビーを見つめた。ルビ
ーは腕を組んで少し考えると、口を開いた。

「……わかりました。必ず、フブリを守ってくださいね」

「もちろ〜ん」

脳天から出したような、高らかな返事が上がる。その態度に、ルビ
ーはあからさまに不機嫌そうな顔をして見せた。

「フブリに何かあったら許しませんから」

「お、大げさだよルビー」

ルビーの声は、氷のように冷たく鋭いものだった。その雰囲気能耐
えかねたフブリが、二人の間に割って入る。

「じゃあ行くけど……、様子を見たらすぐ帰ってくるよ。任せます
けど、ツバルさんの返事にはやはり不安が残るので」

言って、ルビーがフブリのピアスに手をかざした。その指先から、
わずかな光が漏れる。

「何だソレ？」

ツバルが不思議そうに覗きこむ。

「魔法です。フブリが危なくなったら知らせるようにと頼みました」
「これっぽっちも信用してねえのな……」

呟く彼の背中は寂しそうだった。

実は魔法は、手をかざさずともかけることができる。

ルビーはフブリのピアスに乗じて、ツバルの上着の裾にも魔法をかけていた。むしろ、そっちが本命だったのだろう。

怪しい行動が逐一わかるように、遠くにいても声を聞き取れる魔法だった。先ほどナイフの青年にかけたものと同じものである。簡単に言えば盗聴器だ。

フブリはルビーのその動きに気づいたが、何も言わなかった。別にツバルを疑うわけではないが、ここでルビーを止めたところで何がどうなるというわけではない。更に二人の溝が深まるだけだろう。

「おれの剣も頼むぞ〜！」

そんなこととは露知らず、ツバルはルビーの後ろ姿にのんきに手を振った。

「さて……」

ルビーの姿が見えなくなると、ツバルは一転して身を構えた。フブリが生唾を飲みこむ。

「来たな」

彼は、にいつ、と笑った。

「フブリ！ かがんでろ！」

「はいいつ」

咄嗟のことに声が上ずったが、気にしてもらえない。

現れたのは、見たことのない黒ずくめの中年男性だった。剣は持っているが、布の隙間から見え隠れする鋭い眼光だけは、今日会ったどの襲撃者よりも恐ろしかった。指先が淡く光っている。フブリはその光に見覚えがあった。

「あつ、あー！ じゃあこの人が雇い主!? 魔法使いの!」

「そういうこつた!」

それからのツバルの動きと言えば早いもので、フブリは思わず見とれてしまった。剣がないとはいえ、ひ弱な中年魔法使い一人、ねじ伏せるのは簡単だ。

ツバルは、男の顔を見て何かに気づいたようだった。その微妙な表

情の変化を、フブリは一瞬不思議に思ったがすぐに忘れた。ツバルが雑木林の中に魔法使いを押しこむように足を振り上げる。やがてフブリからは二人の姿が見えなくなった。

「ツバル・リアノーラ……」

林に入ったところで、ツバルは動きを止めた。

「まさか、あんたがああ娘を見つけていたとはなア」

「……お前、何故雇った襲撃者を宿に押し入らせた。目立つ行動は慎んできたんだろ」

「あんたがいるって話をさア……娘の死体を回収しに行ったバイトに聞いたもんでね。でなきゃ、こんな表舞台におれが出てくることはなかったさ……。相変わらず目立つ金髪じゃないか」

ツバルは冷ややかな目で男を見つめると、一歩踏み出した。男は笑って後退する。

「おっと、まだおれは誰にもあんたのことを言っていないぜエ？ 報告するつもりもねエよ……。おれはただ、あんたがいるって話が本当かどうか確かめたかっただけさ……。会ってみたかったんだ。個人的な興味でね」

男は舐めるように上目遣いでツバルを見つめた。その様子に舌打ちすると、ツバルは唾を吐き捨てた。

「ツバル！」

フブリは、雑木林から姿を現したツバルに駆け寄った。そこに魔法使いの姿は見えない。林のほうを覗き見るが、人影も見当たらなかった。

「あゝ、あいつ逃げちまった……。林の中は走りづらいし、あいつなかなか足が速くてよ」

苦々しくも満面の笑みを浮かべるツバルに、反射的に微笑み返した。しかし、その笑顔はすぐに消え去ることになる。

街の方角から、小さな煙が上がっているのが見えた。

初めは温泉宿の湯気だと思った。しかし、その煙は宿のある方角から伸びてはいない。明らかに湯気とは吹き出す勢いも異なった。高く、高く、天に向かって伸びている。

「……あ……」

わななく口元を両手で塞ぐ。

ツバルが慌ててフブリのもとに駆け寄り彼女の腕を掴んだ。しかし、フブリはそれを振り切った。

「私、行かないや……」

「フブリ！」

ツバルの声を後ろ手に聞きながら、フブリは丘を駆け下りた。自分に何ができるというのだろう。何もわからない。ただ、勝手に体が動いて止まらなかった。

そこは、夜だというのに真昼のように明るかった。

地元の警備隊が消防団となってバケツリレーを繰り返している。彼らの行く手にあるのは、大きな集合住宅だった。全長六階の縦長で、あまり新しくない建物のようである。火の手は、フブリがそこに着いたときにはすでに住宅全体を包んでおり、焼却にも時間がかかるように思われた。その勢いに、フブリはただ立ち尽くすしかない。

近隣の家屋から騒ぎを聞きつけてきた野次馬たちが、取り囲むように建物を見つめていた。警備隊の数人が、ごった返す野次馬を統制しようとする勢いが、彼らの勢いに呑まれてしまっている。

壁から壁へ伝っている洗濯物をかける物干しが、音を立ててぼろぼろ砕け落ちるのが見えた。

こんなにも大きな建物が、炎に包まれて崩れ落ちていく。

フブリが野次馬に紛れて呆然とそれを見上げていると、突然誰かに腕を掴まれた。ツバルだった。

「お願い、助けて！」

若い女の声が野次馬の中から上がった。見れば、生まれたばかりの赤ん坊を抱きしめている母親が、警備隊に向かって叫んでいた。

「私の子どもなんです……！ 女の子が中にいるのぉ！」

体裁も構わずに顔中を涙でぐちゃぐちゃにして叫んでいる。警備隊はなだめるように母親の肩を撫でたが、それを契機に彼女は赤ん坊を抱いたまま、うずくまって大声で泣き出してしまった。

炎が、彼女の横顔を痛いくらい照らしつけていた。

「どうして……こんなことになっちゃうんだろう……ね……」

フブリは母親を見つめながらぼんやり呟いた。

ツバルは無言で首を横に振った。その意味をフブリはすぐに看取したが、彼女の悲鳴のような泣き声が、耳にやけにまとわりついて離れない。

母親のそれに呼応するように赤ん坊の泣き声が響き渡った。

耳を貫くその命の叫びに、フブリは体を震わせた。

「……ごめんね、ツバル。私、やっぱり駄目だ……」

「おい、フブリ……!？」

フブリが一歩一歩足を踏み出し、その腕をツバルが慌てて掴む。

その歩は止まるどころか、目的地に向かって加速しはじめた。ツバルは緩めに握っていた腕に、思い切り力を入れて彼女を引き寄せた。

「駄目だ！ 馬鹿な真似はよせ！」

フブリは一瞬振り返ったが、わななく唇で叫んだ。

「もう、誰にも何も、失って欲しくないんだよ……!」

「やめる……! フブリ！」

自分でも驚くほど強い力だった。ツバルの腕を振り解いて炎の中に飛びこむ。止めに入る警備隊をすり抜け、まっすぐその入り口へ向かった。

ツバルは野次馬の波に押されながら、どんどん遠ざかって行くフブリに呼びかけ続けた。誰かが建物に飛びこむフブリを目にして悲鳴を上げた。だがそのときにはもう、フブリの姿は完全に炎の中に消

えて見えなくなっていた。

「フブリ！」

ツバルの声は虚しく空を切った。

第二章 七

脆くも崩れ落ちてくる天井をかわしながら進んだ。ミシミシ音を立てる階段を慎重に上る。床のところどころに火が燃え移っていて足がもつれた。足元を見れば、もう焼け落ちて穴が開いている床もあった。そこから見える階下の様子にぞっとする。

フブリは、口元を押さえながらひたすら前へ進んだ。炎の勢いも凄まじかったが、充滿している煙も半端ではなかった。前がほとんど見えない状態である。汗が額を伝って瞼に落ちるのがわかった。火の粉が行く手を遮るように舞う。

煙が視界を塞ぎ、どれだけ歩いたのかもわからなくなった。

崩れていく柱に子どもたちの落書きを見つけた。それだけではない。床の傷跡、壁の染み……

すべてを、炎が呑みこんでしまう。

この真つ赤な怪物が、思い出も人の命も、簡単に連れ去っていつてしまうのだ。

「ゴホッ、ゴホ……」

煙を大きく吸いこんでしまったらしく、喉がひりひりした。体中が焼けつくような痛みに襲われる。

「誰かー……！ 誰かいないのー！？」

喉の奥から必死に声を絞り出す。

「誰かー……」

熱くて、それ以上は声を出せなかった。喉元を押さえて膝をつくと「……あー……」

焼け落ちる建物の音と炎の爆ぜる音の合間に、子どもたちの声が聞こえた気がした。

「……ママあー……」

フブリは、壁にもたれながら体を起こした。スカートに小さな火が燃え移り、足元から煙が上がった。それを手で乱暴に消すと、何と

か体を持ち上げ歩き出す。体の節々が痛い。何だか頭もだるくて、思考が行動に追いつかなかった。とにかく、声のする方向に歩いた。

その日、真つ赤な化け物が、村を呑みこんだ。

銀色の甲冑を着た騎士……

私の家……

シルヘットの思い出……

私の家族の思い出……

お前の養母は罪人だ

罪人だ

罪人だ

だめ……

お願い、燃やさないでえ……！

消えてよお！ 燃やさないでよお！

持ってかないで

その思い出だけは、持って行かないで

シルヘットが本当にいなくなっちゃう

シルヘットが……

「ママア　　！」

泣き声にはっとする。

フブリは、部屋の隅でうずくまっている小さな女の子に気がついた。足を引きずるようにして近寄ると、優しくその体を抱きしめる。少女はしゃくりあげながらフブリにしがみつき、その胸に顔を埋めた。

「……大丈夫だよ。お姉ちゃんが、ついてるからね」

少女を抱き上げ、出口を探す。いつの間にか周囲は火に囲まれ、退路がなくなっていた。入ってきたときよりも明らかに火の手が回っ

ている。同時に、煙の量も想像をはるかに上回るものになっていた。フブリは少女の口元にハンカチをあてがい、なるべく煙を吸わないように身を屈めた。

しかし、もはや彼女の体は限界だった。

足取りはおぼつかない。目の前もかすんできている。どこから逃げているのか見当もつかない。ただ、事務的に足を前へ動かした。

「フブリ……」

目の前が傾いている。ゆらゆら揺れる陽炎の奥に、人影を見たような気がした。

「フブリ！」

名前を呼ばれたような気がする。口を動かすが、自分の声は聞こえない。抱きしめている少女の泣き声も、もう聞こえなかった。

不思議と体の痛みも消え去っていた。何もかもが麻痺したような感覚の中で、ただ、自分の名を呼ぶ低い声だけが耳の奥に反響した。

何度も、何度も……

「フブリ！」

急に、体が浮いた。否、誰かに抱きとめられたのだ。

「フブリ！　しっかりしろ！」

その男は、無遠慮にフブリの頬を叩いた。その鈍い痛みにも薄く瞼を開けると、彼の顔が目前にあった。

「ツ……バル………？」

男はその返事に歯を見せて笑った。ほっとした様子で、肩を揺らしながら大きく息を吐いている。

「よっしゃ、大丈夫だな！　お前がその子助けたんだぞ、しっかり守れ！　しっかり立って、歩いて、おれについてほら、外に出るんだ！」

ツバルは後ろを支えながら強引にフブリを立たせた。

腕の中の少女を見ると急に、体中の感覚が眠りから覚めたように動き出した。

少女の泣き声が耳をつんざき、建物の崩れる音、炎の爆ぜる音が同

時にフブリの感覚中枢を襲った。煙は息苦しく、体中が焼け焦げるような痛みを感じた。

その後、どうやって外に出たのかは記憶にない。とにかくツバルの誘導に従い、時には彼に抱えられながらフブリは炎の海から抜け出した。

「ありがとう、ありがとう……」

母親の言葉が耳を通過して、気づいたときにはフブリは火災現場近くのベンチに、シーツを頭から被って座っていた。

ぼんやり遠くを眺めると、木々の隙間から、まだ火の燃え盛る集合住宅が見えた。消防団と野次馬たちの声が入り混じって聞こえる。

もくもく立ち上る煙を眺めながら、フブリは生まれ育った村を思いおこした。

唐突に、涙があふれ出す。

頬を伝う涙を、大きな手がぬぐった。ツバルは真っ黒になった顔で、いつものように能天気な笑顔を見せた。

「……私………のせい……」

ポツリと口の端から漏らす。

「……私がもしあの日、村にいなかったら……？　銀色の騎士が言う通りに殺されてたら……？」

フブリは、口元を押さえて体を丸めた。

「私が……わたしが村のみんなの思い出を、奪った……あのときにもう二度とこんな、誰かを巻きこむような、誰かを悲しませるようなことはしないって誓ったのに……！」

感情のたがが外れた。

大粒の涙が次から次へとあふれてくる。それを押さえることもせず、フブリはしゃくり上げた。その小さく丸まった体を、ツバルが抱きしめた。頭を優しく撫でられて、フブリは養母のそれを思い出した。彼の胸に顔を埋めると、一層切なくてたまらなくなった。

「あの火事な……、住民の火の不始末だったって。お前を襲ってきただ奴らはな〜んも関係なかったんだよ」

「…………え…………」

フブリはわが耳を疑い、優しいツバルの目をじっと見つめた。

「フブリのせいじゃない」

その一言で、ぶわっ、と感情があふれ出した。

「……………って…………」

ツバルの衣服を掴む手に力が入る。その途端、火の中に飛びこんだときの体の痛みがまた戻ってきた。それだけではない。痛いやら嬉しいやらで、フブリは胸がいつぱいだった。

「だって…………あたしのせいで、あたしがむ、村を焼いたようなものなんだから…………全然関係ないこんな、ま、まちまでやかれたらどうしようかって…………」

大きな腕がフブリをすっぽり包んで抱きしめた。

「大丈夫。みーんな無事だったからな。フブリのおかげだ」

ツバルが優しく耳打ちした。

フブリは涙が止まらなくなり、ろれつの回らない言葉でしゃべり続けた。自分が何を言っているのかわからなかった。ただ、彼の腕の温かさで何かが溶けたように感じる。ぼろぼろと、繋ぎとめていたものがあふれ出すのだ。

「あつ…………あたし…………村…………みんな…………焼けちゃった……………ぜんぶ、なくなっちゃ…………」

「よく頑張ったなあ」

ツバルの大きな手が彼女の頭を撫でた。

フブリは、声を張り上げて泣いた。

シルヘットが死んだときでさえ、こんながむしやらに泣きはしなかった気がする。

悲しいのではなかった。後悔から解放されたかった。心の奥に押しこみ、澱みのように溜めこんでいたものを吐き出したかったのだ。

「フブリー！」

ルビーの声が遠くから聞こえて、フブリは上体を起こした。近寄る彼は、涙で頬を濡らすフブリに気づき、激しく動揺したようだった。

「フブリのピアスにかけた魔法が……きゅ、急に消えたから何かあったのかと思つて……そしたら近くで火事が起こってるし。つて、何その格好!? どうしたの、一体!」

涙の次は、そのぼろぼろに焼け焦げた風体に驚いたようだった。フブリは顔中を炭まみれにして、服のあちこちも黒ずんでいた。

「ルビー……」

フブリは、涙を流したまま彼に微笑んだ。ルビーは困惑した様子で、何があつたんですか、と視線をツバルに向けたが、彼はわざとらしく両手を掲げるだけだった。

火の勢いは依然強いままだつたが、フブリはもう、一年前の火事を思い起こすことはなかった。

炎が奪い去って行くことができなかつた思い出は、ずっと心の中に残っている。

ルビーの肩越しに、遠くで火の粉が優しく舞い上がるのが見えた。

「あなたの剣がなくて宿中探し回つたら、空いた酒樽の中に入つてたんですよ」

ルビーは開口一番、ツバルを恨めしそうに睨んだ。

昨夜のフブリに起こつた一件を聞いて以来、ルビーのツバルに対する不信任は更に大きくなつたようだった。彼らの溝が深くなつた原因が自分であることを知っているだけに、フブリは慌ててツバルを擁護したが、ルビーは聞く耳持たなかつた。ツバルはといえば、そんなルビーの様子を気にすることもなく、というよりは気づいていないようで、いつものように彼の肩を馴れ馴れしく抱いている。

ルビーはカフェのウェイトレスが運んできた紅茶をすすつて、じろり、隣の男を睨みつけた。

「……まあ、とりあえずはツバルさんの言つてた通りでした。町は静かなままで、フブリのことを聞きこんでる人もいなければ、民家

に押し入って暴れてる人間もいなかった……。火事だつて、偶然起こったものでしたしね。ただ、やっぱりわからないんですよね」

「宿に入ってきて、私の名前を出した人でしょ？」

フブリもルビーに合わせるように眉をひそめた。頬を覆う幾つかのガーゼが、昨夜の惨劇を物語っている。それはツバルも同様で、彼にいたつては大きな火傷を負ったため包帯も巻かれていた。

「そう……、あの人も雇われた人間だつてことがはっきりしたわけだけど……」

昨夜、宿に戻るとナイフの青年が襲撃者たちを捕まえて戻って来ていた。

捕獲された襲撃者は三人。死んだフブリを金と引き換えに受け取りに来た男、宿に押し入りフブリを名指した瘦躯の剣士、町人を装って町が襲われていると虚偽を吐いた小太りの男。その中に、最後にフブリが目撃した魔法使いの姿はなかった。

三人はそれぞれがバラバラに別の町で雇われた人間で、一人として雇い主の正体を知っている者はいなかった。宿に押し入って従業員を傷つけた男も、そうするように命じられただけだと言う。

「その雇い主の魔法使いが遠くから彼に命令していたとして、何故わざわざ昨夜に限って自分の存在をアピールするように男を宿に送つたんでしょう？ あんなことをしたら、フブリが逃げるのなんて目に見えてますよね。しかも昨夜に限って派遣される襲撃者の数は多かつた」

実はですね、と咳払いを一つしてルビーは言葉を切った。

「あの襲われた宿の従業員、記憶を失っていたんです。つまり魔法使いが後から戻って、フブリを探している人間がいた、という記憶を消したんですよ。わざわざ自分からそれを公開するような真似までしておいて、何故後から隠蔽するのか……」

「私考えたんだけど、それって私たちを町の外におびき出したかったんじゃないのかな……？」

「それだよ」

ルビーは思いついたように人差し指を立て、身を乗り出した。

「おびき出す必要なんてないんだ。あれだけ人を雇ってるんだから、フブリを殺したいなら彼らだけでこと足りるはずだろ。今までそれでよかつたはずだ。わざわざ外にぼくらをおびき出して、わざわざ指令塔が姿を現す……。その必要性がわからない」

「気が変わって、自分の手で止めをさしてやりたくなった……。とかじゃねえの？」

巨大樽タルトに顔を突っこんでいたツバルがようやく頭を上げた。

「いえ……。もしかしたら……。あのときばかりは、フブリを殺すことが目的ではなかったのではないでしょうか……」

ルビーは、隣のツバルにわざわざ向きなおし、彼に問うように言った。

一瞬、沈黙が落ちると

「フブリちゃん！」

店内に数人の男がぞろぞろと駆けこんできた。

「あ、ナイフ君！」

「おれら、それぞれ家に帰ることにしたっス。金も手に入らなかつたし、上手い話は今回のでもうこりこりなんで、やっぱり真面目に働くっスよ」

襲撃バイト仲間の男たちはすっかり意気投合したようで、周囲から見ていて暑苦しいほど肩を寄せ合っていた。一見すると何の集まりなのか共通点が見出せない謎の集団である。

「そっかあ。ナイフも頑張っておれみたいに格好よくなれよ」

ツバルの言葉にナイフ青年は瞳を潤ませた。男たちは三人に深々と頭を下げると、大きく手を振りながらカフェを出て行った。店内にいた客たちは、嵐のごとく通り過ぎた謎の集団が気になったのか、彼らが外に出た後も目で追っていた。

結局彼らの名前も最後までわからず仕舞いだった。

「そろそろ行こうか、ルビー。ツバルも」

「別にツバルさんは来なくてもいいですけどね」

フブリを危ない目にあわせないようにという約束を破ったことを、まだ根に持っているらしい。ルビーのツバルに向けた言動の一つ一つには棘があった。その冷たい雰囲気にしたたまれなくなったフブリは、まだタルトを頬張っているツバルを無理矢理引っ張った。

「えっ、どこ行くの？」

その当事者といえは、何も聞いていなかったようで、ルビーに対して能天気な笑いかけた。ルビーがもう慣れた動作で頭を抱える。

「これから聞きこみに行くんだよ。初めて来た町ではこれを欠かさないの。シルヘットのこと、カラアのこと……あんまり期待はしてないけどね」

「カラアっていう国は本当にもう、なくなってしまったのかもかもしれないな……」

ルビーが遠くを見つめながら溜息混じりに呟いた。

「あるよ」

座りなおしたツバルがコーヒーをすすめる合間に、喉を鳴らしながら言った。

「え？」

「カラア、あるよ」

「え……ええっ!？」

二人は、店内に響き渡るほどの大声を出した。ルビーに至ってはツバルに掴みかかりそうな勢いだった。

「な、何で知ってるんですか！」

ルビーの言葉は、大きかったがどもっていた。まるで信じたくないというように、首を真横に振っている。

「そっだよ、今まで誰も、カラアを知っている人はいなかったんだよ！ いろんな町で聞きこんだけど、はっきりとその存在を知っている人はいなかった。古い図書には二百年も昔に国交が絶えたって……その当時もどこにあるのかすらわからない幻の国って言われて……本当に伝説のような国で」

「もとから国交なんてないに等しい国だったようで、その書物が残

つっていた国だつてカラアについては漠然とした情報しか持っていなかったんですよ！」

フブリとルビーは大声でそこまで連ねると、スイッチが切れたように声を出すのをやめた。身を乗り出し、ツバルの返答を待っている。当のツバルといえば、激しくまくし立てる二人に気圧されて、ぽかんと口を半開きになっている。

「……いやあ、おれの友達が昔住んでたことがあってよ」

「カラアに……住んでた……？」

「その友達、まあおれとはかなり長いつき合いがあつて、そいつがまた変な奴で……」

ツバルがべらべら繋げているどうでもよい話は、フブリの耳にはもう入らなくなっていた。

カラアに住んでいたことがある。

フブリは、途端に目を輝かせた。

「初めて見つけた……！ カラアを本当に知ってる人……！」

フブリは、感極まってツバルに抱きつきそうなるほどだった。嬉しそうにしているのは、喜ぶフブリを目にしたツバルも同様だった。

しかし、ただ一人ルビーだけは、強張った表情を崩すことはなかった。

幕間 - Interval

あれは、何年前のことだっただろうか。

突然、痩せこけた黒髪の少女が、ふらりとやってきた。

それで、いつの間にかそいつは、おれの家に住みついた。

どういいうきさつだったかは思い出せないが、そう、おれは年甲斐もなく十も歳の離れた少女に、恋をしたのだ。

もともとひょうきんな友達がいた反動だろうか。おれは自分でも思うがあまりお喋りなほうじゃない。

だから惹かれたのかもしれない。

彼女は明るく快活で、まるでここに似合わない性格だった。何が楽しいのか、いつもからからと笑い、冷えきった人々の心を温める少女。それは真つ暗で、未来なんか見えやしない、そんな生活に突然差しこんだ日の光だった。

その笑顔からはとても想像がつかないけれど、少女は、おれなんかよりもずっと真つ暗な道を歩んできた。ひとりぼっちで誰にも愛されず、何度も心を打ち砕かれてきたのだろう。しかし、それでも彼女は微笑むのだ。

おれは彼女の笑顔がとても好きだった。

けれど、彼女にそれを面と向かって言うのは照れくさくて、おれはいつも心に反して無愛想な態度を取った。彼女はおれのそんな性格もすべて見透かしていたから、きつとおれが本当に言いたいことも知っていただろう。

思い起こせば、言葉にして伝えたことは一度もなかった。

何となく一緒にいて、何となくおれたちは恋人なんだ、と認識するだけでことたりたから。

今になって、言っておけばよかった、と思う。

もう二度と、それを伝えることは叶わないのに。

第三章 一

ツバルは何が好き？ 出身はどこ？ 血液型は？

はつきり言つて、異常なほどの変わりようだった。彼女の変貌を、ルビーは何と形容していいのかわからない。ただ、彼女がツバルに心を許しているのは誰が見ても一目瞭然。

「え？ ツバルが何？」

ところが、たまに話しかけてもこの少女ときたら、ツバルに対する己の入れこみに気づいていないようで、のんきに返事を返してくる。「……だから、あの人まだ信用できるって決まったわけじゃないだろ。不用意にベラベラぼくらのことを話すのはどうかと思うんだ」

「やだ、ルビーってはまだツバルのこと疑ってるの？」

フブリは大きく口を開けて、からから笑った。真剣な表情を作っていたルビーとしては、それを馬鹿にされたようで面白くない。

「フブリは能天気すぎるんだよ……！ もうちよつと危機感を」

「あ、ツバルその荷物とつてくれる？」

てんで聞いていない。

「ん〜？ これ？」

そして、彼女を変貌させた元凶 ツバルは、いつの間にかそこになじんでいる。つい先日まで二人旅だったという事実を知らぬ者の目には、その姿はまるで初めから三人で旅をしてきたように映るだろう。小さなポシエットを手渡す優男を、ルビーは冷淡な瞳で見つめた。

この状況が、ルビーにとってはここ数日の悩みの種だった。

ツバルが、カラアを知る男友達のもとへ案内するといった日から、フブリはすっかり夢想到に浸ってしまっている。

一年も探し続けていたものの手がかりが、ようやく見つかったのだ。当然な反応である。彼が命がけてフブリを炎の中から救い出したと

いう話も、後でフブリ自身から聞いた。しかし、だからといって彼の言葉をすべて信じるには、まだ情報が足りなさ過ぎる。

「あんな変な人の言うこと、何でも信じるなよ」

ツバルが不在の時に進言してみるも、フブリの答えはいつも決まっ
て同じだった。

「変だけど、いい人だよ」

剣もあんなに使えるし、優しい人だよ、と彼女は陶然として語った。

「あの人、絶対怪しいよ。大体、そんな『凄腕』の剣士が何でぼくらなんかに構うんだよ。あんなに強いなら雇い口くらい、いくらでもあるだろ？」

「きつと困ってる人を放つとけない性分なんだよ」

本当に疑いなど微塵もないようなフブリの笑顔に、ルビーは顔をしかめた。

「『凄腕』が、それだけで何のメリットもないのについてくる？」

「何か突っかかるね、ルビー」

「別に……」

ルビーは旅の間中、暇があるとツバルを観察していた。確かに剣技は素晴らしいものの、しかしルビーは彼を『いい人』とはどうしても思えなかった。

フブリにベタベタくつついたと思えば、今度は自分の肩を気安く抱いてきて、ルビーはたまに、彼が害虫に見えることがあった。そもそもこの男、無意味なボディータッチが多すぎる。

しかし、そんなのんきな顔の反面、剣を振るときの彼の表情を、ルビーは見逃していない。

前後はひょうひょうとした態度で、相手をあしらうツバルだ。しかし、一瞬だけ、剣を振るその一瞬だけは違った。そこには、別の顔が現れる。ルビーは、このツバルという男が、何か不可解な二面性を持っているように感じていた。

しかし、その旨をフブリに伝えたところで、何も変わらない。

じっとツバルを見つめるフブリの瞳は完全に盲目。他人の言葉など、

もう耳に届いてはいないのだろう。だが、ルビーはツバルに対し、どうしても漠然とした違和感を抱かずにはいられなかった。

「……ルビー、どうしたの？ 具合でも悪いの？」

だから、フブリが自分の顔を心配そうに覗きこむまで、ルビーは自分が沈黙していたことに気づかなかった。拾い集めた薪木がするりと手を逃れ、ぼんやりしていた自分にはっとする。火をくべる準備をしていたフブリが、落ちた薪木を集めている。

「え、あ、うん。ごめん、何の話だっけ？」

聞き返すと、フブリは更に心配そうに顔を歪めた。その表情にどきりとして、ルビーは慌てた。

「だ、大丈夫だよ。ほら、最近は滅多に倒れないだろう？」

「倒れんの？」

ツバルが鼻で笑った。途端にルビーの眉根がきりきりと寄る。

「うん……ルビーってこう見えて、っていうか見たまんまなんだけど、体が弱くて」

「……自慢じゃありませんが万年貧血常習犯です」

ツバルに弱みを見せるのはフブリの手前、面白くなかったが、事実である以上仕方がなかった。

「お前、男のくせに体弱いのか」。病弱美少年っていうコンセプトも悪かねえけど、今は丈夫な男がイケてる時代よ？」

「別に好きで体弱めてるわけじゃないので放っておいてください」誰のせいで悩んでいると思って……。ルビーは心中で悪態をついたが、やはりツバルは能天気にならなかつた。

このあつげからかんとした態度が一番の問題である、とルビーは考えるようになっていた。乗せられるまい、とは思うものの、いつの間にか彼の調子のいいペースに巻きこまれている。

今日だって、本当ならばもうカラアを知るといふ友人宅への道程をたどっているはずだった。

それをこの闖入者が「腹減った」だの「もっとエネルギーを溜めこ

んでから』だの、わけのわからない屁理屈をごねたため、温泉街から数キロも進んでいないこの森林で休息を取ることになったのである。

「……その友達の家つてのは、本当に歩いて行けるんでしょうね」
野営の準備を整えながら、ルビーが聞いた。

フブリと村を出た頃は、金銭的な問題もあり一端の宿に泊まることは滅多になかった。そのため、こうした野営の準備は手馴れている。「任せとけて！ 三年くらい会ってねえから」

「全然任せられる年数じゃないですよ！？」 『から』の意味わかんないし！？」

ツバルはさしたる問題でもないというように、安心しろ、と肩を叩いた。その動作が一番大きな不安要素であることを、彼にはそろそろ気づいてもらいたい。

「でもさ、その友達の家がカラアにあるってわけではないんだよね？ その人にカラアの場所を聞いて……それから、また長い道のりになりそうだね」

焚き木に火をつけて、フブリはため息をついた。けれど同時に、嬉しそうに口の端を上げている。

「知ってた、ツバル？ カラアはね、旅人たちの理想郷なんだって。とても美しく、不幸なんてない天国みたいなところなんだって」
フブリが話しているのは、旅の途中『カラア』を捜しているときに耳にした御伽噺である。

実は、書物を調べずとも、その国の名を知る者は各地に少なからずいた。ただ、彼らはほとんどが長く旅を続けてきた旅人で、夢物語としてカラアの存在を語っているに過ぎなかった。

旅人たちは、その国を『幻の国』と呼んだ。誰一人、そこへたどり着いたものはいないと彼らは笑って言った。古い文献に書かれていることも、昔の旅人がでつち上げた作り話だ、と。それが存在するかどうかは、彼らにとって意味なきことだ。本の中の御伽噺のように、『幻の国カラア』を想像し理想郷にすることで、旅人たちは渴

いた心を癒していったのだ。

「……ツバルさんは、カラアのこと、何か友達から聞いてないんですか？」

「知らな〜い。カラアは可愛い女の子が多いって話は覚えてんだけどなあ……」

適当に考えこむ振りをして、にへら、と笑い返す男にルビーは冷たい視線を投げた。ツバルを睨みつける少年のその視線に、フブリは慌てたようだった。二人の男の間に割って入る。

「る、ルビー！ ツバル！ えーと、あつ、そうだ！」

フブリは思い出したように手を一つ叩いた。

「その友達のいるところって何て言うの？ そろそろ地図でちゃんと確認しよ！」

彼女の気遣いはあからさまで、ルビーは嘆息した。ツバルと自分の仲をどうにか修復しようとして試みているのだろうが、その先にツバルへの信頼があると思うと、ルビーには頭の痛い気遣いだった。

「そこは、『最果て』って呼ばれてるんだぜ」

ツバルは鍋を火にかけ、温泉宿からくすねて来た酒を杯に分けた。

「それが、村の名前なんですか？」

「いや、名前のない村だな。村人が適当にそう呼ぶようになったんだと」

ルビーは杯に口をつけながら、地図を広げた。

「場所的には全然、最果てではないですけど……」

そんな地名は、地図にも載っていない。山間の、どう考えても人が住めそうにない場所に、ツバルがペンで赤く丸印をつけた。ルビーが人差し指をかざすと、その部分が青白く光り『最果て』と刻まれる。ツバルが大仰に歓声を上げた。

「地図にも無い小さな村だから、村人たちは自分たちの村が最果てって信じてるんじゃない？」

フブリがにっこり微笑み、またか、とルビーは思った。

というのも、ここ最近ツバルに自分が反論する度、フブリは必ずと

言っていないほどツバルのフォローに回るのだ。それも、最近はやたら執拗になってきているように感じる。やはりこれも、あまりよい傾向とは思えない。

「ここからどれくらいかかるの？」

「ん〜歩いて二週間かそこら。近くでよかったな」

ツバルは笑ったが、ルビーは硬い表情を崩さない。

「って言っても、山の中歩き続けるわけですよ？ 大丈夫、フブリ？」

鍋のシチューを分けていたフブリは、くすくす笑った。

「私は大丈夫だよ。むしろルビーのほうこそ大丈夫？ 本当にすぐ倒れるんだから、無茶しっちゃ駄目だよ」

「えっ、マジ！？ お前そんなに弱いのか？」

「うっ……」

喉を詰まらせるところを見て、ツバルは何が嬉しいのか瞳を輝かせている。

「確かにその細い体じゃなく。よし、おれが今度三日で腹筋の割れる秘伝のエクササイズ伝授してやるよ！」

ルビーは丁重にそれを断った。

「フブリ〜！ 一緒に寝ようぜ〜」

自分の毛布を広げて手招きをしているツバルに、ルビーは声を失った。

「ツバルさん、変なこと言ってフブリを困らせないでください」

拾った焚き木用の木の枝で、ツバルの頭を小突く。小突くというよりは、容赦なく先端を叩きこんでいるといったほうが正しい。むしろ、突き刺さって欲しいところだ。

「だっておれ、一人で寝るの怖いんだもん。フブリは、おれと寝るのは、嫌？ 困る？」

「えっ、ええ……!?」

次の瞬間、ツバルは急に真面目な顔でフブリの手を握り締めたかと思いきや、こんなことを口走っていた。フブリはといえば、真っ赤になって、確かに困っている。

「怖いなら一人で温泉街に戻ってください」

焚き木が、今度は躊躇なく頭めがけて振り下ろされた。フブリが慌ててそれを止めたため、ツバルは大惨事を免れた。

「あっはっはー、容赦ねえなルビー」

フブリはそれに合わせて苦笑したが、赤みのさした頬は、なかなか熱が引かないようである。

彼女がツバルに好意を抱いているのは明白で。

ルビーにしてみれば、ツバルに疑いを持っている以上、複雑な心境を感じざるを得ない。

そんなことを考えていると、ふと、視線を感じた。ツバルが何を思ったか、まじまじと自分の顔を見つめていたのだ。

「お前、キレーな顔してるし、隣で寝たらちよっと嬉しいかもな……。よし、今夜は男同士肌を寄せ合って寝るか、ルビー！」

「何か滅茶苦茶気色悪いこと言ってますませんでしたか前文ー!? 近寄らないでくださいよッ！」

毛布をかぶったままにじり寄るツバルを避け、必死に後退する。

「いや、おれ全然オツケイ」

「だから何が!？」

ルビーは、一人納得して頷くツバルに、身の危険を感じた。

夜は、更けていく。月の光が森の木々を仄かに照らして揺らめいた。木々の隙間を縫って、雑魚寝している三人の旅人の顔も薄暗く彩る。ルビーは火の後始末をして、おもむろに空を見上げた。満点の星空にぽつかりと浮かぶ月は、どこか儂く消え入ってしまったような淡い光を漏らしていた。

横になると、フブリは疲れていたのか、すぐに眠ってしまった。穏やかな寝息を立てている少女を見やり、ルビーが安堵の吐息を漏ら

す。

「よかった……」

「何がいいんだ？」

ルビーの呟きに、ツバルが不思議そうな顔をする。

「夢に、うなされることがあるんです」

ルビーは、フブリの上かけをそつと直した。それに反応したのか、少女の体が少しだけ動いた。

「……悪夢なんです。それも、決まって同じ夢を」
彼女の辛さを噛みしめるように、ゆっくり言葉をつなぐ。

ルビーは、すでに横になっていたツバルの隣に寝転んだ。満天の星空を見上げ、ため息を一つ。

「幼い頃の夢ですよ。大好きだった、養母が死ぬ光景らしいです。

……多分、当時のショックが強くて、今でも夢に見てしまうんです
ようね……」

「そういえば、フブリは養子だったっけ？」

思い出したようにツバルが呟き、ルビーが頷いた。

「そうです。詳しいことはわかりませんが、本当の両親は、生まれたときに亡くなったとか……。それからは、どういついきさつかはわかりませんが、シルヘットさんがフブリを引き取ったらしいです。でも、彼女も流行り病の熱病で……」

そうか、と一言漏らしたツバルは、同情を覚えているのか、どこか寂しそうだった。寝返りを打ったその背中も、いつもより小さく見えた気がした。

「あの、ぼくからも質問していいですか」

「ん？」

昼間とは打って変わって、おとなしい反応だった。夜はさすがに静かになるようだ。いや、もしかしたらフブリの前でだけ、わざと明るく振舞っているのかもしれない。

「カラアは、本当にあると思っっているんですか？」

「あるんじゃないの？ 知り合いが、実際に住んでたらしいからな」

声の調子は変わらなかったが、ツバルは一瞬笑みを漏らしたように見えた。

「信じてるんですか？」

今度のはつきりと、笑い声が漏れた。

「信じてるよ……。カラアは、幻なんかじゃない」

まるで、自分もそこに行ったことがあるかのような口ぶりだった。

「たまたま都合よくフブリを助けたあなたが、たまたま都合よくカラアの居場所を知っていた。……そんなうまい話、信じられると思いますか？」

ツバルの背中をまっすぐとらえるルビーの瞳に、暖かさはなかった。むしろ、懐疑と、多少の嫌悪に満ちている。

返事は無かった。

「ツバルさん。あなたは、何者なんですか？」

「さあ……」

ツバルは、短く答えて目を閉じた。

第三章 二

鈍色を含んだ葉が揺れ、木々の隙間から光の雨を降らす。深い森林の暗闇の中、旅人たちの歩みを手助けするものは、それだけであった。

人気がない処女地の森を、慣れない足取りで進む三つの影。彼らはぼろぼろになった衣服を身に着け、体のあちこちに木の葉を張りつけていた。頭はぼさぼさで、顔には細かい引っかけ傷もあった。

三人が、こんな格好になっているのには、理由がある。

その一時間前、彼らはいつも通り道なき道を歩き続けていた。

最近、山道を通っているからか、襲撃者の数も減った。襲われても、ツバルがいるため、さして障害にはならなかった。二人きりで旅をしていた頃に比べれば、格段に快適性は上がっている。

「こつ、こんな山奥まで来たのは初めて」

フブリは、足元を取られないように注意深く歩いた。小夜にかけて降った雨が、まだ土を湿らせている。

ツバルの友人宅へ向かう旅は、進むに連れ、険しい道りになってきていた。『最果ての村』は深い森の奥にあるということだから仕方がないが、そこに道標すらないことには驚いた。

「本当に、こんなところに人が住んでるんですか？ ……あいたつ！」

ルビーが、頭を長い木の枝にぶつけた。それを見て、声を出して笑ったのはツバルだ。

「氣いつけて歩けよ。もうちょっと行ったところに、多分すぐ村あるから」

「多分ですか……」

「ひゃつ、ご、ごめんルビー！」

湿った土はよく滑り、フブリは何度も転びそうになった。その度、

前を歩いているルビーに追突しそうになる。ルビーは、はらはらしていたが、彼もさほどフブリと相違ない状況なため、振り向くこともままならないようである。ツバルの足は軽快だったが、残る二人はそれを追いかけるので精一杯だった。体中、緊張で脂汗が滲んでいる。

「ここの下だから」

何とか急斜面を登り終えて平地に到達したとき、ツバルが振り返った。

二人はもう、へとへとで、声を出す気力もないようだった。

「何だ？ お前らスタミナねえな！ いい若いもんが、そんなんじゃ駄目だろ」

「……ツバル……年寄り臭い……」

余裕のツバルからかなり遅れて、フブリとルビーは平地に着いた。せいぜい肩で息をしている。

「……で……どっ？」

フブリが、きよろきよろ周囲を見渡す。

「だから、ここの下」

ツバルの指差す先には、空があった。フブリが首を傾げると、彼の指先は垂直に下降し……谷底に向けられた。

切り立った崖を目の前にして、フブリは絶句した。

深さは相当なようで、その底は暗く、見えない。ただ、大きく伸びた木々の頂点が見えるばかりだ。ただ一人、ツバルだけが、あっけらかんと笑っている。

「あの、まさか……冗談ですよね？」

ルビーの顔が、見る見るうちに青ざめる。

「いや。ここの下だから。行こうぜ」

「行こうって、ど、どうやって？」

一縷の望みをこめて、フブリは聞いてみた。ルビーはもう、何となくその降下方法の見当がなくなってしまったようで、ますます顔を青くしていた。

ツバルが、おもむろに二人の肩を組んだ。がっしりと掴むその腕には、不安以外の何物も感じられない。

「ま、何とかなるだろ」

「ならない！」

悲鳴のような叫びはツバルの耳を通り過ぎただけだった。彼はさしたる問題もないというように笑い、二人を抱えて地面を蹴った。

「ひっ……」

声に鳴らない声だけを後に残し、三人は谷底に消えた。

「ひゃああああああ！」

「ひゃっほ

！！」

楽しそうなのは、もちろんツバルだ。フブリは、目をきつく閉じた。死ぬ。絶対死ぬ。

もう、それしか浮かんでこなかった。

しかし、一向に思考が途切れることはなかった。意外と人が落ちるのは遅いものなのだ、と思い、恐る恐る目を開いてみる。

フブリは我が目を疑った。

空を飛び交う鳥たち、雲の隙間、木々の頂点

それらすべてが、静止して見えた。

落ちていくというよりも、まるで、空を飛んでいるような感覚だった。ルビーが魔法でもかけたのだろうか？ いや、それよりも、ルビーはどこにいるのだろう。見渡すが、落下しているのはフブリ一人だった。周囲にはルビーも、肩を抱いていたツバルもない。たった一人、青く切り取られたジオラマのような空の中に立っている。フブリは、急な吐き気に襲われた。

切り立った崖が、目の裏に焼きつく。

先ほど、三人で跳んだ崖の先に向かって、走って来る幼い少女の影が見えた。

薄暗い深い森の先の、崖だった。花々が歌を口ずさみ、暗い葉の樹木が生い茂っている森だった。

少女は、崖の先に浮かぶ光に向かって走っていた。何かを恐れるよ

うな怯えた表情で、逃げるように走っていた。

彼女は光に飛びこみ、暗闇に染まった谷底へ落下していった。

ゆっくり落下する自分に微笑むその少女の顔が見え、フブリはぎよつとした。

少女は、他でもないフブリ自身だったのだから。

「フブリ！」

はっとして、目を開く。

心臓が急に動き出したかのように、激しく脈打っていた。心配そうに覗きこむルビーの顔が視界に入る。

「よかった……！」

痛いくらい抱きしめられて、フブリはぼんやり状況を把握した。ツバルと肩を組んで、谷底へ向かって飛び降りたことを思い出す。

「な、大丈夫だって言っただろ」

ツバルが、ルビーの背後から顔を出した。彼は体中に傷を負っていた。視線を移し、それがツバルだけでないことに気づく。自分を抱きしめるルビーも、そして自分も少なからず怪我をしているようだった。

「ツバルさんが、あんな危ないことするからですよ！」

「でもなあ……おれ、ここ来るときはいつもこの方法だし」

からから笑うツバルに、ルビーは頭を抱えた。

フブリは二人のやり取りを聞きながら、まだぼんやりする思考を必死に巡らせ、現実に戻ろうと試みた。途端、嘔吐をもよおし、口元を押さえて屈みこむ。

「フブリ？ 大丈夫？」

言わんことじゃない、と漏らし、ルビーはフブリの背中をさすった。フブリには、吐き気の原因がわかっていた。

切り立った崖を見た瞬間から、気を失い、夢を見ていたのだ。最も記憶に残る、最も恐ろしいあの夢を。

恐る恐る上を見やると、そこには夢の中の崖とはまったく異なるそ

れがあつた。落下中に確かに止まって見えたあの薄暗い森は、もうどこにも見当たらない。もちろん、崖の先に光も見えなければ駆けてくる少女もいない。

木々の隙間から、優しい光が差しこみ、フブリは目を細くした。

「ごめん。もう大丈夫」

落ちついたフブリは、ルビーの腕をそつと離した。

「ツバルが、私たちを庇ってくれたんだよね。ありがとう」

ツバルは自分たちに比べるとずいぶん怪我を負っている。フブリは傷だらけのツバルに頭を下げた。

「落としたのおれだしな。しかしお前ら、見るも無残な格好してるな」

「言っておきますけど、ツバルさんが一番ひどいですよ」

三人が三人とも、木の葉やら枝やらを体中に張りつけていた。髪の毛はぼさぼさで、服もところどころに穴が開いている。

密生する木々たちはクッションになってくれたが、同時に体もぼろぼろにしてくれたようだ。

「森の妖精さんに見間違えられたらどうするかな」

「あなたのような怪しい妖精はいないと思うんで、安心して下さい」

真顔のツバルを尻目に、ルビーはフブリの衣服に魔法をかけた。

「あっ、いいな〜！ おれにもおれにも」

ツバルは、修復されたフブリとルビーの格好に、目を輝かせた。ルビーは子どものように騒ぐツバルの反応を流しつつ、彼の衣服にも魔法をかけた。

「一応説明しておきますけど、ぼくの魔法で傷は治せませんから、ここまでです」

ツバルは、一瞬でもとに戻った衣服に感動していた。身体の傷はさして気にしていないようだった。

「よっし、お前ら！」

いつも通りの大声であつた。

「あれが、『最果て』だ！」
彼が指差す先には、小さな門があった。奥のほうは見えなかったが、切り開かれた森の面積からして、かなり小さい村であることがわかる。日のあたらない森の奥に民家があるというのは、とても異様な光景であった。

「本当に、こんなところに村があった……」

フブリは、半ば呆れたような声で呟いた。驚きはするものの、感嘆する気にはならない。

「さて、裏に回るぞ」

「え？ あそこから入るんじゃないの？」

フブリは門を指差した。ツバルが口の端を上げて、目配せする。眼を凝らせば、そこには二つの人影が見えた。

「門番ですか？ あんな小さな村なのに、やけに嚴重ですね……」

「あれに見つかると、やつかいなんだよな」

何がやつかいなのか聞く間もなく、二人はツバルに引きずられて、再び深い森の奥に入った。

ここは、昼間でも暗かった。

深い森に囲まれ、決して何人たりとも近づくことのない場所だった。村人は外界へ出ることを許されず、誤って足を踏み入れた者は、住人になるか、屍になるかの二択を迫られる。

村人よりも多く存在する兵たちはいつも通りに、我が物顔で村を徘徊している。鎧の擦れる金属音と彼らの笑い声は、村人に不快感しか与えなかった。監獄のような生活に満足する者はおらず、当然村の中に活気はなかった。人は、自分が飢えないために田畑を耕し、ただその地で朽ち行く日を待った。

外界に希望を持つことは、決して許されなかった。

女は、村の中でただ一人の医者だった。布を深く被り、兵たちに遭

遇しないように、裏道を歩く。ところが自宅はもう目前だということ
ところで、突然誰かに腕を掴まれた。

「あっ……」

丁寧に編みこまれた紫の三つ編みが、首の両側で揺れ動いた。真っ
赤な胸のリボンも、跳ねて躍る。

「おい、お前。ちょっとつき合えよ」

二人の、若い兵だった。

女は、ロングスカートを翻し、自分よりも小さいその男を見下げた。
頭の布を取れ、と命令されたため、彼女はそれに手をかけた。

白い布から覗く橙色の双眸が、彼を鋭く射抜く。

「へ〜。なかなかイイじゃないか。少し、でかいけど」

兵の一人が、女を吟味するようにじろじろと眺めた。

「……あなたがた、ここには最近配属されたばかりですね？」

女は、布を被りなおし、微笑んだ。しかし彼らに、彼女の眩きは聞
こえなかった。否、聞く前に声が遮断されたのだ。

兵の一人が彼女に手を伸ばしたときだった。

二人の兵を、突然の衝撃が襲う。

兵たちの体が、構える間もなく空を舞う。風が切れた、と女が感じ
たときにはもう、彼らは地に伏せて動かなくなっていた。

それが剣圧であることに気づいて、女は布から顔を出した。兵たち
は、のびてはいたが、顔色を見たところ、恐らく峰打ちだろうと推
測できた。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

胡散臭い金髪の男が、手を差し伸べていた。女は布の隙間から、ま
じまじと彼を見つめた。

「……ええ。ありがとうございます」

女には少しの間があつたが、ややためらいがちに、男の手を取った。

「な、何？ どうしたの、ツバル」

銀髪の少女が、息を乱して駆けてきた。やや遅れて、瘦身の少年が
それに続く。ツバルは少女たちに構わず、女の手を握り締めると、

そつと腰を抱き寄せた。

「きや……」

女は咄嗟のことで力が抜け、ツバルに体を預けた。強く抱きしめられると、その頬が朱に染まった。

「ツバルだ」

「ツバルさま……」

女は長い睫毛をかすかに伏せ、彼の腕に身を任せた。

「何あれ……」

その光景を眺めながら呆然と呟くルビーに対し、フブリは気が気でなかった。

森を抜け、裏口から村に入ったはよいものの、ツバルが何かを見つけて突然全力疾走をし出したため、フブリたちはわけもわからずそれを追いかける羽目となった。彼が剣を鞘に収めているところと、その足元に転がっている男を見れば、からまれている村娘を暴漢から助け出したという現状は大方理解できた。

しかしそれだけでは足りないらしく、こともあろうにツバルはその女性を口説きはじめている。

ツバルが女好きであることは薄々感じていた。というより、九十％確信はしていた。確信はしていたけれど……

「つ、ツバル……」

意を決しツバルに向かったが、振り向いたのは女のほうだった。

フブリは思わず立ち尽くしてしまった。

すらりとした長身、整った目鼻立ち、長い睫毛、両肩で踊る三つ編みの流れは、吸いこまれそうなダークヴァイオレット。メイクはナチュラルかつ巧みで、自然な女性らしさを醸し出している。

一言で言えば、彼女は美しかった。

フブリの中で、普段ならば黙して働かない女の本能が、告げた。

この女には、勝てない、と

「……ぶっ」

途端に漏れたその声に、フブリは呆然とした。

女が、急に笑い出したのだ。それも、先ほどまでの清楚なイメージを打ち壊すような、大笑いだった。

「あーっはっはっは……！」

「え、な、な……！？」

フブリは状況を把握できないまま真っ赤になった。女は素早い動きで頭の布を完全に下ろし、ツバルを押し出すと、フブリに顔を突き合わせる。間近で見ても、やはり美しい女だった。

女は、笑いすぎて涙が出たらしく、目の淵をこすっていた。

「ごめん、ごめん。いや、あんたを笑うつもりはなかったんだ」

急にたががはずれたような女の様子に、ルビーは首を傾げた。フブリは混乱していたため、ただぼかんと彼女を見つめることしかできなかった。

「こんな可愛い娘たぶらかすなんて、お前最低だな！」

女は笑いながら、ツバルの肩をばしばし叩いた。

「って、知り合いですか！？」

驚くルビーに、女が相槌をうつ。フブリは、まだ現状が理解できなかった。

「紹介すつか！　これがおれの男友達、クルージュ・エーレブルーだ」

「え……。何だか今、ものすごく受け入れたくない単語を聞いた気がするんですが……」

ルビーが恐る恐る聞いたので、フブリは目をぱちくりさせた。

「男友達」

「よろしく！」

先ほどまで女……だったその人物は、グツ、と親指を立てて見せた。

「男　　！？」

二人の悲鳴のような叫びが、村中にこだました。

第三章 三

外は風が強かった。窓はガタガタと音を立て、家屋が軋む音も、切れ切れに聞こえた。

フブリは風の音に時折耳を傾けながら、温かいお茶に口をつけた。一日中歩き詰めだったため、フブリの表情に残る疲労の色は濃い。カップから立ち昇る湯気が、体中に沁みこんで骨まで溶かしていきそうだ。

ここは、ツバルの男友達、クルージュの自宅である。クルージュは、流れる濃紫髪を可愛らしい三つ編みにした、一見すると体格のいい美女であった。しかしこれは、実は彼のとんでもない悪癖である。

「こいつの女装趣味はすごいぞ」。スカート以外、はいたところ見たことねえもん、おれ。な、変人だろ？」

顔の傷に消毒液を塗りながら、ツバルが笑った。

「類は友を呼ぶって、本当だったんですね」

「さすがツバルの友達だよ……」

その点に関しては、二人同時に納得できた。

しかし室内を見渡してみれば、女装趣味の変人宅とはいえ、家の中は思っていたよりもまともであった。むしろ、清潔感にあふれる、さっぱりした内装である。人形やら、レースやらで装飾された家を想像していたフブリは、少しほっとした。

ただ、暖炉の傍に乱雑に放置されている白衣と、大きな棚に並べられた小瓶の群れには首を傾げた。

「クルージュ、あれは何？」

棚を指差すと、キッチンで湯を沸かしていたクルージュが、顔をのぞかせた。

「ああ、それはな……」

クルージュの言葉は、勢いよく入ってきた風の音にかき消された。玄関近くに座っていたフブリは、突然の強風に目を剥いた。

「せんせー」

十歳前後の男の子が、風とともに、玄関から入ってきた。彼の身長では、ノブに頭が届くのがやっとならしく、重い扉を必死に押しこんでいる。

「せんせー。隣のニルチエ婆が、怪我したのー」

「あのばーさん、また何か無茶したんだろ。しばらく絶対安静って言ってたんだがなあ」

キッチンから出たクルージュは、白衣を羽織り玄関口にかけてある大きな黒鞆に手をかけた。

「ちよつと出てくるけど、ツバル、留守は頼んだ」

クルージュは、ツバルの返事も待たずに男の子に引かれて、足早に外へ出て行ってしまった。

「驚いたろ？ あれでも、ここでは唯一の医者なんだぜ」

棚の瓶は薬瓶だったのだ。とてもまっとうな仕事をしているとは思えない彼の姿を思い浮かべ、フブリは笑った。

「女装趣味なお医者さん、初めて見たよ」

「あいつも、昔は傭兵稼業やってただけだな。剣の腕は、おれ以上だったんだぜ」

「っていつか、剣士で女装趣味って医者より危なくないですか……？」

ルビーが不安そうに呟いた。

「ツバルとクルージュって、傭兵時代の友達なの？」

カップを流しに運びながら、フブリは柵に立ち並ぶ小瓶を眺めた。

「いや、おれらはもっとガキの頃からの腐れ縁。十歳くらいだったかなあ……あいつと初めて会ったのは」

「同郷なんですか？」

「いや、全然違うけど。実はな、俺はその頃からもう『凄腕』の頭角を顕してたから、立派に一人立ちして剣で生計立ててたわけよ」

「へえ……」

誇らしげに腕を組むツバルに、ルビーは生返事を返した。

「で、たまたま雇われた先であいつと一緒にあって、まあ何年か仕事を共にしたんだな」

「じゃ、幼なじみなんだね」

「まーな」

ガタガタ、と突然音がしたので三人は同時に目を合わせた。それが風に叩かれた戸の音だと気づき、頬の緊張を緩める。外は依然強風に見舞われているようだ。

「じゃあその幼なじみさんに聞きますが、一体何なんですか？ この村は」

「え？ 何が？」

ツバルはきよとんとして、急に真剣になったルビーに聞き返した。ルビーは慣れた動作で頭を抱える。

「ここに来るまで、いーろーいーろー疑問があるんですよ！」

「おう！ 若いうちに疑問があるってことはいいことだ！」
まるで意味の通じていないような返答だった。

「こんな小さな、人の寄りつかないところなのに村がある理由、そして何故か村中をどこぞの国の兵士が闊歩している理由、入り口に厳重な警備が強いられている理由、それから……」

「それから？」

フブリが首を傾げた。ルビーがその視線に目配せして頷く。

「……何だか、妙な違和感があるんだ。魔法、いえ、それに近いもの……村全体が変な空気に包まれているような……」

「おれはこの住人じゃねえからな。わかんない」

ツバルのどうでもいいような返答に、ルビーは明らかに嫌悪を指し示した。ツバルにとっては普通の接し方なのだろうが、どうもルビーは彼のその態度をよい方向へは受け取れないようだ。険悪な空気が漂い、フブリは息を詰ませた。

確かに村に来てからの疑問は尽きないが、それはこれからクルーヂユに聞けばいいことで、何も今よそ者のツバルを問い詰める必要はない。

「知らないんじやしょうがないよ、ルビー」

フブリは明るくルビーをなだめた。

「フブリはさ、ツバルさんに……」

「え？」

そのとき、再び強風が玄関から入ってきた。

クルージュが帰ってきたのだ。フブリは、このときほど救われた気持ちになったことはなかった。

「ただいまあ」

間の抜けた声は、風にかき消された。クルージュの整えられた美しい三つ編みは、今やぼろぼろだった。しかし格好が乱れたことにより、初めて彼が男性に見えて、フブリは吹き出した。

「や……。今日はいつも以上にすごい風だ」

クルージュが、着ていた上着を放りながらぼやいた。

「いつもこのくらい吹いてるんですか？」

「ん……。いや、まあ……吹くかな」

言葉を濁したクルージュを、ルビーは不思議そうに見つめた。

「みんな揃ったことだし、飯にしょーぜ、飯」

まるで家の主であるかのような、態度の大きいツバルだった。

「ああ、うん。じゃ、おれちよつと買い出しに行つてくるよ。皿と
か足りないし」

「えっ、今帰ってきたばかりなのに悪いよ。私が行くよ」

慌ててフブリが立ち上がる。いや、とクルージュがそれを制止した。

「よそ者が村にいることが知れると、大変だから」

クルージュは、もう外に出る準備をしていた。村の正門に門番がいたことを考えれば、彼らにとって確かに自分たちは招かれざる客ということになるのだろうか。そういえばツバルも、『見つかるやつかいだ』と言っていたことを思い出す。

「クルージュ。フブリを連れて行けよ」

背後から飛んだツバルの発言に、フブリやルビーはおろか、クルージュさえも驚いたようだった。

「この村に来たからには、青木さんに会って帰んなきゃ損だし」

「……ああ、そうか。見たことないんだもんな」

少し考えこんだクルージュは、フブリをじっと見つめた。

「この一応観光名所なんだが……来るか？」

「観光名所なんてあるの？ うん、行きたい！」

フブリは途端に目を輝かせた。こんな辺鄙な村に、と疑問は残るものの、旅行気分で楽しかった。勝手に進行する三人の会話に、ルビィだけが眉根を寄せる。

「あの、ぼくも……」

ルビィの口が開きかけたとき、ツバルの腕が彼に絡みついた。反論する間もなく、少年はキッチンの方へ強引に引きずられていく。

「おれたち、飯作って待ってるからよ」

「ちよつ、何勝手なこと言ってるんですか!？」

必死の抵抗も空しく、笑うツバルの腕から、彼は逃れることができなかった。

「変なもん作るなよ、ツバル」

二人の後ろ姿にクルージュは苦笑した。

「ところで青木さん……って誰？」

「会ってみてのお楽しみだ」

キッチンに消える二人を見送ってから、クルージュはフブリに小さくウインクして見せた。

「ただし、外に出たら、あまりきよろきよろしないようにすること。村人を装って」

頭に、先ほどクルージュが被っていた布をかけてもらう。風が冷たいから、と渡された厚着のケープも羽織った。端に編みこまれたピンクの刺繍に、思わず笑みを漏らす。

外は、思った以上に強い風が吹いていた。扉を開けていきなりの突風に、フブリは思わず声を出してしまいそうになり、慌てて口を塞いだ。

家の近くに、兵士が数人、立っていたのだ。

「そのまま、普通に歩け。もし何か話しかけられても、黙っているように」

小声のクルージュに、フブリは心の中で頷いた。ごくり、生唾を飲みこむ。平常心を何とか保ったまま、ぎくしゃく歩いた。どうか何事もなく通り過ぎられますように、と祈る。

しかし願いも空しく、兵士の一人が、おい、と声をかけてきた。呼び止めた兵はフブリのすぐ間近に迫り、フブリは、心臓が飛び上がりそんな感覚を覚えた。

「その小さいのは？」

「おれの患者ですが、何か？」

平然と、クルージュが答える。

「おい、お前。頭の布を取ってみろ」

言われた通りに黙っていると、急に兵たちの無作法な笑い声が聞こえた。

「ババア、こんな近くで話しても聞こえねえのかよ！」

布の前は見えなかったが、どうやら疑いは晴れたらしい。クルージュが診察に行った、老婆だと思ったのだろうか。

「失礼します」

「ばあさん、カマ医者に診せると、あんたも男になるぜ」

兵士の笑い声は、立ち去った後も長く聞こえていた。クルージュに止められていなければ、飛び出して殴ってやりたいところだった。

「静かにな」

クルージュが呟いたことで、まだ近くに兵がいることを知った。一体、この村には何人の兵士が滞在しているのだろうか。

そっと布の隙間から覗くと、どんよりした家屋が一定間隔で立ち並んでいるのが見えた。これだけ深い森の中なら、日差しが届かないのはわかる。しかし、村が暗い理由は、それだけではない気がした。兵士が横行する大きな通りで、フブリはまだ一人の村人にも出くわしていない。誰もが家の中に閉じこもっている。

この村には、活気がまるでなかった。

「あの、ごめんね。住んでる人に、こんなこと言つのはどうかと思うんだけど、この村って何ていうか……」

「変だろ」

フブリが言い切る前に、クルージュが割って入った。

「そんな顔するなつて。ここに住んでる奴らは、みんな変だつて思つてるからさ」

申し訳なく瞳を伏せるフブリの肩を、クルージュは優しく叩いた。

「こんなところ、好き好んで住む奴なんかいやしないんだ……」

「え？　じゃあ」

クルージュは？　と言葉をつなぐことはできなかった。彼が、走りだしてしまつたのである。

丘陵のふもととは、おびただしい数の兵たちで埋め尽くされていた。

まだここにいる時間が一日に満たないフブリにも、一目で頑丈な警備であるとわかる。

ちよつとそれを見下ろせる丘の頂に着いたとき、クルージュはフブリの頭を掴み、屈ませた。

「あれが、青木さんだ」

『それは、無造作に張り巡らされた金網に囲われて、窮屈そうだった。金網を更に兵士が隙間なく囲む。その中央で、『青木さん』と呼ばれた大樹は精一杯自身の巨体を誇示するかのようが高く、高く空に向かって伸びている。

枝の隙間からは、神秘的な青い光が淡く漏れていた。その不思議な威圧感に息を呑む。

「でつかい……」

じつとそれに見入っていたフブリは、ようやくそれだけを口にしたら「こんなに綺麗な木、私見たことない」

無粋な金網を前にしても、滲み出る美しさは隠せなかった。特にどこが綺麗なのか、と問われれば答えに迷ってしまう。『形』でも『色』でもない何か、その神秘的な光を生み出しているように感じられたのだ。

「そりゃそうだ。あれは、普通の木じゃないからな」

「青く光る魔法でもかけられてるの？」

ゆらめく淡い光は、何か非科学的なものを彷彿とさせた。

「そんないいものじゃないさ……」

クルージュの横顔が哀しそうに見えて、フブリは押し黙った。

『青木さん』はそんなクルージュの心境を汲み取ったかのように、弱々しく光った。実際は目に見えてそんな変化があったわけではない。ただ、フブリにはそう見えたような気がした。

「え？」

「ん？ どうした？」

フブリが急に口を開いたので、クルージュは驚いたように振り向いた。

「今、何か言わなかった？」

「いや、何も言っていないが……」

クルージュは怪訝そうにフブリを見つめた。

周囲を見回すも、依然村は静かなまま、人影が見えなければ話しすら聞こえない。ただ風の音だけが、耳の奥にうるさく響いて残った。

「そろそろ買い物して帰るか。風も寒くなってきたし、ツバルたちがマズい夕飯用意して待ってる」

クルージュが丘を降りるようにフブリを促す。

踵を返し帰途につくも、フブリは再度振り向き様に周囲を見渡した。やはりそこには誰もおらず、丘の下には相変わらず大樹が金網の中で淡く光っているだけだった。

「……………」

だから、フブリは気のせいだと思った。

「あんたに、決めた」

風の音に乗って聞こえた誰かの声を、気のせいだと思った。

そのときフブリは、まだ気づいていなかった。

大樹が、風をまとっていたことを。

その風が、まるで生き物のように、唸っていたことを。

第三章 四

「そこお酒入れるところじゃないですよ！」

フライパンの中身を軽快に炒めていたルビーが叫んだ。

「クッキングは手早くアバウトにこなすのが男だろ！」

隣のツバルはあふれ出しそうな鍋に酒瓶を直に突っこんでいる。

「アバウトどころの話じゃないですよ、ソレ！？ あー！ そんなに入れたら今までの下味がっ！」

ルビーはついにたまりかねてフライパンを手放し、鍋担当のツバルを押しつけた。しかし時すでに遅く、彼の手にした酒瓶はもはや空になっていた。恨めしそうに睨みつけるも、当事者は口笛を吹いて悪びれる様子すらない。

「お前、酒あんま飲まないんだっけ？」

「そうですね……、フブリはぼくより弱いです」

ルビーがげんなりしながら生返事を返すと、ツバルは目を輝かせた。「脱ぐの！？」

ああ……。もう嫌だ、このおっさん……。

ルビーはがつくり肩を落とした。

「フブリー早く帰ってきてー！」

叫んだ瞬間、玄関から強風が入ってきた。

フブリたちが帰ってきたのだ。ツバルはそれを見つけるや否や、あふれそうな鍋などお構いなしに駆け出した。

「フブリーーお帰りー！」

両手を広げてフブリに突進するツバルめがけ、ルビーは鍋蓋を投げつけた。男の脳天に空飛ぶ鍋蓋が直撃し、ゴキ、と嫌な音がした。

「お帰りフブリ。大丈夫だった？」

ルビーは何事もなかったように微笑んで、フブリを迎え入れる。

「青木さん、すごく綺麗だったよ。青く光ってる、こーんな大きな

大樹なの」

「青く光る大樹？」

ルビーは目をぱちくりとさせた。それが魔法なのかどうかフブリに問うも、彼女にはわからない。

「気になるか？」

「え、ええまあ」

クルージユに突然話しかけられて、ルビーは驚いたようだった。

「あなたは魔法使いか。今日はもう風が強くなったから、明日連れてってやるよ」

「はあ……、ありがとうございます」

クルージユが買ってきたばかりの食器をツバルに手渡す。フブリは騒々しかったキッチンを覗きこんだ。後始末の大変そうな、見るも無残な惨状であったが、テーブルに揃えられた鮮やかな食器類はそれを微塵も感じさせなかった。

「飯はできたのか？」

「おうよ！ おれの特製ディナー！」

クルージユの背後から、ツバルが皿を抱えて顔を出した。

「これツバルが作ったの？ 料理上手なんだね」

その料理群の完成度の高さにフブリは感嘆の声を漏らした。すかさずルビーがツバルの肩を小突く。

「あなたは邪魔してただけでしょう。ぼくが作ったんだよ」

「な、ルビー何てことを！ 二人の愛の結晶を一人で作ったなんて

……！」

途端にツバルは泣き真似をした。

「気持ち悪いこと言わないでくださいよ！」

フブリは吹き出した。ツバルに鍋蓋で報復しようとしていたルビーが、一瞬静止する。フブリは微笑んで、何でもない、とだけ答えた。

「さ、じゃあ飯にしようぜ」

「うん」

温泉街を出てからずっと、ルビーのツバルに対する疑心が気がかり

だった。

それが出会って間もない頃だったならわかる。けれど、もう随分一緒にいるというのに、彼はツバルを認めようとしない。仲間同士で疑ったり傷つけ合ったりするようなことが、フブリには耐えがたかった。

だから、フブリは二人のやり取りを見て、嬉しくなった。二人が少しでも打ち解けてくれて本当によかった。けれどそれを口に出せば、またルビーに要らぬ疑心を思い出させてしまうから、嬉しい気持ちは胸の中にしまっておくことにした。

「……二人とも、あんまり仲がよくないから、私心配だったの」

しまっておくはずだったのに、何故かパンを口に運んだ瞬間、ぼろりと滑り出る。何っ、とツバルが大げさに切り返した。

「おれはルビーも好きだし、フブリも好きだぞ！」

「ルビーは？」

フブリは対面しているルビーに投げかけた。

「……あ、あのね。ぼくは、別にツバルさんのことが好きとか嫌いとかじゃなくて……」

ツバルを睨みつけながら、ルビーが口に運んでいたスプーンの手を止めた瞬間

わっ、とフブリが顔を覆った。

「ふっ、フブリ!？」

ルビーはあまりに突然な出来事に、激しく動揺したようだった。フブリはルビーから視線を逸らすと、はらはらと涙を流した。その悲しみに暮れた表情にルビーもクルージュも、ツバルですら目を剥く。「二人が仲よくなれないのは私のせいだわ……! 私の努力が足りないから……ッ!」

「な、何を言ってるんだよ! だから、ぼくは別に好きとか嫌いとかじゃなくて……!」

対処に困っているのだろう。所在なさげにあたふたと動くルビーは、いよいよ立ち上がった。

「おれたち仲よしだよな〜！ なっ、ルビー」
と、突然ツバルがルビーの隣に移動し、手馴れた動作で彼と肩を組んだ。

「なな何するんですか!？」

ルビーは抵抗したが、

「仲よしだよな!」

と念を押されたため、なすすべないようであった。

「……………ハイ」

ルビーは機械的に頷いた。

フブリはじつと、笑いながら（約一名、口元を震わせながら）肩を組む男たちを見上げた。そして、満面の笑みを浮かべると

「よかったあ。二人が仲よしで私も嬉しい!」
と手を叩いて見せた。

ルビーが胸を撫で下ろすように、細く息を吐いた。肩を抱いて離さないツバルを引き剥がすと、彼は寂しそうに席に戻っていった。フブリはその後ろ姿を目で追いながら、ふと我に返った。

ところで、何故自分は、泣き真似などしてみせたのだろうか。

「どーでもいいけど肉食いすぎだぞオマエ」

横を向けば、取り皿に山盛りの肉を盛っているツバルと、それに突っこむクルージュの姿。

「しょーがねえだろ。ここに来るまで野宿したり崖落ちたり、大変だったんだからよー」

正面には疲れた表情で黙々と食事を続けるルビー。フブリは首を傾げた。

一瞬、自分が何をしてたのかわからなくなった。そう、青木さんを見て帰ってきたら、二人が仲よく夕食を作っていて、それが嬉しくて……

「フブリ?」

「ううん。なんでもない」

大げさに首を横に振って、フブリは食事を続けた。ここ連日歩き詰

めで疲れていたのだろう。フブリはそう自分に言い聞かせ納得した。
「それで、話を聞かせてもらえますか？ クルージュさん」
ルビーは心持ち身を乗り出した。

「ああ……カラアのことだな？ おれの知っていることは少ないが、夕食の後にも……」

好意的に受け止めてくれたクルージュだったが、その好意は

「やだ」

という一言に掻き消された。

「え？」

全員の驚いたような視線が声の主に集中した。

「今日疲れてくれたただもん。ねえ今日は早く寝て、明日話そうよ」
視線の先には、だらしなく肘をつき、大きく欠伸をするフブリの姿があった。礼節の欠片も感じられない少女の態度に、クルージュが苦笑する。

「おれは構わないが……」

「フブリ、早く聞いてここを出たほうがいいよ。クルージュさんには悪いけど、ここって治安よくないみたいだし、何より早く知りた
い、って君が言ってたじゃないか」

ルビーはフブリの態度に少なからず苛立ちを覚えたようだった。

ところがルビーが反論した途端、カチャン、と音を立ててフブリの指からフォークが滑り落ちた。

「……………固いわ」

「へっ!？」

ルビーは頓狂な声を上げた。

「私、融通のきかない男って嫌いよ」

鋭く放たれるその声は重く冷たく、一寸の迷いもなかった。

「あーあ……ルビーって顔はいいけど、頭固いわよね」

瞬間、ルビーの体はゼンマイの切れた玩具のように動かなくなった。凍りついたような空気が部屋中に漂い、ツバルとクルージュが息を呑む。

「なあ、何かフブリ変じゃねえ？」

「出会って半日も経ってないおれに聞くなよ」
固まったルビーには目もくれず、フブリはこともなげに食事を続けている。

「おいルビー？ あ、ダメだこりゃ。完全に石になつてら……」
ツバルが硬直したままのルビーの目前で手を振るも、彼はぴくりとも動かなかつた。

「あれ、私……」
サラダにフォークを刺している状態のまま、フブリは、はつとして顔を上げた。

どうもおかしい。
瞬時に意識が飛んだような感覚だった。一体自分は今何をしていたのか。何を言っていたのか。

恐る恐る隣に視線を移せば、そこにはルビーの石像が
「え、え、え、ルビー！？ わわ私、今なんて言った……！？」
フブリは慌てて彼の体を揺さぶった。少年の身体はなされるがままに揺れるばかりで、まったく反応が返ってこない。

「『ルビーって頭固い上に女心がわかってない朴念仁だわ！』」
「微妙に脚色されてるぞ」
素早いツバルの返答にクルージュが突っこんだ。

「違っ……ち、違うよ？ ルビーのこと頭固いなんて思ってないからね私！」
フブリは混乱していた。まるで滅茶苦茶な行動をする自分がわからなくて、涙ぐむ。自分の不可解な挙動についてくることができなくなった、二人の男の白い目が突き刺さって痛い。

「どうしたんだろ、意識が遠のいて……わ、私何だか変だよ。へ、ん……」

声は次第にか細くなっていく。それに合わせてフブリの頭は、テーブルにつきそうなほど傾いていった。

「フブリ、どうかしたのか？」

さすがにおかしいと思ったのか、ツバルが少女に手を差し伸べた。刹那、フブリの顔が上がる。

「どうもしないわ」

先ほどまで泣きそうな顔をしていたフブリだったが、面を上げると別人のようにけろりとしていた。

「そのあんた」

「え、おれ？」

ツバルを上から下までじろじろ観察するフブリの目は、完全に据わっていた。

「ツバルも結構見た目だけよね。女と見れば見境ないの？ そういう男に限って、一生ちゃんとした恋人もできずに一人寂しく人生終えるのよ」

鼻を折られ、ツバルはあんぐりとした。

「……………なんか知らんがフブリが毒舌だ……………」

「ごういうキャラなんじゃないのか？」

「違いますよ！」

「あ、復活した」

クルージュの言葉に反応したのか、固まっていたルビーが動き出した。

「じゃあ、ツバルの飯にでも当たったか？」

「そ、そうですよ。ツバルさん、あんた夕食に何か変なもの入れたんじゃ……………」

冗談交じりに笑うクルージュであったが、ルビーはそれを真顔で受け止めていた。

「やめてっ!!」

お構いなしに食事が続けていた当事者の少女が、まるで外にまで届きそうな怒声を発した。三人の動きはそれと同時にぴたりと止まった。

「二人とも、争うのはやめて!!」

「争ってたか……………」

クルージュが冷静に聞き返したが、そんなもの、フブリの耳には届いていない。

「二人が仲よくなれないのは私のせいだわ……！ 私の努力が足りないから……ッ！」

「ええっ！？ またそこに戻るの！？」

フブリがわっ、と顔を覆った。

「私の……私の……！」

ルビーがどうしていいものかわからないらしく、フブリの周りを右往左往している。

「う、うわああああ

ん……！」

声をかけられずにいるルビーをよそに、フブリは食器が音を鳴らすくらい勢いよくテーブルを叩いて、叫びながら階段を駆け上っていつてしまった。

「フブリ！？」

ルビーは、少女の名を呼びながら、彼女の後を追いかける。嵐が去り途端に静かになった居間に、二人の男だけを取り残して。

「フブリー！」

フブリは背後に少年の鬼気迫る声を聞きながら、気が遠くなるのを感じた。

クルージュは、フブリのために二階の部屋を一つ空けてくれた。

男三人は居間に雑魚寝するらしい。それは昼間、クルージュと『青木さん』を見に行く前に決めたことだった。

その自室の扉の前で、フブリは立ち尽くしていた。

食事の席を何故か一人立ち上がってから早三時間。拳動不審な自分を心配して追いかけてきたルビーも、もう眠ったかもしれない。

「わ、私どうしちゃったんだろ……！？」

部屋の中をうろろしながら、フブリは自問した。自分のことだと

いうのに、何故夕食時にあんなことを口走ったのかさっぱりわからない。それをこうして三時間延々と考えていてもわからないことが、一番わからない。

「どうもしてないわ」

あっさり言われて、フブリは拳を握り締めた。

「どうもしてよ！ …………… って、あれ？ あれ？」

見回すも、部屋には自分以外誰もいない。それはそうだ。ずっと独り言を言っていたのだから。

そう、独り言だった。

『どうもしてないわ』と、確かに今、自分の口が……

フブリは、悪寒を感じて首を横に振った。

「そんなこと、あるわけないよね！ ま、まるで私の口が……」
まるで、自分の口が勝手に

「勝手に口が喋り出したのよ」

「……………!？」

咄嗟に口元を覆い隠す。

今度は確かに聞こえた。どう考えても、今のは自分の声としか思えない。フブリは両手で強く口元を押さえた。荒い吐息が指の隙間から漏れて、沈黙の中に響いた。

「お、落ち着けフブリ・トリバンドラム。疲れてるんだよ、きつと。そうそう、山道は辛かったもんね。早く休まなきゃ」

何とか不可解な現象に理屈をつけたかった。自分を納得させて、深呼吸を一つ　そして、ベッドに潜りこむ。

「あたしはまだ眠くないわよ」

ところが、フブリの体はくるりとベッドから反転し、また扉の前に立ち尽くす形となってしまうた。

「ってええ　！？　何やってるの私!？」

背後のベッドと目前の扉を交互に見やり、フブリは悲痛な叫びを上げた。もはや、この現象に理屈をつけることはできない。頭が混乱して、眩暈がする。これではまるで、何か体に操られているよう

ではないか。

「操ってんのよ」

フブりは、自分の口から出る、自分の言葉じゃない言葉に耳を塞いだ。

「あたしよ、あたし」

「あ、はは……な、何言ってるんだろ私」

誰にともなく笑いかける。部屋には誰もいないが、もはや笑うしかなかった。フブりは、目の前が真っ暗になった気がしてよろめいた。「まだわかんないの？ あたし、幽霊なの。あんたに取り憑いたのよ」

「へ？」

間の抜けた声が出た。

幽霊

幽霊が、取り憑いたって

幽霊が……

「え、え……ええええええ

！？」

「ルツ、ルルルルビー！」

ちようど湯を上がって居間に戻ろうとしていたときだった。ものすごい勢いで階段を駆け下りてくる少女に、ルビーは驚きを隠せなかった。フブりは足早にルビーのもとに駆け寄ると、彼の夜着にしがみついた。その必死の形相に、ルビーが目を丸くする。

「フブリー？ どうした？ まさかこんなところまで襲撃者が……」

ルビーは、すかさず構えて周囲を見渡した。

「私、取り憑かれた！」

「は……？」

ルビーは、きよとんとして、しがみつくフブリを見つめる。状況が呑みこめなかったため、何もなし廊下に構える姿勢を崩さない。

「取り憑かれちゃったの！ 女の子の幽霊！」

「……はあ？」

思わず鼻の奥から抜けるような、どうでもいい声を発してしまった。自然に指先は眉間へ向かう。とてもじゃないが、二の句が継げない。本当に今日のフブリはおかしい、と思う。やはり変なものでも食べただろうか。後でツバルを問い詰めよう。

「と、とりあえず落ち着いて。何言ってるのかさっぱりわからないよ」

「だから……………」

「フブリ？」

フブリは、突然スイッチが切れたようにうつむいたまま黙りこんでしまった。その顔を覗こうとすると、またスイッチが入ったように唐突に頭が上がった。あやうくルビーの顎に直撃するところだ。

「ごめんね、ルビー。あたし、寝惚けてたみたいだわあ。うふふっ」
スイッチがオンになったフブリは、やけに黄色い声色で科を作って見せた。普段の彼女ならば到底有り得ない動作に、ルビーは開いた口が塞がらなかった。フブリは、呆然としているルビーの肩に腕を回し抱きついた。そして背伸びをすると、彼の頬に小さく口づけて言った。

「お・や・す・み」

何事もなかったように階段を上るフブリの背を、ルビーはただぼんやり眺めた。

「……………お、おやすみ……………」

疑問符だけを残し、フブリたちの『最果て』での最初の夜は更けていくのであった。

第三章 五

手のひらを掲げてみる。

紛うことなき、自身の手のひらだ。それをぎゅっ、と握ってみる。大丈夫、自分の意志で動く。

立ち上がって着替えをして、鏡の前に立てば、いつもの見慣れた自分の姿が映し出される。フブリは鏡に映った自分に気の緩んだ笑顔を向けた。

「よかった……やっぱり」

しかし次の言葉は詰まって出なかった。代わりに

「まさか夢だなんて思ってるんじゃないでしょうね」

という言葉が自身の口から発せられ、フブリは途端に青ざめた。

「い、い、い、いやああああ　！」

早朝の怒声に驚いて駆けつけた最初の人物はツバルであった。

「フブリっ!？」

パジャマ姿に剣を構えるその姿は明らかに滑稽であった。しかし、フブリにはツバルの形態を笑う余裕がない。今にも泣き出しそうな顔で自らの口を必死に塞いでいる。

遅れてルビーが階段を駆け上がってきた。

息を切らしながら部屋に駆けこむや否や、フブリの背中を撫でるツバルを発見し、ただちに手持ちのフライパンで殴りかかる。

「こっ、この変態ロリコン剣士がああ　!!!」

「うわっ！ マジギレすんなお前！？　ってか誤解だし！　明らかに！」

本気でかかるルビーに、さすがのツバルも対処が遅れた。ツバルの脳天に金属が食いこむ音が、家中に響き渡った。

「いや……、っていうかあの状況じゃ誰でも誤解しますよ」

ルビーは、不本意ながらツバルの頭にできた巨大なたんこぶに氷を

当てながらぼやいた。

「…………え…………何だつて？ つ、ツバルが…………」

くつくつくつ、と必死に笑いをこらえているのはクルージュである。

「あはははは！ 何！？ ツバルがフブリを襲ったつて？ しかも

朝っぱらに？ ぎゃーははは！」

「…………ごめん、ツバル」

げらげら笑い出したクルージュから視線を逸らし、フブリは申し訳なくうつむいた。

「フブリのせいじゃないよ！ ツバルさんが悲鳴の直後にフブリに触つてたから、てつきり」

「おれ、被害者なんだけれども…………」

ルビーに睨みつけられて、ツバルはしょんぼりと肩を落とした。クルージュは笑いすぎて涙まで流している。

「いやー、あんたら最高。メシできたから、そ、そのたんこぶ冷えたら来いよ！」

やはりまだ笑いの余韻を残しながら、クルージュは居間に消えた。フブリが足早にその後を追う。

「ん？ どうした、フブリ？」

「あ、あの…………ね…………」

クルージュは皿を器用に三つ持ちながら、視線だけをフブリに向けた。

「ちょっと折り入って立ち入ったことを聞くけれども…………！」

しかし、彼女のその真剣な瞳に呑まれたのか、クルージュは皿を手放し体勢をフブリに向き直した。

「どうした？」

「この家、その…………幽霊とか出たりする！？」

あまりの突飛な質問にあっけにとられたのか、クルージュはしばらく押し黙った。しかしそれも束の間、彼は抱腹絶倒し、テーブルにもたれかかって崩れ落ちた。拳句ヒーヒー言いながらバシバシ壁を叩き出している。

「……………」
フブリは予想通りの反応に即座に頭を抱えた。誰か信じてくれる者がいてくれれば、と思っただが、ここまで笑われるともうクルージユには手の施しようがない。ルビーには夕べ話したが聞く耳持たず、未だにツバルが食事に毒を（どんな毒だ）盛ったと思っっている。ツバルはツバルで今朝話したが、よしよし怖い夢を見たな、と背中をさするばかりであった。

「誰も信じないわよー。あはは」

幽霊が自分の口を借りて喋り、フブリはこれが現実であることをいい加減認めざるを得ないことに気づいた。

もはやこの幽霊、自分でどうにかするしかない。

フブリはいよいよ腹をくくった。

「誰だか知らないけど、さっさと成仏させてみせるから！」

成仏なんてしないわよー、と舌を出す自分の口を押さえ、フブリは意気こみ食卓についた。その鬼のような幼なじみの形相に、ルビーだけが目を丸くしていた。

立てつけの悪い窓が軋んで鳴った。

外から内部が見えないように窓の外側に板が打ちつけてあるため、日の光は入らない。しかしフブリは、昼間でもどんより曇った暗い村の様子を想像することができた。

今日も風の勢いが強い。まるで村の濁った空気を排出しようと頑張っているようだ。

クルージユは食事を済ますと、足早に村の往診に出かけてしまった。村人の数は少ないが、具合のよい者は少ないらしい。日の当たらない閉鎖的な村に住んでいれば当然だろう。きっと幽霊もそんな村人の一人だったはずである。

「何か、未練があるんだよね……………」

「そういうことね」

「病気で亡くなった、とか」

「はずれー」

フブリは朝食から一人ごとをブツブツ呟いている。自分では幽霊と会話をしているのがわかるのだが、他者からすればただの独り言にしか見えないのが辛いところだ。

「あの……何か昨夜からフブリが尋常でないような気がするんですが、どうですか」

ルビーとツバルがひそひそ話しているのが耳に入り、とてもじゃないが、いたたまれない。

「ん〜、でも不思議ちゃんなフブリも可愛いよネ」
ツバルの返答に、ルビーが盛大にため息をつくのが聞こえた。

だが集中していれば、幽霊と話すことも特に違和感はない。彼女が同じ年頃の少女のように感じられるからだろうか。

「この村に昔から住んでるの？」

遠目に自分を見つめるツバルとルビーの視線が痛い、そんなことは気にしてられない。今、フブリにとって重要なのは、いかにしてこの幽霊を成仏させるかなのだ。

「まーね」

「じゃあ、何でこんなところに村があるか知ってるんだ」

幽霊は一瞬口を閉じた。

「え、ちよつと、そこは黙るの？」

「最果てはね、とある王国の秘密を守っているの」

「秘密……？」

「そうよ。たくさん兵が村中を歩き回って、おかしいと思ったでしょう？ あれは、その秘密が外界に漏れないように見回っている兵士たちなの」

幽霊は大きな顔をして、まるでそれが自分の体であるかのように腕を組んだ。

「でなきゃこんな山の中に村なんか作らないわ。こんなところ……好き好んで住んでる人間なんかいやしいもの……」

似たようなニュアンスを、フブリはどこかで聞いたことがあった。

そう、クルージュの言葉だ。

この幽霊の言っていることが真実だとして、その『秘密』を守っている村にずっと住み続ける村人たちは何者なのだろうか。好き好んで、村に住む者はいない。ならば、彼らはここに住むことを誰かに強いられているのだろうか。

よそ者の自分には、彼らが兵士たちと一線を画しているように見える。決して平等ではない。明らかに村人は牽制されているのだ。

「ふ、フブリ……？」

もとからここに存在した村を、秘密を持った国、とやらが占領したのだろうか。そして、秘密を村の奥深くに隠した……。

「フブリ！ 何してるんだよ！」

「えっ？」

考えこんでいたフブリは、下方から聞こえるルビーの大声に目を丸くした。

いつの間にか、自身の腕は何かにしつかとしがみついていた。それが何なのか把握するのに、そう時間はかからなかった。腕が痺れて、痛い。

「……え………あ………ええええ！？」

フブリは、ルビーを見下ろした。

そう、ルビーは下にいた。部屋の柱をよじ登り、柱にしがみついたまま天井付近で動かないフブリを、ルビーは顔面蒼白になりながら見上げている。

「ななな、何やってるの私は……！」

これにはさすがのツバルですら顔を蒼くしていた。

「私じゃない！ 私じゃない！」

フブリは必死に首を横に振った。しかし、しがみついたままそんな余裕があるはずもなく

「も、もうダメ……！ 腕、痛い……落ちる……」

「フブリ、ちょっと待ってる！ 今行くから！」

柱をずり落ちるフブリは、ツバルの手によって何とか救い出された。

「あはは、他人の身体って面白いわねー」

幽霊が楽しそうに笑い、

「も、もう嫌……！早く成仏してっ！」

フブリは半泣きで心の底から叫んだ。

「お前ら、何やってんだ？」

宵の間もない時刻、往診から帰ってきたクルージュが最初に発したのがこの一言だった。

「フブリ！それは帽子じゃないよ！」

「その鍋はまだ洗ってないから、こっちにしとけ！」

「私じゃないの〜！私じゃないんだよおお！」

何故か鍋を頭に被って離さない少女と、新しい鍋を勧める男と、頭の鍋を引き剥がそうと必死な少年。

クルージュは軽く眉間にしわを寄せて唸った。何故この連中は人の家でいきなりコントをはじめているのだろうか、という声が聞こえてきそうな仕草である。

「どうでもいいけど、鍋……返せよ？」

フブリは、冷たく響くクルージュの捨て台詞に耳を傾けながら、軽く眩暈がするのを感じた。

昼間、柱をよじ登ってからその後、フブリの奇怪な行動は休みなく続いた。それが幽霊の仕業だとわかっているだけに、彼女の動きを止められない自分が悔しい。結局、幽霊の馬鹿馬鹿しい動きが納まったのは、夕食が済んだ頃だった。

「……で」

食後のお茶をすすりながら、機を待っていたようにクルージュが口を開いた。

「落ち着いたか？」

ぜいぜい肩で息をしながら、フブリはただ首を縦に動かした。疲れているのは幽霊に振り回されたフブリだけに限らず、フブリの行動

につき合ったルビーとツバルも同様であった。

「いやー、フブリは面白いなあ〜」

「全然面白くないですよ！ 本当にあんた何か毒でも盛ったんじゃないですか！？ 昨日の夕食！」

フブリはまた関係が悪化しはじめた二人を見やり、肩を落とす。それを引き起こしたのは他でもない自分自身なのだが、それだけになんとフオローしていいものか見当もつかない。

「じゃ、じゃあ、気を取り直して！」

幽霊も疲れたのかそれとも飽きたのか、ともかく身体に自由が戻った今がチャンスだ。まともな人格で話せるのは今しかないような気がした。

「カラアのこと、聞かせて！ クルージュ」

フブリは先ほどまでの自分を忘れたいがため、ひと際明るく努めた。

「ああ……そうだな。何から話そうか」

ごくりと生唾を吞んで身を乗り出す。いよいよ一年間追い続けてきた『カラア』の正体を知ることができるのだ。

「カラアが遠い昔から国交を絶っているのは知っているな？」

フブリとルビーは同時に頷いた。そこまでは二人が旅の途中で調べた確かな情報だった。

「いいか。カラアは噂されるほど美しい国じゃない。あんたたちが何も知らずに行くなら……」

クルージュは、わざと言葉を切って、フブリの首に手をかざした。

「……殺される」

一気に空気が重くなった。お茶のカップを置く音だけが、広がる沈黙の中に落ちる。風の音だけは、まだ強く聞こえていた。

「殺されるって……穏やかじゃないね」

フブリが、テーブルに置いた拳に力をこめ、喉を鳴らした。ルビーも彼女と同じ状態のまま、一言も口にせず黙ってしまった。ツバルだけは我が家のようにソファーに寝そべって顔だけをこちらに向けているが、ともかくも室内に緊張が走った。

「要はあんたたちが、よそ者だつて気づかれなければいいわけさ。そこら辺は大丈夫だ。カラアへ行くまでは、おれが保障する」

少しだけ、クルージュの調子が軽くなつた。それが、自分たちを怯えさせないという気遣いであることがわかつたから、フブリは口元を緩めて見せた。ツバルは一つ、大きな欠伸をすると風呂に行つてしまった。彼自身は『カラア』にはまるで興味がないようだった。

「カラアは旅人からは『幻の王国』と呼ばれているが、カラアの中では、そこだけの通り名がある。カラアの人間は、『魔法の王国』つて呼んでいるんだ。それには理由があつて……」

話をどこからつなげていいのかわからないらしく、クルージュは少し考えるように間を置いた。

「うん。まず、カラアが何故、他国から隔絶されなければなかつたのか、つてとこから説明するな。存在すら定かでない幻の王国……そう思いこませる本当の理由は、おれたち他国の人間に、決して知られてはならない秘密があつたからだ」

秘密、という単語に何か引っかけりを感じる。

「秘密、というか、取られたくないものだ」

「それつて、誰でも欲しがるといふものなの？ お金や宝石みたいな？」

真剣な面持ちで尋ねると、暖炉の火がフブリの心に呼応するように静かに爆ぜた。

「似ているが、根本的なものが違うな。カラアに大事に保管されていたのは、『魔法』なんだ」

「魔法？」

魔法は、魔法使いがものに呼びかける行為であつて、物質ではない。保管できる魔法などフブリは聞いたことがなかつた。

「ただの魔法じゃない。世界を揺るがす『大魔法』だ。……しかし、どんなものなのかはわかつていない。大陸やものや人を一瞬で消せる、とか何でも意のままに操れる、望みが叶う……とか、噂はいる

いろあるんだけどな」

「カラアの人でもわからないの？」

「ああ、誰も知らない。ただ一人……カラアの王を除いて」

「王さま？」

「図らずも続いてしまったオウム返しをフブリは申し訳なく思ったが、クルージュは気にしていない様子だった。」

「その魔法は、代々王が保管する。王位を継承した者に受け継がれていく、っていうシステムらしい。でもな、そんなすごい魔法、外に出れば誰だつて欲しくなるだろ？」

フブリは、小さく相槌を打った。

「とにかく自国にも他国にも、誰かに悪用されたら困るわけだ。何だつて、それ一つあれば、世界を支配することが可能かもしれないんだからな」

「だから、国は自らの存在を隠し、他国との交流も途絶えた、と、クルージュはつけ加えた。そこまで一通り話し終わると、彼は深く椅子にもたれこんだ。」

「えっと、じゃあ、その大魔法は王さまが持つてて、それを取られないように、カラアを『幻』に仕立て上げたつてことか」

「けど、その国つて結局どこにあるんですか？」

長く沈黙していたルビーが突然、口を開いた。

「国交を絶っているといっても、国一つ、数百年の間誰にも見つけれられないなんておかしいですよ」

「確かにルビーの言う通りだ。カラアがいくらその存在を隠そうとしていたとしても、長い年月の間、旅人や学者が誰一人気づかないなど現実的でない。誰も足を踏み入れないような未開の地にあるとしても。」

「そこまで考えて、引っかかっていたものがフブリの頭の中でつながった。」

「この村……！？ 青木さん!？」

クルージュは小さく頷いた。

「そう、カラアは大樹の根にある」

「それって、地下にあるってこと？」

「いや、正確にはカラアへの唯一の入り口が、だ。カラアを作った大魔法使いは、その国をまったく新たな次元に移し変えた」

「じ、じげん？」

思わず声が裏返った。クルージュが苦笑してつけ加える。

「えーと、つまりこことは世界が違うってことだ。この村はカラアに続く最後の通路。だから、こっちの次元の『最果て』」

まさかこんなにも近くに『カラア』があるとは思わなかった。ただ純粹に嬉しさだけが先行してフブリは思わず手を叩いた。

「すごい……すごいよ！ 幻の王国って、そういうことだったんだ。素敵な国なんですよ？」

そのときカラアは、フブリの中で、旅人たちが語る御伽噺の理想郷とすつかりリンクした。しかし瞳を輝かせるフブリに対し、クルージュは目の色を曇らせた。

「この村は、大魔法を守るために作られた防波堤だ。外界に決してカラアの存在を知られることのないように、厳重な警備を布いている。それはあんたらも見ただろう？」

「あ……」

「この村で生活する奴らは、たまたまここへ迷いこんでしまった旅人か、カラアを抜け出そうとした国民だ。ちゃんと故郷もあるし、そこに帰りを待つ家族もいる。だが、ここに一度迷いこめば二度と外へ出ることは許されない」

『好き好んで住んでいる人間などいない』。クルージュと幽霊の言葉が蘇る。フブリは村中の濁ったような空気、その根源を知ったような気がした。村の中が暗いのは、日の光が入らない場所にあるから、という理由だけでは決してなかったのだ。

「ここに、こんな村があるという事実さえ、決して外に漏らしてはならない。この住人はカラアのために、死ぬまで囚われていなければならぬんだ」

フブリは思わず顔を歪めた。

「今の王は狡猾さ。カラアを知る者は生きて国を出られない。おれは、そんな国が嫌でカラアを出た」

「それで、捕まっちゃったの？」

「いや、おれは自分からここに帰って来たんだ。村に囚われた奴らが哀れでならなかったから……おれにも何かできることはないかと思つて、医学も勉強した」

何ともいえない虚脱感に襲われ、フブリは椅子にもたれかかった。

興奮が嘘のように冷めていく。それは、カラアが想像していたような美しい国でなかったからだろうか。それとも、カラアを嫌いながら最果てに戻ってきたクルージュに同情しているのだろうか。

どちらでもいい。ただもの哀しくて切なかった。

「さて……カラアのことはあらかた知ってもらえたかな？」

「……うん……」

先ほどまでとは打って変わって暗い表情になったフブリに、クルージュは苦笑した。

「あんたらがカラアを探してる大体の事情は聞いた。それで、おれから話を聞いてどうする？ 行くのか？」

フブリは押し黙った。答えは話を聞く前から決まっていたはずなのに、言葉にならない。

「その入り口、次元の穴つてのはやっかいなところにあつてな。兵士たちをどう巻くかが問題なんだ」

「……青木さんの根元にあるつていう？」

「そつだ。どうにかあの兵士たちの目をかいくぐつて、金網を抜けないきゃならない」

「あ……そつか」

大樹の周りを囲んでいた金網と兵士の群れには、突破口がないように見受けられた。あの厳重な警備をかいくぐつて大樹の根元にたどり着くのは、至難の業だ。

「大樹の兵士たちは、おれが何とかするから大丈夫だ」

押しも押されもしない口調でクルージュは言い切り、フブリも心を決めた。

「私、行かなきゃいけないんだ。行って、シルヘットの遺言の意味を知りたい。きつとそこに行けば私が狙われる理由もわかる気がする……ううん、それしか手がかりはないんだ」

「フブリ」

ルビーが小さく呟き、フブリはそれに目配せした。クルージュは静かにフブリを見つめ、しばらくの間静寂の中に風の音だけが響いた。「アリカ・チュリカマタって……」

「え？」

突然の低い声に、フブリは戸惑った。小さく息をつくクルージュは、ちよつとした御伽噺だよ、と説明した。

「……アリカっていう、女の子がいました。彼女は、とても明るくて、村の人々の暗く凍った心を、次々に溶かしていきました」
何の話だろう。ぼんやり耳を傾ける。

「村はいつしか明るさを取り戻し、しかし、その村を支配していた国は、それを許しませんでした」

それが、カラアと最果てのことだ、と気づいたフブリは、いつしかその物語に聞き入っていた。

「魔法の国に続く穴は、もともと森全体に頒布されていました。しかし王は、何人たりとも国に近づくことのないように、老齢の大樹に入り口を封印しました」

クルージュは、静かだったがはっきりとした口調で、休むことなく続けた。

何故だか、そのとき幽霊はおとなしかった。彼女も静聴したいのだからつか、とふいに思った。

「しかし、入り口を封印するには、その魔法を持続させるための力強い命が必要だったのです……」
ふと、風の音がやんだ。

「国に逆らった少女は、次元の穴を永久に封じこめるための、大樹

の生け贄になりました。大樹となった少女は、その苦しみと哀しみから、村を、冷たい風で包み続けました。そして、彼女を愛した男は、再び暗くなった村に、一人取り残されました……」

フブリが、口をはさむことはなかった。何を言っているものなのか、皆目検討もつかなかった。

静かに、紫の頭が上がる。

「こんなことをする国に、フブリは行きたいと思うか……？」

寂しく笑うクルージュの瞳が揺らぎ、フブリは、何も答えることができなかった。

ただ、勝手に涙があふれて、止まらなかった。

第三章 六

「アリカ」

部屋に戻ると、灯りをつけることもせず、フブリはキャビネットの上に立てかけられている鏡に向かって話しかけた。

「あなたなんでしょ？ アリカ・チュリカマタ」

身を乗り出し、鏡に鼻が届きそうなくらい顔を近づける。

「ねえ、どうして私に取り憑いたの？ クルージュに会いたかったからじゃないの？」

フブリは黙ったままの幽霊に対し、語気を強めた。一人で鏡に話しかける姿は他人から見れば、それはとても異様な光景かもしれない。「……そうよ」

鏡に映った自分の口が、意思とは関係なく動く。

「あたしはアリカ・チュリカマタ。大樹の生け贄にされた哀れな村娘」

アリカは 身体はフブリなのだが 髪を掻き揚げて自嘲するように笑った。

「あたし、どうしてもあいつに言ってやりたいことがあったの。ずっと風を起こして伝えようとしてただけど、あいつは……気づいてくれなかったから」

次の瞬間、意識はフブリの手に渡る。アリカが黙ったとき、彼女に代わるように意識を前面に押し出せるのだ。意識を交代しながら会話するリズムを、フブリは段々とつかめるようになってきた。

「あの風はあなたが起こしていたの？」

「まあね。大樹の中で、あたしの意識はずっと生きていた」

アリカは表情をくるくるとよく変える。鏡の中の少女は、顔は同じだが、仕草はフブリとまったくの別人だ。

「生きているけど口もきけないし、ただあたしにできるのは風を操ることだけだった」

毎日のように強風で村を包んでいたのは、この幽霊の少女だったのだ。

「あいつ、馬鹿なのよ……」

アリカはため息交じりに吐き捨てた。そのため息が向けられた相手は言わずとも知れている。

「いつまでもあたしが死んだこと気にして、あたしが死んだのはおれのせいだ、って。あいつ一人くらいなら最果てを簡単に抜け出せるのに、いつまでもここに医者として残っているのも、あたしに対する贖罪なの。要するにあたしってどういう存在を免罪符にして生きるのよ。いい迷惑よね」

アリカはまた自嘲気味に笑った。

肉体を共有している今、フブリにはアリカの気持ちを手にとるようになる。決してクルージュを責めているわけではない。彼女は、クルージュを今の状況に追いやってしまった自分に腹を立てているのだ。

「馬鹿みたいにずっと昔のこと引きずって、カラアを憎み続けて……」

アリカの切ない想いが伝わって、フブリは眉をひそめた。

「ホント、馬鹿……」

暗い室内に、少女の乾いた声だけが重苦しく響いて、そして沈んでいった。

「あ、ルビー」

部屋を出て、階下にちょうどよくルビーの姿を見つけた。ルビーは腕にたらいと手ぬぐいを抱えていた。

「今からお風呂。フブリ、先に入る？」

「うっん、ルビーに譲るよ」

別に入浴のために降りて来たわけじゃないし、とフブリは微笑んだ。「昼間は変な行動してごめんね。私、多分疲れてたんだ」

本当にね、とルビーは容赦なくフブリにげんこつを当てた。フブリ

は軽く頭を押さえ、少しだけ唇を尖らせて少年を見上げた。

「それより聞いた？ カラアへ行く予定」

「ええと、明後日の早朝だよ。兵の数が普段より少なくなるって
いう」

カラアへ行く日程は部屋に戻る前にクルーージュと話し合い、とりあ
えず決まった。本格的な段取りは明日の夜、クルーージュの往診が終
わってから再度話し合う予定だ。

「……あのさ、青木さんの話、びっくりしたよね」

浴室に向かうルビーを追いかけながら、フブリは独り言のように漏
らした。

「生け贄に捧げられたって話？」

そう、と軽く相槌だけを打つ。どうせ言っても信じてもらえないこ
とはわかってしているため、自分の中にいるアリカの存在は黙っている
ことにした。

「驚きはしなかったけど……何となく青い木の話の聞いたときに気
づいたから」

「知ってたの!？」

フブリは目を丸くして詰め寄った。

「青は魂の色なんだよ。だからもしかしたら……って思っただけだよ。
過去に似たような魔法を使った人がいなかったわけでもないし」

「魔法は、人を傷つけない。なのに、どうして」

愕然とした。そんな魔法があるなんて知らなかった。

「ぼくらは、万物に『呼びかける』わけだけど、まれに『命令』で
きる人もいる。相当な経験を積んだ魔法使いでないと無理だろうけ
ど」

フブリの真剣な声色と表情に驚いたのか、ルビーは少し躊躇いがち
に話した。

「過去にそういうことやった人って……どうなったの？」

「死んだよ」

間髪入れずにはっきりと言われ、フブリは衝撃を受けた。しかし

つと衝撃を受けたのは、恐らくフブリのリアクションにぎよつとしたルビーのほうである。彼女がそこまで大樹の生け贄に感情移入しているとは夢にも思っていなかったのだろう。

「め、『命令』するってことは、自然を支配しようとしたことと同義なんだ。手痛いしっぺ返しを必ず被ることになる。……だから、ああいうのは自爆覚悟の大博打魔法なんだ」

「あの、魂って、もとに戻せないの……？」

フブリは小動物のような瞳でルビーを見上げた。少年の喉が苦しげに鳴る。

「フブリの言いたいこともわかるけど……多分……無理だと思う。もう魂が大樹と融合して何年にもなるんだろ？ 肉体も保存されていないだろうし、ぼくじゃ、ううん、どんな魔法使いでも、もう……」

「どうしても……？」

本当に申し訳なさそうにルビーは声のトーンを落としていったが、その気持ちは嬉しくとも納得はできない。実際にアリカと先ほどまで話していた立場としては、そんなに簡単に諦められる問題ではないのだ。

「フブリ……」

「ううん、ごめん。あはは、ごめんね、ルビー」

ルビーのほうが自分よりも落ちこんできたので、フブリは明るく笑ってみせた。

「変なこと言っ……ごめん……」

ルビーは少し間を置いて、大きくうなだれるフブリの肩にそつと手を添えた。しかしコンマ三秒、彼女の右手がその甲をロックオンし、直ちにひねり上げる。

「うぐあッ!？」

予想だにしないフブリの攻撃にルビーは悲痛な叫びを上げた。

「……どーせ戻れないことなんてわかってんのよバーカ」

「バ!？」

ルビーは涙目になりながら、しかしフブリの言葉に手の甲をひねられる以上の打撃を受けたようであった。

「当たり前のこと言ってるじゃねえってのよ、ボケが。できない言う前に『ぼくがやってみせる』くらいのこと言ってみなさいよ」

「ボ……………」

明らかにフブリの追撃についていけないルビーがただ口をぱくぱくさせているところに、少女は最後の止めを刺す。

「あなたの器はミジンコ以下決定ね」

「みじんこ……………」

「今度また下らないことほざいたら踏み潰してやるから」

鼻を鳴らし大股で去っていくフブリ。ルビーは硬直したままその後ろ姿を見送った。

数分後、浴室をガラガラ開けて出てきたツバルが

「あーいい湯だった！ ルビー風呂開いたぜ……。……って何風化してんのお前」

戸の前で固まるルビーを軽く叩いたが、彼に目立つ反応はなかった。「だいじょーぶか？ お〜い？」

ツバルの声が聞こえているのかいないのか、風化したルビーの意識はただ砂のようにさらさらと音を立てて崩れていくばかりであった。

そこは、巨大な城だった。

しかしその大きさに反し外見は決して華美なものではなく、白塗りの壁がただひたすら続く質素なものであった。城下町を一望に見渡せる外壁のない回廊は、開放的な雰囲気と漂わせる。城主が、市民に親しみやすい城を造ろうとした意志が窺える。

城下町は、いつものように灯りの洪水であふれ、廊下からもそこが賑わっていることが見て取れる。夜が更けたとはいえ、まだ二十三

時を回っていない。当然である。

しかし、城の中に灯りはなかった。

静まり返った城内に、ゆつたりとした足音だけが響き渡る。それは高い天井に反響して、ひどく重苦しい音に変化した。

足音の主は、周囲に視線を巡らせて歩みを止めた。

どこからともなく入ってきた風が、彼の灰色の髪を揺らす。

奇妙なことに、城の中には物音一つなかった。真夜中でもないというのに、誰一人として活動している者はいない。侍女も、兵士も、銀色の甲冑をまとった騎士ですら、各々が寝台の中で、または床にそのままひれ伏すように倒れこんでいる。

「さて、少し……効き過ぎたかな」

灰髪の男は冷や汗をぬぐった。彼がパチンと指を鳴らすと、その階の扉という扉が一斉に開き、そこから何枚もの毛布が飛んできた。

それはもう、扉が次から次へと開いたり閉まったりするものだから、とんでもない騒音だった。しかし、誰一人として　扉のすぐ傍に倒れていた兵士ですら　目を覚ますことはなかった。毛布の群れは、床に横たわる彼らの体を静かに覆った。

城壁を越え外に出て、男は口笛を一つ、空の果てまで響くように吹いた。風に乗ったその音は、男の体を包み、闇の中に彼の体を取りこんだ。風に乗り、闇に溶けこみ、雲の隙間を抜け　そう考えている間に、風が男を目的の場所へ運んでいく。それを目にする者は、まるで彼が一瞬にして消えてしまったように見えるに違いない。

そして夜の闇は、消えた男のことなどぞ知らぬ顔で、また静寂に満ちていくのだ。

灰髪の男は、深い森に囲まれた辺鄙な村落に降り立った。否、村とは呼べないかもしれない。そこはどこを見回しても真っ暗で、遠くにはいくつかの家屋が並んでいたが、人の住んでいる気配などなかった。ただ、目の前の廃屋で腐った木の窓がギイ、ギイ、ともの悲しい音を上げるばかりだ。

途端、強風に思わず目をつむる。

耳元で、一定のリズムを刻む轟音が通り過ぎた。高らかに唸り声を上げるそれは、まるで彼の訪問を拒むかのように舞い、土埃を上げた。

「移動魔法はお疲れになったでしょう」

廃屋の影から、三人の男たちが現れた。みな、闇に紛れる黒のフードを被り、背を丸めて小さくなっている。灰髪の男はさして驚かず、むしろ待っていたように笑顔で彼らの出迎えを受け入れた。

「……お待ちしてりました。大魔法使いさま」

中央の男が、しわがれたガラガラ声を出した。灰髪の男より一回り、二回りも年を取っていきそうな老人だ。彼が、握ればつぶれてしまいそうな、小さな体を折り曲げると、両脇の男も軽く頭を垂れた。

老人の口は、明らかに歓迎する気など毛頭ないような態度で義務的に動いた。語尾がきつく上がったのを、灰髪の男は聞き逃さない。

彼らは下げた頭を戻す動作の最中、灰髪の男を蔑するように睨め上げた。冷たい視線の群に射抜かれても、しかし男の笑顔は一寸も動かない。

「すまなかった、と私に言う資格はないのだろうね」

小さく呟くと、男の一人が眉をぴくりと動かした。灰髪の男と云えば、わざとなのか気づいていないのか、あつげらんとしてしている。

「ここにいる『旧女王派』はこれだけなのかな？」

「それはお答えするわけにはいきませう。貴方は今の私たちにとつて……」

老人は一瞬言葉を選ぶように間を置いて、首を横に振った。

「とても危険な存在だ」

「裏切り者、と言ってくれて構わないよ」

自嘲するように灰髪の男はこもった笑い声を漏らした。

「オーガスタさまは……ッ！ どうしてバレッタさまを見捨ててしまわれたのですか!？」

オーガスタと呼ばれた灰髪の男は、歩み出た若い男を一瞥した。まだ少年といってよいような相貌だ。彼は、喉の奥から絞り出したよ

うな奇声を発した。

へたをすれば今にもオーガスタに掴みかかりそうな少年を、老人が制止する。

「……行ってください。もうすぐ兵が見回りにやってきます。貴方が何のために今更ここに来たのか、我々には理解しかねますが……彼らが待っています」

「ありがとうございます」

オーガスタはそれだけを残すと、廃屋の扉に手をかけた。三人の男たちは彼の後ろ姿をじっと見送り、やがて闇に隠れるようにちりぢりに散っていった。

闇の中に三つの影が消えた直後、遠くから小さな灯りが廃屋に向かって差しこんだ。重そうな甲冑を揺らしている兵士風の男が、大きく欠伸をしながら歩いてくる。彼は寝ぼけ眼で周囲を見回し、懐中電灯をかざしたが、ギィ、ギィ、と切ない声を上げる廃屋に目配せすると、また一つ大きな欠伸をして通り過ぎた。

風は容赦なく全身に体当たる。それは痛いほどの衝撃を与え、緩やかに体温を奪っていった。

扉を閉めるのも一苦労だった。力いっぱい引いて、すぐに鍵をかける。ようやく強風から解放されたオーガスタは、大きく深呼吸して彼らに微笑んだ。

先客は、二人。

「そろそろ来るだろうと思っていた。……オーガスタ」

一目見た限りでは女性のように見える紫髪の男が、強張った表情で重苦しく呟いた。卓の上で手を組んだまま、顔だけを扉に向けている。オーガスタは一瞬、切なそうに目を伏せた。

「久しぶり……」

漏らすと、黙ってうつむいていた金髪の男が、隣の椅子を引いた。

「座れよ」

「ありがとうございます……と」

まじまじと二人の男を見つめる。

「二人とも、老けたね」

腰を落ち着け、オーガスタは呑気に笑った。強張った表情の男たちは、その言葉が少なからず予想外だったようで、目をぱちくりさせた。しかし、オーガスタの口元に作られた笑みからは、嫌な素振りも微塵も感じられない。彼のこの一言で、緊張していた室内の空気が一瞬和やかなものになった。

「お前が言うなよ。おれらの中じゃ、お前が一番年長なのを忘れたか？」

紫髪の男がオーガスタにお茶を差し出しながら笑った。しかし、それを受け取る彼は、顔つきだけを見れば、三人の中では、一番年若く見えた。

オーガスタは白い長衣に、やわらかな灰髪、極めつけに基本はゆったりした動作だ。顔つきは若くとも、その動きや服装には年寄り臭いものがある。いや、もつと適切に表現するならば、彼には年長者を思わせる威厳があった。

「さて、三年ぶりで申し訳ないんだが、今日も時間がない」

オーガスタは、お茶の味を楽しみながら、ゆっくり口を開いた。とても時間がないようには思えない動きだった。

「抜け出して来て、国王さまに感づかれなかつたか？」

「城の人間全員を、眠らせてきた」

さらりと答えるオーガスタに、紫髪の男が吹き出した。

「さすがの私でも、眠らせておく時間には限界があるからね。だから、時間がないんだよ」

しかしにこりとしたその表情に、焦りの色は見えなかった。

「そんな危険な真似してまで、何故ここに来た」

金髪の男が、和やかな雰囲気を持ち壊すような勢いで冷たく放った。

「もう二度と会わねえって、言ってたよな。オーガスタ」

「そうだ……確かに、そのつもりだった」

「ここだって危ねえ場所だ。旧女王派の奴らも命がけであんたを…

…」

紫髪の男が金髪の男に目配せしたが、金髪の男はすぐに視線をそらした。

「言わせるよ、クルージュ。おれはまだ、こいつには言いたいことが山ほどあるんだ」

「いいから、その辺にしておけ。オーガスタにも言いたいことがある。つてここに来たんだろうさ。そうだろう？」

今すぐにも殴りかかりそうな金髪の男を、クルージュが慣れた口調でたしなめ、落ち着かせる。オーガスタはクルージュに向かって頷いた。

「お前たちが今やろうとしていることを全力で止めに来た……と言えはわかるだろう？」

「オーガスタ……！」

金髪の男がオーガスタを睨めつけ、下唇を噛んだ。その仕草にオーガスタはただ苦笑するだけだ。

「そう、まさかお前たちが本当に彼女を見つけるなんて……いや、もうこの話はよそうか」

オーガスタは視線を手元のカップに向けた。残り少なくなったお茶の表面に、その寂しげな瞳が揺らいで見えた。

「旧女王派に話を聞かなければ、お前たちが最果てにきていることを私は知らなかっただろう。私はもう旧女王派ではないはずなのにね……。彼らは、私の過去の功績に免じて恩赦を与えてくれたようだったよ。……哀れみを感じて、私にお前たちの情報をくれた」

「それで、このタイミングでここに来たわけか……」

「そう、お前たちの計画を食い止める、好機だ」

オーガスタが一息に言い切ると、二人の男は彼を凝視したまま動かなくなった。

「ここでお前たちの動きを封じたいが、しかし」

視線を動かすまでもなく、オーガスタにはわかっているようであった。金髪の男はオーガスタがこの室内に入ったときから、既に帯剣を構えている。それはあまりにも自然な動作で、金髪の男がこの訪

問者を快く思っていないのは明白だった。

「……返り討ちに遭うだろうね」

オーガスタが呟いて、わずかに微笑む。

「それをわかつて、ここに来たのか？」

金髪の男が怪訝そうに眉をひそめたが、オーガスタはやはり微笑むだけだった。

「いても立ってもいられなかった。無駄だとわかっていても、私は……」

カップに映る揺らいだ瞳を、オーガスタは一気に飲み干した。

なあ、とクルージュが口を開いた。

「アリカのことを、話したんだ。そしたらあの子……すぐにでも泣きそうな顔してた」

「そうか……」

「それで、おれ、どうしたんだろうな。『カラアに君は行きたいと思うか?』って、いつの間にか口走ってた」

その一言に、オーガスタも、金髪の男ですら目を剥いて動揺した。

「クルージュ」

「何言ってるんだお前……！　ここまで来て」

金髪の男の声には、わずかな嘲笑も混じっていた。

「大丈夫だ、わかってるよ……」

クルージュは金髪の男に優しく笑いかけた。金髪の男はわずかな苛立ちを手元のカップに向けた。カチャン、と大きな音が無音の室内に響き渡る。

「オーガスタ、おれは今……少しだけ迷ってる」

テーブルの中央に置かれた一つきりのランプが、クルージュの顔に色濃い影を作る。

「三年前、おれたちが今と同じように旧女王派の手助けのもと、ここに集まって話したときのことを覚えているよな？」

オーガスタは頷いた。

「あのときは、お前の思想なんかバカみたいたと思ってた。『すべ

ての人が幸福であつて欲しい』なんてバカみたいなことを口走つて旧女王派を抜けた裏切り者……そう思つてた。でも、あの子に實際会つて、お前の言つていたことも少しはわかつたんだ」

「クルージュ」

オーガスタは目を見開き、口元を押さえた。彼にとってそれは、とても意外な言葉だつたようだ。

「でもな、オーガスタ。おれはやっぱり許せないよ……」

クルージュは、じつと、遠くを見つめている。

「おれは……リラを、幸せにしたいとは思えないんだ……どうしても」

クルージュは、苦虫を飲みこんだような顔で、口の端から呟いた。静かだつた。あまりにも長い静寂が続く。

オーガスタは何も言い返さず、ただうつむいた。

「もう、帰らなければ……魔法が切れてしまう」

沈痛な面持ちで、ポツリ、呟く。

「次に会うときは、本当に敵同士だ」

「ああ」

このやり取りを見て、敵対関係を想像する者がどれだけいるのだろうか。逆に、長年寄り添つてきた親友同士のイメージを思い浮かべる者のほうが、多いことだろう。しかし彼らはそれぞれが『敵である』という見方にまつたく疑問を持つていないように、頷き合つた。扉を開けると、煙のようにオーガスタは消えた。風に呑みこまれるように、静かな夜の風景に溶けて消えた。後にはただ、風の音が扉を叩くばかりだつた。

しかし次の瞬間、それは現れた。

廃屋の扉の影から何かが生まれるように、そこから人間が 消えたはずのオーガスタが突然姿を現したのだ。二人の体が、驚きにのけぞる。

「ちよつと忘れていたことがあつたよ」

オーガスタは金髪の男の上着をじつと見つめた。

「何だよ？ ……うわっ！」

オーガスタが彼の肩を軽快に叩く。すると、バチリ、という何か切れたような音とともに、光が弾けた。男は突然己を襲った大きな衝撃に立ちすくんだ。

「お前は昔から魔法の気配にはからつきしだったが、これは……フエアじゃないからね」

訝しげに上着をまくりあげて確かめる金髪の男に、クルージュが駆け寄る。頭の上に疑問符を浮かべている金髪の男に手を振ると、今度こそオーガスタは去った。

残された二人は、ぽかんと、今しがた彼の姿があつた場所を見つめた。

そこにはただ暗闇が広がるだけ。人の声一つない寂しい村を、暗闇が彩るだけであつた。

金髪の男が悔しそうに、唇を噛みしめた。その寂しく丸まった肩をクルージュが優しく叩く。

風が小さく唸った。

それに呼応するように、扉がギイ、ギイ、と哀しそうに鳴く。

「すべての人が幸せに……か……」

まるで子どもの戯言のように、クルージュは吐き捨てて笑った。

ルビーは、深夜に話し声が聞こえた気がして、目を覚ました。

風の音は依然大きかったが、その合間に小さく聞こえる人の声を、彼は確かに耳にした。

周囲を見渡せば、両隣に寝ているはずの二人の姿がないことに気づく。シーツにまだぬくもりが残っているところを見れば、彼らが今しがたどこかへ出て行ったことは明白だ。

まだ、ツバルへの疑いが消えたわけではない。

ひょうきんな男を装ってはいるが、フブリと二人きりになった瞬間、豹変するとも限らない。そう思っていた。何者であるかはつきりしない以上、用心するに越したことはない。

だから、ルビーは声の主がツバルであると考えた。ツバルとクルー
ジユが、自分たちの寝静まった時間帯をわざわざ選び、密談してい
るのではないか。

しかし起き上がって周囲に耳を傍立てるも、声がどこから聞こえて
いるのかはわからない。居間を出て、玄関や浴室をそつと覗いてみ
るが、人の気配はなかった。

一旦部屋に戻り、その声が、ずっと自分の耳元で聞こえていること
に気づいた。

そこで、ルビーは思い出した。

以前、フブリのピアスにかけた魔法に乗じて、ツバルの上着にも魔
法をかけたことがあった。温泉街で襲撃者から逃れた際、遠くにい
ても声を聞き取れる盗聴器のような魔法をかけた。あのときは彼が
フブリと二人きりになったとき、怪しい行動をしたらすぐわかるよ
うにと仕掛けたのだった。

ルビーは、耳元に全神経を集中させた。

魔法をかけた上着に、呼びかけるのだ。

「……カラア……と思う……」

「……の計画を……好機……」

かすかに漏れる単語を拾うが、はっきりしたものは聞き取れなかつ
た。ツバルとクルージユの声、それからもう一人、聞きなれない男
の声もあった。恐らく会話をしているのは三人だ。

切れ切れに聞こえる会話に、あのとき、もつと強く魔法をかけてい
ればよかった、とルビーは後悔した。ずいぶん前にかけた魔法だつ
たため、効力が切れかかっていたのだ。

合間に、『国王』という単語が聞こえて、ルビーはどきりとした。

一瞬、耳を疑う。

その瞬間、バチリ、と何かがはじけた。その音が聞こえたときには、
もう遅かった。声は、完全に聞こえなくなっている。

ツバルが、気づいたのだろうか。

いや、彼には魔法の素質は少しも感じられなかった。そういうもの

は、魔法使いであればすぐにわかる。

では、クルージュか……？

確かに、彼は多少の教養をつめば、簡単な魔法の使い手くらいにはなれそうだった。しかし、こちらの魔法を一瞬で消せるような、そんな高レベルな魔法を突然使えるようになるとは、考え辛い。

ルビーは、風の吹きすさぶ外を、窓越しに眺めた。

三人目の、男……。

ルビーは、その言葉を静かに呑みこんだ。

夢を見た。

幼い自分が、ベッドにしがみついて泣いている。

ああ、いつもの夢だ、とフブリはすぐにわかった。

シルヘットは息を引き取り、ルビーが自分の名を呼びながら家に入ってくる。

ここまでは、現実と同じなのだ。幼いフブリはただ泣きじゃくり、ルビーは呆然とシルヘットの死を見つめる。

そして、フブリは何故か、逃げるように走り出す。

何が怖いのかはわからない。ただ、逃げなくてはいけなかった。

幼い自分も、ルビーも、シルヘットもない、たった一人の空間で。

薄暗い森を駆け、恐怖を振り切ろうとする。

この森は、フブリに恐怖以外の何もも与えなかった。

森の先の光に飛びこみ、フブリは崖から転落する。光の先が崖だと知っているのに、夢の中の自分は決して止まってはくれない。

深い闇に、なすすべもなく落ちていく。

フブリは、その瞬間、不思議な哀しみを感じている自分に気がついた。

第三章 七

夢から覚めたフブリは、おもむろに着替えると、家を出た。

時刻は深夜の三時を回ったばかり。誰にも気づかれぬように、足音を忍ばせて階段を下りる。悪夢を見た直後なのに、不思議な爽快感があった。

アリカが大きな欠伸をした。

「こんな夜中に、どこ行くわけ？」

「青木さんに……会いに行こうと思って」

ルビーと昨夜話してから、フブリはずっと考えていた。

クルージュはカラアに行きたいか、と問うた。そこはフブリにとって最終的な目的地である。一年追い続けてきた目的を目の前にして、今更引き下がることなどできない。

しかし、クルージュとアリカをこのままにしていくのもフブリには心残りだった。ルビーには魂をもとに戻すすべはないと言われたが、どうしても自分を納得させられない。もう一度、最後にもう一度だけ、自分の目で大樹を確認しておきたかった。見たところで何ができるわけでもないのだ。そんなことはわかっている。ただ、諦めるのはその後にしたくない。そう思った。

あのさあ、とアリカが間の抜けた声を出した。

「ちよっ……静かにしてよ。誰かに見つかったら……」

フブリは自分の口を慌てて塞いだ。夕方でもあれほどの兵がいた村である。深夜とはいえ、見回っている兵士がいらないとは限らない。兵士が通るため道は整備されており歩きやすいのだが、その分彼らに姿を見咎められる可能性も高いのだ。

「大丈夫。あたしが何年ここにいると思ってるのよ。どの時間にとどの兵士がどこを動き回ってるかくらい、熟知してるわ」

「それならいいんだけど……。で、何？」

フブリはほっと胸を撫で下ろした。アリカがいる限り、兵士に見つ

かる心配はなさそうだ。

「クルージュってぶっちゃけどう思う？」

「は？」

唐突に、しかもとんでもなく場違いな質問を投げかけられた。

「だから、クルージュをどう思う？」

しかしアリカはフブリの動揺などお構いなしだ。

「……えーと、女装趣味の医者」

フブリはしばらく悩んで、ぼんやり思い起こされるクルージュの特徴を述べてみた。ところがアリカはその答えに納得がいかないらしく

「そういうことじゃなくて、好きか嫌いかと問っているのよ、私は

！ 元カノとして！」

いきなり怒り出した。

「は！？ な……何で私が！？ クルージュを好きにならなきゃならないの！？」

フブリは思わず大声を出してしまい、それから慌てて周囲を見渡した。だってさあ、とアリカは鼻を鳴らした。

「あいつ、あんなんで結構イイ面してるじゃない？ 下はスカート

でもさ、顔も中身も悪くないし……」

だからといって、元彼女としてクルージュの印象を聞かれても返答に困ると言うものだ。

「ちよ、私、まだクルージュに会って数日しか経ってないんだよ？

そ、そんな目でクルージュを見るはずないじゃない！」

「そう？ あたしとクルージュは一目ぼれだったけど」

「あ、そう……」

単なるのろけだったようだ。

「あたし十四のときに初めてクルージュに会ったのね。もう七年になるかな」

呆れるフブリに構わず、アリカは話しはじめた。

「実はあたし育ての親に身売りに出されてさ、どうしようもなく森の中さまよってたらここにたどりついたの」

その当時は懐かしがっているのか、アリカはどこか楽しそうだった。小石を蹴りながら軽快な足並みで通りを渡る。

「クルージュはまだ医者じゃなくて、何でも屋みたいなことやってたわね。あの格好だからさ、笑ったわねー当時は。聞けばカラア出身なのに最果てにいる変わり者だって言うし、女装趣味なのに剣士だし」

フブリは黙って彼女の話に耳を傾けた。

「あ、ごめんね。下らないことしゃべって」

アリカは少しだけ申し訳なさそうに頭を掻いた。

「ここって若い女の子いなかったからさ、フブリと話せてすごい嬉しいの。こうして人間の足で歩けるのもすごい新鮮なのよ。だって七年も木の一部だったわけだからさ」

木の一部、という言い回しが切なかった。彼女の気持ちを本当に理解することはできないけれど、それが若い少女にとってどれだけ辛いことなのか、想像に難くない。

「……アリカ。失礼だけど……あなたの肉体って、やっぱりもう……」

アリカは何も言わなかった。けれど、答えがなかったことでフブリは彼女の気持ちを看取した。

「ごめん、変なこと聞いて」

「フブリの言いたいことわかるわよ。あたしが大樹から解放されて人間に戻れたらいいなー、とか思ってるでしょ」

「うん……」

ふふ、とアリカは声に出して笑った。

「ありがと。その気持ちだけで充分よ」

胸が痛む。たとえ本人が本気でそう思っているとしても、フブリはどうしても納得できなかった。

「でも、アリカ」

フブリは立ち止まった。

「クルージュに気づいてもらいたくて風を起こしていたって言うって

たよね？ 言いたいことがあるって……」

「……………」
黙りこんでしまったアリカに、フブリは嘆息した。彼女がわざとだんまりを決めこんだと思ったのだ。

「アリカ」

「……………」

「アリカってば」

少し語気を強める。すると、蚊の鳴くような小さな声が、己の唇からわずかに漏れた。

「……………」

「え？」

「……………」 フブリ…………… あたし…………… やば…………… かも……………」

「……………」 アリカ？」

その様子がおかしいことに気づいたフブリは、何度も彼女に呼びかけた。しかし、そう感じたときにはもう、自分の言葉以外何も出てこなくなっていた。
冷や汗が頬を伝う。

「アリカ！」

轟音とともに、突然風が砂埃を上げて舞った。まるでアリカを連れ去っていくかのように、遠くへ舞って消えていく。

「アリカ？ アリカ……………」

フブリは、砂埃を呆然と立ち尽くして眺めていた。

何があつたというのだろうか。

つい数分前までは欠伸をするほど余裕のあつたアリカが、突然苦しんでいるような声を出し 消えた。そう、消えたのだ。まさか、これが成仏したということなのだろうか。しかし、このように何の前触れもなく、消えてしまうものなのだろうか。

「違う……………」。アリカは、きつと」

そこにいる。フブリは、根拠もないのにそれがわかった。

大樹だ。

風はまだ静かに吹いている。確かに彼女の声だ。彼女の命は、まだあそこで生きている。それがわかる。

優しい風が、走り出すフブリの背中を押した。

しかしアリカというナビゲートを失った今では、兵士に見つかる危険性と隣り合わせの状態である。フブりは、クルージュのフードを深く被り、細心の注意を払って歩いた。あと少しで大樹が見える、というところまで来たとき、若い兵士にすれ違った。

慌てて民家の隙間に隠れるが、彼はフブリの影をとらえたようだった。まっすぐ近づいてくる足音に、フブりは身を固くした。

兵士が、暗闇にカンテラをかざす。

しかし、そこに人影はなかった。

遠ざかる足音に、フブりは安堵した。しかし、背後で自分を抱えたまま物陰に隠れる金髪の男には、言葉も出なかった。

「一人で外に出たら危ないって、クルージュは言ったはずだよな？」

口調はいつも通りだが、そこに笑顔はなかった。フブりはうつむいたが、すぐに思い直し、真剣な面持ちでツバルに詰め寄る。

「青木さんに会いに行きたいの！ 私、どうしても納得いかなくて、もう一度確認したいことが……！」

勢いを増すフブりは、ツバルの手によって口を塞がれた。驚いていると、ツバルはからからと笑ってみせた。

「……悩むのはいいことだ。若いうちは、悩むのが一番！ じゃ、カラアに出立する前に、青木さん見に行ってみっか！」

途端に表情を明るくするフブりに、ただし、とツバルがつけ加える。「これからは、こんな危ないことするんじゃないぞ。何か危険なことをするときは、まずおれに相談すること」

頭に軽くげんこつを置かれ、フブりは、たまらず笑顔をこぼした。

「ごめん。……と、ありがと、ツバル」

二人は、真夜中の村を慎重に進んだ。さすがに、深夜は見回りが少なくなるようで、そこから大樹までは、誰一人会うことはなかった。

金網近くにはたくさんの兵士がいるため、その上にある丘陵からしかそれを見ることはできない。

大樹は、昼間とまったく変わらぬまま、美しく立っていた。枝の端々から神秘的な光が漏れる。暗い村の中で、そこだけが昼のように明るかった。

か細い女性の声が聞こえた気がして、フブりは辺りを見渡す。しかし周囲にはツバル以外、誰も見当たらなかった。

それがアリカ自身の声だとフブリには即座にわかった。

「アリカ！　アリカでしょ！？」

「フブリ？」

突然大樹に呼びかけはじめたフブりを、ツバルが慌てて制す。あまり大声を出しては兵士たちに気づかれてしまう危険性があるからだ。

「アリ……………」

身を乗り出したフブりをツバルが抱きとめると、少女はうつむいたまま、ぴくりとも動かなくなった。

「フブリ、どうした？　おい……………」

ツバルが心配そうに覗きこもつとすると

「……………ぶはあッ！　あ　　びっくりした！」

ゴン、という音とともに、勢いよく上がるフブリの頭がツバルの顎に命中した。

「消えたかと思った！　どうしたの、一体！」

すぐ傍で顎を押さえたままうずくまるツバルには目もくれず、フブりは自身に向かって話しかけた。アリカが身体の中に戻ってきたのだ。

「あたしにもよくわからないのよ。何かに引つ張られるような感じになって、段々とフブリの声が遠くなって、気づいたらここに……………」
理由はお互いわからないが、ともかくアリカは成仏したわけではなかったのだ。安堵すると同時に、フブリはある事実気づいてはつとする。

「つ、ツバル。あの、少しだけ一人にしてくれる？　あ、別に兵士

の中に突っこんだりとか、危険なことはしないから」

他人から見れば、フブリとアリカの会話は単なる危ない独り言にしか見えない。幽霊に話していると言って、ツバルにならもしかしたら信じてもらえるかもしれないが、今更真剣に説明する気にはならなかった。

ツバルは顎を押さえながら小さく了解、とだけ呟いて後退した。

「……で、一体何が起こったのかな」

ツバルが遠ざかったのを確認して、フブリはひとりごつ。

「精神が長く離れていたせいかもしれないわ……ま、でも今回の一件で学ぶことはあったわね」

アリカは大きいため息をついて、それから苦笑した。

「あたし、もう青木さんと一心同体なんだわ、やっぱ」

それは、何かを諦めるような物言いだった。大事にしていたものがもう修復できないくらい壊れて、それを心の底から受け入れた人間の呟きだった。

「アリカ」

「ちょっとだけ、ちょっとだけだけど……人間の女の子に戻れて、嬉しかったな」

ぽつりぽつりかすれる声で、少女は呟いた。

「何言ってるんだよ」

フブリは、思わず下唇を噛みしめた。

「やだ、泣かないでよ、フブリ」

下唇を噛んだ反動か、フブリの相貌には涙が溜まっていた。

「違うよ、これは、アリカでしょ？」

強がって脛をこするが、それは多分、二人分の涙だと思う。

「伝えてほしいの、フブリ、あなたに」

「え……」

まっすぐ大樹を見据える。風が、身体の隙間を通って力強く唸った。

「多分、あたしがこうして意識を外に出してられる時間は、もう短い。だから、クルージュに、伝えてほしいの」

声は自分の身体から発せられているはずなのに、不思議にもすぐ傍にアリカという少女が実体を持って現れたような錯覚に陥った。

流れる黒髪に白のワンピースを着た少女が、そこにいた。アリカは、微笑みながらフブリに話しかけた。

「じ、自分で伝えなきゃ駄目でしょ……！ クルージュだって、ずっとアリカのことを想い続けているんだよ！？」

心の底から叫ぶも、目の前の少女はただ微笑むだけだ。

「あたしがさ、フブリの体を借りて話したら、あいつ絶対生半可な希望を抱いちやうもの。……あたしが死んだって事実を、あいつはいつまで経っても受け入れられないわ」

「でも……」

「あのね、あたしが生け贄になったときの話を聞いて、フブリ」

風が大樹を揺らして、光の粒子を撒き散らした。その光の粒々がアリカの体に絡みつき、まるで意思を持っているかのように点滅した。少女は光の中で微笑んだ。

フブリは口を出そうとして、やめた。アリカの声はあまりにも真剣で、この話が彼女にとってとても大事なものであるということがわかったからだ。

「はじまりは『村人が協力して暴動を起こし、最果てから逃亡する計画を立てている』という噂だった」

呟くアリカの瞳は、まっすぐフブリを見据えていた。今は暗くなっってしまったこの村に、噂が流れるほど活気があったとはとても信じられない。アリカが村の人々の心を溶かし、彼らに笑顔をもたらした、というクルージュの話は嘘ではなかったのだ。

「ずっとそんな噂が流れてたのよ。そしてあの夜、噂はついに現実になった。誰かが兵に掴みかかった。それは些細な口喧嘩で……でも、みんな、もう怒りを抑えることなんてできなかつた」

アリカは小さく首を横に振った。

「口喧嘩はいつしか武器の打ち合いとなり、ひとり、また一人、倒れていった。それでも、村人たちは立ち向かったの。彼ら突き動

かしたのはたった一つ、暗い復讐の念だけ……」

恐らく、当時のそれは血がにじむような惨憺たる状況であったのだろう。その苦しみは当事者たちにしかわからない。瞳に暗い影を落とす少女を、フブリは哀れむことしかできなかった。

「噂のまままで終わればよかった。けれど事態は最悪の結果で幕を閉じるの」

アリカは目を伏せて、ゆっくり瞬きをした。

「村人たちは、全員暴徒とみなされ捕らえられた。多くの犠牲を払った暴動は……完全な村人の敗北に終わったのよ……」

フブリは思わず顔を歪めた。目の前のアリカも、もう笑ってはいない。

「カラアはね、こう言ったそうよ。『この暴動を計画した代表者は名乗り出る』と」

けれどアリカは、休むことなく続けた。

「そんなのいるわけがないわ。だってそれは、ただの噂だったんだもの。現実には、ただ誰かががむしゃらに兵に立ち向かい……ただ誰かが剣を抜いただけ。でも最果てとしては、カラアへ『暴徒扇動の罪人を罰した』っていう戦果を挙げたかった。……たとえその暴動が、先導者のいない突発的な事故だったとしても……。それで最果ての兵士が下した結論は、『村人を扇動した娘を見せしめに殺す』だったというわけ」

「ひどい……」

身につまされる思いを感じ、思わず口の端から漏らした。アリカにとって、他人の同情ほど無意味なものはないに違いない。だが、話を聞くことしかできない自分に、彼女に同情する以外の何ができるというのだろうか。フブリにはそれがわからなかった。

「別に罪人は誰でもよかったの。ただ、村で最も若い、それも女が生け贄には最適だった。そう、もう二度と村人が馬鹿な考えを起さないようにするために」

改めて、カラアの狡猾さを知った気がした。幻滅したというよりは、

彼女の話すカラアが、もはや理想のカラアとかけ離れた別の国のようにさえ思えてならない。

「最初は大樹に魔法をかけて、入り口を封じてたらしいわ。でもそれもさすがに限界があった。それを半永久的に封じるためには、強い魂が必要だったの。だから……ね、村人の生きる意欲を失わせ、大樹の贄も手に入る。まさに一石二鳥つてわけよ」

アリカは一呼吸置いて、フブリに近づいた。朱色の瞳に間近で射抜かれ、どきりとする。

「暴動のひきがねになった、最初に兵に掴みかかった若い男。それが、クルージュだったの」

耳元に囁かれる事実はあまりにも衝撃的で、フブリは我が耳を疑った。寂しげに笑うアリカの笑顔は、クルージュのそれとまったく同じで、胸が苦しくなる。

「だから、クルージュは今も悔やんでる。あたしが自分のせいで死んだって、アリカが大樹の中で苦しんでるのにおれだけ幸せになるなんてできない、って」

頬を伝う熱い感触に気がついた。いつからだろう、涙があふれてとまらない。

それは自分の意思ではなかった。もう一つの心が、自分の身体を媒体にして流れこんでくる。アリカの悲痛な想いが痛いくらいわかって、フブリは涙をぬぐうことさえできなかった。

「ごめんね、身体貸してくれて、ありがとね」

目の前にいた黒髪の少女は、もういなかった。光の粒子が背景の色に溶け、消えていく。

「アリカ……」

心の中に、アリカの声が反響して痛い。

「クルージュに……伝えて……おね、がい……」

耳元で聞こえていた声が遠くなっていく。少女の願いは、喉の奥から絞り出したようにか細くなり、そして風の音とともに消えていった。

「アリカ!?!」

胸を押さえて問いかけるも、応答はない。本当にもう、彼女は自分の体から離れてしまったのだ。

「アリカ!?! ねえ、アリカ!?! アリカ!?!」

「フブリ?」

ツバルは、突然のフブリの大声に驚いたようだった。そんなツバルの様子に、フブリもまた、驚く。

「……聞こえなかったの? ツバル。今までここに……」

何が、と聞き返すツバルを、まじまじと見つめた。金網を囲む兵士たちを見ても、何も変わっていない。黒髪の少女は、幻だったのだろうか。確かに彼女は目の前に現れ、つい先ほどまで自分と会話していたと思っていた。

見下ろす大樹は、ただ静かに風に揺れ、淡い光を漏らし続けるばかりであった。

「せーのッ!」

クルージュが浴室から戸を開け放った瞬間、彼とルビーは同時にフライパンを振り下ろした。

金属の塊はターゲットの脳天に命中し、男は悲鳴を上げる間もなく崩れ落ちた。無遠慮に家の中を物色していた兵士の一人である。

「……まさか、ぼくらの存在がばれるなんて思ってもみませんでした。しかもいきなり家宅搜索って」

ルビーは頭の鍋を被りなおした。

「最近家の中が騒がしかったからな……」

クルージュのぼやきに、ルビーは多少なりともここ数日の生活を後悔した。よくよく考えれば一人住まいのクルージュの家で話し声（というより叫び声）が頻繁に聞こえたら、それは明らかに怪しい。

「自業自得ですね……ってうるさいな、もう!」

クルージユの黒袍が所構わず飛んで、背後から迫ってきた兵士の気を逸らさせた。魔法で人を傷つけることはできないものの、陽動することはできる。

「おみごと！」

クルージユが緊張感もなく拍手した。こういうところはツバルに似ている、とルビーは思う。

兵士たちが侵入してから二人は後退を続け、最終的に奥間の浴室を拠点に動いている。何しろ敵の人数が半端でなく、真正面から立ち向かうには無理があった。そのため何とか兵士をおびきよせ個々に潰し、現在居間直前のキッチンに隠れて体勢を整えている。

「このままじゃ、キリがないですよ！ クルージユさん」

「わかってる。一気にカタをつけたいところだな。ルビー、あれ全部動かせるか？ フォローはおれがやるから任せろ」

クルージユが指差した先には、棚に綺麗に陳列された薬瓶の群があった。

「いいんですか？ 貴重な薬なんじゃ……」

「どうせこうなったらおれも村にはいられないし、いいさ」

「じゃあやりますよ！」

ルビーが勢いよく立ち上がると、それを見つけた兵士たちが一斉に向かってきた。と同時に、薬瓶が次々に空を飛んでいく。しかしすべての小瓶を一度に動かすことはできないため、ルビーは一点集中で数人の兵士の周囲にそれを飛ばした。

小瓶の追撃をうまく通り抜けた兵士が、無防備なルビーに襲い掛かる。それを見計らったようにルビーの脇からクルージユが勢いよく飛び出す。

兵士たちは恐らく、それがよく知る村医者だと頭で判別する前に意識を失った。一人、二人、三人、次々に倒れていく。あまりの速さに、ルビーはそれを目で追うことすらできなかつた。それだけ、クルージユの剣戟は素早いものだった。ツバルと対等 いや、それ以上だ。

「本当に剣士だったんですね……」

ルビーはぼかんと口を開けて、折り重なるように倒れた兵士の山を見下ろした。

「もう数年握ってなかったがな」

苦笑しながら、クルージュは古い剣を鞘に戻した。

「とりあえず、ツバルとフブリを連れて来るんだ。こうなった以上、騒ぎが大きくなる前にカラアへ向かったほうがいい。予定より早いが、仕方ないだろう」

「あ、そうですね！」

ルビーは返事をしながら階段を駆け上った。

兵士たちの突然の侵入に気づき応戦したのはクルージュとルビーだったが、そのとき居間にツバルはいなかった。そのため、彼は二階のフブリを守りにいったのだろうと安易に想像がついた。

しかし、扉を開けて、ルビーは愕然とした。

「おい、ルビー、早く来い！ 第二波が来るかもしれないぞ」

ルビーは恐る恐る階下のクルージュに振り向き、凍ったような表情のまま呟いた。

「フブリが……いません……」

それと同時に、新たな兵が数人、玄関を無遠慮に突き破って侵入して来た。

アリカの声が聞こえなくなってから、風は強さを増したように思えた。

伝えてくれと言っている。フブリにはそれがわかった。

「ツバル、家に帰ろう」

「おう、満足したか」

頷くと、ツバルは辺りを見回して、意味ありげに口元に人差し指を立てて見せた。

「ばれちゃった……」

彼の言葉の意味を理解するまで、そう時間はかからなかった。背後から、数人の兵士がこちらに向かって走ってくるのが見える。彼らの目標は明らかに自分たちに向けられていた。

「ツバル！」

「大丈夫、フブリはこの美青年剣士さまが守ってやるからな」

ツバルはフブリを庇うように前に出て、帯剣を構えた。

しかし兵士たちの動きは途中で止まった。フブリたちのいる丘陵の頂上に着く前に、突然ばたばたと倒れはじめたのだ。

フブリとツバルが目を見合わせると

「フブリ！」

ツバルのものではない声が聞こえた。

ルビーが、必死の形相で駆けてくる。後ろには、剣を鞘に収めるクルージュの姿も見えた。

「ルビー！」

駆けつけたルビーは、感極まって、フブリを抱きしめた。

「な、何でこういう危ないことするんだよ！ 一人で出歩くななんて

……」

フブリは、何が何だか理解できないまま、彼の背に手を回した。なだめるようにさする。普段冷静なルビーが、このように取り乱すのは珍しい。

「ご、ごめん……」

彼にいらぬ心配をさせてしまった自分を恥じ、フブリは向こう見ずな行動を反省した。

「そこから先は、後でゆっくりな」

フブリたちの間にクルージュが割って入る。

「グッドタイミングだ」

彼の言葉に反応したかのように、それは起こった。金網を囲っていた兵士たちが、見張り交代で入れ替わりはじめたのだ。フブリは、いつの間にか夜が明けかけていたことに気がついた。

「いいか。あと少ししたら、見張りが薄くなる。その混乱に乗じて、あんたらは次元の穴へ向かうんだ」

混乱に乗じるとは、どういう意味だろう。フブリがそれを問う間もなく、クルージュは早口で続けた。

「入り口は大樹の根元にある。あれだ、わかるか？」

指差すほうを細目を見てみると、根の間に確かに小さな穴のようなものが見えた。一人が通り抜けられるかどうかの大きさで、細かい根が周囲をびっしり覆いつくしているため、その奥底は見えない。「中の地下通路を通って細い道に出たら、一箇所固まってじっとしているんだ。あとは、勝手にカラアへ転送されるのを待てばいい手でもつないで一緒に待つんだぞ。でないと、まったく別のところに転送されるから」

言いながら、何かを握り締めたクルージュに、フブリはふと目を留めた。それが帯剣だと気づいたときには、もう遅かった。

「ツバル。あとは頼んだ」

言うや否や、クルージュの体が目の前から消えた。いや、彼は丘陵を滑り落ちたのだ。

兵たちが待つ、大樹のふもとへ、真正面から。

「クルージュ!？」

まさか、と身を乗り出すフブリを、ツバルが止めた。

「お前らは、こっちだ」

抗議するフブリの背を、ルビーが押す。見ればルビーも、沈痛な面持ちだった。ここに来る前に、こうすることを彼から聞いていたのだろうか。

何故、今まで考えなかったのだろうか。

自分たちがカラアへ行くということは、あの兵士の群れを突破しなくてはならない。おれが何とかする、と言っていたクルージュの姿が思い起こされて、フブリは目頭が熱くなった。

「大丈夫だ。あいつなら……」

青さめるフブリに、ツバルが優しく笑いかけた。

しかしクルージュは、身一つで大群に突っこんで行ったのだ。剣の腕は確かなようだが、やはり多勢に無勢である。周りを囲まれ、身を守るのが精一杯のようだった。

もし逃げられたとしても、もうこの村にいられるわけがない。

カラアを知った者は、外に出れば殺される。王は、狡猾で恐ろしい人間だ、とクルージュは言った。クルージュは、追われることを覚悟の上で、自分たちをカラアへ導いてくれた。死にに、行ったようなものなのだ。

三人は、丘陵を裏から静かに下ると、兵たちの視線がクルージュに集中しているのを確認して、金網をくぐった。しかしフブリは、ツバルに促されても、大樹の根に近寄ろうとはしなかった。焦れて腕を掴むツバルを振り切り、元来た道を走り出す。

「フブリ！」

ルビーの呼ぶ声も、もう聞こえなかった。

「クルージュ！！」

腹の底から、彼を呼んだ。

聞こえているだろうか。聞こえて欲しい。伝えなくてはならない。

「アリカは、カラアを恨んでなんかいないって！　あなたの傍で、あなたを見守れて、嬉しいって！」

力の限り、叫んだ。

風の音が、耳元を通り過ぎる。唸り声を上げるそれは、とても哀しく、しかしとても優しい流れを帯びていた。

「だから、恨まないで！　風に、耳を澄まして！　彼女がまもっているのは、決して憎しみの風なんかじゃない！」

クルージュがフブリの声に反応したと同時に、兵もその存在に気づいた。

金網に向かっていく兵たちを、クルージュが押さえこみ、彼の背に、一振りの剣が振り下ろされた瞬間

風が舞った。

かつてないほどの強風に、兵たちは次々に座りこんだ。

人が立っていられないほどの強風だった。しかし不思議と、フブリの周囲だけは穏やかな風で包まれた。フブリだけではない。ルビーも、ツバルも、そして、クルージュも。

大樹が、体全体を、守り抱いているような感覚だった。

「アリカ……？」

クルージュが、まるで夢を見ているような声を出した。

兵たちが次々に吹き飛ばされる中、ツバルは、突然はっとしたように、フブリに駆け寄った。

「今だ。行くぞ」

フブリは、大樹を見上げて動かないクルージュから、目を離さなかった。じつとそれを見つめたまま、ツバルに引きずられる。

一瞬、クルージュが、フブリを振り向いた。穏やかに微笑んでいる。遠ざかる彼の唇は、『ありがとう』と動いているように見えた。

風も、微笑んでいるように温かかった。

名残惜しそうに自分を見ていたフブリが穴にもぐったのを確認して、クルージュは大樹にそっと手を添えた。風は、依然強く、兵たちに吹きつけていた。

触れる幹から、アリカの声が聞こえる気がする。頬を撫でる風が、やわらかい。

少女が、美しい黒髪をなびかせて笑っている。

そんな幻を見た気がした。

その少女の笑顔があまりにも幸せそうだったから、涙に歪む顔で必死に笑顔を作った。

クルージュは、アリカとともに、願った。

「……フブリ……どうか無事で……」

祈るように、呟いた。

第三章 八

大樹の根の下は、地下とは思えないほど広く、明るかった。

広い通路の至るところに、魔法の火が灯っていたのである。浮かぶ火の玉に、フブリは感嘆の声を漏らした。さすが、魔法の国と言うだけはある。

「クルージュ、大丈夫かな……」

フブリが、ふと口の端から漏らす。

アリカが助けてくれたとはいえ、あの後どうなったのかわからない。ここに兵士が追いかけてこないところを見ると、まだ彼らは風に足止めされているのだろうか。

「大丈夫だ。フブリのおかげで、あいつも……」

感謝するように呟き、ツバルは笑った。最後のほうは、濁されたように聞こえなかった。

フブリはツバルに真正面から向き直った。

「ツバルに言っておきたいことがあるんだけど」

「ん？ 何？」

満面の笑みには少しばかり言いづらかったが、心を決めた。今言わなければ、ずるずると言えないままになってしまう。

「ここまで、ついてきてもらって嬉しかった。でも……、ツバルとはここでお別れしたほうがいいと思う」

ツバルが、目をぱちくりさせた。

実は、これは今になって考えたことではない。熟考した上での結論だった。貴重な戦力である彼を失うことは痛いし、それ以上にフブリは、せつかくの楽しかった三人旅の終わりが辛かった。しかし、自分の都合で彼を振り回すことが嫌になっていたことも事実であった。もうこれ以上彼を巻きこむことはできないと思う。

「護衛してもらっているけど、私たちはお金もないし……。だから、これ以上はつき合わなくていいんだよ。私たちは……」

フブリが言い終える前に、ツバルの手が頭を掴んだ。

頭を無遠慮に撫でる大きな手に、フブリは動揺の色を隠せなかった。

「ばか。んなこと気にしなくていいんだよ」

いつも以上に、優しい笑い声だった。

「おれは、好きでフブリたちを守ってんの。楽しいからいいの。おれの勝手なの」

子どものような理屈に、フブリは思わず笑ってしまった。彼は、せつかくだからカラアも観光しなくちゃな、とつけ加えた。

外観が変わらないため、入り口からどれほど歩いたのかはわからな
い。見上げれば天井は、先ほどより少し低くなっているような気がする。
する。いつの間にか、深いところまで足を進めていたのだろうか。

「それより……、ここで待っていれば、勝手にカラアに行けるんです
よね」

しばらく黙っていたルビーが、口を開いた。

「ん？ ああ。じっとしてれば……」

「では、じっとしててください」

早かったため、フブリは彼が何と言ったのか、はっきり聞きとれな
かった。ただ、ルビーの手が唇に合わせて少しだけ動いたのはわか
った。

「……ルビー……。これは、何の冗談だ……？」

歩くツバルの手足が突然止まった。その声は、笑っていないかった。

ツバルの体は石のように固まり、動かなくなつた。息つく間もなく
驚くフブリを、ルビーが強引に掴み引き寄せる。

「魔法は、人を傷つけないんじゃないか？」

「ぼくには、あなたを傷つける意思はありませんから」

ツバルの影に魔法がかけていることに、フブリはすぐに気づい
た。影を縫いとめて、動けないようにしたのだ。

「ルビー、何してるの！」

「フブリは黙ってて」

いつもより強い語気に、フブリはびくり、と身を痙攣させた。声が

大きいわけではなかったが、そこには怖いぐらいの威圧が含まれていた。

「……以前、温泉街でツバルさん、フブリと二人きりになったときがありましたよね」

フブリには、何故ルビーが今、このような話をするのか、少しも見当がつかなかった。

「フブリと二人きりになった後、あなたは襲撃者のアルバイトを雇った、魔法使いと話しましたね？ ……ぼくは、あなたの会話を聞いていました。奇妙なことに、魔法使いはあなたのことを知っていて、あなたをおびき出すために宿を襲わせたと言った」

あのとき、ルビーがツバルの上着に魔法をかけたことをフブリは黙認した。しかし、まさか今、それが問題になるとは思ってもみなかった。

「ルビー、あれは……!!」

「逃がしたんじゃないですか？ あなたは、フブリを狙っている男たちの、仲間だったんじゃないですか？」

何か口に出す前に、ルビーの早い言葉がそれを遮った。

フブリは、ルビーが何を言っているのか理解できなかった。とてもじゃないが、状況に思考が追いつかない。

「それだけじゃない。昨夜、一体どこへ行っていったんですか？ あのクルージュさんとこそこそ密談を」

「ルビー、やめてよ！」

フブリがついに悲痛な声を上げた。

「……魔法は時間が経てば、勝手に切れます。行こう、フブリ」

フブリは呆然と、彼のなすがままに、半ば引きずられるように歩いた。

「待て！」

背後から、ツバルの叫び声が聞こえた。地下道に反響して、耳の奥に響き続ける。

「ツバルさんは、襲撃者たちの仲間だったんだ。こんなところ、早

く出よう」

こんなときに、彼は何を言っているのだろう。目的地だったカラアは、目前に迫っているというのに。

フブりは、力の入らない体をルビーに任せ、ぼんやりと足を動かした。

「カラアなんて、ないんだよ」

その一言に、フブりは総毛立った。背筋が寒くなるのを感じ、同時に止まっていた思考が動き出す。

突然足の止まったフブりを、ようやくルビーは振り返った。

「ツバルは、ツバルは、そんな人じゃないよ」

ようやく、それだけが言葉になった。喉が詰まって震え、うまく声にならない。ルビーの顔が段々と不機嫌なものになっていくのが見て取れた。

「ぼくは聞いたんだ。昨夜、あの人はクルージュさんともう一人誰かと、おかしな話をしていたんだよ」

ルビーは、フブリの肩を掴むと、言い聞かせるように顔を寄せた。

「そんな理由にならない！」

フブりは声を荒げた。

今まで自分を助けてくれたツバルが、敵だとは思いたくなかった。

「ツバルにだって何か事情があったのかもしれないじゃない。あ、あんなことしなくたって……！」

「フブりは、ツバルさんが好きなんだろ！」

かたくなに否定するフブりに苛立ちを覚えたのか、ルビーは遂に大声を出した。

突然のことに、フブりは目を白黒させた。首を横に振るも、顔は勝手に赤くなる。

「な……なに言って……！？ ルビー、ちょっと変だよ！ どうしちゃったの……！？」

「いい加減、認めるよー！」

怒鳴り声が、地下中に響き渡った。反論する隙を与えない迫力に気

圧され、フブリはたじろいだ。

「カラアなんて、あるわけないんだ！ あんなの、夢見た人たちがでっち上げた、文字通りの『幻』なんだよ！」

本当に、彼はどうかしてしまったのではないだろうか。

クルージュの話は、どう考えても作り話には思えない。今まで一緒に旅してきた理由さえも、彼は否定しようというのだ。

「でも……でも、この村だって、カラアの管轄下としか考えられない。カラアはあるんだよ。クルージュだって命を張って、私たちを送り出してくれたじゃない！」

涙が出そうだった。

自分たちを送り出してくれた彼らの、存在をけなすルビーに、心が痛んだ。

「それは……」

一瞬喉を詰まらせたルビーを、フブリは見逃さなかった。

「ルビー、ねえ目を覚ましてよ！ 私たち、ツバルに助けられてここまで来れたんだよ。カラアは……」

「フブリは、カラアに行っちゃ駄目だ！」

掴まれた肩を揺さぶられた。鈍い痛みを感じて、顔を歪める。肩に食いこむその力は、高まる感情に合わせて強くなっているようであった。

「わ、私、ツバルを助けに行く」

いつの間にか声は震え、涙が出ていた。

肩の手を強引に剥がして、ツバルのもとへ向かった。

「フブリ！」

振り向くことなく、走った。

今は、ルビーが怖かった。

何が彼をここまで追い詰めたのかはわからない。フブリはとにかく、今すぐその場から立ち去りたかった。

すると、何かにぶつかり、フブリはよろめいた。ぶつかったものを見上げて驚く。

「ツバル!?」

彼が、歩いてきたのだ。

「軽い魔法だったみたいだ」

ツバルは笑うが、フブリはもう、自分が何をすべきなのかわからなかった。

自分のもと来た方向から、早い足音が聞こえた。少年の、自分をつぶす声も。

しかしフブリは、立ちすくんだままだった。

ツバルの腕にしがみつき、怖いものでも見たように、立ち尽くしている。

頭が、回らなかった。

必死に思考を巡らす。落ち着け、と反芻させる。

ルビーは、自分を心配してくれていたただだけだったのかもしれない。

そんな都合のいい解釈が、今更浮かんだ。

そうだ、と改め、ルビーのもとへ駆け寄ろうとしたとき体が、浮いた。

ルビーが、自分の名を呼んでいる。

しかし、もう彼は追いつけないくらい、遠くにいた。伸ばす手も、届かない。

フブリは、ツバルとともに、次元の穴に呑みこまれ

「ルビ

!!!」

叫ぶ声は空しく、狭い通路に反響して、やがて、消えた。

幕間 - Interval

リラ・コスモレドがどんなに弱い人間であるかを、私はよく知っている。

精神的な面が脆弱で、本当は声を荒げたり激しく動き回ったりすることに慣れていない。また、人の上に立つ器でもない。それは、リラ自身も知っていることだ。

思い起こしてみれば、私が小さかった頃、彼女と話した記憶はあまりない。

私は生まれたときから大人ばかりの環境で育ったから、私の身近にいた同年代の子どもといえば彼女だけであった。

それなのに会話が少なかったのは、彼女が人づき合いの苦手な子どもだったからだ。

彼女の性格を一言で表すならば、内向的というのが最も適切だろう。いつも柱の影からこちらを覗いている少女。そんな印象が残っている。彼女が自分から誰かに話しかけているところを見たことはない。こちらが話しかけても、蚊の鳴くような声で事務的に口を動かすだけで、視線を合わせることもなければ冗談に笑うこともない。外で遊ぶよりも中で読書をしているほうが好きだったから、少女はいつも血色の悪い顔色をしていた。

いつだったか、私が父からもらった大事な指輪をなくしてしまったことがあった。

それを偶然拾ったのがリラだった。眉をひそめながらうつむき、まるで腫れ物にでも触るように指輪を渡す彼女の姿を、私は鮮明に覚えてる。

当時は率直に、あまり関わりたくない子どもだと思った。友達になりたいとも思わなかった。

その後、私は同年代の男友達に恵まれ、ますますリラとの距離は遠くなった。

子ども時代に内向的な性格だったせいだろうか。人づき合いはいつまで経っても苦手なようだが、リラは動植物に慈愛を注げる女性に成長した。

私にすら見せたことのない笑顔を、リラは彼らに向けた。

しかし私は、彼女のそんな姿に目を向けたことはなかった。リラが植物を育てていることなど、こんなに近くで何年も過ごしてきたというのに、気づかなかった。そこにある彼女の存在を、まるで空気のよう思い、ただ通り過ぎるだけだったのだ。

私は、実際に彼女と真正面から向き合ったことはなかった。

面と向かって彼女の気持ちを少しでも知ろうとしていれば、あんなことにはならなかったかもしれない。

彼女がどんな場面で、何を怖がって、何故植物が好きなのか、少しでも歩み寄れば簡単にわかったことなのに。

けれど、今は少しだけわかるのだ。

何故、私が落とした指輪を、彼女が恐る恐る渡したのか。

彼女はただ、緊張していただけだったのだ。汗ばむ手で私に触れるのは失礼だと思い、顔を歪めて素早く手渡した。それだけだった。

わかり合えない者など、この世にはいないと私は思う。

相手のことを知る努力をして、一步踏み出せばいい。相手を理解しなければ、何もはじまらない。

リラ・コスモレドは弱い人間だ。

けれど、私は彼女の下に残ることを選んだ。

誰かが哀しむ姿は、もう見たくなかったから。

第四章 一

私は物思いにふけていた。

私は人と接することが苦手だ。

それはもう物心がつく前から……恐らく生まれ持った人格の一部というものなのだろう。

昔から人より草木や花が好きで、庭師の手伝いをすることはしよつちゅうだった。幼い頃、母に頼みこんで自分専用の温室まで作ってもらったほどである。ガラス張り、加温設備がしっかり整ったそこに、私はたくさんの花を揃えた。毎日手入れをして、人に接するときの数十倍も気を遣った。

私は一日の大半を温室で過ごす。おかげで花々は季節を彩る美しい蕾を開き、私の心を癒してくれた。

私が毎日必ず顔を合わせるものと言えば、その草花たちと二人の間だけだった。

本来なら私は何人たりとも会いたくはない。一人の時間が好きなのだ。しかし一人は私の身の回りの世話をするために、そしてもう一人は

「今年はアリッサムが咲くといいね」

その男は、突然話しかけてきた。いつの間に温室に入ってきたのだろう。いつもこの時間になると、どこからともなく現れる。

私は黙々とプランターの移動に専念している。日中は日当たりが変わるため、花たちの状態や特性に合わせて場所を変えるのだ。

「去年はうまくいかなかったらどう？」

私が振り向きもしないのに、彼は勝手に話し続けた。

そう、アリッサムは昨年植えつけに失敗してしまった。甘い香りの小さな花を見ることができなかったのが、とても残念だった。

「今行くわ、オーガスタ」

「別にせかしているわけじゃないよ……好きなものに打ちこむのは

いいことだ」

オーガスタ・ササンクロスは本当に申し訳なさそうに微笑んだ。こういうときの正直な表情はすぐに顔に出る男なのだ。その実直さは私が一番よく知っているとと思う。

オーガスタは私が一番重いプランターに苦戦していると、横から割りこんで簡単に持ち上げてしまった。最後のプランターだった。

「これはあっちだね」

このプランターは私がまず持ち上げようとして、しかし必ず最後にオーガスタが移動させる。数年前からそれは決まっていた。いつもと変わらない習慣だ。私もオーガスタも、毎日同じ行動を繰り返している。

私は睨め上げるように男を見上げた。

「行こう、リラ」

彼の差し伸べた手を握って、私は温室を出る。巨大な城の中で、温室のあるこの庭園だけが、私の唯一心安らく場所だった。無駄に敷地の広い私の城。その広さが、むしろ私には窮屈だった。城壁は空を覆いつくすほど高くそびえ、東西南北に位置する塔は摩天楼のように高く、高くその存在を誇示している。どこまでも終わりが見えない廊下は、恐らく五十人の兵士が並んで歩いても余りある広さだ。この城を一周するのに、一体どれだけの時間がかかるだろうか。想像するだけで気が遠くなる。

白塗りの壁がひたすら長く続く回廊を歩きながら、私は男に問うた。「今日の予定は？」

「昼過ぎに護民官が謁見に来る。それから、明後日はシエル港町の視察に行ってくれ。数ヶ月前から君を歓迎したいと申し出ていたから、きつと手厚くもてなしてくれるよ」

港町の話はすいぶん前から出てはいた。ただ、私が気乗りしなかったことで見送られていたのだが、いよいよもって、そうも言っていられない状況らしい。相手の町が招待したいと言っているものを断り続けるのは、あまりに失礼な行為だ。

「昼からほとんどの兵団が訓練で出払うと聞いたけど」

オーガスタがそれ以上何も言わなかったので、私は自分からそれを問うはめになった。

「ああ、その通りだ。ちゃんと覚えていたみたいだね」

オーガスタは本当に嬉しそうになっこり笑った。

ああ、また騙された。自分からわざと言わず、私がそれを口に出すのを誘発させるための罠だったのだ。はっきり言って、この男は魔法使いよりも役者が向いていると思う。お得意の口八丁手八丁で、いつも私の心を見透かす。

そうやって、私がどれだけ政務に力を入れているかを探っているのだ。

政が嫌いなわけではない。勉強は好きだし、紙の上ならいくらでも政務をこなせよう。だが、それを実行に移すとなれば私には荷が重い。なぜなら私は人づき合いが苦手で、人前に出ればまともに提言などできない性格なのだから。

しかし、今のこの生活を作ったのは私自身だ。私には仕事をこなす義務がある。ただ、オーガスタのいかにも上から見下ろすような態度が、気に食わないだけだ。

「浮かない顔だ。眉間に皺が寄っているよ」

はっとして、私は顔を更にしかめた。

「そういうことを女性に向かって言うものではないですよ、オーガスタさま！」

少しくぐもった、高い女性の声だった。柱の影から現れた彼女は、私の側仕えの侍女、ベルイヤールだ。私が幼い頃からずっと仕えてくれている女性で、毎日顔を合わせる人間の一人、でもある。歳も近いため、人見知りをする私にしては珍しく、割と何でも話すことのできる希有な存在だ。

「陛下、兵団が出立前にご挨拶をしたいと申しております。訓練所のほうへ足を運んでやってくださいませ」

「あ……ええ、わかりました。今行きます」

出立にはまだまだ時間があるというのに、せっかちな兵隊だ。できることなら避けて通りたいその『ご挨拶』を思い浮べ、私はため息をついた。というのも『ご挨拶』の際には、自分も何か兵に向かつて奨励の言葉をかけてあげなければならぬからだ。地平線の果てまで並んでいそうな兵の群れの前に立ち、私は一人で喋らなくてはならない。心臓は張り裂けそうなほど高鳴っているし、気が重たくて仕方ない。私は本当に、そういったものが苦手なのだ。オーガスタがそれを横目に嬉しそうにしているのが憎らしい。

「陛下。その間、私は外の様子を見てきても宜しいですか？ この間城下でおきた魔法使いによる放火事件が気になるので」

私が眉をびくりと動かしただけで、彼は気づいているだろう。私の不信感を買うことを知っていながら、しかしオーガスタは平気で口にするのだ。放火事件のことは知っていた。それをオーガスタに視察してきてほしいと思っていたことも事実である。ただ、自分が命令する前に勝手に動くこととする彼の態度が、私は嫌いだ。た。

「……兵を、つけさせましょう。ベルイヤール、彼に誰かつき人を」
「ありがとうございます、陛下」

頭を軽く下げてみせるオーガスタから、私は視線を逸らした。つき人などというのは表向きの名目にすぎない。オーガスタがどこかへ出かけるときには、例えそれが国務であっても監視をつける。拒否することはできない。それは私も彼も承知の上で結んだ、いわば二人の契約なのだ。

私はオーガスタを信用していない。

どんなに優しい言葉をかけてきても、どんなに私の政務を助けてくれても、それはもうこれから先、ずっと変わらない。

私は王だ。この国　カラアを背負う唯一人の王。民からもてはやされ、議会に期待を寄せられ、臣下に忠誠を誓われる存在。

王が臣下を疑うなど、普通は有り得ないことなのだろうか？

だが、私は彼を疑わずにはいられない。いや、オーガスタだけでは。私に接するすべての人間が、私に牙を向けないという保障が

どこにある。誰も、信用できない。

「そういう人間なのよ……私は……」

自嘲して呟くと、とてつもなく寂しくなる。

ベルイヤールに連れ立って訓練所に向かう私を、オーガスタは遠目に見ていた。いつもそうだ。いつもそう、本当は彼に監視されているのは、私のほうなのだ……。

宵の月も出はじめて間もない頃、私はようやく一日のスケジュールを終え、部屋に戻ろうとしていた。

広い回廊が、今日は殊更広く感じる。ほとんどの兵が訓練でいなくなったことで、城内は静かな空気に包まれていた。普段ならばこの時間帯は、鎧をガチャガチャ言わせながら廊下を闊歩する兵たちでごった返すはずなのだ。外を見れば、城下町の活気ある灯りが光の洪水となつてあふれている。まるで城内の暗さを際立たせるために光っているかのようだ。

「湯浴みの用意は整っておりますゆえ、今日は早めにお休みになってください」

私がぼんやり外を眺めていたせいだろうか。隣を歩いていたベルイヤールが少し強い口調で言った。

そんな静かな城内に、何やら喧騒が聞こえて、ふと立ち止まる。誰かが言い争っているという感じではない。大勢が各々独り言を言っているような、とりとめのない話し声の羅列だ。

「何かしら……」

「少しここでお待ちになってください」

私が訝しげに首を傾げると、返事も聞かずに、ベルイヤールは小走りに声のするほうへ走っていった。王の安全を守るため、彼らほんな些細な出来事にも慎重になる。要するに、何事も私の命が最優先というわけだ。だが、私にはこの喧騒がそんな大袈裟なものだとはとても思えなかった。

「ベルイヤール、どうしたのですか？」

追いかけてきた私に、侍女は少しばかり難色を示したようだった。

「申し訳ございません、陛下。何やら外で騒ぎが……」

彼女が姿勢を正すのとほとんど時を同じくして、遠くから侍女が大声を上げながら駆けて来た。

「陛下、こちらにいらっしやいましたか！」

「どうしたのですか？ 一体何が……」

よほど切羽詰った顔をしていたのだろう。彼女は私の心配をほどくように、やわらかく微笑んで見せた。

「それが、城内に賊が入りこんだと……報告がありました」

「侵入者が出たということね？」

すかさずベルイヤーが緊張した面持ちで確認する。

「ええ、ベルイヤー。何分状況が把握できていないものだから、キングーニヤ侍女長さまは侍女全員に招集をかけたわ。広間に集まれという命令よ」

「では、陛下も一緒に……！」

しかし、私はベルイヤーたちとともに歩ける自信がなかった。足元が揺れている。ここから一步、踏み出すことは予想以上に困難だ。「私のことは気にせず、先に行ってください。二階の広間でしよう？ 私もすぐに向かいます」

それを感じかねないように、精一杯微笑んだ。

「しかし、そのようなわけには……！ 陛下をお守りすることが私たちの最優先事項です」

「私なら大丈夫。それより、早く侍女長たちと合流して、現状をまとめて報告してちょうだい」

躊躇しているベルイヤーに、強く頷く。

「……それでは、申し訳ありません、陛下」

丁寧に一礼し、二人の侍女は足早に駆けていった。

侵入者、という単語を私は頭の中で反芻させた。

いつも恐怖は、思いがけないところから突然私に襲いかかってくる。私が恐れていたものが来たのかもしれない。違うかもしれない。オ

「ガスタが手引きしたのかもしれない。違つかもしれない。震える足元が白くぼやけているのに気づき、私は慌てて頬を叩いた。こんなところで気を失うわけにはいかない。深呼吸をして、震える足を前に出してみる。」

一刻も早く、私も安全な場所へ逃げなくては

「集合かかったぜ！ 城に残ってる兵士は、持ち場がある奴以外全員広間に集まれとさ！」

ひと際明るい声が聞こえて、はつとした。駆けていく三人の兵士の姿が見え、私は咄嗟にそれを追いかけた。

「おつ、何、仕事？ 警戒態勢！？ ヤバくない？」

「大魔法を盗みに来たバカがいたらしいよ」

若い兵があっけらかんと言い、鼻で笑った。

「何で大魔法を盗みに来たってわかるわけ？」

「いや、おれも詳しくは知らないんだけどさ。何か侵入者が大声で

『大魔法を頂きに来た！』とか言ってたらしい」

「うわ、救いようのないバカ……」

軽い会話の流れには、少しの危機感も感じられなかった。彼らの話を聞いていると、徐々に、私の恐怖も和らいでいくのがわかる。このような非常事態に、と普通は怒るところなのだろうか。しかし私は何も言わず、こっそり彼らの後を追いかけた。

「だからあんま警戒ないみたいよ、今回。兵団ほとんど留守だから、まともに動けるのおれらだけじゃん？ でもそんな馬鹿泥棒一人相手なら、楽勝で捕まるだろって話でさ。銀の騎士もお役御免だし」

「銀の騎士は気味悪いからな。なるべくなら出てきてほしくないし、それはそれでよかったよ」

「でもさあ、そもそも大魔法って何なんだろうねー」

女性のように細い兵士が人差し指を立てて見せた。

「おれが聞いた話ではさ、何でも世界を焼き尽くす炎が出せるとか」

「えー、ぼくは人の心を読むことができるって聞いたよ？」

「いやいや、その実体は、手を触れたものがすべて食べ物になると

「いう素敵魔法なのさ！」

小太りの兵士が満足げに体を仰け反り、彼は両脇から同時に突つこみを入れられた。

大魔法は、王家の血筋に代々継がれる禁断の魔法だ。その正体は、それを唯一使用できる王と、製作者の末裔である大魔法使いしか知らない。誰かが正体を知れば、盗みに来る。誰かの手に渡れば悪用される。だから、王は大魔法を自らの体に保管する役目があるのだ。カラアの長い歴史をたどれば、そうやってこの国がどれだけ必死に大魔法を守り抜いてきたかがわかる。だが、王は保管することはできても守ることはできない。

大魔法を守るため王に仕えるカラアの護り手　大魔法使い。

その血族は、遙か昔、それはもう神話に届きそうな頃、大魔法を創りカラアを別の次元に移した。恐ろしいほどの強大な力を持つ、恐らく世界一の魔法の使い手。彼らは王を守り、大魔法を守る。いつの時代も、王と大魔法使いは二人三脚で大魔法を守ってきた。そう、他者から見れば、今の私とオーガスタもそういうことになるのだろうか。うわべだけを見れば……。

気づいたときにはもう、前を走っていた兵士たちの姿はなかった。早く広間に向かおう。侵入者がいるとなれば、城内といえど油断はできない。引潮が満ちてくるように、不安が舞い戻ってきた。侵入者がいるのだ。その事実だけで、この身は震え、意識が薄れていく。私は急いで階段を下りた。

「魔法が消えた　　！」

悲鳴が聞こえ、私はそれが何を意味するのかわからぬまま、突然広がった真つ暗な世界に立ち尽くした。

第四章 二

いつもは広い室内が、今ばかりは窮屈に感じられる。広間は城中の侍女と、訓練に参加しなかった数人の兵士ですし詰め状態となっていた。中央のテーブルには心もとないカンテラが十個、暗闇の中にぼんやり淡い光を放っている。

私がここにたどり着けたのは、私の身を案じて迎えに来てくれた侍女数名のおかげである。彼女たちがカンテラを手に駆けつけてくれなければ、私は暗闇の中、今も恐怖に身を震わせていたに違いない。「侍女長さま！ 侍女全員揃いました！」

年配の侍女が老婆とも言える女性　侍女長に報告をしている。私は隅の椅子に腰掛けながら、じつと彼らの様子を窺い見ている。

私の姿を見つけると、オーガスタがすかさず駆け寄ってきた。放火事件の経過を聞いたかったが、今はそれどころではない。

「話は聞いたか？」

「ええ……」

臣下の報告は以下の通り。夕刻を過ぎた頃、何者かが宝物庫に忍びこもうとしているのを目撃した兵士がいた。倉庫番だった彼は不審者を捕らえようと、しかし返り討ちに遭い鍵を奪われた。

「けれど、彼が目を覚ましたとき、宝物庫の中は物色された形跡はあれども、盗まれたものはなかった……」

「そう、お目当ては国宝の剣でも、盾でも、美しい宝石でもなかったわけだ」

とてつもなく広く頑丈な警備を布いている宝物庫に、見張りが一人しかいないなどということは、普段ならば到底有り得ない。恐らく犯人は、兵団が今日の夕方からいなくなることを知っていて、その時間帯を狙ってきたのだろう。しかしせっかくうまく城へ入れたというのに、彼は金銀財宝には興味がないらしい。

本当に大魔法を狙っているのだろうか。私は侵入者を笑い飛ばして

やりたくなつた。

「今日は多くの兵団が外に出払っていますし、近衛隊もおりません。今動けるのは私たちだけです。よろしいですか？ 我々が命をかけて国王陛下をお守りするのです」

侍女長が沈痛な面持ちで声を出した。今城の中で動けるのは、この広間に集まつた人間だけなのだ。数だけを見れば大したものだが、その九十%は非力な侍女たちである。戦力になるとはとも思えない。先ほど廊下で見かけた三人の兵もいるが、彼らは訓練に参加できなかつた落ちこぼれ組である。

近衛隊は本来ならば王の側に残るべきなのだが、今回は私が彼らを訓練に行かせた。近衛の一人であるオーガスタがいれば、日常の護衛はこと足りる。何より私は四六時中見張られているという空気から、一時的にでも逃れてみたかつたのだ。それと時を同じくしてこのような事態が起こつたことは、とてつもなくタイミングが悪かつたとしか言いようがない。

つきましては、と侍女長はわざと言葉を切つて、その男に視線を移した。

「大魔法使いさまのご意見を伺いたい」

広間の中で唯一の戦力と言つても過言ではないかもしれないオーガスタは、緊張感のない微笑を浮かべた。

「魔法の火を消すとは、犯人はよく城のことを調べているね」

魔法の火、とは夜になると城内をくまなく照らす照明だ。日が落ち、室内が外より暗くなると、壁という壁に一定間隔ではりめぐらされた筒の中に、自動的に火が灯る。普段は自動だが、城の西には遙か昔に大魔法使いが造つた管制塔があり、そこから手動で灯りの消灯点灯をすることができ。一説では初代大魔法使いが永遠に続く魔法をかけたという話だが、そんな魔法が存在するとは思えない。管制塔の詳しいメカニズムは未だ解明されていないのである。

「管制塔へ行つてみたが、私の呼びかけには応えない。自動的な復旧を待つしかなさそうだ」

「侵入者は管制塔を壊したのですか？」

私はすかさず問うた。

「それに近いことをしたのだろうけど、そんなに簡単に壊れるようなものではないから大丈夫だ」

「では、大魔法使いさまの魔法で火を再度灯して頂けますか？」

のんびりしたオーガスタの受け答えに苛立ってきたのか、侍女長の口調は先ほどより早くなっていった。

「私が今一時的に火を灯すことは容易いが、少々精神力を使うね、こつという魔法は」

持続させる魔法というのは、使い手の精神をひどく消耗させる。国内一の魔法の使い手ともてはやされるオーガスタでさえ、その例には漏れない。

「つまり、その間に何かあったら……」

誰かが生唾を飲みこむ音が聞こえた。

「私は動けない、というわけだ」

静寂が落ちる。しんとした室内にオーガスタの声だけが重苦しく響いて、私は息を呑んだ。

あまりに広範囲な持続魔法をかけている間は、それに精神を集中させているため、他のことができなくなってしまう。だがオーガスタが動けなくなるというのは、今日のこの面子を見た限り、あまりにも不安だ。

「侵入者の居場所はわかっている。今は東の塔だ」

おお、と誰かが大仰に声を上げた。

城に魔法をかければ、城内にいる人間の居場所の特定はできる。侵入者を捜せ、と城壁に呼びかけるのだ。普通の魔法使いなら首を真横に振るような、広い敷地全部に魔法をかけるなどということも、この男にはいとも簡単にできる。

「ならば早く移動魔法で東の塔へ飛んできたらいかがですか？」

ここにいつまでも籠っているわけにはいかんでしよう。お強い力をお持ちの大魔法使いさまならば、侵入者一人捕まえることなど魔法

で容易くできるのではないのですか？」

黙って頼杖をついていた年老いた文官が、不機嫌を前面に出した物言いで言った。何もできない人間ほど、こういう状況下でよく吼えるものだ。

「移動魔法はひどく疲れるから……あまり使いたくはない。もしものときに魔法が使えなくなったら問題だろう？」

もしものとき、という一言が重く押し掛かる。広間にいる全員が同じように思ったのか、気落ちした表情を浮かべた。

「大魔法使いさまは、何かあったときのためにここに残って陛下を守って頂くのが最良でしょう」

静かに頷く侍女長にオーガスタは目配せをした。

「そうだね。私は一人で勝手に出歩けない身であることだし」

私はどきりとして、その男の後ろ姿を見つめた。皮肉だろうか。私が彼を監視していることを、遠回しに嫌悪しているのだろうか。

「何で出歩けないんですか？」

「あんな新人だから知らないのね。オーガスタさまは、本当は……」
侍女たちのひそやかな話し声が聞こえて、私は思わず立ち上がった。ガタン、椅子が音を出すくらい勢いがあった。全員の視線が一斉に私に集中する。その中にオーガスタの冷めた視線を見つけ、私は言葉を失い立ち尽くす。

「ご命令を、陛下」

オーガスタは、恭しく頭を垂れた。冷え切っていたように見えた彼の瞳は、むしろ温かさに満ちていた。その微笑に悔しくとも私は落ち着きを取り戻す。

「とにかく、ここにいる兵士と数人の侍女は東の塔へ向かい、侵入者の確保を急いでください。残った者は城内の見回り、それから宝物庫や管制塔の見張りを強化してください」

敬礼の後、止まっていた時間が動き出したかのように、広間の中は慌しくなった。少ないカンテラをどう使うか、というところが一番の問題だったが、侍女の中に多少なりとも魔法の経験を積んだ者が

いたことが救いだつた。彼女たちは自らの手のひらに炎の玉を作り出し、何とかそれを持続させた。火を灯している侍女は、その間精神を集中させなくてはならないから、もう一人の侍女とペアになり、灯り役と見張り役で分担することにしたようだ。

ぞろぞろと人の波が消え、途端に広間はまた静けさを取り戻した。もちろん私は広間に残つた。ここにいるのは、私とオーガスタ、ベルイヤー、そして数人の侍女と文官だけである。残されたカンテラは二つ。人がいなくなつて広く感じるはずの広間も、灯りの範囲が小さくなつたことで、更に狭くなつたような錯覚さえ覚える。

と、突然広間の扉が開いた。扉の前を見張っていた侍女たちが駆けこんできたのだ。

「な、何か、何か……」

二人の侍女は、涙声であたふたと辺りを見回した。まるで幽霊でも見た子どものような怯え方だ。

「どうしたのですか？ 落ち着きなさい」

呂律が回らなくなっている侍女の肩を、私はなだめるようにさすつてやった。本当は何が起こつたのか理解できず怯える自分もいるのだが、自分以上に慌てている人間を目にすると、割と冷静になれるものだ。

「くっ、黒いものがザザザ　って！　ザザザーって！」

「いっぱい動いてあっちに行つたんです　　！」

彼女たちがジエスチャー混じりに説明するも、それは到底私には解読できそうにもなかつた。

「ぎゅ、ぎゅぎゅー……？」

何を見たのかはわからないが、その擬音が不可解すぎることは充分すぎるほど伝わる。侵入者は東の塔にいるという。だとしたら、それは侵入者とは関係のない生き物だろうか。虫や、ねずみ、はたまた幽霊が……。そこまで考えて、私は自分の頬を叩いた。

私が息を詰まらせていることに気づいたのか、オーガスタが背中を軽く叩いた。

「私が見てこよう」

扉へ手をかけるオーガスタの衣服の裾を、咄嗟に掴む。

「ま、待ちなさい、オーガスタ！」

オーガスタは驚いたようだったが、やがて微笑んで問うた。

「……宜しいですか？ 国王陛下」

先に許可を得てから行動して欲しいものだ。その言葉を、私は無理矢理呑みこんだ。

「わ、私も行きます。あなたを一人にするわけにはいきませんからこの暗闇に乗じて、オーガスタが何かを企まないとも知れない。いや、もしかしたら侵入者が大魔法を奪いに来たというのはカムフラージュで、実際はオーガスタの仲間かもしれぬ。私は沸々と沸きあがってくる疑念に身を任せ、彼を掴む手に力をこめた。

真剣な瞳で見つめると、オーガスタは一考する間もなくすぐに私の手を取った。

「でしたら私も！」

「陛下が行かれるのなら私も！」

「というか陛下はお残りください！」

侍女たちの申し出はありがたかったが、大勢で歩き回っても利になることはない。私はベルイヤールだけを共に連れ、オーガスタの後に続いて外に出た。

轟音が聞こえ、私は身を縮ませた。それはベルイヤールも同様だったから、私たちは手を握り、身を寄せ合って、そろそろと歩いた。

「大丈夫。ただの風だ」

オーガスタだけは平然と言い払い、カンテラを手にさくさくと先に進んでいる。

「私、お化け屋敷とか苦手です……」

「私もよ、ベルイヤール。おかしなのはあの男です」

「あまり嬉しい褒め言葉ではないね」

びくびくしながら背後を歩く私たちに背を向けたまま、オーガスタは声を出して笑った。

しかし、扉の付近を一周してみるも、侍女たちの言っていた『黒いもの』はとうとう見つからなかった。

「風の音と、木の葉の影を見紛ったのかもしれないね」

ベルイヤールはほっとしたようで、広間に戻る頃には笑みを浮かべる余裕さえできていた。私もそれに感化され、意志とは無関係に、顔がほころぶ。

刹那　首元に冷やりとした感触が走る。

私が背後に人気を感じたのは、それから数秒後。東の塔へ向かったはずの兵が何かを喚き駆けてくるのは更に後で、それよりも先に、オーガスタの私を呼ぶ声が聞こえた。そしてベルイヤールの、悲鳴も。

第四章 三

「リラ！」

「動くな！ 少しでも動いたら、お前たちの王は死ぬぞ」

オーガスタの声に呼応するように、耳の後ろから怒声が飛んだ。私の体を掴んで離さない背後の人物が、首元に当てているのが刃物であることを、私はもうわかっていた。あまりにひんやりしているそれは、私の体温をすべて奪っていくかのように地肌を吸いつく。

「へ、いか……」

ベルイヤールが咄嗟に手を伸ばしたが、刃物を見止めると体内の時間が止まったように動かなくなってしまった。

「そこにいるのは大魔法使いだな。移動魔法でもしてみろ。お前がおれの背後に回った瞬間、すぐに首をかき切るからな！」

さすがのオーガスタも、こうまで言われたら動けない。背後のこの男、大魔法使いのことも移動魔法のことも知っているとは、魔法使いだろうか。恐らくそうだ。オーガスタなら、移動魔法など使わずとも、刃物に魔法をかけて弾き落せばことはすむ。だがそれをしないということは、男が魔法使いで、オーガスタが魔法をかけてもすぐに刀が主人の手元に戻ることを知っているからだ。

ああ、だがそんなことはどうでもいいのだ。やはり大魔法を奪うというのはカムフラージュだったのだ。ついにこの日がやってきた。私を殺しにやって来たのだ。

怖い、怖い、怖い

背後の男は私を捕らえたままじりじりと後退し、ある程度オーガスタたちと距離をとると、踵を返して走り出した。私は引きずられるようにして走った。抵抗する、などという考えは起こらなかった。思考が麻痺したような感覚が、長く、長く続いた。

どれくらい走ったのだろうか。

腕に鈍い痛みを感じて、顔を上げる。私は後ろ手にきつく縛られていた。その現実には言いようのない不安と恐怖を感じ、気を失いそうな激しい眩暈に襲われた。思わずその場にへたりこむも、男は何も言わず、じつと私を見下ろすだけだ。目元以外はマスクで覆っているため、顔はわからない。その姿も、今は私の恐怖を煽る材料にしかならない。

「……あ、あなたは……旧女王派なのですか？」

恐る恐る、口を開く。語尾は震えて、上手く声にならなかった。

「旧女王派？ 何だ、それは」

予想外の返答だった。旧女王派を知らない。旧女王派ではない。私を殺しに来たのではないのだろうか。では刃物を突き出して私の命を脅かす、この男は一体何なのだ。

「っ……」

再度喉元に刃物を当てられ、私は血の気が引いていくのを感じた。身体の震えが止まらない。

「答える」

恐怖で、もはや声も出なかった。人は本当の窮地に陥ったとき、叫ぶことすらできなくなる。

「大魔法はどこにある？ 宝物庫にはなかったようだが」

「……し、りません」

本当に知らない。私は恐怖の中に入り混じる、自嘲したい気持ちを懸命にこらえた。

「嘘をつけ。大魔法は国王が持っている、誰もが言っている」

大魔法は王の体内にある。それ自体に実体はなく、手渡せるものでもない。

「……あなたは、私を殺しに来たのではないのですか？」

「おれは大魔法が欲しいだけだ。お前を殺す気はねえよ」

この侵入者は、本当に大魔法を奪うことを目的として城に乗りこんだのだ。旧女王派ではなかった。未だ緊張した状況下にあるものの、私は胸がすく思いで安堵のため息を漏らした。

ようやく状況を把握する余裕が生まれた。灯りはなかったが、月の光が射していたため、慣れればそれほど暗闇でもない。窓の外に浮かぶ月は思いのほか近かった。ここは恐らく東の塔の最上階である。塔へ向かった兵たちが侵入者を捕らえるのは、思いのほか簡単だったのだろう。それで、油断した。男は彼らの手を逃れ、ちょうど広間を出ていた私の姿を見つけ、今に至る。多少は違うかもしれないが、大体の成り行きはそんなところだろう。

月の光が男の横顔を照らしつけ、私は思わず、あ、と口に出してしまった。

何故、気づかなかったのだろう。高いトーンを無理に低く装った声。私よりも低い身長、幼い相貌。

「女……の子？」

暗闇では見分けることは難しいかもしれない。だが、マスクをしていても、その輪郭や身体の曲線はわかる。目を凝らせば、確かに目の前の侵入者は少女であった。

「……女で悪いかよ」

もはや隠す意味もないと悟ったのか、少女は黒いマスクを脱ぎ捨てた。

「何故、大魔法が欲しいのですか？」

まだ年端も行かぬ少女が、危険を冒してまで城に乗りこみ、大魔法を狙う理由が私には見当もつかない。

「おいおい、王さま。あんた全然状況がわかってねえのな。質問してるのはおれなんだぜ」

「答えてくれたら、大魔法の在りかを教えてあげます」

私は自分でも驚くくらい、自然に微笑んだ。年下の少女とわかったからだろうか。先ほどまでの恐怖はすっかり消えてなくなっていた。

「……嘘じゃ、ねえだろな」

「ええ」

少女は私を舐め回すように見つめ、どこか釈然としない表情でため息をついた。

「つい先日、おれの両親が死んだんだ。うちには代々受け継いできた大きな農園と屋敷があつて、それを守ることだけがおれたちの生き甲斐だった。だけど一月前、近くの町の領主が屋敷の権利書を偽造して、屋敷を奪いやがった。……両親はそれを苦に自殺したんだ」少女は眉一つ動かさず、ずっと一点を見つめながら話した。この年頃に両親を喪うことは、とても辛く哀しいものだ。私も、彼女よりずっと幼い頃に両親を亡くしているから、その気持ちは痛いほどわかる。

「おれはあいつらに復讐してやりたい。だけど、屋敷に忍びこんであいつを殺したら、おれは絶対に捕まって死刑にされる。おれがいなくなったら、今度は弟たちがきつとひどい目に合わされる。だけど、大魔法があれば何だってできる。誰にも気づかれずにあいつを殺せる！ あの糞野郎をぶち殺して、父さんたちの仇を討つんだ！」もし仮にそれを手にすることができたとして、それを使えるのは国王だけだということをおの者は知らないのだ。何て浅はかな　口に出しかけて、私は思いとどまった。

殺したいほど憎い人間がいる。まるであの頃の自分を見ているかのようではないか。ふ、と私は口元を緩めた。

「けれど、このままだとあなたは国に対する反逆罪で捕まりますよ」「大魔法を手に入れたら、それを使って逃げるさ」

気丈に答える少女の瞳には、明るい未来しか映っていない。無鉄砲ともとれる計画は歳相応と考えるべきなのだろう。しかしそれはあまりにも幼すぎる。現実をもっと残酷で、少女にすら容赦のない仕打ちを与えるというのに。

「あなたは愚かですね。大魔法なんて、国王がでっち上げた嘘かもしれないのに。そんなもののためにあなたは自分の人生を投げ捨てたのです」

一息に言つと、少女は怒りを剥き出しにして私に掴みかかった。

「嘘なはずがないだろ！」

自由のない体をいきなり上に持ち上げられて、私は低く呻いた。私

の苦悶の表情に気づいたのか、少女はすぐに手を放し、ばつの悪そうな顔をした。

「考えても見なさい。今まで、誰かが大魔法を使ったところを見たことのある者がいますか？ それを記述した歴史書がありますか？」
大魔法が本当はないなんて、即席の嘘だ。大魔法がなければ、国をここまで隔離して守ることに意味はない。だが、未だかつて大魔法が使われた経歴がないというのは、本当である。

「……そんな、馬鹿な……。嘘だろ！？ あんたが、それを持って
いるんだろ！？」

私は何も答えなかった。少女はよろよろと後退し、

「そんな……」

崩れ落ちるように腰を落とした。

「おれ、どうなるんだ？」

先ほどまでの明るい色は、その瞳の中から消え去っていた。代わりに、わずかな恐怖がそこに見え隠れする。

「だから愚かだと言うのです。投獄されればわかります。地下へ閉じこめられて、未来永劫日の目を見ることなく朽ち果て……銀の騎士として生きることになりましょう」

「銀の騎士……？」

「自らに魔法をかけ、自身の記憶と意思を完全に消し去り、死ぬまでカラアのために働く囚人たちです。そういう恐ろしい魔法が、負の遺産としてこの国にはたくさん残っているのですよ」

感情の含まれない平坦な口調で連ねると、少女は固まったまま動かなくなっていた。

銀の騎士は、恐ろしい魔法だ。王の命令にのみ従う、最強の兵器。

そう、囚人は己の肉体をカラアに捧げ、心持ため兵器として生まれ変わる。しかし彼らは命令に絶対服従ではあるものの、意思がないため、扱いにくい。人の多い戦場に出れば敵と味方の区別もつけられない。殺せと命じればその者が住む村ごと焼き尽くす。

できることなら使いたくはない。人でありながら人でないものに変

化した彼らが恐ろしい。けれどももっと恐ろしいのは 彼らに平気で命令を下せる自分だ。
黙ったままの少女を見やり、私は静かに目を伏せた。

「いいいいいやああ！ オーガスタさまあ！」

間抜けにも捕獲してきた侵入者に逃げられ、拳闘王を人質に取られた兵と侍女たちが、一斉に悲鳴を上げた。しがみつく彼らを引き剥がし、オーガスタは通りをそっと覗く。

「ザザザって動きました、今！ 黒いの、黒い塊がいっぱい！」

「少し静かにしていなさい」

オーガスタがたしなめるように言うも、騒々しい悲鳴は止まぬようであった。

黒い物体が流れるように通りを抜けていったのを、確かに全員が目撃した。もう幻でもなければ幽霊でもない。

オーガスタがそっと柱の影から顔を出した瞬間

小気味よい音とともに、彼の顔面に何かが直撃した。紙で作ったおもちゃの剣だ。

「悪い魔法使いめ！ 姉ちゃんを返せ！」

黒い塊の正体 黒マントを羽織った少年が三人、口々に喚きたてながら、オーガスタを力の限り殴りつけている。殴るといつてもまだ五、六歳程度の少年たちだ。ぽかぽか叩いていると言ったほうが正しい。

「いたた……」

それでも勢いもって何度も叩かれれば多少のダメージにはなるらしく、オーガスタは困ったような顔で己の身をかばった。

「おつ、オーガスタさまに何てことを！ この方は偉大な大魔法使いさまですよ！」

ベルイヤールが少年たちを見下ろして、一喝した。彼らはその剣幕

に驚いたのか、一瞬たじろいで、しかしまたすぐに攻撃を再開した。
「いいんだ、怒らないであげて」

目配せするオーガスタに、ベルイヤールは不満そうにして少年たちを無言で睨みつけた。

「さつき姉ちゃんを兵士が引きずっていくのを見たんだ！」

「東の塔から？」

オーガスタはそっと囁くように、優しく言った。

「だけどその後、彼女は兵たちの手を逃れて、うちの大事な王さまを人質に逃げたんだよ」

「えっ、そうなの？」

少年たちは目を丸くして、攻撃の手を止めた。

「でも、また塔に戻ったみたいだから……そのお姉ちゃんのところへ、一緒に行こう」

微笑んで彼らの手を取ると、オーガスタの姿はゆっくり暗闇に沈み、次の瞬間には消えてなくなった。

後に取り残された兵士たちは、ぼんやりと、彼らが煙のように消えた空間を見つめていた。

第四章 四

少女は何も言わず、私の捕縛を解いた。

「いいんだ、もう……どうせ捕まるんなら、早くしてくれよ」

打ちひしがれた少女の瞳に、私は良心が痛むのを感じた。本来ならば城に乗りこみ大魔法を狙うなど、とんでもない反逆罪だ。だが、私は彼女を罰する気も、銀の騎士にする気もなかった。これだから王として甘いのだ……。そうは思うが、自分の性格を曲げてまで彼女を罰することに意味があるとは思えなかった。

「嘘よ」

「え？」

少女は力ない視線をこちらに向けた。

「先ほどの話は嘘よ。大魔法は確かにある……けれど大魔法は、王の肉体そのものだから形を持たない。大魔法を保管し、唯一使用することができるのは王だけなのよ」

一息に言うと、少女は一瞬驚いたような表情を見せたが、更にそれを曇らせた。

「あんたしか使えないのか……」

「ええ」

「じゃあ、どっちにしろ無駄足だったな……」

自嘲するように、少女は笑った。

「領主を殺して、その後どうするつもりだったの」

問い詰めるように身を寄せると、少女は目を丸くした。人質だった女が急に自分から近づいてくれば、それは予想外な展開に違いない。

「その後……？ 普通に弟たちと暮らすさ。親父たちの残してくれた屋敷で……」

「だけど、あなたはきつと思い出すわ。人を殺したことを……それは一生あなたにつきまとい、決して消えることはない」

彼女のすべてを一蹴するつもりで私は言った。

「そんなことない！ おれは、おれはあいつを殺せば、それで

「それで、終わりではないの。殺して、そこですべてが終わるわけではない。明日も明後日も日は昇るし、世界はいつも通りに動くのよ。その中で、あなたは生きていかなければならないの。罪の意識をまとったまま、生きていかななくてはならないのよ」

その苦しさを、私はよく知っている。罪を犯した人間がどうなるのか、いや、どうやってその後を生きていかななくてはならないのか。犯した直後からはじまる、とてつもなく長い悪夢との闘い、呵責、苦痛。すべての悪意は自分に向けられ、犯した罪の重さだけ、それは容赦なく還ってくる。

「でも、おれは……」

私が急に大声を出したからだろうか。少女は、途端に顔を歪めてへたりこんだ。

「おれ、怖いよ……」

がんと、頭に釘を打ちつけるような痛みを感じる。少女の絶望する顔を見ていると、嫌な思い出があふれ出してくるようだ。城に忍びこんだ理由を聞いたときから思っていた。あまりにも私に似すぎているのだ、この少女は。

「私も怖いわ。さっきだって、誰かが私を殺しに来たと考えて恐ろしくてたまらなかった」

そのせいだろうか。言いたくないことまで、勝手に口を突いて出る。「王さまを殺しに来る馬鹿なんていないだろ。王さまがいなくなったらカラアは駄目になっちゃうから」

そんなことはない。何故なら私は……

「でも、私は大魔法を持っていないの」

「何で……？ 王さまが持つてるんだろ？」

ぽかんと口を開ける少女を、私は眉をひそめて見ていた。

「私は王じゃないの」

馬鹿みたいだ。何故、自分から弱みを見せる。やめろ、言うな。頭

のどこかで声がするも、それに反抗するように、一向に私の口は止まらない。

「だって、リラ・コスモレドさまは王さまだ、ってみんな言ってるぜ」

「そうね……。だけど、私は王にはなれなかったの……」
苦しげに呟くと、少女が心配そうに私の顔を覗きこんだ。いつの間にか、私のほうが彼女よりも沈んでいた。

「あなたは逃げなさい。そう、東の塔なら、確かここに……」
きよろきよろ見渡して、壁の端に見覚えのある落書きを見つける。落書きの矢印が薄く指差す場所には、大人の目線では気づかない、誰も目を向けられないような小さなくぼみがあった。近くにあった小石を、そこにはめると、子ども一人が通れるくらいの小さな穴が、何もないはずの壁にぽっかりと開いた。壁を隔てた向こうは外だ。穴からは暗闇に支配された空と、そこにのんびり浮かぶ月が見えるはずなのだ。だが、あるはずのない穴は、塔の造りをまったく無視し、空の中に長く続く抜け道を出現させた。

「姉さんと見つけてよく遊んだ抜け道……よかった、昔のままね。大丈夫、オーガスタも侍女たちも、この抜け道を知っている者はいないわ」

少女は呆気に取られていたが、やがて思い直すように首を横に振った。

「だけど、弟たちを残して行くわけには……！」

「弟を連れて来たの？　なんて」

考えなし。

やはりまだ考えが子どもだ。この少女だってせいぜい高く見ても十三、四　弟はもっと歳の低い、もっと考えなしな子どもであることは想像に難くない。

「私がちゃんと家に帰してあげる。だから心配しないで、早く逃げなさい」

少しだけ焦りを含んだ声で言った。私が東の塔に来てからしばしの

時間が経過した。オーガスタなら、私たちの居場所を魔法で探し出すことなど容易い。彼のことだから、きっと見つければすぐに移動魔法で駆けつけるだろう。彼が来る前に少女を逃がすならば、一刻の猶予も許されない。

「どうしておれを逃がしてくれるんだ？」

何の疑いもなしに、少女は私に感謝の言葉を述べて問うた。何て素直なのだろう。もしかしたら、この抜け道は私が彼女を陥れるための罠かもしれないのに。弟を無事に帰すという保障はどこにもないというのに。

「あなたが私に似ているから。多分……」

自分と同じ道を選ぶうとしているあなたを見ると、腹が立つから。

その言葉を、私は呑みこんだ。それは決して、少女への同情ではない。自分へ対する怒りだ。彼女に言っても意味はない。

「オーガスタがそろそろ来るかもしれないわ」

私は少女を抜け道に押しこんだ。彼女の細身でも少しきつそうだったが、通り抜けられないことはなさそうだ。

「なあ、大魔法使いも銀の騎士なのか？」

顔だけをこちらに向ける少女に、私は思わず微笑んだ。大魔法使いが銀の騎士なんて、どこからそんな発想が出てくるのだろう。

「どうして？」

「だって大魔法使いは、あんたの姉さんを殺したんだろ」

衝撃が、体中を走った。

その話を、他人の口から聞く機会がまだあるとは、思わなかった。もうこんなに時間は経ったというのに、本当に思いがけないところで記憶は舞い戻ってくる。

「……何故、それを……」

私の唇は震え、体温は指先から急速に冷えていった。

「父さんが言ってた。今の大魔法使いは、先代の国王を殺した罪人だって」

罪人。そう、多くの国民にとってオーガスタは忌むべき罪人だ。オーガスタは先代国王殺しの罪で捕らえられ、しかし大魔法使いという不可侵の存在ゆえ、罰することはできなかった。だから、私は彼を軟禁して常に監視状態に置いている。その事件から十年以上経った今では、彼に警戒心を持つ者はほとんどいないが、国民の中には彼を疎ましく思っている者がまだ存在する。

だが、私の知る真実は国民が知るそれとは違う。国民は知らない。姉が何故殺されたのか、本当は誰に殺されたのか、その犯人が今どんな気持ちでいるのか

「だから、怖いんだろ、あんた。自分の姉を殺した人間が側に仕えてるなんて、気味悪いもんな」

「いいえ、それは違うわ……」
祈るように、呟いた。

「私は、私が、怖いの。……自分が、怖いのよ……」

少女が眉根を寄せる。私は彼女の背を優しく押してやった。

「さあ、早く行きなさい。早く……」

少しだけ名残惜しそうにこちらを見つめ、少女は穴の奥に向かって足を動かした。彼女の姿が豆粒くらいになったのを確認し、くぼみにはめた石を外す。小さな音を上げて、穴の開いた壁は何事もなかったように、もとの状態に戻った。

それからオーガスタたちが来るまで、さほど時間はかからなかった。風に乗って、その男は何もないところから現れた。彼にしがみついていたベルイヤーが、きつく閉じていた目を開き、私の姿を見止めると即座に駆け寄ってきた。

「陛下！ ご無事でしたか!？」

「オーガスタ、ベルイヤーも。どうしたのですか？ そんなに慌てて……」

必死の形相に気づかない振りをして、私は平然と言った。

「ど、どうしたって……! リラさま!」

ベルイヤーは泣き出しそうな声を出した。つい先ほどまで、国王

が生きるか死ぬかの瀬戸際にあつたと思つていたのだ。その気持ちはわからないでもない。

「姉ちゃん！」

と、オーガスタの脇から飛び出した三つの黒い影　小さな少年たちが、きよろきよろと辺りを見渡してオーガスタに憤慨した。

「おい、魔法使い！　姉ちゃんがいらないじゃないか！　姉ちゃんはどこだ！」

なるほど、この子たちが例の弟というわけだ。どこか憎めないあどけなさを持った彼らの視線に、私は膝をついて合わせた。

「あなたたちのお姉さんなら、家であなたたちの帰りを待っているのではないかしら」

「え……」

ぼかんとした相貌が三つ、私を見つめる。

「早くお帰りなさい」

私は彼らを門の外まで案内するように侍女に言いつけた。少年たちは考える間もなく、侍女に連れ出つて、外で待つ姉の下へ帰つていった。

「だから、侵入者はどこへ行つてしまつたのか！　搜索しなければなりません！」

息巻く兵士から視線を逸らし、私はため息をついて見せた。

「侵入者？　何のことですか？」

「何のことつて、大魔法を狙つて忍びこんだ不届き者ですよ！」

彼の苛立ちは、聞いていて具合の悪くなるくらい伝わってくる。私は更に深く嘆息した。

「そんなものはいません。夕方からの騒ぎは、城下の子どもたちが城に迷いこみ、管制塔で間違つて火を消してしまつた。それだけのことです」

べらべらと嘘を並べ立てる。そうは言つても半分は嘘ではないのだから、よしとしよう。

「そ、それだけって……宝物庫が荒らされていたし、管制塔だって見張りがいたのに、あんな子どもに入りこめるわけが……」

ここまでではつきり言われると、反撃のしようもないのだろう。兵士は明らかに私の言葉に気圧されていた。よし、もう一押し。

「宝物庫から盗まれたものはありません。それにあの子たちの小さい体なら、見張りに気づかれず管制塔に入れるかもしれないでしょう」

口を突いてよく出るものだ。私は嘘を連ねながら、自分で感心していた。しかしここで、兵士も反撃の一手に出た。

「東の塔から、確かに私たちが侵入者をここまで連れてきました！陛下を人質にとつて、奴が逃げたところまでみなが見ているのですよ！」

喉が一瞬詰まる。東の塔から侵入者を捕らえ、彼らは私の前に現れた。そして次の瞬間、私は少女に刃物を突きつけられていた。あるとき確かに、多くの人間が侵入者の少女を目撃した。

しかしこの兵士、何という目ざとい……。私がどう反論しようか悩んでいると

「もしかしたら、お化けだったのかもしれないよ」

脇からひよっこり顔を出し、オーガスタは楽しそうに笑った。

「おつ、オーガスタさまも見ていたではありませんかっ！陛下の喉元に刃物を当てて逃げる侵入者の姿を！」

捲くし立てる兵士に、オーガスタが鋭い眼光を向ける。微笑んではいるが、その瞳には少しの温かさも感じられない。

「うーん、それが本当だとして、君は明日訓練から帰ってきた軍団長殿にそう報告するのかな？東の塔から侵入者を捕らえてきました。だけど油断していて逃げられ、あまつさえ陛下のお命を危険にさらすような真似までしてしまいました……と」

「あう……」

ついに兵士は万策尽きた。口をモゴモゴ動かしながら固まった彼の背中を、オーガスタが軽快に叩く。

「あれは君が見た幻だったのかもしれないよ？ そう、子どもたちが迷いこんだことに動揺して、君は幻を見たんだ……」

さすが、二枚舌の役者である。いや、もう役者の域は超えた。彼ならばカラアールの詐欺師になれる。

私は、彼が文官と話し終わるのを待って、側に寄った。

「嘘つき」

開口一番、そう言うと、オーガスタは薄く笑った。

「君もね」

「知らないわ。私はあなたほど演技が上手くないもの」

それより、と彼に詰め寄る。それだけでオーガスタは私の意図を理解したようだった。小さく頷く。

「領主が不正に権利書を偽っていたという件、明日から調べさせることになった。あとは地方の役人に任せて、十中八九、彼女たちに土地は戻ってくるを見ていいだろう。明らかかな偽造なら、すぐに見抜けるという話だったよ」

「そう……それはよかったわ」

私は細く息を吐いた。

これで、彼女が領主を殺すなんて馬鹿な真似をしなくて済む。そのために大魔法を盗むなんて突飛な考えも……。

「陛下。湯浴みをなさって、早くお休みください」

寝室の用意やら湯の用意やらをして、急いで駆けて来たのであろう。ベルイヤールはぼさぼさの頭で、エプロンドレスの裾を濡らしていた。普段はそんなことのない肅々とした侍女のそれに、私は驚いてしまった。

「すみません、もう時間も時間なもので……」

視線に気づいたベルイヤールが恥ずかしそうにうつむいた。よく考えれば、侵入者がやって来てからさういぶん時間が経った。一度そう考えると、どっと疲れが押し寄せてくる。

私はオーガスタと別れ、湯に向かった。

着替えて外に出ると、ベルイヤールが壁にもたれかかったまま、こ

つくりこつくりと首を揺らしている姿が目に入った。

「陛下……すみませ……ん。私、何だか眠くて……」

ベルイヤールがとろんとした瞳をしばたいた。眠気を何とかこらえようと必死らしい。私は苦笑して彼女に下がるよう命じた。申し訳なさそうに一礼をして去っていく彼女だったが、足取りもおぼつかないようで、見ているこちらがはらはらした。

「疲れたのでしょうか……」

誰にともなく呟き、私は自室に戻った。寝室護衛の兵が二人、屈強そうな体を反り返していたが、私を見つけると背筋を正して扉を開いてくれた。一人が大きな欠伸をして 同僚に睨みつけられていた。

真っ暗な室内に自分の影だけが細長く伸びる。今夜はベルイヤールがないから、自ら髪に櫛を通さなくてはならない。

ところが、ランプに明かりを点けようと思ったところで、私の意識は急速に遠のきはじめた。

それは尋常でない眠気だった。

「私も、疲れたの……ね……」

足元がふわふわして、気持ちが悪かった。そう、疲れたのだ。こんなに眠くなるほど、疲れたのは初めてだ。

私は何とか寝台にたどり着いた。体を投げ出すように、そこに飛びこむ。もはや毛布を首元に寄せる気力もなかった。

「……………眠い……………」

私は自身の体が欲すまま、深い眠りに落ちていく。

遠のく意識の彼方で、オーガスタのゆったりとした足音を聞いた気がした……。

幕間 - Interval

シルヘットは大好きなかぞくです。

でも、おかあさんではありません。

だったら何なんだよ、って学校のともだちに言われました。

シルヘットは『ようぼ』なんだって教えてもらいました。『ようぼ』
っていうのはおかあさんのかわりの人です。

わたしのおかあさんは、わたしをうんだときに死んでしまったんだ
って。

でも、わたしにはシルヘットがいるのに、ルビーにはかぞくがいま
せん。

だから、こじいんっていう家で、かぞくのいない子どもたちといっ
しょに生活しています。こじいんにはいんちよう先生がいるけど、
あれじゃあおとうさんっていうよりおじいちゃんです。いんちよう
先生はやさしい人だけど、ちょっと耳がとおすぎて話がつうじない
の。

わたしのおかあさんは死んじゃったけど、ルビーは自分のおかあさ
んとおとうさんにすてられた、って言うてました。

だから、わたしはルビーのかぞくになつてあげることになりました。

わたしは女の子だから、おかあさんのかわりになれます。だから、
ルビーの『ようぼ』です。

シルヘットは、ずっとフブリのそばにいるからね、って口ぐせのよ
うに言います。

わたしもずっとルビーのそばにいてあげようと思います。

ずっとずっと、そばにいてあげようと思います。

< 字数が足りず投稿できないのですが、これ以上付け足す気はないので、以下管理人の独り言です。5章までお付き合いください。ありがとうございます。前6章構成となっておりますので、最後までお付き合いいただければ幸いです。>

第五章 一

フブリは、まどろみの中、ひたすらルビーの名を呼び続けていた。その声は頭の中で反響し、いつまでも途切れることはなかった。

「……………」

ふいに、体を揺すられる感覚。

フブリは、重たいまぶたを動かした。

「フブリ！」

耳元の大声に、はつと我に返る。

目の前にツバルの顔が唐突に現れ、ぎよっとする。男は自分の体を抱き締め、苦しげに喉を鳴らしていた。

「ツバル……！？ あれ……わたし……」

慌てて途端に体を離すと、ツバルは目を細くした。

どうやら自分は、ずいぶん長い間気を失っていたようだ。火照った顔を必死に冷ましながら、頭を働かせる。そう、大樹の穴に引きずられるような感覚の後、急に気が遠くなり

「ここが、カラア？」

「多分な」

しかし周囲を見渡すも視界は一面緑に覆われていて、最果ての森と何ら変わりはなかった。

「フブリが寝てる間に、ちよつとそこら辺をうろついてきた」

ずい、と目の前に果実が差し出される。どこから拾ってきたのか、両の手にも余る巨大な果実だった。しかも、まだら模様が点々と染みを作っている。これは、俗に『腐っている』という状態ではなからうか。

クルージュがツバルの料理の腕を酷評していたことを思い出す。

「うまいぞ。食ってみ」

フブリは丁重にそれを辞退した。

「森の外は見てきたの？」

「もうちよつと行くと、町があつたからなく。多分、カラアに来れたと思うぜ」

フブリが捨てた果実を頬張りながら、ツバルが答えた。

立ち上がり少し歩いてみるも、見えるのはやはり木々ばかりで、目新しいものは見つからない。ツバルはかなりの距離を散策してきたのだらう。

見渡す限りでは、ルビーの姿も見当たらなかった。

「ルビー……どこに飛ばされちゃったんだろ……」
悲愴に暮れ、フブリはポツリと呟いた。

クルージュによれば、ひとつところに固まっていなければカラアの別の場所に転送される、という話だった。もし自分と異なる場所にルビーが転送されていたとして、それを捜すことは可能なのだろうか。遠い異国の地で一人きりになってしまった彼の身の安否が、何より気がかりでならない。

「……カラアにいることは確かだから、いずれ見つかるだろ」
ツバルの投げやりな返答に、フブリは複雑な気持ちを感じざるを得ない。大樹の地下でのルビーの行為を、フブリはどうフォローしていいかわからなかった。どう考えても、あのとときのルビーは様子がおかしかった。

けれど、だからといって彼の身を案じないわけがない。ツバルに非はないが、フブリはこの現状でルビーを責める気にもならなかった。
「迷っていたらどうしよう……」

「……さあ、どうかな」
やけに曖昧なツバルの態度に、フブリは胸が痛むのを感じた。しかし何か言おうにも、彼が歩き出してしまったため、フブリはそれに従うしかなかった。

どれくらい歩いたのだろうか。木々の隙間を通り抜けながら道なき道を行く。息が切れ出した頃、ようやく道が開け、日の光が見えてきた。突然飛びこむ明るい世界に思わず目をそばめる。白くぼやける光の奥には、広大な都市が広がっていた。

「……わあ……」

森を突き抜けた先は断崖だった。山頂からの絶景にフブリは胸を踊らせた。

「これが、カラア……」

見下ろすふもとの都市は、小さな農村で育ったフブリに充分すぎる感銘を与えた。遠くにどこまでも広がる土地を見渡せば、恐らく目前のこれも、大国の中の一都市に過ぎないのだからと予想がつく。フブリはしばらく、その景観に目を奪われた。

二人は崖から少し迂回し、山を慎重に下りた。目前に町並みをとらえると、フブリの興奮は更に高まった。

「でっかい……」

それしか出ないようなフブリを横目に見て、ツバルが吹き出した。けれどその目は極めて真剣だ。

「落ちて着けよ、フブリ。ここは、あの『カラア』なんだからな」

フブリはクルージュの話の思い出し、気を引き締めた。理想郷とはかけ離れた国なのだと心中言い聞かせても、目の前の現実はそれとあまりに違いすぎる。夢から覚めるようにと頭を振るが、どうやらこの興奮までは到底抑えられないようだった。

天まで届きそうな高い建物は、隣家との間隔がないくらいぎゆうぎゆうに建っている。道行く人の波は、閉鎖された国だからだろうか、フブリが知らない民族衣装のような服を着ていた。

初めて見る都会の喧騒に、フブリは胸を膨らませて軽快に歩いた。目にする何もかもが新鮮だった。

「お前、人の話聞いてねえだろ……」

目を輝かせ、きよろきよろするフブリを、ツバルは無理矢理路地裏に引っ張った。

「ご、ごめん、ツバル。こういうとこ、私初めてで……」

フブリは彼の言わんとすることを悟り、しどろもどろになりながら弁解した。

「わからないこともねえけどよ……。さ、まずは服をどうにかすっ

か」

「え？ これ、駄目かな」

フブリは、自分の身を確認した。緑を基調とした普段通りの格好だ。「この奴らを見たる？ あの格好してたほうが、目立たねえからな」

どつりで道行く人の視線がこちらに集まるはずだ。自分のいた世界では普通の服も、カラアでは異質な格好に取られてしまつらしい。服は意外と近くにあった。というより、見渡す限り近くの建物はみなファツション関係の店舗だった。通りを歩く足並みも若者が多い。どうやらここは、シヨツピング街のようである。

「つ、ツバル……！ 服が、ガラスの中で浮いている……！」

フブリはガラス張りのディスプレイを指差したまま、動かなくなつた。

シヨールウィンドウに張りついているフブリを、慌ててツバルが引き剥がす。明るい笑顔で近寄ってくる店員は、見慣れぬ異国の服をまとった客に、明らかに不審感を覚えたようだった。その態度には、さすがにはしゃいでいたフブリも緊張を取り戻す。

ツバルは、適当に軽そうな衣服を二着手に取ると、慣れた足取りでカウンターに向かった。カラアの通貨はクルージュから多めに援助してもらっていたため、服を買っても路銀に困ることはないだろう。まだこちらを上目遣いで不審そうに眺める店員だったが、表情をちらとも変えない青年に何も言えないでいるようであった。あくまでしらをきつて堂々としていられるツバルに、フブリは初めて尊敬の念を覚えた。

店の化粧室で着替えると、二人は何事も無かつたかのように外に出た。フブリが大きく息をつく。

「ツバル、すごいね」

「だろ？」

微笑むツバルの服装を改めてまじまじと見て、フブリは吹き出してしまった。

変？ と、くるりと回ってみせる男の姿は、無理に着飾らせられた人形のようなだった。普段が黒を中心とした服装なだけに、明るい色は浮いて見える。

「なっ、なんか似合わない……」

「そう言うツバルは……んん……」

ツバルの視線がじろじろとフブリの体中を這った。

「可愛い！ うん、地元っ子に見えんぜ」

フブリが笑うと、ツバルが思い直すように、腰に手を当てた。

「これからどうするかねえ？」

「ルビーを探さなきゃ」

ついつい浮かれてしまっていた自分を恥じる。ルビーは今も一人、異国の地をさまよっているのだ。これほど広大な土地なら、きっと途方に暮れているに違いない。こんなところでいつもの方向音痴っぷりを発揮されていたら、と思うとフブリは気が気でなかった。

「とりあえず飯でもどうだ？」

ツバルの指差す先には、小さなレストランがあった。提案されて、ようやくフブリは、自分の腹の虫が鳴いていることに気づいた。

「腹が減ってちゃ戦はできない、って言うしな」

「そう言えば私、昨日の夜から何も食べてないや……」

今朝はアリカと大樹に向かい、そのままカリアへ来ることになったため、朝食を口にすることができなかった。それに気づいた瞬間から、ぐうぐう鳴る腹の音が、急に大きくなってきた気がした。

「だからあの果物、食っとけて言ったんだ」

そう言うツバルには賛同できなかった。

レストランに入り、フブリはここでも驚いた。メニューも、食べ物も、テーブルの隙間を縫い、滑るように飛んでいたのだ。皿は、中身などお構いなしというようなスピードで飛んでいたが、不思議と中身がこぼれたり形を崩したりすることはなかった。

「飛んでる……」

あんどりと口を開けて空を見上げているフブリをよそに、ツバルは

服と同様、適当に料理をオーダーしていた。

やがて、自分たちのテーブルにも当たり前のように料理の皿が飛んできた。それを夢中で掻きこむも、フブリにはそれが美味しいのかどうか、いまいちわからなかった。テーブルの上ではランプが踊り、ナプキンは勝手に自分の口元を拭いていたからである。

「魔法ばっかだ……」

店を出たフブリは、疲れ果てた声を出した。

「どこもかしこも、魔法だらけ。魔法の国って言う名前は伊達じゃないね」

見上げる空を、人が歩いている。靴に魔法をかければああいう芸当ができることを、フブリは知っている。しかしあれは靴に大変な負荷がかかるため、不安定で危ないのだ。

「魔法の国は、みんな魔法使いなのかな？」

「いや……そうでもないと思うぜ」

ツバルも空を見上げていた。先ほどまで頭の上を歩いていた人は、もういなくなっていた。もしかしたら靴が壊れて落ちたのかもしれない、とフブリは思った。

「ほら、あいつなんか剣を持ってるだろ」

「あ。本当だ」

路地に立って過ぎ行く人の波を見ると、ちらほらと帯剣をしている人を見かけた。

「そうだよね。魔法は才能だって、ルビー言ってた。どんなに頑張ってもできない人もいるって」

幼い頃、学校で花瓶を割ってしまったとき、ルビーが瞬きする間もなく花瓶をもとの状態に修復させたことを覚えている。思えば、初めて自分が目にした彼の魔法はそれだった。魔法使いなど、その存在すら知らない老人たちがほとんどだった農村では、誰もがその事件に驚いた。村に一つきりの新聞社が、初めて夕刊に号外をつけたのを覚えている。孤児院の院長先生など、腰を抜かして寝こんでしまった。

「ルビーは、自分で魔法を学んだのか？」

「ううん。昔ね、村に立ち寄った魔法使いの人に教えてもらったんだって。私はよく知らないんだけど、そう言えば、いつの間にか使えるようになってたっけ」

淡々と答えるフブリに、ツバルは、ふうん、とだけ漏らした。

「その魔法使い、フブリは見てねえの？」

「私がないときだったの」

いつの間にか、周囲の景色はまったく変わっていた。遠くに潮の引く音が聞こえる。

「海だあ……！」

フブリは感極まって、大きな橋に駆け寄った。目前に広がる青は、どこまでも終わりが無い。沈み繰る夕日の色がそれに混じりあい、ときには相容れぬように反射して、何ともいえない情緒を醸し出していた。

旅をしてきたものの、フブリは海というものを見たことがなかった。知識でしか知らなかったそれに、目を奪われる。心ここにあらずといった様子で、その青さに吸いこまれるように、フラフラと橋の欄干にしがみつく。

なんて、大きいのだろう。

川も湖も、これに比べたら、隕石のかけらのようなものだ。

「こんなところに海があるなんて……」

「港町みたいだな」

自分を気遣ってくれていたのか、しばらく黙っていたツバルが口を開いた。船が一艘、風に帆をはためかせながら、光の波間に消えていくのが見えた。

「綺麗だね……それに、何だか」

フブリは、言葉に詰まった。切ない気持ちがかみ上げてくる。

「何だか……、不思議に、懐かしい。海は、人が生まれた原始の場所なんだよね……」

呟くフブリを、ツバルはどこか寂しそうに見つめていた。

「ごめんね。行こう、ツバル」

ところが、二人はそのまま、歩き続けることができなくなった。橋の向こうから、ツバルの名を呼ぶ男の声が聞こえたのである。一瞬ルビーが自分たちを見つけたのだと思った。しかし、目を凝らせば声の主が、まったくの別人であることはすぐにわかる。ツバルは、その人物を見止めると、肝をつぶしたような顔をして動かなくなった。

「ツバルじゃないか……!？」

男は目を丸くして駆け寄ると、周囲を気にするように見回し、路地裏に二人を押しこんだ。フブリは突然の出来事に、なされるがまま従うしかなかった。

「お前、いつの間に戻ったんだ!？」

男の言葉に、今度はフブリが目を丸くした。

「戻った」？

「俺は、お前が無実だって信じてたんだ。クルージュは生きてるのか？ バレッタさまは……」

「やめる!」

ツバルが、小声だが気迫のこもった声で、男のを止めた。普段のひょうきんなツバルからは想像できない、真剣な瞳に声を呑む。彼が動揺するのを、フブリは初めて目にした。

バレッタという人物はわからないが、クルージュのことは知っている。ツバルの態度から察するに、自分には聞かれない話のようにだ。ツバルが、フブリを背に隠した。すると男が、閉口したまま動かないフブリの存在に、ようやく気づいた。何かを確かめるように、少女を凝視する。

「お前……その子はまさか『例の』……」

それを聞いた瞬間から、フブリの足は走り出していた。

カラアに「戻った」ツバル。

「例の」フブリを捕まえたツバル。

カラアへ自分を導いた「クルージュ」。

何てことだろう。何故ツバルが、ここまでついてきたかが、こんな形でわかるなんて。

もし、彼がカラアの人間だったら？

理由はわからないが、自分を襲った人間たちと共謀して、自分を狙っていたとしたら？

自分を追いつめるためにカラアへ案内した？ クルージュの協力を仰いで？

仮説は、いくらでも湧いて出てきた。もっと冷静になっていればよかった。思い起こせば、確かにルビーの言っていることは的を射ていたのだ。

わかつてはいた。しかし、納得したくはなかった。

ツバルは、大人で、優しく、とても素敵で……。

けれど、ルビーは、いつだって正しかった。

どうしてあるとき、彼を信じてあげられなかったのだろう。

どうしてあるとき、彼を怖いと思ってしまったのだろう。

後悔が、体中を覆いつくした。

「……ルビー………！ ルビー！」

必死で走る彼女の背後に、彼はもう、迫っていた。

「待て！ フブリ！」

ツバルの声に、少女の体が振り向くことは、なかった。

第五章 二

「……波の音……」

自分にしか聞こえないほどの、小さな声だった。

「陛下。もう少ししたら、ここを出ます」

ベルイヤールがノックの返事も待たずに扉を開けた。地につきそうなほど頭を垂れている。

「わかりました」

私は、彼女を振り向こうともしなかった。自分のために宛がわれた無駄な装飾の多い部屋で、ぼんやり窓の外を眺めている。私がもつとこじんまりした質素な部屋を好むことを、主人は知らなかったのだろう。

いや、これが、一国の王に相応しい待遇なのだ。間違っではない。私は、絶え間なく聞こえる波の音に、軽く耳を塞いでみた。即位した直後は、この音が嫌いでたまらなかったことを思い出す。

「ベルイヤール」

部屋を後にしようとする侍女を、呼び止めた。

「私は、いつここを出るのですか？」

ベルイヤールは、何か言いたげな顔をして、深く嘆息した。

走るフブリは、すぐにツバルに追いつかれた。

強い力で腕を捕まれ、逃げようがなくなった。

「いや！ 離して！」

がむしゃらに体を揺するも、簡単に押さえこまれてしまう。

「落ち着け、フブリ！ おれの目を見る！」

ツバルは、フブリの両手を引き寄せ、顔を近づけた。目を逸らそうとする彼女の顎を掴み、無理に自分のほうを向かせる。フブリは、

視線を合わせたまま、凍りついたように動かなくなった。揺らぎのないツバルの双眸は、少女をとらえて離さない。

二人、固まったまま、時間だけが過ぎた。

「……落ち着いたか？」

しかし、ツバルを見つめるフブリの目は懐疑に満ちていた。わずかに潤んだ少女の瞳にツバルは少なからず動揺したようで、一瞬視線をそらした。

「少し早いが、すべて話す。落ち着いて聞けよ」

その提案に、返事をする気にはならなかった。

フブリの大声で野次馬が集まってきていたため、ツバルは場所を移すことにしたようだ。人通りの少ない路地へ逃げるように移動する。フブりはうつむいたまま、黙ってそれに従った。

「おれは確かに、カラア生まれの、カラア育ちだ。騙していたことは謝る」

噴水がある小さな通りで、ツバルは静かに頭を下げた。フブりは、何を話されても動じるつもりはなかった。ただじっと、彼を見つめている。

「フブリ、カラアは、お前の本当の故郷なんだ」

一瞬、心臓が跳ね上がるかと思った。耳を疑うも、目の前のツバルは依然真剣な表情を崩さない。

「シルヘットが、よく最期に伝えたもんだと思ったよ……」

口元を無理に引き上げながら、ツバルは視線を落とした。

震える唇を塞ぐ。フブリの鼓動は、もはや体を突き破りそうなほど強く波打っていた。

「おれも、シルヘットも、クルージュも、先代のカラア国王に仕えていた。シルヘットは侍女で、おれたちは王を守る近衛だった」

電気が体中を流れるような、衝撃が走った。脳天から痺れていくような感覚に、眩暈を感じる。

「王の名は、バレッタ・コスモレド。フブリ、お前の本当の母親は……」

「何、言ってるの……?」

わななく唇が、かすかに漏らした。

「私、王さまなんて知らない。カラアなんて知らない」

「フブリ、落ち着け」

意識が混濁し、涙が出そうになった。突然、自分が自分でないものになった気がして怖かった。

そんな真実を、このタイミングで、知りたくなどなかった。

「何言ってるのよお!？」

フブリは力の限り、腹の底から叫んだ。

私は宿を出てすぐに、華美な馬車に乗ることになった。従者の目を盗んでそつとため息を漏らす。町の視察が嫌いなわけではない。ましてや、町自体が気に食わないとか、波の音が耳障りなわけでもない。

ただ、私は、疲れていた。

ここ数年、体の重い日が続いている。まだ自分の体は若いはずだったが、急に歳を取ったように、すべてが億劫になってしまった。考えることも、人の目を気にすることも疲れた。まして先日、城に侵入者が忍びこみ、少なからず私の命を脅かした事件があったばかりである。精神が確実に磨り減っているのを実感せざるを得ない。

馬車へ足をかけるとき、私はふと、遠くを見やった。言い争うような声が聞こえたのだ。

声の主は、まだ幼い少女と金髪の青年だった。

若いカップルの痴話喧嘩か、と視線をそらそうとして、言葉を失った。少女の容姿が、まぶたの裏に焼きつく。

一瞬私は、夢を見ているのかと思った。その少女は、あまりにも似すぎていたのだ。

気が動転して、彼女から目を離せなくなった。すると、少女の周り

だけがスポットライトを当てたように突然暗くなった。私は心臓が飛び出るかと思うほど、鼓動が速くなるのを感じた。

少女はゆっくり、振り向いた。そして、私の姿をとらえ、笑い出した。

まるで道化を見たように指を差して、腹を抱えて笑っている。

激しい嘔吐感に襲われた。

「陛下？ どうなさいましたか？」

ベルイヤールの声が聞こえた気がしたが、それはすぐに私の思考を素通りした。

「何故……今頃……」

少女の笑う顔が、忘れかけていた暗闇の記憶を呼び戻す。心臓が張り裂けそうなくらい脈打って苦しかった。

殺してやる。

耳元で声が聞こえた。私は震える両手で耳を押さえた。この声を聞くのは本当に久しぶりだ。

ふらつく足を、雑踏に向けて一歩踏み出してみる。駆け寄る侍女たちを振り払うと、私はまっすぐ少女のもとへ向かった。不思議と、一歩一歩進むたびに足取りは軽くなった。私の行動に困惑した従者たちが追ってきているのだろうか。背後から連なる足音が聞こえる。けれど、私は人ごみの中を、ためらうことなく通り抜けた。

銀髪の少女が、私を見て笑っている。

ああ、考えていた通りだ。

少女に一歩一歩近づくと、思考はクリアになっていくようだった。やらなければいけない。やってしまえばいい。

私は、腰元に差した護身用の帯剣に手をかけた。

フブリは錯乱していた。

落ち着け、とツバルに囁かれても、もう声にならない声しか出てこ

ない。

喚き声が聞こえたのか、フブリたちの周囲を歩いていた民衆の視線が、ちらほらと集まってきた。ツバルは慌てたようだが、フブリにとってはどうでもいいことだった。

また路地裏に自分を連れこもうとするツバルから逃れようとして、フブリは、こちらに向かってくる一人の女性に気がついた。

やわらかな茶髪の女性。一般人の服装とはまた違う、不思議な出で立ちだった。

「だれ……?」

迷いなく自分のもとへ向かってくる彼女から、フブリは目が離せなかった。女性は、まるで怖いものでも見たように、全身を強張らせていた。

彼女は何を怖がっているのだろう。

ぼんやり考えていると、ツバルがフブリを押しつけ前に出た。

「リラ!」

金属の重なる音と同時に、声は聞こえた。

その男の大声で、止まっていた時が動き出したように突然視界が開け、体の動きが止まる。雑踏のざわめきも聞こえてきた。気づけば、少女に帯剣を振り下ろしている自分と、それを剣で止めている男がいた。

銀髪の少女は、にこりとも笑っていなかった。

「お前……は」

剣を止めている金髪の男には、見覚えがあった。

あまりの驚きに、声が出ない。彼は不敵に笑うと、私の剣を簡単に撥ね返した。わずかな衝撃に身体が仰け反る。

「フブリは、まだ殺させるわけにはいかねんだ」
フブリ。

そう、そんな名前だった。

剣を弾かれ、それを握り締めていた右手が、じんじんと疼いた。

「陛下！ どうなされたのですか！？」

背後から従者たちの声が聞こえたときには、少女たちの姿はどこにも見えなくなっていた。

見渡せば、周囲にはたくさん野次が集まっていた。ざわめく大通りに、自分を中心とする人の輪ができていく。私は震える声で呟いた。

「……………追ってください……………」

ベルイヤールが、困惑した表情を浮かべた。

「彼は、姉を殺した反逆者、ツバル・リアノーラです。あの二人を、追ってください」

私は、呼吸を整えはつきりと、言葉をつなげた。右手の痛みが、少女が幻でないことを、物語っていたのである。

第五章 三

少女の腕を強引に引き、ツバルは裏道をひたすら走った。後ろを振り向くこともせず、薄暗い通りを突き抜ける。

「痛い！ ツバル離して！」

ツバルからの返答はなかった。彼の額には汗の玉が浮き、フブリが今まで見たことのないような険しい表情をしていた。それだけ彼に余裕がないということだ。

「ツバル……」

だから、フブリは何も言えなかった。問い詰めたことはたくさんあるが、今がそのときでないことは全身で感じてわかる。迷ったが、彼について、とりあえず逃げなくてはいけないと本能で悟った。

「見つけた！ こつちだ！」

「早く騎士を連れて来い！」

そう遠くない背後で声が聞こえた。一人ではない。数人の足音もそれに紛れて向かってくる。

「ちつ……手際よすぎだぜ」

ツバルは小さく舌打ちをして、フブリを通路のくぼみに押しこんだ。
「っ……！」

突然のことにフブリの顔が歪む。しかし、フブリが小さな痛みに驚いている一瞬の間に、それは現れた。突如日の光を遮る、巨大な影。全身を銀色の甲冑に身を包んだ、大きな騎士が立っている。

その体躯は、細い裏道を歩くにはあまりに窮屈そうだ。しかし環境によってその動きが鈍ることはなく、一目見た限りではとても重そうなその鎧の腕を、騎士はまるで空気のように軽く持ち上げた。

「銀色の、騎士……」

フブリは、自分を隠すように立っているツバルの影から、ぼんやり彼らを見つめた。一年前、村に火を放った騎士だ。間違いない。

くつくつ、とツバルが喉の奥から漏らした。

「銀の騎士まで連れて来てたのか……。遠征先でも抜かりがねえな！ リラア！」

叫ぶツバルの身体は、いとも簡単に銀の騎士に跳ね飛ばされた。あまりに速すぎて、フブリはそれを目で追うことができなかった。ただ見えるのは、黒い壁に背をつけて崩れ落ちたまま、動かないツバルの姿だけ。

「ツバル！」

ツバルの右手から力なく剣が落ちる。

「あ……」

フブリは震える身体を必死に押さえこんだ。少しでも気を抜けば涙が出そうな戦慄を覚える。ツバルがこんな簡単に倒されたなど、フブリには信じがたかった。彼の強さを知っているだけに、衝撃は大きい。

銀の騎士は、ツバルの腕を引きずるようにして無理に立たせると、踵を返した。ツバルがフブリの体をくぼみに押しやってくれたため、彼らはその存在に気づいていないようだ。

最後の力を振り絞ったのか、ツバルは弱々しく顔を上げて、フブリにウインクして見せた。彼の唇がかすかに動く。

「いいか……。スラム街へ行って、旧女王派と合流しろ。そのピアスを見せればわかるはずだ」

フブリは涙目になりながらツバルの声に耳を傾けた。引きずられていく彼の身体は握りつぶされた紙のように小さかった。

「それから、あいつには気をつける。あいつは、恐らく……」

ツバルの声は段々遠くなって、やがて聞こえなくなった。

一人、薄暗い通路に残され、フブリは身体を震わせた。目をこすり、恐怖を少しでも感じないように走り出す。

ツバルの身が心配だった。彼は、何故銀の騎士に捕まったのだろうか。

フブリは彼が銀の騎士たち

おそらく襲撃者

の仲間であると

思っていた。ルビーの推測もそうだった。銀の騎士がカラアにいるとわかった以上、フブリの命を狙っているのがカラアの間人であるということにははっきりした。ツバルは、先代国王の近衛であったと言っていた。では、その近衛が騎士に捕まる理由は何なのだろう。また、自分たちに身分を隠して近づいた理由は？

カラアに来てからわからないことばかりが怒涛のように押し寄せて、フブりは混乱の海原に一人取り残された。

これからどこへ行けばいいのかわからない。スラム街など、探せるのだろうか。こんな得体の知れない国に一人残され、無事に帰ることができのだろうか。唐突に不安が思考を支配した。一度そう考えると、恐怖は決壊した防波堤のように次から次へとあふれてくるのだ。

「ルビー……ツバル……私、どうしたらいいのかな……」

どのくらいの間時間が経過したのだろうか。途方もなく歩き回って、ようやくフブりは道らしい道へ抜け出た。

大きな通りを歩く人の数は昼間より格段に減っており、いつの間にか日が落ち、空が暗くなっていたことに気づく。よろよると近くのベンチに腰掛け、遠い空を見上げた。カラアの星は故郷で見た星とまったく同じ空に浮んでいて、フブりは涙がこみ上げてきた。胸が痛くなる。

「何泣いてんだ、ねーちゃん」
声が聞こえた。

フブりは首をもとに戻したが、ごしごし目をこするも、そこには誰もいない。きよるきよる辺りを見回すと、こっちだこっち、という声が足元から聞こえた。

「女の子がこんな時間に一人で出歩いてたら、おかされるぜ」

フブリの腹の辺りまでしかない、小さな少年だった。年のころは五六歳といったところだろうか。背丈に合わないダブダブのオーバーオールをまくり、手織り綿の帽子を目深に被っている。

「……こども……？」

フブリがきよとんとしている

「ごどもあつかいすんじゃねーよ！ おれはもう七さいだぜ！」
むっとした様子で少年は息巻いた。

「あ……、ご、ごめん」

フブリは反射的に頭を下げた。その瞬間、張り詰めていたものが解けたのか、突然腹の虫が鳴いた。頭を下げたまま硬直し、頬を染めるフブリを少年が覗きこむ。

「ねーちゃん、腹減ってんのか？」

「……そうみたい」

ますます赤くなるフブリを見ると、少年は思案に暮れるように腕組みをして、黙ってしまった。

「ここで何してんだ？ もしかして行くところないのか？」

フブリは小さく頷いた。

「……おれのアジトに来るか？」

「アジト？」

「ホントはなかま以外は駄目なんだけど、ねーちゃん悪い奴にはみえねーし、困ってる奴は助けるって父ちゃんが言ってたからな」

少年はフブリのスカートの裾を引っ張った。よろよろ立ち上がる。

「あ、ま、待って」

「アジトにはねーちゃんみたいなの、親にすてられて行くところない奴いっぱいいるかな。寂しくないぜ」

フブリの言葉などお構いなしに、少年はフブリの手を引いた。再び暗い路地裏に入り、少年は何を思ったのか狭い通路の隅に置かれた薄汚れたポリバケツを開けた。

フブリが訝しげにそれを見てみると、少年はバケツの底から一枚の紙を取り出した。不思議な文様の描かれたそれに彼が足を乗せると、たちまち二人はバケツの中に吸いこまれた。

「ひゃあああ！」

フブリは頓狂な声を上げた。今までであった薄暗い街頭が、夜空が、汚れたポリバケツがない。何もない真っ白な空間を飛んでいる。身

体が宙でぐるぐる回転しているような感覚だった。少年の小さな腕を離さんとはかりにきつく抱きしめる。

「あわわ……」

「何だよ？ いどうまほー初めてなのか？」

少年はあっけらかんと聞いてきたが、フブリは頷く余裕すらなかった。

「私魔法使いじゃないのに、移動魔法なんて使えないのに！」

「まほう使いが一般人用に作った、いどうまほうじんだよ。今はそんな珍しくないぜ？ ねーちゃんどんなイナカから来たんだ？」

少年の声が耳元を通り抜け、フブリが気を失いかけた頃、ようやく回転が止まった。

フブリは、地面に大の字になって転がっていた。吐き気がして咄嗟に口元を押さえこむと、少年が困ったように頭を掻いた。上体を起こし見上げれば、そこには先ほどと変らない真っ暗な空と、点在する星の群れ。しかし、周囲の景観はまったく変わっていた。

「……ここ、どこ？」

密着して立ち並ぶ建物は、まとまりのない雑居の群れだった。そこかしこに壊れたフェンスや落書きが見える。建物の隙間から小さな呻き声が聞こえ、フブリは思わず立ち上がった。目を凝らせば、道端で眠っていたり、壁にもたれかかったまま動かないでいたりする人影が目に入る。閉鎖された空間のような印象を受ける。あまり治安のよさそうな場所とは思えない。

「もしかして、ここってスラム街！？」

「え？ ああ、そうだけど」

先ほどまで呆けていたフブリが突然叫んだものだから、少年は目をぱちくりさせた。

「じゃあ、旧女王派って知ってる！？」

「っ！ ねーちゃん、まさか国王の手下か？」

フブリは大きく首を横に振った。

「私、ツバル・リアノーラって人に言われてここに来たの」

「あんだ……それは本当かい？」

フブリの問いに答えたのは、少年ではなかった。

それほど若くない男が数人、フブリたちの背後に立っている。フブリは一瞬たじろいだだが、男たちの物腰はやわらかく、こちらを傷つける意思がないことがわかったため緊張を解いた。

「ツバルさんがカラアに戻ってきたのか」

「ツバルが……」

彼らは、口々にぼやき嬉しそうに頷き合った。合間に感嘆の声が漏れる。

「このピアスを見せろと言われたの」

耳元の髪を掻き上げると、男たちは驚いたようにフブリを見つめ、一斉に跪いた。突然思いもかけない行動を起こされ、フブリも少年も一驚を喫し、立ち尽くすばかりだった。

「……バレッタさま……」

誰かが呟き、しばらくして、中央の男がフブリに恭しく手を差し伸べた。

「どうぞ、こちらへ。ぼくたちは旧女王派のメンバーです。我々は貴女をお待ちしております」

フブリが案内されたのは、雑居の中にひっそりと隠れた薄汚れた建物だった。一見すると一般人の住まいにしか見えないが、中は思いのほか広い。宿を開業できそうな数の部屋、終わりの見えない螺旋階段、いくつか嚴重に施錠された扉もある。そのどれもが鉄の匂いを漂わせ、重苦しい雰囲気をつくっていた。踊り場には小さな灯りが灯っていたが、それだけでは階段全体を照らすには至らず、フブリは薄汚れた壁に手をつきながら進んだ。触れる壁からひんやりと冷たい感触が走る。風通りがいいのか、通路は寒いくらいの冷気に包まれていた。

最上階の鍵を外し、男は丁寧なフブリの手を引いて中へ入った。生唾を飲みこんで、恐る恐る扉の隙間を覗きこむ。そこは、大きな円

卓一つと椅子が無造作に並べられた、会議室のような造りになっていた。円卓の周りにはたくさんのお若男女が集まり、何やら真剣な面持ちで会話をしたり、地図を広げたりしている。しかし彼らはフブリの姿を見止めると、口々に何かを囁きあい、頷き合った。室内は一気にざわめいた。

「ようこそ、フブリさま！」

「お会いできて光栄です」

部屋に入ると、すぐに数人の男女が駆け寄り、フブリを拝むように頭を下げた。

「え、あ、頭上げてください！」

フブリは申し訳ない気持ちでいっぱいになり、彼らよりも深く頭を垂れた。慣れない敬称がくすぐったくてたまらない。

「このように接せられるのは慣れませんかな」

しわがれた声の老人が、フブリに歩み寄った。小さな腰を痛そうなくらい折り曲げている。

「みな、貴女がカラアへ来てくださるのを心待ちにしていたのです」

「それはどういう意味ですか？ 私、本当に何もわからないんです」

フブリはうな垂れた。

「貴女は何も聞かずにここに来たのですか？ それでは貴女の母上、バレッタさまのこと嗎？」

「ツバルから少しだけ、聞きました……。でもそんなこと信じられなくて、私、混乱してしまっただけです。ツバルから詳しく聞く前に、彼は銀色の騎士に連れて行かれてしまったんです」

背後で静聴していた集団が色めき立った。

「そうですか、ツバルは囚われてしまったのですね……」

「ツバルは私をかばってくれたんです。でも、どうして彼が私に正体を明かさずに近づいたのかわからない。クルージュも、王さまの近衛だったんでしょう？ けれど彼もそんなこと一言も話してくれなかった」

フブリは早口で連ねた。できることなら疑問のすべてを吐き出して

しまいたかった。

「彼らなりに、貴女を氣遣ったのでしよう。貴女がまさか王の娘カラアの正統な第一王女であるなどと、言っても信じてもらえないと思っただけではないですか」

老人の瞳にまつすぐ射抜かれ、フブリは思わず喉を詰まらせた。途端に鼓動が速くなる。

「……その、それは本当、なんですか？ 私が、王女なんて」

恐る恐る尋ねると、老人はおろか周囲の旧女王派たちも微笑んだ。

「貴女のしているピアス……それはバレッタさまのものです」

無意識のうちに、フブリは自身の耳たぶに触れた。シルヘットからもらったステイクピアス　それが、まさか母のものだとは知らなかった。

「貴女は紛れもなく我らの愛するバレッタ・コスモレド国王陛下の御子。フブリ・コスモレド王女です」

続けざまに言われて、二の句が告げなくなった。シルヘットの娘だったフブリ・トリバンドラムという存在が、あっさりとなくなってしまう。その現実を呑みこむのは、やはりまだ時間がかかるように思える。

「さあ、こちらへ。少し長い話になりますかな……。お茶を用意してもらいましょう」

老人にエスコートされ、フブリは円卓の奥に連れて行かれた。古びた扉が一つ、薄暗い角に浮かび上がる。不安げに辺りを見回すフブリに気づいたのか、老人は彼女の歩に合わせてゆっくり手を引いた。窓が一つきりの、小さな個室だった。手作りと思われる木のテーブルに、椅子が四つ置いてあるだけで他は何もない。月がもの悲しそうに空に浮び、少しだけ開いた窓から涼しい風を送りこんだ。

「どうぞ、フブリさま」

老人に促され腰掛けると、女性が白いティーカップを差し出した。

「あの、さまっというの、やめてください。私は、そんな風に呼ばれるような人間じゃないし」

女性は目をぱちくりとさせたが、困ったように微笑んで退出してしまっただ。

「突然環境が変わったのだから戸惑うのも無理はありません。そのうち慣れますよ」

そうは思えなかったが、女性に申し訳ない気持ちもあつたので、はあ、と曖昧に言葉を濁した。

「旧女王派って何なんですか？」

小さな部屋に老人と二人、押しこめられているという状況は腰が浮いてしまう。フブリは単刀直入に聞いた。

「そうですね。では、我々旧女王派が結成されたことの顛末からお話しましょう……」

老人はなかなかティーカップに口を運ばないフブリにそれを勧め、彼女が一口飲みこむのを待ってから、話しはじめた。

「十五年前、その事件は起きました。フブリさま、貴女がお生まれになった年です。当時の国王はバレッタ・コスモレド陛下。その先代の王、つまり貴女の祖父母さまはずいぶん前に崩御され、バレッタさまは貴女の年の頃にはもう国王に即位されておいででした」

自分の年の頃には。それを一瞬想像しようとして試みるが、とても十五歳の国王など簡単に浮んではこない。

「女性でも、王さまになれるんですか？」

「カラアでは、王家に男女の区別はありません。たとえばバレッタさまの後に男の御子がお生まれになっていたとしても、第一王位継承権は長女のバレッタさまにあります」

外界から閉ざされたカラアなりの風習なのだろう。フブリにとっては特殊に感じるのだが、カラアの人間にとっては当たり前のことなのだ。改めて、カラアと自分の住んでいた世界の遠さを知った気がした。

「お母さんは、私を産んですぐに死んだとシルヘットから聞きました。それは本当ですか？」

「哀しいことですが、真実です」

一縷の望みをかけて聞いたのだが、それは儚くも打ち砕かれてしまった。シルヘットの言葉を信じていなかったわけではない。だが、もう一度確認せずにはいられなかった。

「でも、お父さんは生きてるんですよね？」

その質問に、老人は難色を示したようだ。あまりよい返事が期待できないことを、フブリは彼の瞳から悟った。

「貴女のお父上は、名のある伯爵家のご長男です。ただ……バレッタさまと結婚してすぐに病に伏せられ、そのまま帰らぬ人となりましたが……」

「そう、なんですか……」

急に力が抜け、フブリは椅子にもたれかかった。もとより、本当の父母のことなど知らぬまま、自分は死んでいくのだらうと思っていた。だから、それを今更知ったところで驚きはあれども哀しみはない。肉親の死でも、まるで他人事のように案外簡単に受け入れられるもののようなのだ。

「ですが、母上さまは病死ではありません。十五年前、バレッタさまは寝室で何者かに命を奪われました」

一息に言われ、フブリは一瞬耳を疑った。

「え……」

凍りつくような空気が個室を包む。しかし老人は表情一つ変えず、淡々と続けた。

「ツバル・リアノーラはバレッタさまの優秀な近衛でありましたから、そのとき事件の現場で犯人を捕らえようとなりました。しかしツバルは力及ばず、バレッタさまは重症を負い、シルヘットの助けのもとカラアを出て貴女さまを産んだ直後に息絶えたのです」

「お母さんは、誰かに殺されたんですか!？」

色を失い、思わず立ち上がる。手元のティーカップがカチャリと揺れた。母が自分を産んですぐ死んだことはシルヘットから聞いて知っていたが、まさか殺されていたなど、知る由もない。

「そうです。そして、バレッタさまを殺したのは、リラ・コスモレ

ド。……現在のカラア国王であり、バレッタさまの実の妹君です」
更なる衝撃がフブリを襲う。

「い、妹……？ お母さんの妹が殺したって言うんですか？ そんな、まさか……」

「リラ・コスモレドは狡猾な女です」

フブリの戸惑いを覆い隠すように、老人は語気を強めた。

「王位欲しさに姉を殺し、その罪をバレッタさま直属の幼い三人の近衛に着せました。それがツバル・リアノーラ、クルージュ・エーレブル、そしてオーガスタ・ササンクロスの三人だったのです」
「オーガスタという名前は聞いたことがなかったが、ツバルとクルージュが母の近衛だったことはもう知っている。」

愕然とした。母を殺した上、その罪をツバルたちに着せ、自らはこのうと王の位についている、リラ・コスモレドという女。彼女はまんまと国王の位を手に入れたのだ。

「王位、王位なんかのために……？ 自分が国王になるためにお母さんを殺したんですか！？」

フブリには信じがたかった。実の姉を、そんなものために殺したというリラの考えが少しも理解できない。一国の王位というものはそれほど価値の高いものなのだろうか。家族を自らの手で傷つけてまでも欲しいものなのだろうか。

老人はフブリが落ち着くのを静かに待ち、カップに口をつけた。薄暗い室内に沈黙が落ち、フブリは興奮する自分を落ち着かせ、座り直した。

「三人は濡れ衣を着せられ、国を追われました。ただ一人、オーガスタさまだけは囚われ王城に残りましたが、それぞれが散り散りになり身を潜めて、蜂起するのを待っていたのです」

「リラに、復讐するときを……」

うつむいたまま、視線だけを老人に向けると、彼が頷く姿が見えた。
「その一方で、バレッタさまの死に疑問を持った民は少なくありませんでした。あれほど信用のおける臣下であったツバルたちが、バ

レッタさまに牙を向くなど考えられなかったのです。そうした疑問を持った者たちがいつの間にか集いはじめ、身を潜めて機を待っているツバルたちの存在も知りました。こうして旧女王派ができたのです」

老人はそこまで言い終えると、お茶の残りを一気に飲み干した。

「バレッタさまは当初、シルハットと共にうまく逃亡し、どこかで生きていると思われておりました。しかし、その希望が打ち砕かれ、けれど同時に、貴女さまがお生まれになっていたということも知ったのです」

希望、という言葉が胸に突き刺さって痛い。旧女王派の歴史が長いこと、彼らが団結力の強い組織であることは、建物に入ったときから感じていた。彼らはずっと、リラを王の台座から引きずり落とし、彼女に報復する日を夢見てきたのだ。そんな哀しいことを、ずっと希望にして生きてきたのだ。

老人は硬直したまま動かないフブリに、優しく微笑みかけた。

「フブリさまは、我らの新しい希望です。貴女さまが先頭に立って、我ら一同蜂起する日を、ずっと待ち望んでおりました……」

第五章 四

「すげー！ おうじよさまだぜ、おうじよさま！」

「ヴィタイムは静かにしてなよ！ 失礼でしょ！」

「お前こそだまってろよ！ おうじよさまを連れてきたのはおれなんだぜ！」

「あんた実の姉に向かってその口の聞き方はどーなのよ！ いい加減にしな、このガキ！」

「いてて！ てめーふざけんなよブスゴリラ！」

ぎゃあぎゃあ足元で喚く二人の子どもにぼんやり視線を落として、フブリはため息をついた。

老人と一対一で話して個室を出てから、彼女の周りには旧女王派が絶え間なく押し寄せた。彼らは憔悴しきったフブリのことなどお構いなしに、彼女を拝み、口々に賛美の言葉を述べて去っていった。自分が王女である事実を未だ呑みこめないでいるフブリとしては、それらが苦痛でしかない。そそくさと最上階の広間を後にし、付近の踊り場に座りこんで今に至る。

頭が重かった。もう、しばらくは誰とも会いたくない。

「よお……………」

ところが、この王女殿下に無謀にも軽々しく話しかけてくる男が現れた。どことなく他の旧女王派とは毛色が違うように見える。

「久しぶり」

「…………え…………？ 誰？」

久しい覚えなどまったくなかったフブリは、まじまじと男を見つめた。三十、四十代……だろうか。それほど若くはない。濃朱の短髪に、黒い瞳。顎の辺りには無精ひげが生えている。彼はツバルよりも長身で、その細身に合った、ゆったりとしたローブを着ていた。

「あんときは真っ黒だったから覚えてねえかな……。ほら、こんなフードかぶってさア……………」

男は頭に布を被るようなジェスチャーをして見せた。フブリは思わず彼を指差す。

「温泉街の、魔法使い！？ バイトを雇ってた！」

「覚えて頂いて、光荣だねエ……」

にやりと口の端を上げ、男は足元で言い争いを続けていた二人の子どもの間に割って入る。

「おれはイエリコ。こっちの気の強え娘が姉貴でオリヴェンサ。で、ちっこいのが弟のヴィタイムだ」

オーバーオール少年　ヴィタイムは、イエリコの腕の隙間から横目で姉を睨みつけた。一方の姉、オリヴェンサも口の端を引つ張って対抗している。

「おめエら、喧嘩も大概にせーよ」

「だって父ちゃん、こいつうるせーんだもん！」

ヴィタイムはイエリコの後ろに隠れながら、顔だけを出してあっかんべをした。

「うるさいのはあんたでしょ！ このバカ！」

「バカって言うほうがバカなんだぜ！ バカバカ！」

「あーうるせエガキどもだぜ……」

困ったように頭を掻く男をじつと観察するも、なかなか温泉街で会った魔法使いと彼を同一人物として認識し難いものがある。黒いフードの奥から見えた鋭い眼光が印象に残っていて、あのときはまさか彼が二児の父親だとは夢にも思わなかった。

しかし、自分を暗殺しようとしていた魔法使いが旧女王派にいますというのはおかしくないか。

「……あなた、旧女王派じゃないでしょ？」

肩をすくめるフブリに、イエリコは苦笑した。

「ああ、あんときはおれ、リラの部下だったからなあ……。いやア、すまん、すまん」

フブリは更に嫌悪の眼差しを男に向け、身を固くして一歩後ずさった。

「そんな怪しい目で見るなって。まア、あんときバレッタの娘を仕留められなかった、ってことでクビになったのさ……。そんで行くところねエし、仕方なく旧女王派にいるってわけよ」

場を和ませようとしているのだろうか。大げさに両手を上げてみせるイエリコだったが、かつて自分を殺そうとした相手に笑い返せるはずもなく、フブリは冷たい視線を投げ続けた。

「じゃあ、やっぱり襲撃者たちはカラアの兵士なんだ。今の国王……リラが、私を殺そうとして刺客を放った……」

憶測が現実になったことが辛くて、フブリは下唇を噛んだ。今まで自分の命を狙ってきた襲撃者たちが、国王リラ・コスモレドの部下であることは容易に想像がつく。彼らはカラアの存在が外界に洩れることを恐れ、何も知らないバイトに『フブリ・トリバンドラムを暗殺する』ことを命じた。そうして間接的にフブリを始末しようとしていたのだろう。

リラは、姉だけでなく姪の自分までも殺そうとしていたのだ。

「そういうことだな。おれがバレッタの部下やめてリラの下に就いたときも、姉が生きてるかもしれない、私を殺しに来るかもしれない、ってすげエ取り乱してたのを覚えてるぜ。そうやって怯えるような臆病者なんだ。リラ・コスモレドって女は」

「あなた、お母さんにも仕えてたの!？」

渡り上手というか、卑怯者というか……、その仁義なき生き方に驚きを通り越して呆れてしまった。

「まアね。渡り奉公が信条だからな。長いものには巻かれるって奴か？ なア、オリヴェンサ」

「オヤジは最低なコウモリ野郎なんですよ。だからお母さんにも逃げられて、いい年なのに家すら持ってないんです」

父親譲りの長い赤髪を揺らして、オリヴェンサは鼻を鳴らした。

「ふーん……」

フブリは殊更彼を冷眼視した。

「おいおい、余計なこと言うなよ、オリヴェンサ。ヴィタイムはそ

んなこと言わねエよな？」

実の娘とフブリの白い目が思いのほかダメージを与えたようだ。さすがにイエリコは苦笑して、ヴィティムの頭を撫でた。

「父ちゃんはウラギリモノだって、このみんなは言ってるぜ！
いどーまほーうじん作れるから生かしてるって」

イエリコはがくりと肩を落とした。そのリアクションが何だか可笑しくて、フブリは建物に入ってから初めて笑った。

「……おれは本当はあんなもん作りたくねエんだ。一つ作るのに時間も精神力も浪費する上、一回飛んだだけで壊れちまう」

「だからいどーまほーうじんってすげー高いんだぜ」

子どもらしいジェスチャーで、ヴィティムは大げさに両手を広げてみせた。フブリが興味津々に耳を傾けてきたため、得意そうである。

「ここにつながってたポリバケツも、移動魔方阵だったんでしょ？」

そんな高価なもの、あんな簡単に使っちゃってよかったの？」

「あれは簡易移動魔方阵。まア、本場のミニチュア版ってとこだな……。簡単に作れるが、その分飛べる距離は二キロ以内」

「だから、アジトの入り口を隠しておくには最適なんです。本当は表通りのすぐ近くにここはあるんだけど、あのポリバケツから飛ばないと、この場所には決して来れないの」

父に続いて、オリヴェンサがフォローした。一瞬でとても遠いところに移動したような気でいたが、実際はそれほどでもなかったらしい。カラアの魔法技術の発達力には圧巻させられる。

旧女王派の数人に呼ばれ、イエリコが軽く手をふって階下へ降りていった。壁にもたれ、ずるずると腰を落す。ちょうどヴィティムと同じ目線になると、彼は首を傾げた。

「ねーちゃん、疲れてんのか？」

「え……？ うん……そうかもね」

実際自分の身体が疲れているような自覚はなかった。しかし現在の行動を冷静に分析すれば、これは疲れているという状態なのだろう。「ねーちゃんは、おれたちを助けてくれるおうじよさまだもんな。」

そりゃ疲れるぜ」

ヴィティムの言葉に、フブリは違和感を覚えた。

「助ける……私が、助けるの……？」

「王女さま？」

首を真横にするくらい折り曲げて、オリヴェンサは顔を覗いてきた。隣のヴィティムも不思議そうにしている。

「ヴィティム……。リラ・コスモレドって……今の国王さまってどんな人なの？」

「おれはよくわかんねえけど、旧女王派のおっちゃんたちは今の王さまは駄目だつて言ってる」

「それは、実のお姉さんを殺したから？」

「こくり、と両の首が動いた。」

「もうすぐ本当のおうじよさまがやってきて、リラを殺してくれるつて。そしたらおうじよさまが王さまになって、カラアは助かるんだつて言つてた」

ヴィティムは得意げに笑ってみせた。オリヴェンサも嬉しそうに笑つてフブリの膝にしがみつく。

「ねえ、王女さまはあたしたちを助けにきたんでしょ？」

「でも、そんなこと言われても、私は……」

できない、という言葉がはっきりとは出てこなかった。喉の奥でしこりのように残り、フブリは思わず眉をひそめる。

「私は国を救うなんて、そんなことのできる人間じゃ、なくて……」
ただの、十五歳の女の子です。

王女なんかじゃありません。

「私は……」

けれど、頭の奥ではっきりと発音されているはずの言葉は、声にはなってくれなかった。それが、変えようのない現実だからだ。今逃げて、必ず自分について回る現実だからだ。

突然、歓声が聞こえた。はっとする。

「いよいよ反逆の徒、リラ・コスモレドに正義の鉄槌を下せる日が

やってきた」

踊り場からそつと覗きこむと、会議室の円卓を囲うようにして多くの旧女王派が立ち上がっている姿が見えた。中には小さな子どもも姿も見える。彼らの視線は、恐らく旧女王派のリーダーであろう老人に集中していた。

フブリは、ぼんやりと老人の演説を眺めていた。だから、自分がメンバーに促され、旧女王派の面前に立たされるまで、まともに話を聴いてはいなかった。彼らの声は耳を素通りしていった。

老人がフブリを中央に立たせた。それが、自分にコメントを求めている行為だと知っていても、フブリには何を言っているかわからない。室内は水を打ったように静まり返り、聴衆はフブリへ向かって一際熱い視線を送った。

何かを期待している瞳だ。

その期待するものが何なのかを、フブリは知っている。けれど、それに応える自信はない。浮き足立ち、視線を室内に這わせ、うつむくことしかできなかった。

「フブリさまがついていらっしやるんだ！ 失敗する気がしねえよ！」

誰かが叫んだ。

「リラに正義の鉄槌を！」

それに呼応するように一人、二人 重い静寂が支配していた室内は、一気に大歓声に包まれた。しかしフブリは、うつむいたままだった。握りしめたままの拳がわずかに湿っていることに気づいても、うつむき続けている。

「これでやっとリラを国王の台座から引きずり降ろせるってもんだ！ 一週間後が楽しみだぜ！」

「……一週間後？」

不安そうに老人を見ると、彼は迷いなく頷いた。

「一週間後、我々は王城へ乗りこみます。計画は何年もかけて熟考してありました。残すは計画の要となるフブリさま、貴女の存在だ

けだったのです」

「ちょ、ちよつと待ってください。王城に乗りこむなんて、私は……」

納得していません。

言葉はやはり出てくれなかった。

「王都は遠い。このときのために作った移動魔方陣で、数人の旧女王派が王城へ向かいます」

彼らにとってはあらかじめ計画されていた作戦なのだろうが、つい先ほど真実を知ったばかりのフブリにとって、それはあまりに唐突な展開だった。

「旧女王派はここにいる我らだけではありません。王都や城内には別働隊が潜んでいます。彼らが城に火を放ち、それを合図に我々も乗りこみます」

フブリは青ざめて、首を真横に振った。

「火を放つ!? そんなの駄目!」
それだけは何があっても駄目だと思った。その炎が自分の村を襲ったこと、それによって多くの人間が苦しんだことをフブリは身をもつて知っているのだから。

「ほんの威嚇です。リラを引きずり出したら、すぐに我々の手で消火する手はずになっているのです」

「でも、そんな……」

けれど、彼らのリラに対する憎悪を、自分はどれだけ理解できるというのだろう。何年も、復讐する日を待ち焦がれて、それだけを原動力にして生きてきた彼らを。

「フブリさまは、リラが憎くはないのですか?」

怖いものでも見たように、フブリは老人を見つめた。

「貴女さまはバレッタさまと同じように、心優しい方であると我々は思っています。お辛いのですしたら、強制はいたしません。けれど、我々は」

老人は一息ついて

「貴女さまにリラを殺して頂きたいと思っている
はつきりと言葉を連ねた。」

背後で止まぬ歓声が、一瞬間こえなくなったように思えた。老人の
その一言だけが切り取られ、頭の中をぐるぐる回ってまとわりつく。
「殺す……、殺す……！？ そんなことしなくても、国の人たちに
私が名乗り出れば信じてもらえるでしょう？」

唇が震えているのがわかる。その動揺を老人は見透かしているよう
だ。フブリを不安にさせないようにと微笑んで何度も頷いて見せる。
彼の瞳はとても優しい。そのとても優しい瞳を持った人間が、人殺
しをしようとしている。

「いいえ、リラはここ数年で少しずつ国王としての地盤を築きつつ
あります。突然現れたバレッタさまの御子……それを信じるものが
いかほどいることか」

「……でも、私、人を殺すなんて」

「リラをこのまま野放ししておくわけにはいきません。現実問題、
フブリさまのお命をも彼女は奪おうとしている。あの王を生かして
おけば、またいつ十五年前と同じことが起こるとも知れません。形
だけでいいのです。彼女の首は我らが刎ねる。その後で、それはフ
ブリさまがなさった正義の行為であると公言すればいい」

「私……」

ひどく疲れた。唇が乾いて、もう動かない。

背後の歓声は未だやむことを知らない。

「さあ、フブリさま」

老人が、フブリに差し出したのは、装飾の少ない短刀だった。

「貴女の母親を殺した女です。貴女を国から追いやり、あまつさえ
ツバルやクルージュ、シルヘットを不幸へ導いた女です」

シルヘットの名が思わぬところで飛び出し、フブリはどきりとした。
正直、バレッタという実母がリラに殺されたという事実にはピンと
くるものがない。もつと時間が経てば違うものなのかもしれないが、
今はそれを心の底から受け入れたという気持ちにはなれなかった。

だが、シルヘットの思い出を焼いたのはリラだ。

リラが銀の騎士をフブリたちの村へ送らなければ、今でもフブリはルビーと共に、村で平和に暮らしていたのだ。

養母の作る煮豆のスープの匂い。

彼女のエプロン、日なたの匂い、暖かい家族の抱擁。

思い浮かべるシルヘットの顔は、年を追うごとに風化して、ぼやけていった。彼女の顔を思い出せなくなってしまふことが何より哀しいとフブリは思う。

火を放つのは嫌だ。

けれど、考えてみれば、それを先に仕掛けてきたのはリラのほうではないか。

王位などという下らないものを求め、実の姉を殺して、姉の部下を貶めて、そんなことが許されるはずがない。

リラを殺せ

リラを殺せ

リラを殺せ

「リラを……」

意識は高揚する旧女王派の歓声に呑みこまれ、消えていった。

第五章 五

朝が来た。

宛がわれた個室で着替える。城で働く侍女の制服だ。もしものときのために、と旧女王派が用意してくれた。短刀を腰にくくりつけると、もうもとの自分ではない気がした。

「私は、フブリ・コスモレド……」

鏡に向かうと、それは自然に滑り出た。けれど、先週末までのような違和感はない。それを受け入れたからだろうか。むしろ言葉にすることで妙に落ち着く。

これは仇討ちだ。親の仇を子が討つ　それはとても自然なことだ。何も間違っではない。何も……

「よオ……もう出立かい？」

階段の途中でイエリコに会った。下ばかりを向いていたフブリは、それに気づかず危うく衝突するところだった。

「あなたは行かないの？」

「おれは信用されてねエんで……。子守兼留守番さ。移動魔方陣作つたのはおれだっというのに冷てエよなア……」

フブリが苦笑すると

「餞別だ……旧女王派が信じられねエと思ったら開きな」

イエリコが四つ折の紙片を差し出した。

「城壁は魔法を吸収するけども、城壁を左にずっと伝っていくとイイことがあるぜ……」

その説明だけでは疑問が残るものの、フブリはとりあえず礼を言って彼を通り過ぎた。

先発隊は既に早朝、王都へ向かっている。魔方陣の数は少ないため、それこそ数名の精鋭だけが先に乗りこむ手はずになっていた。今頃はもう、王城に潜んでいるという旧女王派が火を放ち、先発隊が城へ斬りこんでいるはずである。やはり火を放つという行為だけはま

だ、しこりのように残って辛かったが、フブリはそれを忘れようと努めた。仕方のないことだ、と言いきかせ自分を納得させる。

移動魔方阵は、正方形の厚みのあるタイルだった。薄いピンクの光が四隅から漏れている。

「あちらへ行ったら、フブリさまは後方で待機されているだけで宜しいのです。何も心配することはありません。貴女が我々を見守ってくださいというだけで、旧女王派の士気は上がることでしょう」魔方阵を前にしてじっとしていると、老人が優しく微笑んだ。彼は足手まといになるため、ことが済んでから王都へ向かうと聞いた。

「私がお先に行きます。フブリさまは、それに続いて魔方阵を踏んでください」

若い男がフブリの手を引き、あ、と漏らす間に、フブリは男に続いて魔方阵の中へ吸いこまれていった。

ゆらゆら漂うような、心地よい感覚。それは、ヴェイティムと共に吸い込まれたポリバケツの中とは、明らかに異なる。遠くでかすかにきらめく光の粒子に、全身が呑みこまれるような感覚を覚え、フブリはきつく目を閉じた。

次の瞬間、耳をつんざく喚声と熱気に眩暈を感じてよろめいた。

火の粉と砂埃が目の前で舞い上がる。それは煙と共に立ち昇って、真っ白な城壁を無遠慮に覆っていた。

立ち尽くすフブリを、共に移動してきた旧女王派の面々が引きずるように城から遠ざける。フブリはじっと城を見つめながら、彼らに連れ立って視界をふさぐ砂埃の中を走った。

これほどまでに巨大な建築物を、フブリは見たことがなかった。遠くに広がる終わりのない白い城壁。天まで届きそうな城門。城郭を更に囲う兵士たちは、どれも屈強そうな大男ばかりだった。そこに果敢にも旧女王派のメンバーが挑みかかる。彼らは兵士と違って軽装なはずなのだが、兵士たちも突然の襲撃に混乱しているのだろう。フブリが一目見た限り、旧女王派のほうに優勢のように見えた。

銀の騎士の姿は見えない。彼らがもしいたら、と心のどこかで案じ

ていたが、どうやら杞憂だったようだ。先発隊が対処したのだろうか。数年間、緻密な計画を立ててきた彼らのことだから、銀の騎士に対抗するすべも考えていたに違いない。

金属の交わる音、誰かの悲鳴、喚声、炎が爆ぜる音。兵士が旧女王派の男に斬りつけられる場面から、フブリは目を逸らさなかった。彼は胸を押さえ、倒れこみ、地に伏して動かなくなった。見るからに頑強そうな鎧の隙間から、鮮血があふれ出し、土を染める。それは、あまりにあっけない命の終わりだった。

「フブリさまがいらしたぞ！」
誰かが叫んだ。

喚声は歓声に変わり、まるで彼らの勝利が約束されたかのように、旧女王派は喜び合った。

しかしフブリは、戸惑っていた。迷いはもうないはずだった。だが、現実には想像していた以上に重くのしかかる。一国の城へ攻めこめば、当然誰かが命を落とす。『フブリ・コスモレド』になるということはそういうことなのだ。考えなかったわけではない。しかし、できれば考えたくはなかった。やはりまだ、自分は現実から逃げているのだ。

「フブリさまは後方へ！」

耳元で叫ばれ、フブリは自分が前進していることに気がついた。

「でも……」

今、戦況はどうなっているのだろうか。リラはもう殺されたのだろうか。あまりに城から離されて、フブリは落ち着かなかった。フブリを守るように囲んでいた旧女王派の一人が前線へ飛び出し、それと同時にフブリも旧女王派の隙間を縫い、城へ向かって走り出した。自分を呼ぶ声が背後から聞こえたが、フブリは振り向かなかった。母親を殺した女を、見てみたい。

巨大な城を前にして、フブリは唐突にそう思った。

会って、何をするのだろうか。彼女に短刀を突き刺すのか、それとも窮地に陥った彼女をせせら笑ってやるのか。

わからない。ただ、衝動的に足が動いた。

城門を死守する兵士たちをすり抜ける自信はない。裏に回ろうとも、どこまで走っても城壁に終わりはなさそうだ。ふとポケットの中に手を入れ、ある感触にたどりつく。取り出すと、それはイエリコからもらった餞別だった。紙片には不可思議な模様が書きこんである。「簡易移動魔方陣……！」

フブリは小柄な身体を生かし、兵と旧女王派の隙間を軽々と抜けた。背後の追跡は完全にフブリの姿を見失っていた。城壁をひたすら左へ進むと、少し離れた場所に見慣れたポリバケツを見つけた。

迷わずバケツの蓋を開け、紙片を放り投げるように地に落とし、飛び乗った。くるくる回るような感覚とともに、体がポリバケツの中に吸いこまれていく。フブリは目の前に広がる白い空間の先に、無意識に手を伸ばした。

「い、つた……………！」

着地の際に、頭を強く打った。天井が二重、三重にも見える。フブリは瞬きを繰り返し、頭をさすりながら立ち上がった。

「うう……………たんこぶできてる……………」
自分の着地の仕方が悪いのか、イエリコの魔方陣が悪いのか、とにかくフブリはこれを仕掛けた魔法使いの男を少しだけ恨めしく思った。

そう遠くない場所から喚声が聞こえる。フブリは周囲を見渡した。イエリコが元・城に仕える魔法使いであったことを考えれば、ここは城内であると考えて間違いないだろう。彼の卑怯な性格を考えれば、城に何も言わず自分だけの脱出経路を作っていた、という仮説がしっくりくる。

「あいたツ！」

何かに頭を小突かれ、フブリは前のめりに倒れこんだ。振り返れば、そこには喚きながら突進してくる鶏の群れ……

「わ、わ……………」

コケツ、コケツ、と耳元で騒がれ、フブリは慌てて出口を探した。敷き草と羽が体中に張りついて、なかなか前進できない。

「もう、何てところを移動先にしてるんだよ！」

鶏たちの攻撃を受けていると、何やら焦げ臭い臭いがして、フブリは嫌な予感を感じた。小屋の隅から煙が上がっている。

「火が回ってきてる！」

小さな攻撃を体中に受けつつ外に飛び出すと、鶏たちは颯爽とどこかへ駆けていった。

むせかえるような血の臭い　悲鳴にも似たような、混沌する喚声、淀んだ空。目の前にそびえ立つ城壁を隔てた向こう側に、戦場が見える。フブリは息苦しさを感じて、鶏小屋から一度離れた。小さな火の粉が小屋の角に燃え移り、煙を生み出している。フブリは上着を脱ぐと、煙を吸いこまないように口元を押さえながら火元を消した。

外の喧騒に反して、中はひっそりと静まり返っていた。旧女王派の姿も見えない。兵士は表に総動員されたのだろうか。城内の警備は恐ろしく手薄になっているようだ。精巧な造りではあるが、城内の装は決して華美なものではなかった。だだっ広い真っ白な床が延々と続くばかりである。ただ、そのスケールの大きさには驚かされる。高い天井と、それを支える巨大な柱に、フブリは見入ってしまった。

「おい」

背後からの声に、フブリは瞬時に身を硬くする。慎重を期して歩いてきたつもりだったが、その兵士の足音には気づかなかった。

「まだ逃げていなかったのか？　侍女は……いや、お前見慣れない顔だな。どこの所属だ？」

所属。そう、自分は今、侍女の制服を着ている。しかしアドリブでかわそうにも、上手い機転が思いつかない。黙したままのフブリに焦れたのか、兵士が一步踏み出した。じりじりと後ずさり、足元に何か触れた。横目で確認したそれは、誰かが落とした剣だった。兵士はその存在に気づいていない。

顔全体をすっぱり覆っている兜は頑丈そうだ。けれどこれしかない
とフブリは腹をくくり、素早く剣を手に取り、彼の背後に回る。相
手は着ている鎧の重さゆえ、動きがフブリよりも鈍い。

今だ。

彼の一瞬の隙をつく、そのチャンスは今しかない。生唾を飲んで鞘
を握る手に力をこめる。考える前に、フブリは鞘のまま剣を振り下
ろした。

「ご、ごめんなさいっ！」

出せる力を振り絞って、兵士の頭を殴打した。しかし、やはり女の
力では彼を気絶させるには至らなかつたらしく、彼はフブリに向か
って反撃してこようとした。兜に覆われ顔は見えなかつたが、明ら
かに殺気立っている。

その動きが尋常でなかつたため

「ごめんなさいい！」

フブリは無我夢中で、鞘を兵の頭に振り下ろし続けた。

「重いなあ……よくこんなもの毎日つけていられるよね……」

床でのびている兵から失敬した鎧と兜に身を包む。そのどちらも重
い上に、サイズが大きすぎて合わなかつたが、城内を歩き回るには
顔の隠れたこの姿が最適だと思い、我慢した。

近くで足音が聞こえた気がして、フブリは慌てて柱の影に隠れた。
数人の兵士が通路を通り過ぎる。のびている兵士を鶏小屋の中に隠
しておいてよかった。

どれだけ進んだらうか。何度か兵士とすれ違いそうになり、その
度に肝を冷やしながらかり廊下を走った。走るといっても、慣れな
い鎧姿である。他者から見たら、それはとても滑稽な姿であるに違
いない。

突き当りの門をくぐると、大きな庭園に出た。

普段ならば、朝露に濡れた草花が景観を彩り、蝶がその周りに弧を
描いて飛び回るのだらう。そんな情景が目の裏に思い浮かぶ。しか
しそこは今や、煙の充満する火の海と化している。庭の隅に建てら

れたガラス張りの温室にも、火の手が迫っていた。

「怖い……怖い……」

すぐ傍でか細い声が聞こえて、フブリは身を強張らせた。

女が一人、火の海の中に立っている。

「姉さん、オーガスタ、助けて、助けて」

フブリは、その女性に見覚えがあった。何かに怯えているような瞳、軽いウェーブのかかった流れる茶髪。彼女は、港町でツバルに斬りかかってきた女性だった。

「消えて……お願い、消えて……」

女は、手持ちのシヨールで小さな火の粉を振り払っていた。そんなものでこの火の勢いを止められるはずもないのに、何度もその行為を繰り返している。彼女の背中はとても小さく、ひどく弱々しく見えた。

「リラ……」

フブリは小さく呟いた。

女は気配に気づいたのか、突然フブリのほうを振り向いた。身を隠すこともせず立ち尽くしていたフブリは、はっとして顔を逸らす。

しかし考えてみれば、鎧を身に纏っているのだから、顔を隠す必要はない。

「そのあなた！」

「は、はい」

反射的に背筋を伸ばしてしまった。

「お願い……！ プランターを移すのを手伝ってください。お願い

……」

「リ…… 国王陛下は逃げてください！ ここは火が回って危険です」「花を残しては行けません！」

リラは今にも泣き出しそうな表情に反して、はっきりした大声を上げた。

「それに、まだ城の中には移動魔方陣が足りず逃げ遅れた臣下たちがたくさんいます。非力な侍女たちもまだ残っていることでしょう。」

私は一国の王として、城の安全を守る義務があります。最後まで残って、すべてを見届ける、義務があります」

それは、先ほどまでおろおろしていた女性とは別人のような、毅然とした態度だった。

けれど、彼女の声は震えていた。声だけではない。身体も小刻みに揺れて、瞳には涙が溜まっていた。

彼女がリラ・コスモレド。

お母さんの仇。シルヘットの仇。そして、お母さんの、妹……。彼女を、私が

「殺す……?」

温室から城内へプランターを移し終わると、リラは安堵のため息を漏らした。さすがにすべての植物を移動させることはできなかったが、それは彼女も承知の上のようだった。

「ありがとう」

「いえ……」

リラは、ほっとしたのか少女のような笑みを浮かべて見せた。

「あなたは外の加勢に行ってください。できれば城の中に逃げ遅れた者がいないか確認しながら……」

しかし次の瞬間には真剣な面を作る。それが国王としてのリラの顔なのだろうか。

「国王陛下はどうされるのですか?」

「私は」

リラの言葉は続かなかった。否、それより大きな音に遮断されたのだ。

その音は頭上から聞こえた。城壁の一部が剥がれ落ち、落下してきたのだ。巨大な白壁が目前に迫り、フブリは逃れようとして、立ちすくんだまま空を見上げるリラを目の端にとらえた。

「リラ!」

フブリは考える前に飛び出していた。

崩れ落ちる塊。轟音が静寂の中に響き渡り、やがて消えていく。砂埃が宙を舞い、一瞬目の前が真っ白になった。

足元に飛び散った破片がパラパラと転がっていく。

「あ、ありがとう……」

リラの声が耳元を通り、フブリは自分が彼女を抱きしめて転がっていたことに気づいた。後ろを振り向けば、つま先からあと一步のところ、城壁の塊が砕け散って転がっていた。我ながら、重い鎧のままでよく動けたものだと思う。

「リラ！」

唐突に突風が舞い、切り開かれた青空の中から男が現れた。

「オーガスタ！」

「大丈夫か？ 怪我は？ 近衛隊が捜していたぞ。こんなときに一人でいるなんて……」

オーガスタはリラのもとに駆け寄ると、へたりこんだままの彼女に手を差し伸べた。立ち上がるも、女の両足はまだかくかくと震えている。

「だいじょうぶ……この人が、私を」

リラが振り向いたときには、そこに兵士の姿はもうなかった。

「火を放ったのは、旧女王派らしい」

沈痛な面持ちでオーガスタが漏らし、リラは下唇を噛みしめた。

「来たのね……つ、ついに……」

「大丈夫、落ち着いて」

リラを安心させるためか、オーガスタは彼女の肩を叩き、その目線に合わせ腰を落とした。

「私を殺しに来ただわ。わたしを……」

「私に、この暴動を鎮圧してくるよう命令しなさい」

視線を合わせようとしないリラに、オーガスタはきつく言った。

「命令するんだ、リラ！」

びくり、とリラの身体がかすかに動く。

「……………」

リラは、初めてオーガスタの存在に気づいたかのように、ようやく彼の目を直視した。

「オーガスタ……………」

彼女の震える口元が小さく動く。

「とめて……………」

「わかつている。私が、必ず止めて見せるから」

決然と言い切り、オーガスタは宙に手をかざした。彼の手の平が淡く光り、フブリは柱の後ろに隠れながら、息を呑んでそれを見つめた。

一瞬の出来事だった。瞬きをする間もなく、庭園の火は消え、煙はなくなり、温室に残されていた花たちは勝手に城内へ飛んでいった。転がっていた城壁の塊ですら、影も形もなくなっていた。見上げれば、何事もなかったように傷一つない城壁が高くそびえている。

「君はここにいなさい。すぐに兵をこちらに向かわせるから、ここでじっとしているんだ。いいね？」

リラは何も言わずに頷いた。

微笑むオーガスタの身体は徐々に透け、空に溶けこむように足元から青くなっていった。彼が今しがた消え去った虚空を、リラは座ったままじっと見つめていた。

フブリは走った。

移動魔法を使いこなし、一度に複数のものに『呼びかける』ことができる魔法使いを、初めて目にした。今の魔法使いが只者でないことくらい、魔法を使えないフブリにもわかる。

彼が言葉どおり旧女王派を止めに行ったとして、それは可能なのだろうか。多勢に無勢、と思いたいが、明らかに彼の力は常軌を逸している。

もし旧女王派の反乱が制圧されたら

「……………制圧、されたら……………」

何がどうなるというのだ。フブリは自問した。

リラを殺して、自分が国王になることができなくなる。恐らくそういうことなのだろう。

「私、王さまになりたいわけじゃ……」

しかし、なる義務はあると思っていた。バレッタ・コスモレドの娘である以上、国民のために、旧女王派のために王になるべきだと思つた。それが、母やシルヘットへの弔いになると信じて……。

真っ赤な絨毯の敷かれた長い階段を駆け下り、フブリはいつの間にか薄暗がりの中を走っていた。外に出るつもりが、地下まで降りてしまっていたのだ。

暗闇に目が慣れず、奥のほうはよく見えない。手探りで壁を探し、鈍い痛みを感じて慌てて手を離す。ささくれ立った木のテーブルに触れたのだ。木の破片が指に刺さっている。フブリが引き返そうとしたそのときだった。カチャ、と金属の擦れる音が聞こえた。

誰かいる。

それほど遠くないところにかすかな人の気配を感じる。フブリは迷つたが、外に出ても手をこまぬくことしかできないと判断し、奥に進むことにした。

緊張に喉を鳴らし、ささくれが刺さらないように注意しながら、テーブルの上を慎重に撫で回した。人差し指が冷たいものに触れる。その腹を撫で上げ、頂点の細い金具にたどり着いた。じっと目を凝らし、それが手持ちのカンテラであることを確認する。近くを探ると、簡単にマツチも発見できた。

灯りを点して、フブリは全身の毛が凍るような感覚に襲われた。

そこは、牢屋だった。

牢の数は半端でない。あまり手入れがされていないのか、フブリが触れると錆びついた柱の表面が簡単に剥がれ落ちた。ただ一つ救われたのは、そのどれもが中に人のいない状態であつたことだ。

白骨化したそれはおれども。

フブリは身を斜に構え、奥へ進んだ。足元を黒いものが走り抜ける。

「ひっ……」

咄嗟に足を避けると、その隙間を縫って、二匹のねずみが鳴きながら暗闇の奥へ消えていった。

「はあー……」

体中から気が抜けた。と同時に、カチャリ。物音が聞こえる。

「……だ……」

人の声だ。確かに、奥のほうから聞こえる。フブリは恐る恐る、カシテラを伸ばした。最奥の牢……だろうか。揺れる灯りの奥に、錆びついた鉄の格子が並んで見える。二本の足。声の主は、だらしなく足を伸ばして寝転んでいた。

「誰だ？ 夕飯はまだ早えぞ」

暗闇の牢にまるでそぐわない間の抜けた声が聞こえて、フブリは頬を紅潮させた。

「ツバル！」

先ほどまでの恐怖など忘れて、フブリは牢に駆け寄った。男は怪訝そうに眉をひそめて、目の前の甲冑を見つめた。

「何だ、オマエ？ ……その声、女？ ……フブリか!？」

フブリは何度も頷いた。頭の兜を外そうとするが、籠手が邪魔で上手くいかない。それはとりあえず諦めて、目前の錠前を外すことにした。しかし肝心の鍵は近くには見当たらない。

「待ってて、ツバル。今鍵を探してくるから……」

「フブリ」

腕をつかまれた。格子の隙間から、ツバルの手が伸びている。

「辛い目に遭わせて、ごめんな」

「な、何で、謝るの？」

ツバルは握る手に力をこめた。鎧に身を包んでいるから、そんな些細な感覚などわからないはずなのに、痛いくらい掴まれているように感じた。水風船が破けるように、唐突に感情のたががはずれる。

「あ、あれ……私、おかしいな……。哀しいことなんてないのにな……」

とめどなく涙があふれてきた。ツバルといるときは、何故か辛い気

持ちを押さえこめなくなってしまう。吐き出したいものが自然にあふれて止まらなくなる。不思議だ、とフブリは思った。

「鍵は三階の看守室にあるはずだ。……無茶はするなよ」

ツバルの微笑がまるで何年も見ていなかったように思えて、フブリは大丈夫、という言葉を発することすらできなかった。次々にこみ上げてくる感情の荒波を押さえることで精一杯だったからだ。

兜のせいで目をこすることもかなわなかったから、瞬きを何度もした。

「ツバル、待つてね。私が絶対、助けてあげるから！」
急いでもと来た道を引き返す。

壁を隔てた向うに聞こえていたはずの喧騒は、いつの間にか小さくなっていった。もしかしたら、先ほどの魔法使いの介入によって、旧女王派が負けたのかもしれない。

看守室には人つ子一人おらず、鍵は思いのほか簡単に手に入った。再度地下に降りてツバルを救出することも容易いことだった。フブリはツバルの手を借りて、重い鎧と兜を脱いだ。涼しさにほっと息をつくも、体中汗でベトベトになっていた。

「こうなってるってことは、旧女王派は攻め入ることに成功したんだな？」

「うん、うん……。多分……」

フブリは、リラを助けにやってきた魔法使いの動向が気がりだった。城内に兵がないのは、旧女王派の勢力に圧されているからなのか、それとも旧女王派を制圧してその後始末をしているからか。旧女王派にとって旗色が悪い状況だった場合、自分は一体これからどうすればよいのだろう。ツバルが傍にいることは心強いが、やはり多少の危惧も残る。

前を走っていたツバルが、フブリの動きを制す。彼は人差し指を立ててフブリに目配せをした。通路の角から、そっと視線を這わせ、彼が足を止めた原因に、フブリは驚いた。

「ルビー」

茶髪の少年。紛うことなき、ルビーの姿だ。フブリは駆け寄ろうとして、躊躇った。

少年はリラと対峙していたのだ。

「……あなたがフブリ・トリバンドラムを連れてきたのですね？」

「申し訳ございません……。ご命令どおり、できる限り、止めたつもりだったのですが」

少年はうつむいて答えた。

「そんなことはもうどうでもいいのです。あなたでは頼りないから、私わざわざ暗殺の刺客を送ったというのに、結局あの子はカラアに来てしまった」

小刻みなリズムで、リラの靴音が響く。苦渋に満ちた彼女の表情には少しの余裕も窺えない。

「やはりあれは、国王陛下が……！」

くぐもっていた声が、突然はつきりなものに変わった。ルビーは何か言いたげに口を開こうとして思い直し、そのまま黙りこんでしまった。

「あなたやオーガスタには、もう任せられません。オーガスタだって、フブリ・トリバンドラムがカラアへ来られないようにするという約束を破ったではないの！」

びくり、少年の肩が震える。

「リラさまは、フブリ・トリバンドラムを殺さないと言っていたではないですか……」

「殺さなければ、私が殺されます！」

リラの怒声が耳の奥に響く。

「見なさい、外を！ 旧女王派がいよいよ動き出したのです！ このタイミングで！ どういうことかわかりますか？ フブリ・トリバンドラムが彼らを導き、私を殺そうとしているのです！」

頭を抱え、リラは苦しげに息を吐いた。怯えた小動物のようなその瞳に囚われ、対峙するルビーは、びくりとも動かなかった。

リラが彼一人を残し、その場を去っても、硬直したまま動かない。
フブりは一歩、踏み出した。

「ルビー……？」

少年は、怯えたような目つきで、フブリを見つめた。

第五章 六

「うそだよ、ね……ルビー。嘘でしょ？ 冗談だよな？ ねえ、笑って、答えて……ねえ……」

ルビーの返答はなかった。頭を深く垂れたまま、何の動作も示さない。

「うそ……。ねえ、答えてよ……！ ルビー！」
いつもみたいに笑って。冗談だよって。
言ってよ、と呑みこんで体を震わせた。

気を抜けばすぐにでも涙があふれてきそうでもたまらない。意識が混濁し、冷静に状況把握をすることすらままならなかった。

色素の薄い茶色の頭が静かに上がり、ルビーはその物憂げな瞳を初めてフブリと合わせた。それはまるで、フブリを哀れんでいるかのような瞳だった。

「本当の、ことです」

鋭い衝撃がフブリの体中を走った。

まるで雷が直撃したような感覚に、硬直し立ちすくむしかない。

「だましていたんです、フブリさん。あなたを、ずっと」

ルビーの聞きなれない敬称が、更にフブリを圧迫する。これは、ルビーの自分自身に対しての免罪なのだろうか。

「う、嘘だあ……ルビーは私と一緒にずっと村にいたじゃない。カラアのことなんか知ってるわけない。そうだよ……ずっと小さい頃から一緒……だったじゃない……」

必死に笑顔を作ってルビーに対峙するも、彼の瞳があまりにも真剣なので、言葉がつかなくなってしまう。

「なんで……？ 何で国王の部下なんかになれるんだよお……！」
フブリはついに、喉の奥から悲愴な叫び声を上げた。それを皮切りに、こらえていた涙があふれ出して止まらなくなった。

見上げると、ルビーの冷ややかな瞳がフブリをじっと見つめていた。

その目が本当に別人のようで、フブリは恐ろしいやら悲しいやら胸がいつぱいだった。

すべてが、今この一瞬で壊れてしまったのだ。

つい数時間前までは、大切な幼なじみだった。同じ村で生まれ、同じ村で育ち、同じ時間を生きてきた。シルヘットの死も二人で乗り越えた。旅に出た後でさえ、辛いときも悲しいときもいつも傍に彼がいた。

唯一の心の拠り所だったルビーがいなくなるなど、フブリは今の今まで考えたことがなかった。

考える必要がないと、思っていた。

信じていた。

「どうして……!? 説明してよ、ルビー!」

フブリはいつしかルビーの胸を、固く握り締めた拳でがむしゃらに叩いていた。立ち尽くしたままのルビーの体がその振動に合わせて微妙に動く。

「どうして……」

弱々しく呟くと、フブリはそのままルビーの胸に顔を突っ伏した。震える拳が、力なく振り下ろされる。

「ぼくは、クイルビー・ヴォルケットじゃない」

はつきりと、耳を貫く衝撃。

フブリは、その言葉の意味を理解できなかった。

少年の胸に埋めていた顔を恐る恐る上げる。がんとしたルビーの表情が深く脳裏に焼きつき、痺れた頭から何かが体中を駆け巡るのを感じた。

「あ……あ、あ……」

フブリは頭を抱え、喉の奥から蚊の鳴くような声を発した。

ゆっくり意識が遠のいていくのを感じた。足の力が抜け、ふらつく。ぐらぐら揺れるフィルターがかった視界の奥に、ルビーを見つけて

手を伸ばすが、届かなかった。

目を閉じる。真っ白な意識の果てに、フブリは幼いルビーを見つけ
た。

手招きをするルビーの奥には、食事をしているルビーが、その隣に
は眠っているルビー……

『それ』は、思い出の中を駆け巡り、ゆっくりフブリの中に沈んで
いく。

「…………ルビー……………」
呟くと、前のめりに倒れこんだ。ツバルの腕が、素早くそれを支え
る。

フブリは、薄れ行く意識の中でルビーを見ていた。たくさんのルビ
ーが、暗闇に呑みこまれていく。その先は知っている。
いや、フブリは思い出したのだった。

「クイルビーじゃない、か……他人になりすますなんてことが魔法
でできるなんてな……記憶をすりかえたのか？ 大した魔法使いさ
まだ」

フブリを抱きかかえたツバルが、吐き捨てるように言った。しかし
ルビーは口をつぐんだまま、まるで微動だにしない。

「だんまりかよ。どうでもいいが、フブリの記憶は戻ったんだろう
な」

「…………戻りましたよ。ぼくが、クイルビー・ヴォルケットではない、
と自白したでしょう」

「それが、解呪呪文か…………」

ツバルは、何か考えるようにうつむいた。ルビーはそんなツバルを
見ようとしなかった。いや、正確には彼の腕の中のフブリを。深い
眠りに落ちた少女は、まだ睫毛を涙で濡らしていた。

「さあて…………お前には聞きたいことがたくさんあるがな。本物のク
イルビーはどこに行ったのかとか…………ま、どうせ国王陛下に口止め
されているだろーな」

言葉の一つひとつが突き刺さる。ツバルは誰が見ても明らかかなほどに、ルビーを蔑視していた。

「お前はこれからどうするんだ？ 大方フブリを監視していたんだろ？ フブリに正体ばれちまったら任務失敗だよなあ。国王さまを追っかけて彼女の靴でも舐めてるか？」

明らかに含みのある物言いに、ルビーは更にツバルから目を逸らした。

「お前は最低な人間だよ」

ルビーは言葉の重圧にひたすら耐えた。ツバルがフブリを優しく抱きかかえ、ゆっくり踵を返す。その後ろ姿を見送るルビーは、まるで魂の抜け殻のような顔をしていた。

ふと、ツバルの足が止まる。

「……ああ、忘れてた」

急に振り返られて、ルビーは体を強張らせた。

「お前の魔法……誰に習った？」

ツバルの鋭い視線に射抜かれる。聞きたいことは他にもあるだろうに、何故わざわざそんなことを彼が問うのか、ルビーにはわからなかった。

「何でそんなことを？ …… ツバルさんには関係ないでしょう」

「いいから教えるよ」

焦れたようにツバルは問い詰めた。ルビーは少し間を置いてから、彼に向き直った。

「……… オーガスタ……。 オーガスタ・ササンクロスという方です」

「……… それだけ聞ければ充分だ」

ツバルは言うや否や、ルビーに背を向け歩き出した。

ルビーはぼんやりその後ろ姿を見送り、歩き疲れた老人のように重たい腰を下ろした。頭の中は不思議と冴えていたが、恐ろしく重い足かせをかけられたような気分だった。

眠っているフブリの、あふれる涙が脳裏に焼きついて離れない。

「ぼくは、クイルビー・ヴォルケットじゃない」
ルビーは、確かめるように呟いた。

第五章 七

夢を見た。

幼い頃の、あの懐かしい村で生活していた頃の夢。

鮮やかな緑。優しい春風の音。まぶたの裏からでもわかる、暖かい陽射し。

カーテンがそよ風に揺れて擦れる音が聞こえる。

やがて自家製煮豆のスープの香りが、鼻腔をくすぐるはずだ。シルヘットのスープが世界一美味しいことを、フブリはよく知っている。フブリは、遠くに自分の名前を呼ぶ声に気づいて、目を覚ました。

「おはよー!」

重い目をこすりながら階段を駆け下りる。

「あら、今日は寝坊しないのかい？ 学校も休みなのに」
肩ほどの茶髪を片手で器用に結びながら、シルヘットはスープを卓に置いた。

「だって今日、シル……」

言いかけて、フブリは慌てて口をつぐんだが、その仕草は誰がどう見ても怪しかった。

「私は何だって……?」

「にやんでみよにやい……」

両頬を引っ張られながら、フブリは必死に弁解した。

「あんた、どうせまたなんか壊したんでしょ」

「違うもん!」

「どーだか。ああそうそう、こないだ壊した食器代出世払いでよろしくね」

「ぐっ……」

思わずスプーンを噛んでしまった。その話を持ち出されると、ぐっの音も出ない。

フブリは、こんな着飾らない性格の養母が大好きだった。物心つく頃には本当の母親でないことを聞かされていたが、血のつながりがあってもなくても、彼女は自慢の家族だ。シルヘットは、自分のことを母とは決して呼ばせなかった。それがフブリには少し不満であったが、今ではもう慣れてしまった。

フブリはスープ皿を流しに片づけると、外に出て『彼』を待った。シルヘットが、今日は農作業を手伝いなさいよ、と言っていたが今はそれどころではない。

彼はくたびれた自転車でのろのろとやってきた。

「もう！ ルビー遅いー！」

「ごめん、ごめん、と謝りながら少年は自転車を投げ捨てるように急いで降りた。

「院長先生が自転車を貸してくれたんだけど……こんなので」

院長先生とは、ルビーの暮らす孤児院の創立者だ。フブリも何度か会ったことがあったが、笑顔が優しく、でもどこか抜けた耳の遠いおじいさんだった。

「言っちゃあ何だけど、すごいぼろ……」

小声で呟き、二人は吹き出した。

「ねえ、ちゃんと用意してきた？ 早くしないと、シルヘットに気づかれちゃうよ」

「も、もちろん準備万端だよ」

ぼくを誰だと思ってるんだ、とルビーは胸を張った。

「フブリこそ、蛙なんか仕込んでないよね？ それはただの嫌がらせだから」

「なっ……確かに昔、シルヘットのベッドに蛙入れて怒られたけど……」

「あっ！」

突然ルビーが声を上げたので、フブリは咄嗟に姿勢を正した。

「な、何」

「シルヘットさんが行っちゃったよ……」

シルヘットが自宅から出てくるのが見える。彼女は毎朝、家畜たちに餌をやってから、近くの穀物貯蔵庫へ向かうのだ。

ひたすらおろおろしているルビーの襟首を掴むと、フブリは走り出した。

「どっ、どっしよっ」

「今走って行けば間に合うでしょ！　まあ、ルビーは本当に本番弱いんだからっ」

フブリは半ばルビーを引きずりながら、駆け足で貯蔵庫に向かった。中にはまだシルヘットの気配はなかった。どうやら先回りできたようである。

貯蔵庫は、村のお祭りに使ったリースの余りや近くで摘んできた花折り紙の星などで飾りつけが施されていた。辺りに穀物の袋やダンボールがあるのが何だかミスマツチだが、この際気にはいられない。シルヘットに気づかれずに行動することが最優先だったのだから。

そう、驚いてもらわなければ意味がない。

「シルヘット、誕生日おめでとう！」

シルヘットは、貯蔵庫を開けた瞬間クラッカーの音に目をぱちくりさせた。

「これプレゼントだよ！」

「ぼくが選びました。フブリは趣味が悪いので……」

「あつ、でも包んだのは私だよ」

ぼかんとしているうちに勝手に大きな包みを手渡され、シルヘットは大声で笑い出した。

今度は仕掛けた二人が目をぱちくりさせた。

「……あはは……おかしー。あんたら昨晚から何やってんのかと思つてたら……ふふ」

「ええーっ、気づいてたのお？」

くすくす笑ってシルヘットは頷いた。口を尖らせるフブリの頭を優しく撫でる。

「フブリもルビーも、ありがとう。本当に嬉しい」

シルヘットの笑顔につられ、フブリとルビーも顔を見合わせて笑った。

フブリは、シルヘットの笑顔が好きだった。この笑顔を目にするとき、自分たちはどこの家族にも負けなくらい幸せな母子だと感じた。

シルヘットがフブリを抱きしめたので、フブリは耳元に大好きだよ、と呟いた。

「私もよ……でもね」

シルヘットの口元が歪んだ。

「……でもフブリ、ここは違うのよ」

「え……」

突然のことにフブリがぼかんとしていると、シルヘットは消えた。腕が何もない空を掴む。

抱きしめていたぬくもりは、まだ腕の中に残っていた。

「シルヘット」

周囲を見渡しても、誰もいない。

「シルヘット……？」

フブリは突然大きな不安に襲われた。

「シルヘット！ ルビー！」

そこにはいつもの闇が待っていた。シルヘットも、ルビーもいない。ただ真つ暗な空間に、フブリは一人立っている。

「やだ……やだよ……!!」

フブリはがむしゃらに叫んだ。どこまでも追いかけてくる闇の中を走りながら。

「ひとりにしないでえ!!」

叫ぶと、フブリは真つ白なベッドに顔を突っ伏していた。

闇は消え去り、代わりに息を引き取った後のシルヘットがいた。自分の手を誰かが握っている。

その暖かさにほっとして顔を上げると、少年は切なそうな瞳でフブリを見つめた。

「ルビー……」

うん、とルビーは頷いた。

「大丈夫だ。フブリは絶対ひとりになんてさせないから。ぼくがずっと一緒にいるから……だから、もう泣くなよ」

フブリは、自分が泣いていたことに気づいた。片手でぬぐうと、繋いでいるルビーの手がかすかに震えていることにも気づいた。ルビーも、泣きたいのを必死でこらえているのだ。それが、これ以上自分を悲しませないためであることが痛いほどわかったから、フブリは強くその手を握り返した。

すると次の瞬間、右手の温かさが消えた。フブリは、隣を確認しようとはしなかった。

ルビーがいなくなったことはわかっていた。

やがて、暗闇がすべてを包みこむのだ。

“ここ”も違うの？

どこなの？

ルビー

どこなの？

ざあつ、と大きな風が吹いて、フブリは宙に飛ばされた。

そしてフブリは記憶の波に流され、ついに失っていた真実に到達した。

風が引いたと思うと、フブリは地に膝をついて座りこんでいた。フブリは、成長していた。というよりは、いつもの夢のように幽体のような存在で幼い自分を見ているのだ。夢と異なっているのは、宙から見下ろしていないことくらいだった。

さわさわ、と風に稲穂が揺れていた。金色の畑の中で、幼い自分がルビーと追いかけてっこをしている。沈みかける陽が美しい夕暮れだ

った。

フブリは懐かしい光景に心躍らせた。シルヘットが死んだ後、自分も孤児院に預けられてからは、ルビーは今まで以上に近い存在となった。毎日夜が更けるまでルビーと遊んだ記憶が蘇る。

フブリは歩き出した。幼い二人の影がだんだん近づいてくる。

幼いフブリはルビーの手を引いて、どこかへ行こうと誘っているようだった。

どこへ行くの？

それを見つめるフブリは幼い自分に話しかけた。しかし、その声が決して届かないことを彼女は知っている。これは、フブリ自身の記憶が見せる夢なのだ。フブリが幼いフブリに触れると、その手はまるで映写された虚像に触れたかのように、すりぬけた。幽霊のようだ、と苦笑する。

「何が怖いんだよ。ルビーの意気地なし。男のくせに」

「お、男とか女とか関係ないよ。そうじゃなくて、院長先生も村のみんなも言ってた。この森は危険だから近づくなかって」
どうして、忘れていたんだろう。

フブリは、目の森をぼんやり眺めた。毎朝登校途中に目にした、シルヘットの畑近くにある深い森。ここには、銀色に光る珍しい鳥がいると、図書館の本で読んだ。いつか、ルビーと二人で探検したいと思っていた。

そこまで思い出すと、幼い二人は足早に森へ駆けていった。

フブリは見えない糸を、その奥にある忘れ去った記憶を取り戻すために二人を追いかけた。その先に何かがあるのか、フブリは知らなくてはならなかった。

「もういいよ。私一人で行くもん。意気地なしはついてこないですよ。幼いフブリが单身森へ入り、ルビーが慌ててそれを追った。

「だめだってば！ もう、わかったから。ぼくも行くよ。でもその鳥を見つけたらすぐに帰ろう、ね？」

ルビーはしぶしぶ少女についていった。

ふいに、二人を追いかけたいたフブりは足を止めた。

この先に何かがあることを確信していたが、それだけに恐ろしさもあつた。フブりは胸に手を置いて深呼吸をし、唇をぎゅっ、と結んだ。ゆっくり息を吐き出して、また歩き出す。

幼い二人はまるでそこでフブ리를待っていたかのように、立ち止まっていた。フブ리가歩くと、それに呼応して二人の足も動き出した。「こうして印をつけておけば迷わないよ」

ルビーは幼い頃から利発な少年だった。小さなナイフで木に切込みを入れていく。

深い森を進み行く二人を追うフブりは、驚くべきことに気がついた。木が、動いたのだ。

自らの根を引き抜き、軟体動物のようにずるずると移動し、また沈黙する。こんな森で迷わずに帰れる人間などいるはずがない。そして二人はまだ、そのことに気づいていないのだ。

フブりはすぐに走り出し、彼らの前に立ちはだかった。戻って、この先に行かないで。

しかし、フブりの声は届かない。目の前に立っていても、彼らは自分の体をすりぬけていく。苦渋に満ちた顔で振り返ると、遠くに淡い光が見えた。

「すごおい……きれいだね……」

「本当に銀色だ……鳥のくせに」

光の中から現れた美しい銀の鳥は、幼いフブりたちの頭上をくるくる飛び回った。月の光が反射して、その姿は神々しく輝いた。いつの間にか、夕日は沈み、辺りは暗くなっていた。

フブりは、突然の恐怖に身を震わせた。

深い森……漆黒の空……黒い樹木と、そして……

それは、あの悪夢の中の光景だった。フブりは震える両手で、急速に冷えていく身体を抱えこんだ。下唇を噛み必死に閉口するが、かすかに歯ぎしりの音が漏れた。

「あれ……」

帰途に着こうとしていたルビーが、先導していた足を止めた。

「どうしたの？ ルビー」

「あれ……おかしいな……」

ルビーは不思議そうに辺りを見回した。

彼らが迷ったことは明白だった。やがて幼いフブリは状況を把握したのか、ルビーに代わり先頭に立ってどこへともなく歩き出した。空にぼつかりと浮かぶ満月が、ゆっくり彼らの影を追いかけた。まるで二人をあざ笑っているかのように、淡い光で足元を照らす。

「どうしよう……道がわからなくなっちゃったよ……」

「こんな小さい森で迷うわけじゃない。すぐに村に着くよ。それに暗くなっちゃったから、院長先生や村のおじさんたちが探しに来てるかもしれないし」

すっかり弱気になったルビーをなぐさめて、幼いフブリはどこまでも同じような樹木が立ち並ぶ道を、力なく歩いた。ずいぶん歩き回っていたため、二人の足の皮は擦りむけていた。

そのままじっとして！ 村の人たちが助けに来るのを待って……！ 聞こえないとわかっていながら、叫ばずにはいられなかった。二人の前に仁王立ちになり、必死に言葉を続ける。

あんたに何ができるの？ 無力なあんたに、この森を抜け出すことができると思ってるの？

しかし幼いフブリは、無情にも彼女の体をすり抜けてしまう。フブリは絶句し、立ちすくむ。

「ねえ、ルビー！ あれ見て、ねえ！」

通り過ぎた幼い少女の明るい声が背後から聞こえて、フブリは恐る恐る振り向いた。

「村……？ あれ、村だ……！」

二人が指差す先には、ぼんやり暗闇に浮かぶ光があった。歩き疲れて腰を下ろしていた二人は、頬を紅潮させて立ち上がった。

光……

光の、先は……

遠くにぼんやり光って見えるのは民家の明かり。フブリは、ついに気づいた。

ため

フブリは決して聞こえぬ奇声を発した。それはむしる悲鳴に近かった。

ルビーが光に向かって歩き出し、幼いフブリがそれを追いかけて……フブリは、それを眺めている。止めたいのに、足が動かない。

『私はまた、ひとりになるの?』

ルビーがぬかるみに足を滑らせ、あっ、と呟くフブリがそれを支えようとする。ルビーの体は引きずられるように、足元に広がる闇に呑みこまれるのだ。

『ずっと一緒にいてくれるって言ったじゃない』

村に面した深く暗い崖が、その谷底がルビーを

フブリは、彼に手を差し伸べた。二人のフブリが重なり手がむなしく空を切る。

わずかに触れた彼の指の感触すら、残らない。

『お願いだから……ひとりにしないで』

幼いフブリは、座りこんで呆然と谷底を見下ろした。

そこは、闇。何も見えない。ルビーはもういない。ルビーは……フブリは、膝をついた幼い自分を見下ろしていた。

やがて少女の叫び声だけが、森の中に空しく響きわたった。

闇が、すべてを呑みこむ。

ルビーが落ちた崖から広がる暗闇が、幼いフブリの幻影も、森も、すべてを呑みこんで消していく。

クイルビー・ヴォルケットは、即死だった。

幕間 - Interval

おれはバレッタに何度も言っただんだ。

だけど、あいつつてはおれを子ども扱いするし、拳句シルヘットとオーガスタにチクリやがった。

オーガスタだつておれよりちょっと年上つてだけなのにさ、何であいつばかりバレッタと仲いいんだろ。代々国王に仕える魔法使いだか何だか知らねえけど、くつつきすぎだよなあ。

そういえば、お前もこの間バレッタと話してたな。

でも、おれのほうが剣の腕だつてたつし、絶対将来いい男になる。そう思うだろ？

それでも相手にされないのは、やっぱり年下つてのがネックだからかな？ そればかりはどうしようもねえな。おれだつて好きで今十二歳なわけじゃないし。

ああ、こうやつて悩んでる間に、バレッタに男ができたらどうしよう。

知つてたか、クルージュ。バレッタの奴、今度ピー何とかつていう伯爵と見合いするらしいんだ。バレッタは美人だし、カラアの人気者だからな。言い寄る不届き者は多いつて話だ。

でも、おれは絶対反対してやるんだからな。おれを倒せるくらい強い奴じゃないと、あいつの旦那なんて認めないからな。

え？ そりゃ知つてるよ。バレッタが国のためにいずれ誰かと結婚しなきゃいけないんだろ？ おれだつて馬鹿じゃあるまいし、そんなくらい知つてるぜ。

だから言つてるだろ。

バレッタはおれと結婚すればいいんだ。

そこで、おれがバレッタを歴代カラアの王さまにしてみせるよ。つて、笑うなよ！

今は相手にされないけど、あと何年か経ったらさ、おれ絶対バレッ

タを嫁にする。

おれがバレッタの夫で、お前は軍団長、それに大魔法使いのオーガスタがいれば、カラアは無敵だろ。

約束だぞ。

絶対みんなでカラアを、バレッタを守ろうな。

第六章 一

十五年前、今でもはつきりと覚えている。

近衛の少年が止めにかかるのを振り払い、彼女を刺し殺した。

普段なら、ツバル・リアノーラが私ごときに負けるはずはなかったけれどそのとき私は、自分でも驚くくらいの素早さで、彼を振り切ったのだ。もう二度と、あのような力は出せないだろう。

姉は死んで、私は近衛の少年たちにその罪を着せた。

怖かったのだ。

これほど、恐ろしく感じたものはなかった。

姉を殺したことよりも、近衛が私の罪を白日の下にさらすことが怖かった。

しかし、私が王になって何か変わったかといえば、そうではない。

時間も、国も、民も、いつも通りに動いた。あえて言うなら、私が罪を着せた近衛の少年たちがいなくなったことくらいであろうか。

そう、姉の侍女も一人、姿を消した。

私は、何を期待していたのだろう。

いや、期待などないはずだった。

姉がいなくなれば何かが変わる、なんて陳腐な動機は三流だ。動機なんて下らない。後からそんなことを考えても、過ぎてしまったことは、もう変えようがないのだ。

私は、ただ怖くてたまらなかった。

人も、ものも、風の音でさえ、私を責め立てるように動くのだ。

姉の声が、毎晩耳元で囁く。

殺してやる、と。

私は焦っていた。

一刻も早く、ツバル・リアノーラとクルージュ・エーレブルーを捕らえなければならぬ。特に、ツバル・リアノーラは殺害現場の目撃者だ。王族である私と年端も行かぬ近衛の証言ならば、民衆がどちらを信じるかは決まっている。だが、慎重すぎるに越したことはないだろう。

疑いを持つ者が現れるだろうか。彼らはバレッタのことを心の底から敬愛していたから、まさか彼女を殺すはずがない、と。

落ち着け。今の王は私なのだ。王の言葉は絶対だ。私が罪人だと言え、彼らは罪人なのだ。

「陛下が賊に討たれたと……!?!」

「緊急事態だ！ 近衛兵は何をやっている!?!」

「国王陛下はどこだ!?! 傷の具合はどうなのだ!?!」

城内は恐らくこれ以上のものはないほど、緊迫していた。警備の整った魔法の王城。その最奥に位置する王の寝室に賊が入りこむなど、天地が引っくり返るのと同じくらい有り得ないことなのだ。兵たちはみな、焦りの色を隠せないようだった。事態の全貌が明らかでなく、今現在の混乱状態を收拾する王がそもそもいない。

だから、私は彼らに事件の詳細を伝えるため、慣れない演説をはじめめる羽目になった。騒然とした空気の中に、出せる限りの大声を響かせる。姉が深夜未明に殺害された。実行犯は寝室に身を潜めていたツバル・リアノーラで、クルージュ・エーレブルー、オーガスタ・ササンクロスの両名も暗殺に共謀した共同正犯である。 。 雑兵はともかく、近衛隊や軍団長の中には疑問を抱く者もいたようだが、それ以上に私を支持する声は大きかった。このような異例の事態の手前、とにかく一刻も早く城内をまとめ上げ先導する王が必要だったのだ。

「リラさま！ 罪人を捕らえました」

兵が小走りに駆け寄ってきた。その背後に、うなだれた灰色の頭を見つけて、私は息を呑んだ。

「オーガスタさま、こちらへ……」

兵も、罪人とはいえ彼の扱いには困っているのだろう。両手を縛ってはいるが、彼を捕らえたというよりは地下牢へ案内しているように見える。オーガスタは由緒正しい大魔法使いの末裔であるから、重い刑罰を受けさせることはできない。だから、他の二人の近衛とは扱いが異なるのだ。

少年は、私のほうを一瞥しただけだった。叫び喚いて抵抗するかと思いきや、そうではない。彼は理不尽な捕縛を受け入れていた。

昔から、よくわからない男だとは思っていた。私より一つ年上だったから、小さい頃は彼と遊ぶように侍女たちから勧められることが多かった。けれど、私は彼と遊んだことは一度もない。ツバルやクルージュに比べると、あまり活発なほうではないし、どこか冷めたような少年だったと記憶している。そう、冷めた目で、よく私を見つめていた。どこか人を蔑視しているような目で

あの目と同じだ、と思った。

軽蔑しているのだ、彼は。私を。

「それで、他の二人の近衛は見つかったのですか？」

私は下唇を噛みしめながら、慌しく城内を走り回る兵士に問うた。

「い、いえ……。それが、どうも次元の穴を通って国外へ逃げた可能性もあると……」

それは私の予想通りだった。あの優秀な近衛たちならば、そうするだろうと思っていた。そのままどこかへ逃げて、二度とこの国へ戻って来なければいい。捕らえて罰するよりも後が楽だ。

「それから、国王陛下のご遺体を、シルヘット・トリバンドラムが持って逃げたという報告も入っています」

シルヘットは姉の側近中の側近だ。歳も近く、まるで友達のように姉と接していたのを覚えている。

「陛下の侍女ですね？ ……わかりました。引き続き、搜索を」「はっ！」

兵たちは背筋をピンと伸ばし、敬礼して去っていった。

窓から差し込む朝日に目を逸らし、私は一つため息をついた。昨夜、姉の寝室に入ってから今まで、一睡もしていない。

姉を殺した日にも、変わらず朝日は昇るのだ。姉が死んだことなど、世界はそ知らぬふりで回り続ける。それが何だか可笑しくて、私は笑いながら地下へ降りた。

地下牢はひんやり冷たい風が流れて、気味が悪い。銀の騎士となる囚人たちを横目で流しながら、足早に進む。ここはあまり好きな場所ではない。

奥の牢に、オーガスタは収容されていた。彼は座ったまま、ぼんやり薄暗い壁を眺めていた。私の足音が聞こえても、ぴくりとも動かない。まるで人形のように、そこに佇んでいた。

「オーガスタ」

男は、沈黙したままだった。

「私に何か言いたいことがあるのではないですか？ オーガスタ・ササンクロス」

私は少しだけ苛立った。状況もわからず冤罪を着せられて黙っている、この男の心理がわからない。

「姉さんは死んだわ」

その訃報を、彼は瞬き一つせずに聞いていた。

「バレッタ……」

オーガスタは、はらはらと涙を流して見せた。

同情を煽ろうというのだろうか。油断はできない。

「あなたは、姉さんを殺した罪人ということになっている」

「……………」

やはり、目立つ反応はない。激昂して噛みついてくれれば、どんなに私も気持ちになるか知れないのに。

「何も言わないのね。そうやって、私を馬鹿にしているの？ 姉を殺した愚かな女と思って、軽蔑しているの？」

私は早口に言った。

「……………」

「何とか言いなさい！」

しかしオーガスタは、いつまで経っても口を開かなかった。ただ、虚ろな瞳から涙を流すばかりであった。私はわななく拳をきつく握り締めた。大声を出すと震えが止まらなくなる。

「いいわ……それなら好きなかだけそこにいるといい」

私は踵を返して階段を上った。途中、何度かオーガスタを振り返ったが、彼は私のことなど気にも留めず、薄暗い壁をじっと見据えていた。苛々した。

あんな男のことなどどうでもいい。

牢に閉じこめておけば、何もできない。王城の牢は、すべての魔法を封じる力が働いている。更に、城門、城壁に至っては誰も侵入・脱出ができないように移動魔法を禁じる術がかけられている。どんなに偉大な大魔法を作ったという大魔法使いの末裔でも、あそこから抜け出すことはできない。

私は、はっとして足を止めた。

そう、大魔法。

カラアの王は、大魔法を保管する役目がある。そして、それを大魔法使いが護る。大魔法がなければ私はカラアの王たる資格がない。私は、城の書庫で古い文献を調べた。

「大魔法は……どこ？」

天まで届きそうな書棚の隅から隅まで目を走らせ、私はそれを探した。

片手に余る分厚い本を幾つか見繕い、閲覧室の椅子に腰掛ける。ポツリ、水滴がめくるページの隙間に落ちた。いつの間にか私は汗を掻いていた。

「……大魔法は、次代の王が即位する際に、自動的に受け継がれる。即位式で王から直接受け取るか、または現在の王が死亡すると同時に……」

私は、音を立てて本を落とした。

「あなたは知っているのよね!？」

オーガスタは、目を丸くして私を見つめた。地下へ駆け下りるや否や、勢いよく格子に掴みかかった私に驚いたのだ。きっと私は今、とんでもない形相でいるのだろう。

「大魔法って一体何なの!？」

「……知らないのか？」

「そうよ……!」

喉の奥から必死に絞り出す。私は勢い余って牢格子を叩いた。

「それは、つまり……」

「姉さんが生きていたということよ!」

ガシャン、と格子が鳴った。オーガスタは私の剣幕に驚いたのだろうか。それともバレッタが生きていたという事実を驚いたのだろうか。目を据えたまま動かない。

「よかつたわね……あなたたちのバレッタが、きっとそのうち大魔法を使って私に復讐しに来るわ」

言葉にすると、その事実が重く押し掛かって、私を押しつぶしてしまふそうだった。心臓が壊れそうなくらい鼓動を打つ。

「私を殺しに来るわ!」

ガシャン。格子が鳴って、沈黙が落ちる。一瞬の静寂が、とても長いものを感じられた。

オーガスタは何も言わない。

その沈黙が、恐ろしくてたまらない。血の気が一斉に引いていく。

「……リラ……。私を、解放してくれないか？」

口を開いたと思いきや、男は真剣なまなざしを私に向けた。

「何を、言ってるのよ……あなた自分が何を言っているのかわかっているの？ 私に不利な証言をするあなたを、私が解放するわけないじゃない」

思わず笑ってしまった。口元が震えながら不自然にほころぶ。

「私は、君の味方になる」

けれど、オーガスタは瞳を逸らさなかった。揺らぐことのないその瞳が、私を射抜き、心臓までも貫いてしまふそうだ。

「何……言ってるの……」

「君を、バレッタから守ろう」

この男は、バレッタの近衛だ。王に仕える大魔法使いだ。自分の主人を殺した女を守る？ そんなことができるはずがない。何かを企んでいるのだ。ここを抜け出して私に復讐しようと考えているのだ。信用できない。信用できるはずがない。

頭の中で警鐘が鳴り響く。私はくらくらする意識を必死に保った。

「わ……わかったわ……」

次の瞬間、私は男にそう答えていた。

予想外のことはかりを言うオーガスタに、私はどう対処していいかわからないのだ。何もかもを見透かしたような彼の瞳が、突き刺さって痛かった。

手元が震え、鍵がなかなか入らなかった。オーガスタはじっと、私の震える手を見ていた。観察するように、私という人間を暴くように。

こうして、私はオーガスタを毎日の監視つきで城に軟禁した。

私が彼を解放したのは、きつと怖かったからだ。

一人でいるのが怖かった。誰か、自分を肯定してくれる人間が欲しかった。そう、彼は私のそんな気持ちを知っていて、『味方』になったのかもしれない。オーガスタは聡明な男だ。そうやって、今は私の味方になった振りをし、バレッタと共に復讐する機会を窺っているに違いない。

だから、ある日オーガスタが監視を逃れ、城内から消えても私はさほど驚かなかった。

「そう……オーガスタが、逃げたの……」

私は、監視していた兵の報告をぼんやりと聞いていた。

旧女王派が手引きしたのだ。

最近、噂を聞いた。バレッタを慕う民たちが、『旧女王派』という名で秘密裏に集まっていると。それにはツバルやクルージュも関わっているという話だ。バレッタの死に疑問を持ち、私を疑う者たち

が反旗を翻そうとしているのだ。

『私は君の味方になる』

その言葉を、私は反芻した。

彼が逃げたとなれば、私の罪が白日の下に晒される可能性が高くなる。しかし、不思議と彼の逃亡に焦りを覚えることはなかった。怒ることもなかった。

ただ、虚しくて仕方がなかった。

真相を知るものは、もうこの城には私しかない。心のどこかにぽっかり穴が開いて、そこを隙間風が抜けているような感覚だった。それが、とてつもなく虚しかった。

しかし、オーガスタが消えてから一ヶ月。私がいつものように温室のプリンターを移動させていると、彼は突然風の中から現れた。

「ただいま、リラ」

男は、至極自然に笑って見せた。まるで何年もそうしてきたように、私に微笑んだのだ。

「何故、戻ってきたの？」

私が鋭く言い放つても、彼の笑みは消えなかった。

「私は君の味方だから……」

第六章 二

殺してやる

私は背後を振り返った。しかし、そこには誰もいない。

声なき声が囁き、私を責め立てる。

「もう、やめて……姉さん……」

私は必死に耳を塞いだ。塞いだところで意味がないのはわかっている。そんなものでこの声が消えたことは一度もない。きっと彼女は死ぬまで私を追いかけてくるのだ。

「陛下！ 大丈夫ですか!？」

ベルイヤールが駆け寄ってくる。私は彼女の手を借り、ようやく寝台から降りることができなのだ。

これが、バレッタ・コスモレドがいなくなってからの私の毎朝だった。

大魔法とは何なのだろう。どんな風に私を殺せるものなのだろう。

身を一瞬で焼き滅ぼす炎か。それとも、何の痛みもなく私という存在を消してしまう魔法か。

気づけば、そんなとりとめもないことを考えている自分がいる。オーガスタが戻ってきてから、私の精神はどこか狂ってしまった。オーガスタを監視しているというよりは、私が彼に監視されているような錯覚さえ覚える。彼の目はバレッタの目であり、バレッタが私を殺そうと思っっている限り、彼もまた私の命を狙っているのだ。

怖い。怖くてたまらない。

「……ラ……」

誰かの声が聞こえ、頭を上げる。

「リラ！ 何をしているんだ!」

「……オーガスタ」

目の前には、見慣れた男の顔。

複数の声が聞こえる。誰かの叫び声　こちらに駆け寄ってくる侍女たちだ。ものすごい形相で近づいてくる。

停止していた感覚中枢が急に動き出す。冷たい。一度そう思うと、途端に体中が凍るような寒さに襲われて、私はたまらず両腕を抱いた。

腕が濡れている。腕だけではない。よく見れば、自分は頭からつま先までびしょ濡れだった。冷水が空から降ってくる。

「私……」

オーガスタはシートでくるんだ私を促し、『そこ』から遠ざけた。轟音が耳をつんざく。

ひどい雨音だ。そう、今日は朝から土砂降りだった。

ようやく私は自分が雨に打たれていたことに気がついた。何時間外にいたのだろう。ぼんやりしていたから気がつかなかった。私は彼に半ば引きずられながら、城の中へ入った。湯に浸かり着替えると、冷えた体が芯から温まるのを感じて私はほっと息をついた。

ベルイヤールに促され自室に戻ると、男が腕組みをしたまま立っていた。ずっと待っていたのだろうか。彼の頭はわずかに濡れ、衣服から水滴が落ちてるのが見てとれた。

「何故、あんなことをしたんだ」

オーガスタはきりり、と眉根を寄せてみせた。その思いのほか冷たい声に慄いたのか、暖炉に薪をくべていたベルイヤールがこちらを一瞥して、そそくさと出て行った。

「わからないわ……」

私はやはりぼんやりとベルイヤールの後ろ姿を目で追った。

「君の身体は君一人のものではないんだ。君は国王だ。国民を守る王だ」

真剣に言う男が何だか可笑しくて、私は口元を緩めた。

「じゃあ、あなたが王になればいいじゃない」

瞬間、鈍い痛みを感じた。

乾いた音が高い天井に反響して、広い室内に響き渡る。

私は、何が起きたのかを把握するまでにしばしの時間を要した。じわりと戻ってくる頬の痛みに気づき、そこに触れてみる。私の頬はわずかに熱を帯びていた。

「ふ……あはは……はは……っ」

何故か笑いがこみ上げてきてたまらなかった。オーガスタの苦渋に満ちた表情が、それを更にかき立てる。

「やっぱり……！　そうよ、それでいいのよ。オーガスタ！」

叫ぶと、肩から荷が落ちたように急に気持ちが悪くなった。私は、こうなることを望んでいたのだ。

「リラ」

男が、私に手を伸ばしてくる。私は躊躇いもせず、それを弾き返した。オーガスタが一瞬たじろぎ、私はその隙を見逃さなかった。

「早く殺しなさいよ！」

拳を握り締めて喉の奥から絞り出した。次第に感情のたがが外れ、エスカレートしていくのが怖いほどわかる。

「あなたの主人の命を奪った女よ！？　あなたが世界で最も憎い女よ！」

もう止まらなかった。

このままでは言いたくないことまで口にしてしまう。
言いたくないことまで……

「くるしいのよ……！」

オーガスタが目丸くした。私が人前でこんなことを漏らしたことがなかったからだ。自分の弱みを曝け出すような真似だけはしないようにと、細心の注意を払ってきた私が、初めて弱音を吐いたのだ。だが、もうどうでもよかった。

苦しい。

苦しい。

苦しい。

「もう……殺して……！」

憂いに満ちた男の顔が、崩れ落ちた私を覗きこむ。同情しているの

か、それとも蔑んでいるのか。
静寂の中に雨音だけがうるさく響き渡った。
その中に、聞き覚えのある女の声を聞いた気がして、私は目を見開いた。

殺してやる

初めは空耳かと思った。

しかし、その声は雨音のリズムに合わせて絶え間なく耳元に囁かれる。

「ひつ……」

周囲を見渡す。誰もいない。けれど、どこからか声が聞こえるのだ。歯の根が合わなくなつた。オーガスタの顔がぼやけてよく見えない。視界が霞んできたのだ。私はよろめき、痛みとともに何かが転がる音を聞いた。暖炉脇の椅子にぶつかつたのだ。しかし、それに気づいたとき、私はすでに地に膝をついていた。

私が後ずさりすると、オーガスタは異変に気がついたのか、ゆっくりと近づいてきた。

「リラ？」

「いつ、いや……！ もう許して！ ゆるして……」

私は頭を抱えて小さく丸まった。

バレッタがやって来る。私を殺しにやって来る。

「リラ、どうした！？ リラ！？」

私の肩を痛いくらい掴んで揺さぶる男のことなど、もう気にならなかつた。

「声が聞こえるの……！」

「声？」

「殺しに来るの……！ 私を殺しに来るのよ！」

眼を閉じると姉の姿が鮮明に浮かび上がり、私は慌てて目を開いた。

「お願い……お願い……来ないで……！ 怖い……」

私は次第に声のトーンを落としていった。叫べば叫んだだけ、恐怖は背後から押し寄せてくるからだ。

「大丈夫、誰もいない。リラ、誰も君を殺そうなんて思っていない」
私は、涙目でオーガスタを見上げた。彼の表情は見えない。ただ、薄暗くぼやける輪郭が小刻みに動くばかりだ。

「怖い……怖い……」

「だいじょうぶ……」

思いのほか大きい、その男の胸に顔を埋め、私は泣いた。濡れたままの彼の服は、雨の匂いがした。せつかく湯浴みをしてきたばかりなのに、また濡れてしまう。何故か、そんな考えが浮かんだ。安心したのかもしれない。

人の体温は不思議だ。先ほどまでの恐怖が嘘のように、落ち着いていくのがわかる。今このときばかりは、オーガスタから離れたくなかった。彼の体温を感じていたいと思った。

声が消えていく。

波が引くように穏やかな感覚を覚え、私はそつと目を閉じた。

翌朝になって、私は前日の醜態をひどく後悔した。

自分に仇なす存在であるかもしれないオーガスタに、弱みを見せるような真似をし、挙句彼にすがりついたのだ。その事実にもいわれぬ怒りを感じ、私は下唇を噛んだ。

温室で花たちに水をやってみるも、そのことが頭のどこかについて回る。

思い出したくもない。私は大きく首を横に振って、その事実を揉み消すように黙々と作業を続けた。

「おはよう、リラ」

怒りの矛先を向けてやりたい男がやって来た。

「出て行って。あなたの顔なんて見たくもない」

私は彼の顔を見ることもせず、背を向けたまま呟いた。

「ひどいな。せつかく手伝いにきたのに」

「いらないわ」

今度は向き直って、ぴしゃりと冷たく言い放つ。オーガスタは苦笑して肩をすぼめた。

「これだけの種類、よく育てられたものだ。ここにはよく来ているみたいだね」

昨日のことで、私が心を許したとでも思っているのだろうか。馴れ馴れしい彼の口調が不快だった。

「落ち着くの。ここにいと」と

早く出て行って欲しかったから、私は早口で言った。私だけの温室に、誰かが足を踏み入れることがたまらなく嫌だ。しかし、私の気持ちなど看取できないその男は、無遠慮に私の花園に押し入ってきた。

「これは菊？」

「『都忘れ』よ」

私は苛立ちを抑えながら、言い捨てた。

「へえ……」

「昨年から種つけをはじめたの。一緒にはじめたクレマチスがあまり育たなかったから……これはちゃんと育ててあげたくて」

オーガスタがあまりにも感心したように頷くものだから、つい要らぬことを口にしてしまった。

私がひと際大きなプランターを動かそうとして苦戦していると

「運ぶよ」

オーガスタが脇から手を出し、軽々と持ち上げてしまった。あ、と呟くも、もう遅い。オーガスタに手伝ってもらうなど決して気分のいいものではなかったが、私は渋々彼にプランターの移動場所を教ええた。

「今朝もうなされていたらしいね。身体の調子はどうか」

運びながら、男はごく自然に問うた。

私の精神状態を探ろうとしているのだ。やはり昨日、あのような姿を見せるべきではなかった。

「私は病気だわ。自分でわかるもの」

「そう自分を否定するものじゃない。君は健康だよ」

オーガスタが微笑み、しかし私はそれに反して顔を歪めた。

「じゃあ、はつきり言って、オーガスタ。私は王には向いていないと。『旧女王派』の一人として私を失脚させてやりたいと」

「リラ……どこでそんなことを？」

私のはつきり言っても、彼は慌てることさえしない。ただ、少し驚いたように口を開くだけ。その態度が私は嫌いだった。私のすべてを見透かして、心のどこかで蔑んでいるのだ。

「わからないとも思ってた？ そうよね、そんなバカな王だから操りやすく助かるわよね。いつでも旧女王派に会いに行きなさいよ。私に拘束されてるなんて、本当は私にはそんな力はないもの！ あなたは自由にどこへでも行つて、いつでも私を裏切れるじゃない！」

オーガスタは変わらない優しいまなざしを私に向ける。私がいくら激昂しようと変わらない。いや、すればするほど彼は冷静になっていく気がした。

癩癩を起こす子どもをなだめるように、オーガスタはうつむく私を覗きこんだ。

「私は裏切らない。旧女王派という一派が一部の国民に存在しているという話は聞く」

「白々しいわ」

私は鼻で笑った。

「リラ、疲れているんだろう？」

「やめて！ もう誤魔化されないわよ……！」

「私は君に従う。私は勝手に外には出ない……。約束は守るよ」

「嘘つき……。やめてよ……」

オーガスタは変わらず微笑んでいた。

「さあ、部屋へ戻ろう。風が強くなってきた」

「この城に……何人いるの……？」

オーガスタは、何を、とは問い返さなかった。

「わからない。けれど、声を張り上げて活発に表で動いている人間はもういないだろうね」

「……どうしてあなたはここにいるの？」

その問いは、私の意思に反して勝手に滑り出た。あまりにも弱々しく口をついて出た言葉に自嘲する。

「君の味方だからだ」

「本当のことを言っつて」

間髪入れずに言い返す。

信じられない。信じられない。警鐘が鳴り響く。

「……君を助けたいんだ、リラ」

オーガスタは、瞬き一つせずに私を見つめた。

「どういう意味……？」

「そのままの意味だ。リラ、私たちは幼い頃滅多に話すことはなかったね」

その視線をゆっくり地に落とし、彼は瞳を閉じた。

「私は君を知ろうとしなかった。だから今、知りたいと思っている信じられない。信じられない。」

「君の苦しみを、少しでも知りたいんだ。そしてそれを和らげるすべを、一緒に考えよう」

手を握られ、その温かさに私は脳髓が蕩けるような感覚を覚えた。

信じられない。裏切るかもしれない男だ。バレッタとともに、私に復讐しようとしている男だ。

「私と一緒に、やり直そう」

涙があふれた。

何かが奥底からこみ上げ、胸がいっぱいになった。信じてもいいのだろうか。

もし、本当にやり直すことができるなら、私は

第六章 三

私はいつものように、広い食堂で遅い朝食を済ませた。

散歩がてら温室の様子を見てこようとぼんやり歩いていると、若い娘たちのおしゃべりが聞こえた。書庫近くの一室であった。

それは、侍女たちの下らない世間話だった。毎日のように耳にするのが、よく他人の話でそこまで盛り上がるものだ、といつも思う。

「えーっ、あのオーガスタさまが？」

そのまま通り過ぎるつもりだった私は、足を止めた。オーガスタも話題に上がることがあるとは、何だか彼の人間臭い一面をみたような気がして可笑しかった。

私は、こっそり扉に耳を傍立ててみた。他愛ない世間話も、オーガスタのこととなれば自分には有益な情報となるかもしれない。

「本当だって！ 私見たんだもの。厨房裏の倉庫……あそこで毎晩、真夜中に女と逢引してんのよ」

思わず吹き出してしまいそうになった。有益な情報なんてとんでもない、やはり下らない噂話だった。

「でもそれって、相手誰よ？ 人目忍んで……ってことは同僚の誰か？」

しかし、ふと考えてみる。それは、逢引ではないのではないか……。たとえば『旧女王派』と呼ばれる組織の人間が密かに侵入していて、オーガスタと会っているとしたら？

そうだとすれば、深夜の密会にも合点がいく。

「この間武官の側仕えに入った新人の子、怪しくない？ あいつ城中の男という男に片っ端から色目使ってるのよ」

「案外、陛下だったりして！」

「うっそ禁断の恋！？ 密通！？」

会話の流れにさすがにいたたまれなくなり、私はその場を去った。オーガスタが……。

私は、胸に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。もしかしたら今まで私の頭の中でのみ作られていた彼の裏切りが、本当のものになるかもしれない。

私は唇をかみ締めた。

そうかもしれない。違つかもしれない。またいつもの、私の勝手な思い過ぎかもしれない。私は何度も自問自答を繰り返した。彼は味方だ。なのに何故、こんなに不安になるのだろうか。

私の体は震えていたのかもしれない。自室に戻るとベルイヤーが驚いて、風邪をお引きになりましたか？ と訊いてきたのだ。

私は、馬鹿馬鹿しいという思いと、確認しなければという思いの板ばさみになった。

もう、あの事件の日から十年の月日が経った。オーガスタは私の味方で、私の政務を助けてくれている。私は大魔法使いである彼に支えられ、国王として何とかここまでやってこられたのだ。それを自らの安易な想像で壊してしまうことは、あつてはならないと思う。信じている。だからこそ……。

その夜、私は迷わず倉庫へ向かった。

厨房裏の倉庫小屋は、昼間であつても人気はない。私自身、子どもの頃に一度探検したことがあるくらいで、滅多に足を運ぶことはなかった。周囲に明かりもないため、昼ならまだしも夜中などは誰も近寄らないだろう。

倉庫の中に人気を感じて、私は息を凝らした。

立てつけの悪い扉の隙間から淡い明かりが漏れている。誰かが中にいるのは確かだった。

聞き耳を立てるが、声は聞きとれなかった。そこで私はぐるりと裏手に回った。どこかに窓がないかと考えたのである。相手が自分の臣下であるとしても、真正面から扉を堂々と開け、中に入る勇氣はなかった。

残念ながら窓はなく、私は困り果ててもう一度入り口に戻った。そのとき、突然中の明かりが消えた。

私が驚いて近くの茂みに身を隠すと、扉が開いて二つの人影が出てきた。何かを話していたようだが短かったので聞き取れなかったし、人物の顔も暗くてよく見えなかった。

そのうち一人は足早に城内へ戻り、一人はまた小屋の中に入っていた。

二つの影が消え、しばらくして私は倉庫の前に立った。

私は息を殺し、ノブに手をかけた。

しかし 勢いよく引いたのだが 扉は開かなかった。私は、呆然として扉を眺めた。開かなかったことにはがっかりしたのではない。これで、密会していた人物がオーガスタである確率が高まってしまったのだ。

そのドアには、魔法がかけられていたのだから。

翌日は、侍女に就寝の準備を早めてもらい、ベッドに入る素振りを見せてからすぐに倉庫へ向かった。

それでももう二十二時を回っていたが、まだ倉庫に灯りは点いておらず、今日は先回りできたようだった。ほっと息をついて、慎重に小屋全体を見回してみる。明かりがないため不便だったが、じつと小屋を見つめているうちに目が慣れてきた。

私とその木目にほんの小さな隙間を見つけたとき、彼はやって来た。慌てて木陰に隠れる。

私は、今度は間近に彼を見て、ついに確信した。

その男は、紛れもなくオーガスタだった。

驚く間もなく、彼は小屋へ入り戸を閉めてしまった。淡い灯りが扉から漏れる。私は急いで木目の隙間に耳を傍立てた。未知の会話に興奮するも、オーガスタが何者かと密会していたという現実が妙に私の胸を締めつけた。

信じていたのに……。

私は、落ち着かない胸の痛みを必死に抑えていた。彼らの会話に集中しようと思えば思うほど、自分の鼓動がそれを邪魔した。

「……………そう、フブリ・トリバンドラムは娘だ……………」

オーガスタの声だ。

「シルヘット・トリバンドラムが田舎で彼女を育てていた。フブリはバレット王国王陛下の實の娘であり……………」

瞬間、体が自然に小屋から離れた。私は口元を押さえたまま、駆け足でその場を去った。

もつと話を聞けばよかった、などという考えは浮かばなかった。とにかくその場から逃げたい衝動に一心に駆られていたのだ。

私は、恐ろしかった。

寝室に戻り、シーツを被ると恐怖がやってくる。

十年、私は我慢したではないか。何故また今頃になって戻ってくるのだ。

お前も殺してやる

耳元に声が聞こえた気がしたが、振り返っても誰もいないことはわかってる。私は、震えの止まらない体を精一杯丸めて縮こまった。頭までシーツを被り、固く目を瞑った。

殺してやる

姉さん、いつまで私を苦しめるの……………？

オーガスタ・ササンクロスの外出は、計画的に秘密裏に行われた。リラの監視の目は、ここ最近はやや緩いとはいえ油断はできない。彼女の精神はとても脆く、傷つきやすい。オーガスタの行動一つで、リラがまた昔のように心を閉ざしてしまうことも十分考えられるのだ。城内に潜む旧女王派の協力の下、真夜中にオーガスタはカラアを抜け出した。彼ほどの魔法使いともなれば、瞬間的に移動することくらい容易い。風に魔法をかけるのだ。人工物ならある程度習熟した魔法使いであれば誰でも呼びかけられるが、自然物に呼びかけられ

る魔法使いはそうそういない。

カラアの城壁は魔法を無効にする力が働いている。そのため城門を出なければ、移動魔法は使えない。だから旧女王派の手引きがどうしても必要だった。また、国外へ出るには大樹の根をくぐって空間を飛び越えなければならぬため、その場所までの移動である。

カラアへの入り口が唯一残されている、『最果て』という名の皮肉な村に彼は下り立った。バラックのような粗末な造りの小屋には、先客がいた。

「遅かったか。やはり私が最後だね」

「オーガスタ！」

感極まった様子の二人の男たちは、オーガスタが戸を閉める間も許さず彼を抱きしめた。

「落ち着けツバル！ 変わってないなお前は……」

「はは……、本当に久しぶりだ！」

「ばんばん、と背中を叩かれオーガスタは苦笑した。

「お前のことは本当に心配だったんだ。なあ、ツバル」

スカートを完璧に穿きこなしている青年は、オーガスタから先に離れた。ツバルは頷き、腰掛けると肩の辺りまでの金髪をもどかしそうに掻き揚げた。

「私も心配していた……。お前たちは……。弟みたいなものだからね」

オーガスタも椅子に座り、微笑んだ。

「何だか、昔の時間が戻ってきたみてえだなあ……」

「おれとツバルは何度か会えたけど、三人揃うのは十年ぶりか……」

「二人が無事でよかった。クルージユが最果てにいと聞いたときは気が気じゃなかったけどね」

クルージユは、歯を見せて笑った。その様子に、オーガスタはほつと息を吐いた。彼の恋人が大樹の生贄にされたという事実をオーガスタは知っている。しかしこの様子からすると、自分が心配することとは何もないようだった。

「この女装趣味のおかげで助かったわけだな。今じゃバレッタでも

俺だとわからないかも」

確かにクルージユの女装は、十年前に比べると遥かにレベルアップしている。化粧もナチュラルかつ巧みで、彼を知らない人物はまず女性と信じて疑わないことだろう。

「それで……」

ツバルはわざとらしく言葉を切った。

「リラはどうしてる？」

一瞬で空気が重くなる。三人は身を硬くした。

「……変わったよ。当時は少しのことでも混乱して癪癪を起こしていたが、今は落ち着いている」

オーガスタは慎重に言葉を選んだが、ツバルは不満そうに眉を吊り上げた。

「そう簡単に変われるもんかよ」

「ツバル、人は変わるよ。リラは……」

「お前、何の話をしてるんだ？」

クルージユが訝しげに表情を歪め、言葉を遮った。

「リラが変わったかなんてどうでもいいだろう。おれたちはそんなことのために、この十年間隠れてきたのか？」

「しかしこれは大事なことだ」

「オーガスタ」

クルージユは静かに首を横に振った。

「リラはバレッタを殺した。忘れたわけじゃないだろう」

「だが……」

口ごもるオーガスタを横目に、クルージユは分厚い封筒を取り出した。オーガスタはそれをぼんやり眺めた。

「私の手紙を、読んだんだな？」

「ああ。最初は、バレッタが死んだなんて信じられなかった。だが……まさかあのとき身ごもっていた子を出産していたなんて……正直それだけが救いだっただよ」

「シルヘットは養母としてフブリを養っていたが、一年前に病死し

たらしい。フブリは私が見た限り、とても健康そうな可愛らしい少女だったよ。バレッタと同じ銀の髪に翠の瞳をしていた」

「それでな、実は……」

雰囲気が和らいできたのを感じて、オーガスタは、自分が最近王城に連れてきた少年について話そうと思った。しかし、それはツバルによって遮られる。

「なあ……フブリを、カラアに連れてこようぜ」

予想だになかった彼の言葉にオーガスタは驚愕し、思わず立ち上がった。

「な、何を言ってるんだ、ツバル。彼女は何も知らないほうが幸せだ」

「いや、おれはいいと思う。のうのうと城に守られて生きているリラに、バレッタのことを思い出させてやるべきだ」

考えこんでいたクルージュも、頷き賛同した。

「馬鹿なことを……！今のリラにフブリを会わせたら、彼女は壊れてしまう。フブリだって今の生活があるんだ。両者のためにならない。そうだろう？」

「リラ、リラって……お前あの女に毒されちまったんじゃないの？」
ぴしゃりと言い放たれて、オーガスタは閉口した。

「おれはリラがどうなったっていいと思ってる……。あの女がバレッタを殺して、おれたちに罪を着せて、オーガスタ、お前をカラアに閉じこめたんだぞ！」

気持ちが昂ぶってきたのかツバルは立ち上がり、拳をきつく握り締めオーガスタに対峙した。彼の肩をクルージュが優しく叩く。

「オーガスタ、ツバルの言う通りだ。おれだってリラが憎くてたまらんよ……。おれの大事なものを……二度も奪ったんだからな」

できることなら、とクルージュは言葉を切った。

「おれの手で殺してやりたい」

オーガスタは、なんてことだろう、と心中で呟いた。クルージュが

恋人を殺されたことから立ち直ったなど、思い違いも甚だしい。彼もまた、ツバルと同じように暗い憎悪を抱えこんでいる。

「殺してやりてえよ！」

呼応するようにツバルが叫んだ。感情のたがが外れたのか、体中から搾り出すような叫びだった。

「ツバル、リラは反省している」

オーガスタは落ち着くようにと身振りて伝えながら、やんわりと言った。

「黙れオーガスタ！ 誰が何と言おうと、おれはあの女を許さねえ……！ バレッタがどんな思いで死んでいったと思ってるんだ！ それを知りもしないあの女は……！」

ツバルのバレッタに対する恋心は知っていたが、これほどまでに激昂する彼をオーガスタは見たことがなかった。

抑える、とクルージュがツバルの肩を抱いて口元に笑みを浮かべた。「こちらには大魔法がついてるんだ……リラも迂闊には手は出せないさ。そうだろ？ バレッタの娘がリラを殺してくれる」

フブリが、リラを殺す？

オーガスタは我が耳を疑い、愕然とした。

確かに十年という長い時間の中で、各々いろいろなことがあった。

三人ばらばらになってからの彼らをすべて知っているわけではない。しかし……

「そ、そうじゃないだろう。リラが死ねば、すべてが解決するとも？ それは、それはただの復讐だ。憎しみの連鎖は何も生みやしない」

「おれは復讐でも構わない」

ツバルは決然と言った。クルージュは何も言わなかったが、ツバルと同じ決意を持っていることは簡単に見てとれた。

オーガスタは、多少の摩擦は覚悟していたが、これほどとは思わなかった。自分と二人の思想のずれは、明らかに大きすぎる。

「……変わったな、お前たち……。本当に、変わってしまった」

オーガスタは後退し、壁に背中をぶつけたため鈍い音がした。目の前の現実には気持ちばかりが先行して、正常な思考が追いつかなかった。

「変わったのはお前だよ、オーガスタ」

ツバルの声が別人のようで、オーガスタは慄いた。

変わったのだ。十年という歳月は、少年だった彼の声が大人のそれに変わったように、多くのものを変化させ、壊してしまった。

もしかしたら、本当に自分も変わってしまったのかもしれない。

自分も、ツバルたちと共にカラアの外へ逃げていたら、リラへの深い同情は有り得なかったかもしれない。むしろ、今の彼らのようにリラを憎み続けていたに違いない。

「……しかし私は彼女を知ってしまった」

オーガスタは独り言のように呟いた。

「今、彼女を憎むことはできない。ツバル、クルージュ……私たちは、もう昔のようにはいられないのかもしれないね」

ツバルは、ぎゅっ、と唇を結んだ。一番年若い彼は、こうした仕草にまだどこか幼さを残している。

「私はリラを救いたいし、フブリを巻きこみたくもない。だから、お前たちがフブリを利用しようとするのなら容赦はしない」

一変して冷たく言い放ったオーガスタは、二人の目をしっかりと見据えていた。

「旧女王派を抜けるのか？」

クルージュの問いに、オーガスタは視線で答えた。聞かなくてもわかりきっているのに、クルージュは確かめずにいらなかったのだろう。

「今日、はつきりした。フブリの居場所はお前たちには教えられない。……お前たちはもう……」

オーガスタは言葉を搾り出そうとして、詰まらせた。今は、それを口に出すことが辛い。

十年前、罪人としてカラアを追われることになった三人は、いずれ

戻ってこようと、バレッタと共に自分たちの手でカラアをもとに戻そうと約束した。リラをどうするかなど、考える間もなかった。そのときはバレッタの失踪で頭がいっぱいだった。それは、希望だった。

どこかでバレッタが生きており、彼女の指示に従ってカラアに戻り、また三人で彼女を守るのだと……。

淡く儂い希望は、もはや砕け散ってしまった。

初めから、バレッタが生きていることは幻想に等しいと、三人とも思っていたに違いなかった。しかし、信じたかったのだ。

もう戻らない昔を思い浮かべ、オーガスタは扉に手をかけた。

「私はね、すべての人が幸福であることを望むよ」

悲愴な面持ちで微笑み、オーガスタは出て行った。

このとき、彼は大きな決意を改めて抱いた。

すべての人が幸福に……。

反芻し、大樹の根に潜りこむ。

オーガスタは、カラアに戻ると真っ先に厨房裏の倉庫に向かった。

私は、暗い廊下で彼の帰りを待っていた。

倉庫でオーガスタの話し声を聞いた翌朝から、私は彼の行動観察を欠かさなかった。もはや自分は彼を信用していないのか、まだ信用したいのか、それすらもわからないほど混乱していた。

そして、オーガスタは今日どこかへ出かけた。

私の許可がなければ、彼はたとえ城下町であっても勝手に外出できない。しかし、こともあろうに彼は真夜中に城門をくぐりぬけ、魔法を使ってどこかへ転移した。そう、転移しなくてはならないほど遠くへ、である。

見張っていたら、本当にオーガスタの裏切りの瞬間を目撃してしまったのだ。

私は、不安で気が気でなかった。

こうして彼を静かに待っている間も、気が狂いそうでならない。その男は深夜に現れた。しかしさすがの彼でも、まさか私がこの時間にこんなところにいるとは思わなかったようだ。彼の驚いた顔と見たら、あまりにも私が思い描いていたものと同じで、思わず笑みが漏れたほどだ。

「リラ……」

彼の慌てる顔を見るのは初めてだった。薄暗い中でもわかるほど動揺している。私はオーガスタを出し抜いたという高揚感から、自分でも驚くほど自然に立ち上がった。先ほどまでの不安が嘘のようだった。

「お帰りなさい」

私は距離を保ったままで彼らにっこり笑った。

深夜に現れた人影は、二つあった。思った通り、オーガスタが例の娘を連れてきたのだ。

「今日はどこへ行っていたの？ オーガスタ……」

私が視線を向けると、オーガスタの後ろにあった小さな影がおびえたように動いた。

「毎晩その娘と話していたでしょう。どんな方法でオーガスタに連絡したのかわからないけれど、あなたがバレッタの娘であること、辺境の村でバレッタの侍女の娘として生きていたことも」

「リラ、落ち着いて」

「母子で私に復讐しようとしていたんでしょう、フブリ・トリバン
ドラム！」

「リラ！」

「ち、近寄らないで！」

私は咄嗟に身構えた。

「裏切り者……あなたはその子を迎えに行ったのね。やっぱり、いつかはこんな日が来ると思ってた！ そうだ、あの女が私を殺しにくるんだ！」

「……リラ、大丈夫。何もしないよ。ほら、よく見て、この子は男の子だ。信用して」

目を凝らすと、なるほど後ろの影は確かに少年のようだった。オーガスタは、ゆっくり私に近づいてくる。何もしない、というように両手を上げている。

私は猜疑心を前面に押し出したような顔つきをしていると思う。この男は信用できない、といつも心の中で警鐘が鳴るのだ。

しかし、私はどのみち彼を信用するしかないと初めから思っていた。信用する以外にどんな選択肢があるのだ。私はわからない。姉のように殺せばよいのか？ 彼の同僚たちのように国外へ追放すれば？ 私はもう彼がいなければ、寂しすぎて生きていけない。

「この子は、そのバレッタの娘を見張らせるために連れてきたんだ」じりじり距離を縮めてくるオーガスタに身を硬くすると、彼は苦笑して歩を止めた。

「そう、バレッタの娘の名はフブリ・トリバンドラム。彼女は今、ある辺境の村に住んでいる。リラに一言も話さなかったことは謝るよ。彼女の消息がつかめたのは本当に最近だったんだ」

オーガスタは、後ろの少年を前に出るように促した。
「この子は新しく城に仕える少年だ。実はフブリは最近、親しい幼馴染の少年を喪つたらしい。この子にはその彼になりすまし、フブリを見張るように命じるつもりだった。もちろん、彼女がカラアに来ることがないようにね」

少年は、バレッタの娘が私に仇なす存在となるのを防ぐために、彼女の監視役として派遣されるらしい。村の人間と娘の記憶を魔法で書き換え、クイルビーという、娘の幼馴染に取って代わるのだと言う。

私は、彼がすべて話し終えるまで口を開かなかった。

「……姉さんは？」

私はいらいらしながら早口で投げ捨てるように言った。この男は、こういふときの私の気持ちを何もわかってはいない。そんな娘のこ

となど、私は正直どうでもよかった。

「バレッタは死んだ」

彼は一息に言った。

驚愕し、私は大きく目を見開いてオーガスタを見つめた。後ろの少年は、まだびくびくした目つきでこちらの様子を窺っている。

「姉さんが……死んだ？　嘘よ。嘘よ！」

私は、オーガスタに掴みかかる勢いで、彼に詰め寄った。彼は微動もせず、私を見下しているだけだった。

「嘘でしょう……？　だって、だって、あの人は私を殺そうと身を潜めていたのよ」

「彼女がここを去ったとき、もはや生きているのが不思議な状態だった。バレッタはシルヘットとともに逃亡し、身ごもっていた子どもを産んだところで力尽きた」

私は両腕をだらりと落とし、彼を見上げた。

「し、死んだの……そう、そう姉さん……」

腹の底から笑い出した気分だった。驚きよりも、安堵感のほうが強かったのだ。歪んだ唇から震えた笑い声が漏れる。

オーガスタは、冷たい目で私を見ていた。本人はそんなつもりはなかったかもしれないが、少なくとも私にはそう見えた。

「私に大魔法が受け継がれなかったのは、その娘が持っているからなのね」

少年をなめるように眺め、バレッタの娘を想像してみる。しかしいくら考えても、姉の顔しか思い浮かばなかった。

「そう……姉さん……死んだの……」

私は、今度は声に出して笑った。

天に届くくらい、高らかに笑い続けた。

私は数日の間、姉の訃報に心奪われた。

それは、瞬く間に私の中に浸透した。あれほど恐れていたものが、あっけなく消えたのだ。私は、姉の死をすんなり受け入れた自分を

自然に容認していた。それまでびくびくしていた自分を少しは顧み
たものの、それはもはや過去の自分ではしかなかった。

そのせいか、姉の娘が大魔法を持っているということにさほど恐怖
感はなかった。姉のときのように日常が手につかなくなるほどの関
心もなく、私は解放感に満ちた日々を徐々に送った。

しかし、それも束の間だった。

その後もオーガスタが不穏な動きを続けていることを、侍女たちの
噂話で耳にした。私が目を離している間　つまりほとんどが真夜
中であるが　彼は外出しているらしかった。目を追うことに、私
の恐怖は堤防が崩壊するかのごとくあふれ出していった。

オーガスタの連れてきた少年がいなくなると、いよいよ新たな不安
が私を襲った。

フブリ・トリバンドラムという少女が、大魔法を有しているのだ。

オーガスタが大丈夫だと私に言い聞かせるたび、私は不安でたまら
なくなつた。最も怪しむべき彼を、信用しなければならぬからだ。
私は彼の行動を、今までの比でないほど規制した。城内ですら自由
に歩けないように、また外出時には必ず監視をつけた。深夜は地下
牢に閉じこめた。彼は嫌そうな素振りすら見せず、微笑んでそれに
応じた。そんな態度ですら、私の不安を煽つてやまない。

姉が死んだところで何も変わってなどいなかった。
私は結局、死ぬまで姉の亡霊から逃れることはできないのではない
か。

私は常に怖れることで、自分の罪を確認しているのではないか。

殺してやる

耳の奥で声が聞こえる。

姉の子が、私を殺しにやってくる。

第六章 四

「さあて、どうしたもんか……」

ツバルは困ったように頭を掻いた。足元には、依然目を覚まさないフブリが横たわっている。

気を失ったフブリを抱えて城を抜け出したはいいものの、旧女王派の拠点に戻るためのすべはなく、仕方なく城に面した森に隠れている。遠くを見れば、朝よりはずっと小さくなった煙がまだ立ち上っていた。

ツバルは小さく舌打ちをした。

呻くような声に、ふと視線を落とす。フブリの小さな口がわずかに動いた。

「かわいそうにな……」

少女の頬にそっと触れその涙をぬぐってやると、彼女の腕がツバルの手を掴んだ。突然のこととツバルは驚いたようだったが、目を覚ましたフブリを見て安堵のため息を漏らす。

フブリは、影を帯びた虚ろな瞳を地面に落とした。

「……私が……」

「ん？」

かすれた小声にツバルは耳を傾けた。

「……私が、殺したの……」

「何だつて……？」

「わたしが……ルビーを殺したんだ……！」

フブリは爪を立てそうな勢いで顔を覆った。ツバルが彼女の腕を強引に引き剥がす。少女のむき出しになった顔は哀切に歪み、大きな瞳からはまだ涙を流している。

ツバルがあまりの形相に躊躇しフブリの腕を離すと、彼女は上体を起こして頭を掻きむしった。

「何であたしは無力なの！？ 何でみんなを死なせてしまうのお！

？」

はじめは、ただの恐怖でしかなかった。

でも今はわかる。

あの夢は

「あの夢は、私が自分で隠した記憶だったんだ……！」

フブリは大粒の涙をこぼしながら、悲痛な声を上げた。

「自分に都合の悪い記憶を抹消して、ルビーが死んだこと忘れて、べ、別人をルビーだと思いこんでたんだ！」

「やめる！」

暴れわめくフブリの両手を押さえ、ツバルは耳元に顔を近づけた。

フブリははじめ抵抗していたが、やがてしゃくりあげながら両手をだらんと落とした。不規則な吐息の合間に、生唾を飲みこむ音だけが静かに響く。

ツバルはきつくフブリの両肩を押さえこんで、彼女の視線を無理に自分のそれに合わせた。

「そもそも、私が森に行こうなんて誘わなければ……。私のせいだよ……！ 私が殺したのよお」

「フブリ！」

叫ぶと同時に、ツバルは少女の体が折れそうなくらいきつく抱きしめた。

「……って……。ひとりにしないって……約束したのに……」

小さな嗚咽は、間断なく少女の口元から漏れた。涙が頬を伝って熱い。ツバルの腕がきつくて苦しい。けれど、フブリは涙をぬぐうことも、ツバルを引き剥がすこともできなかった。

「……なあ、おれもな、昔大切な人を死なせてしまったことがあったんだ」

耳元に囁かれ、フブリは恐る恐る顔を上げた。

「自分を呪ったよ。何でおれは弱いんだって、人ひとり守れねえのかってな」

ツバルはフブリを抱きしめていた腕を緩めると、自嘲気味に笑った。

「おれは早くに両親亡くして、父親が剣を覚えてくれてたから何も考えずに兵士に志願したんだ。ガキにしちゃ腕は立つほうだったんでな」

胸襟を開くように、ツバルは自身の過去を語りはじめた。

「たかだか十やそこらの子どもが、そうそう城に入れるわけがねえんだ。でも、何を考えたんだかその国王さまは……おれらを自分の近衛にしたんだ。おれとクルージュと、もう一人……オーガスタって言う魔法使いをさ。一番年長のオーガスタでさえ、まだ十三だったんだぜ」

その三人が国王殺しの罪で国を追われたことを、フブリは知っている。彼女にあまりにも近い存在だったことが、逆に仇となったのだ。「彼女は流れ者のおれを、いや誰であつても分け隔てなく接してくれる人だった。素性もわからないガキを兵士の、しかも一番自分の身近におくべき近衛にしたんだぜ？ 後から聞いたらな。その人間がどんな人なのかは一目見ればわかるっていうんだ。例えその人間がとんでもない悪党でも、自分が信じていれば相手も信じてくれる。すごい女だよな……疑いも偏見もないんだ。……おれは、そんなバレッタが好きだった」

ツバルは昔の情景を思い浮かべるように、空を見上げた。今は亡きその女性に語りかけているのだろうか。その瞳があまりにも哀しげだったから、フブリは目を逸らせなかった。

「けど、バレッタの思想はとても危うい。世の中信じてくれる人間なんざ一握りだ。だから、たとえバレッタが結婚しても、国王をやめても、変わらずにおれはバレッタを守り続けると誓った。なのに……」

鈍い胸の痛みを感じて、フブリは唇を結んだ。大切なものを喪った気持ちは、今なら痛いほどわかる。

「この先は、知ってるよな？」

フブリは静かに頷いた。

「ツバルは、今も後悔しているの……？」

ツバルはその問いには答えなかった。代わりにフブリをきつく見つけた。

「いいか……？ おそらくあの少年は、リラに命じられてお前を見張っていた。お前がバレッタの娘だからだ」

悪夢が、その一言でついに現実になった。フブリは少なからずショックを受けた。確実にわかっていることでも、やはりまだ受け入れたくない自分がどこかにいる。

「そしてあいつはこともあるうに、死んだフブリの幼なじみに取って代わった。お前や村の人たちの記憶をすりかえたんだ。……だから、フブリは何も悪くない。ルビーのことを忘れてたのは魔法のせいだ。そうだろ？」

フブリは虚ろな目でツバルを見つめていたが、やがて彼にしがみつきながら小さく頷いた。

「確かにバレッタを守れなかったのは、おれの力不足かもしれない。でもな、残された者の気持ちや踏みにじってあまつさえ利用する奴はもっと最低だ」

ツバルの言葉は冷たく鋭く響き、胸がつかえた。

「リラ……現国王はそういうことを平気でやれる卑劣な女だ」

自分を掴んでいた腕がかすかに動いたのを感じて、フブリは顔を上げた。ツバルはどこか遠くを見つめている。

「フブリ。お前は王にならなくちゃいけない。シルヘットもそれを望んで遺言を残したはずだ」

「シルヘット……」

「そうだ」

フブリはぼんやり耳を傾けながら、ツバルにもたれかかった。

「私……何だか……」

ずる、と力なく彼の腕に体重を預ける。その恍惚とした表情に、ツバルは優しく微笑んだ。

「疲れたんだろ……。ん、少し休むか。そこらへんで水汲んできてやっから、待ってな」

フブリを丁寧に横たわらせると、ツバルは背中を向け小川の音の聞こえるほうへ消えていった。

しばらく、フブリは目を閉じていた。

眠たくはなかった。ただ頭を空にして、見えるものすべてをシャットアウトしたに過ぎない。静寂が静かに響き渡ると、フブリは閉じた瞳から一筋の涙を流した。

頭を空にすることなどできなかった。

「う……う……う……」

口元を押さえ上体を起こすと、周りでさえずっていた小鳥たちが驚いて飛び去った。フブリは膝に顔をうずめ、涙が枯れるのを待った。

「ルビー……」

胸の奥に棘が刺さったように苦しかった。

「何で……何でだよ……ルビー……」

顔を伏せたままで、噛みしめるようにぽつりぽつりと呟いた。何かを発していれば、その間は深くものを考えないで済むような気がした。

フブリは、夢の中の幼いルビーを思い出していた。彼の姿を思い浮かべると心が安らいだ。

いつも自分勝手な我が侘で振り回してばかりだったルビー、本当はすぐく臆病で泣き虫なルビー、でも自分の前では強がって、たまに男の子らしいところも見せようとするルビー……

想いがあふれ出しそうだった。

しかしそれらが、共に旅してきた少年と重なり綺麗に一致すると、胸が苦しくなった。はっとして首を横に振るも、そのイメージは頭から消えてくれなかった。

「あれは、ルビーじゃない……！」

フブリは座ったまま、じだんだを踏んだ。頭を抱えて必死に忘れようと試みるが、足掻けば足掻くほど彼の虚像は鮮明になった。むしろ幼い頃のルビーがかすんで、はっきりその姿を思い出せなくなった。

鳥の鳴き声が響いた。

「どうして……」

涙で前が霞んで見えない。フブリはそれをぬぐうこともせず、ただぼんやりと遠くを見つめた。

「どうしてこんなことになっちゃったんだろう……」

このようなことになるなら、カラアに来なければよかった。何も知らずに、ずっとあの村でルビーと一緒に暮らしていれば……

「違う！」

フブリは自分自身を否定するように首を大きく横に振った。

「それはルビーじゃないんだよ……！ ルビーは、ルビーは……」

幼なじみのルビー。一緒にシルハットを看取ったクイルビー・ヴォルケット。

しかし、彼はもういないのだ。

フブリは、はっとして顔を上げた。

自分が泣いていたのは、ルビーが死んだという事実が哀しくて辛いためだと思っていた。しかし、感情の奥底に問いかけてみれば、哀しい気持ちは確かにあるものの、その死を自然と受け止めている自分がいる。

「私……」

何が、納得いかないのだろう。

「私は……」

ルビーが死んだことが哀しいのではなかった。

裏切られたことが……

いや、彼がルビーでなかったことが何より、辛い。

「そうだったんだ……。そうだよ、そうだ！」

フブリは涙をぬぐい、何かを決意して深呼吸した。自らの両頬を勢いよく叩き一喝してみる。明るい音が響くと、フブリは長い夢から覚めたように感じ、大きく背伸びした。

少女の心は、もう晴れ渡っていた。

「お待たせ。……フブリ？」

ツバルが水を持って戻ると、そこにはもうフブリの姿はなかった。鳥の声が、ツバルを嘲笑うかのように森の中に響き渡る。

「フブリ……」

ツバルは、苦しげに呟き、遠くにそびえ立つ王城を眺めた。

フブリは走っていた。何度も息を詰まらせ、足を草に絡ませながら、走っていた。

「はあ……はあ……はっ……」

彼が誰なのかはわからない。

ツバルの言うように、とんでもない悪党かもしれない。本当に自分を利用していただけかもしれない。

けれどルビーが死んだ後、自分を支え、ここまで一緒にいてくれたのは確かにあの少年だ。あの時間の中で自分にとって、彼は紛れもなくクイルビーだったのだ。

だからフブリは、信じたかった。

他の誰でもない、彼に支えられていたことは真実。

その瞬間、自分はひとりではなかったことも真実。

「ルビー、待ってて……」

フブリは、まっすぐに王城を見据えていた。その目に、涙の跡はもうなかった。

「すぐ行くから……！」

第六章 五

城に放たれた火は鎮火していた。煙ももう見えない。

城門前では、傷ついた兵士たちが救護班に手当てをされ、健康な者は旧女王派の残党処理に奔走している。多くの旧女王派は捕らえられる前に逃亡したが、数人は拘束され、捕虜となっていた。

その周囲は、城下町からやって来た野次馬たちでごった返し、兵士どころか侍女までもが外に出て対応に追われていた。

そんな騒動に紛れて、城壁の傍の茂みを這うようにして動く影が、三つ。

大きな影が、青い古ぼけたポリバケツをおもむろに開けた。その後を小さな影が二つ、つかず離れず追いかけてくる。

「オヤジー。何でお城に来てんのあたしたち」

小さな影　オリヴェンサが黒いフードを脱ぎため息をついた。静かにしろよ、と大きな影がたしなめる。

「もう旧女王派も危ねエからな……。このどさくさに紛れて、もらうもんもらってさっさと王都から逃げようかと」

「サイテー」

「さいてー」

「うるせエよ、おめーら」

イエリコはぼやきながら、胸元から簡易移動魔方陣を二枚取り出し、二人の子どもに渡した。

「あつ、おうじよさまだ！」

魔方陣を受け取りもせず、ヴィティムは遠くを指差した。

「んなわけねーだろ。何でわざわざこの警戒態勢の中、捕まりにくる……」

しかし次の瞬間、イエリコはその少女の姿を目の端にとらえて驚愕した。

「イエリコー！」

フブリは、肩で息をしながら駆けつけた。ぽかんとするイエリコにしがみつく。

「私も、城の中に、連れてって！」

「まじかよ……」

イエリコはまるでそれが冗談であるかのように、大げさに両手を広げて見せた。しかし少女の真剣な瞳に呑まれたのか、彼は大きく嘆息し次の瞬間、魔方陣の描かれた紙片を差し出していった。

身体がくるくる回るような感覚の後、フブリは頭から落下し、見慣れた鶏小屋の中に落ちた。飼料が体中にへばりついている。

「いつてー！」

「オヤジ、この移動方法どうにかならないわけ!？」

子どもたちがすっぽり体を収めてしまった敷き草から、顔だけを出してましく立っている。

「仕方ねエだろ……。改良してるヒマがなかったんだからよ」

体に張りついた草を器用に払いながら、イエリコはぼやいた。

「イエリコ」

フブリが真剣なまなざしで彼に向き直ると、イエリコはやり場がないように視線を泳がせた。

「リラの話聞かせて」

「旧女王派だのツバルだのから耳が腐るほど聞いてるだろ……」

イエリコは面倒くさそうに息を吐いた。

「うっん、違う。あなたの客観的な意見を聞かせてほしいの。私、真実が知りたいんだ」

そっぽを向いてしまったイエリコの前に出て、フブリは懇願した。

「あなたはお母さんが国王だった頃からカラアに仕えていたんでしょ？　そしてリラにも仕えて、今は旧女王派と行動をともしている。……あなたなら、三者の主観的な視点を切り崩してくれるはず」

「……さアな。おれにはわからんね」

イエリコは少し考えるように間を空けて、瞳を逸らした。

「父ちゃんのケチ！」

「ケツの穴の小さい男！」

「うるせエよ、おめーら！」

足元でぎゃあぎゃあ騒ぐ子どもたちに、イエリコの一喝が飛んだ。

「イエリコ、聞いて」

フブリは、再度彼の前に出た。少女を視界から外そうとしている男に、食って掛かる勢いでしがみつく。

「リラに会って、私思った。あの人は……」

「あア、わかった！ わかったよ！」

迫力に圧されたのか、ついにイエリコは両手を上げてフブリを直視した。

「お前さんはリラに会って、少なからず違和感を覚えた。そうだな？」

強く頷く。

「じゃあ、それが答えだ」

即答され、フブリは目を剥いた。自分の答えが間違っているとは思えない。だが、それを彼がこんなにも簡単に、容認してくれるとは思わなかった。

「それ以上でも以下でもねエ……。おれは確かにどっちつかずな生き方を選んできたし、これからもそうするつもりだ。だが、完全に客観的なリラを見れているかと言えば、そうじゃない」

「それでもいい！ あなたから見た、私の知らないリラの姿を知りたいの！」

激しい態度で迫ると、彼は眉をひそめてこめかみを押さえた。

「……あア……面倒くせエ……。おれはこうというのは苦手なんだよ……」

イエリコは小屋の隅に腰を下ろし、座れよ、とフブリを促した。子どもたちはきよんとしたまま、敷き草の中から二人の様子を凝視している。

「リラが国王になって、何が変わったかって言ったら、実はそんな

大きな変化はなかった」

胸のポケットから噛み煙草を出して、イエリコは吸いこむように口に放った。

「何が駄目ってことはねエんだ。政権がリラに移ってすべてがマイナスになった、なんてこともねエ……」

「でも、最果てのことは……」

「あれは確かにやりすぎだがな。大樹の生け贄に少女を選んだのはリラじゃなくて最果ての兵士だ。それに過去のカラア王だって、そりゃ悪どいの探せばリラ以上のが山ほど出てくるぜ」

国に逆らった民を大量虐殺した王、ひどい納税を課した王　イエリコが語るそれらの王の姿は、フブリにとってとても信じがたい話ばかりだった。

「リラは王には向かねエが、その分をオーガスタが補って、それなりの政治はできてる」

フブリは、リラの前に現れた魔法使いの姿を思い出した。リラは彼のことをオーガスタと呼んでいた。

「オーガスタって、ツバルたちと一緒にお母さんに仕えていたっていう、魔法使い？」

「そうだ。カラアを別次元に造った大魔法使いの末裔。奴らは代々国王に仕える身なのさ……」

ツバルたちと同じように罪を着せられ、しかし彼はカラアに残っている。リラを助けたときのオーガスタを思い出すも、彼がリラを憎んでいるようにはとも思えなかった。国王に仕えるという身の上、渋々リラに協力しているのだろうか。いや、そうではない。きっとオーガスタは

「彼は、リラを許したんだね」

「……さアな。あいつの考えてることも、おれにはさっぱりわからねエ。昔はあいつ、旧女王派だったんだが、足抜けしたんだ」

イエリコは煙草を噛み潰しながら、頭を掻いた。

「それで、リラは何とか今のところカラアを引っ張っていている。

なのに未だに旧女王派が存在するのは、あいつが実の姉を殺した罪人だからだ。おまけにその罪を三人の近衛に着せた。バレッタという人間に惚れて、国王を支持していた民たちは、その真実を知り黙っていられなかった。それだけ、バレッタのカリスマ性は高かったんだ」

息苦しさを感じ、顔を歪める。こればかりは、何度聞いても気分がいい話ではなかった。

「バレッタ・コスモレドとリラ・コスモレドは、歳こそ離れてるがそりゃ大層仲のいい姉妹だった」

抑揚のない声が耳を貫き、その真実にフブリは少なからず動揺した。「バレッタは明るく社交的、リラは内向的だが頭脳明晰。まったく正対な姉妹だが、お互いが持つてないものをお互いに補い合ってるって感じで上手く釣り合いが取れてた」

「えー！ 王さまと前の王さまって仲よしだったのか!？」

「ヴィティムは黙ってな！」

ヴィティムが身を乗り出し、それをオリヴェンサが制す。彼らにとっても意外な情報だったのだろう。目を丸くして聞き入っている。

「だけど、リラはお母さんを殺した……。それは何故？」

フブリは静かに口を開いた。イエリコの話が真実ならば、あのような凄惨な事件が起るはずはない。

「知らねエよ……。おれが見たことがあるのは、仲よさそうに一緒に花の手入れをしたり、髪を漉き合ったり、笑い合ってる二人の姿だけだ」

感情のまったく見えぬ声で答えると、イエリコは噛み煙草を吐き捨てた。

リラの怯えたような顔しかフブリは見たことがない。彼女が母とともに笑い合っている姿など、少しも想像がつかなかった。

「リラが王位に興味があつたとは、とても思えねエ……。それでなくてもあの女は人づき合いが嫌いで、人前に出ることすら苦手だったからな。でも、バレッタの婚儀では大粒の涙を流して自分のこと

のように喜んでたし、フブリ、お前の名前を一緒に考えたりもしていた。リラが唯一心を開けたのはバレッタだけだったんだろうな」やはり彼の語るリラの姿に、フブリの想像はとも及ばない。ただ、火の回る温室近くで彼女が震えている姿だけが、脳裏に鮮明に浮かんだ。

「だけど、もしかしたらあったのかもしれない」

イエリコは落ちた噛み煙草を足で潰しながら、囁くように言った。

「リラが心の底に暗いものを作ってしまうような出来事が。ほんの小さなすれ違いから生まれた悪意が」

しばらく、物音一つない真つ白な時間が過ぎた。

フブリが硬直したまま彼を見つめていると、イエリコは初めて自分から彼女に視線を合わせた。

「何がきっかけだったかなんて本人たちにしかわからねえさ」

それは、フブリを立ち上がらせるのに充分な言葉だった。

「ありがとう、イエリコ」

「ねーちゃん、どこ行くんだ？」

突然立ち上がったフブリに、ヴェイティムが心配そうに駆け寄る。

「私、わかったの。リラのところに行く」

微笑んで小屋を後にする。子どもたちが不思議そうに首を傾げているが、フブリは何も言わず外に出た。足取りは軽かった。

リラに会いたい。ルビーに会いたい。話したいことがたくさんある。フブリは迷うことなく、走った。

久しぶりに大声を出した。

私は、小刻みに震える手を必死に握り締めた。

感情を荒立てることは慣れていない。しかし、怖くてたまらないのだ。叫ばなければもっと怖いことが起こる気がして耐えられないのだ。

「陛下……」

少年は、打ちひしがれたような顔で、私の前に戻ってきた。先ほど私が怒鳴ったからだろうか。生気の抜けたような、暗い影を背負っている。何故戻ってきたのか、と私は問わなかった。

「あなたも、私と同じなのね」

フブリ・トリバンドラムを監視していた少年。しかし、カラアへ戻ってきた今は何者でもない。何年もクイルビーという嘘をまとい生きてきた彼に、もうフブリ・トリバンドラムという宿木はないのだ。「どこにも居場所がないのよ。そうでしょう？」

少年は、ただじつと私の顔を見つめていた。

「まだ、外は騒がしいのね……火は消えたみたいだけれど」

「旧女王派は制圧されたようです。オーガスタさんが暴動を鎮めて今は兵士が総出で事後処理に追われているようです」

「そう……」

私はほつとして息をついた。胸元に下げていた鎖を、音を立てて引き上げる。

「これが何かわかる？」

私は鎖の先についている小さな鏡を、少年に掲げてみせた。

「魔法ですね？」

少年は即座に答えた。

鏡は光を反射させながら、くるくると回った。そこに映るものは、私の顔でなければ少年の姿でもない。そこには、城門で傷ついた兵士の搬送に追われているオーガスタの姿が映し出されていた。

「この鏡は、オーガスタがどこにいて、何をしているのかがわかる魔法がかけられている。毎朝、オーガスタが自分でこの魔法をかけ、私の味方だということを証明するの……」

私は鏡の装飾を撫でながら、ぼんやりそれを眺めた。

「これがないければ不安なの。いつ彼が裏切るのか……信じたいという気持ちもあるけれど、本当は彼が裏切る日を待っているのかもわからないわ」

何故こんな話をこの少年にしているのか不思議だった。私は鏡を胸元にしまった。

「陛下！」

外に出ていた多くの侍女と兵士が戻ってきた。彼らはこの非常事態に私が一人でいたことに責任を感じているようで、各々が地につきそうなほど頭を下げた。近衛隊ですら、つい先ほどまで応戦で手いっぱいだったのだ。彼らに非はない。

「私が周りの言うことも聞かずに勝手に温室へ行ったのがいけないのです。気にしないでください」

本当に申し訳なくて、私は条件反射で頭を下げた。その動きに非を感じたのか、兵士たちは更に頭を垂れた。王ならこうしたとき、もっと毅然とした態度を取らなければならないのだろう。そうは知っているものの、私はどうしても強気になつて行動できないのだ。彼らを前にいたたまれない気持ちでいると

「何だ。おれが一番手か」

突然低い男の声が背後から聞こえた。

声の主は、しかし一目見た限りでは女性のようなだった。胸の辺りまでの長い髪を二つに編み、フレアスカートを穿いている。右手に握られた近衛兵の剣がなければ、私は彼だとわからなかっただろう。

「クルージュ・エーレブルー……」

男は、不敵に笑った。くるくる剣を回す慣れた仕草が、その身なりとあまりに不釣り合いだ。身を強張らせると、兵士たちが私を取り囲むように前へ出た。

「おいおい、おれと本気でやりあって勝てると思うのか？」

トントン、とクルージュは軽く足踏みをした。剣を構える様子もない。兵たちは男の余裕に少なからず動揺したようだ。私は彼の強さをよく知っている。剣の腕だけを見れば、間違いないカラア一だ。

銀の騎士以外に、この男と張り合える人間がいるとは思えない。

「クルージュ！ くっそ。おれのほうが絶対近いと思ってたのに！」

遠くから緊迫した状況にそぐわない能天気な声が聞こえた。回廊を駆け抜けてくる金髪の男が視界に入り、私は驚愕した。彼は次々に立ちはだかる兵士の群れをなぎ払い、もう私のすぐ近くまで迫っていた。「ツバル……」

「だから言つたる。右の階段のほうに近いって」

クルージュは、その言葉だけを背後のツバルに投げ、おもむろに私に向き直った。私がびくり、と身を震わせると、クルージュは冷淡な瞳をこちらに向けた

「最果ての警備は全滅させてきた」

心臓がどくん、大きく鳴り響く。ひどい息苦しさを感じて、私は唾を飲みこんだ。

「あ……」

ついに、恐れていたことが起きた。旧女王派が攻め入り、その混乱に乗じて私が罪を着せた近衛たちが、私に復讐しに戻って来たのだ。「村人はアリカが守ってる。大樹の生け贄になった娘だ」どくん、どくん。

心臓の音がうるさく耳の奥で響いて止まない。

「もうすぐフブリが来るぜ」

兵の体が傾いで倒れ その背後で皮肉な笑いを浮かべるツバルの姿が見えた。憎悪に満ちたその相貌が、私を確実にとらえる。

そう、フブリ・トリバンドラムが来る。

私を殺しにやって来る。

私を殺しにやって来る。

「罪を償え、リラー！」

ツバルが叫び、私は、白くなっていく意識に呑みこまれた。声が出なかった。頭も回らなかった。

兵たちが、とまどっている。言わなくてはならない。反逆者を捕らえる、と言わなくてはならない。この者たちの言葉に耳を傾けるな。王の命に従い、反逆者を捕らえる。

言わなくてはならない。十五年前のように、彼らを反逆者にしなけ

れば、私の罪が本当のものになってしまふ。

だが、私の唇は震えるばかりで一向に動く気配がない。

そう考えている間にも、二人の剣士は次々に兵士たちをなぎ倒していく。もはや、私を守るものは数人の兵と背後で震えながら構える侍女ばかりだ。

私が祈るように手を胸に当てると　突然ツバルの剣が空を飛んだ。私はぼんやりとそれが描く弧を目で追っていた。見間違いではない。彼の剣は彼の意思に反して手から抜け出し、まるで命あるもののように空を飛んで逃げたのだ。

金属の塊は地に落ちて、カラカラとももの哀しい音を立てて転がっていった。

「てめえ……」

ツバルが私を睨んだ。いや、よく見ると彼の視線は私に向かってはいない。ツバルは私の隣にいる魔法使いの少年を見据えていた。

「クイルビー」

私は呆気に取られて彼を見つめた。少年が何故私に与するような真似をしたのか、わからなかった。

「オーガスタさんはあなたを裏切ったりしません。だから、信じてあげてください」

少年はそう言うと、私を守るようにツバルたちの前に立ちほだかった。

「ルビー。お前、おれに勝てると思うか？」

「思いません。でもツバルさん、あなたは間違ってる。誰かを殺してその上に成り立つものなんて何も無い。復讐は愚かです」

「何年も人を騙し続けてきた男がよく言うぜ……」

ツバルは唾を吐き捨てた。対峙したまま、少年が表情を曇らせたのを私は見逃さなかった。

「陛下は逃げてください」

「でも……」

余裕のない少年の後ろで私が足踏みをしていると、目の前で風が舞

った。一瞬の風は轟音を鳴らし、それらが収束して人の姿を形づくる。白く浮き出るその男の顔は、暗く影を負っているように見えた。「オーガスタさま！」

私が口を開く前に、侍女が歓喜の声を上げた。灰髪の魔法使い、オーガスタはこの状況を知っていたようだった。彼は周囲を見渡し、ここにいるはずのない二人の男を、悲哀漂う表情で見つめた。

「ツバル、クルージュ」

オーガスタはまるでそれが幻であるかのように、彼らの名を呼んだ。「遅いぜ、オーガスタ……」

ツバルが口の端をわずかに上げた。オーガスタは私を囲んでいた兵や侍女たちを見渡し、素早く彼らに指示を出す。

「ここは私に任せて、君たちは外へ行きなさい」

臣下たちは顔を見合わせ、しばらく逡巡していたが

「早く！」

オーガスタの怒号に身を固くすると、敬礼をして足早に去っていった。

静かになった回廊で、オーガスタはツバルと向き合った。これほど切なそうにしている彼を見るのは初めてだ。私は、自分のことでもないのに何故かとても胸が苦しくなった。

「……こんな形でこんなに早く再会することになるとは思わなかった」

「本当に……」

ツバルが呟き、彼の手元でチャリ、と金属の擦れる音がした。

私はただ、クイルビーの後ろで立ち尽くしていた。体が石になったように重たく、動かない。ツバルが一步、足を踏み出した瞬間「待って！」

大声が、回廊に響いた。駆けてくる足音も。そこにいた全員の視線が声の主に集中する。

少女は息せき切らせ、私の前に現れた。

フブリは、汗に濡れた前髪を煩わしそうに掻き揚げた。ツバルの帯剣に視線を向け、彼の手に自身のそれを重ね目配せをする。ツバルは戸惑っていたが、やがてフブリが微笑んでいることに気づき、剣を下ろした。

「フブリ。どうして、どうして戻ってきたんだ！」

悲愴な声でルビーが叫んだ。

けれどフブリは、微笑んでいた。彼がそう言っただけで自分を心配するだろう、ということがとくにわかっていたからだ。

「ルビー、私ね、思い出したよ」

ゆっくり、噛みしめるように呟くと、瞼の裏に幼いルビーの姿がぼやけて映し出された。

「さっきは驚いちゃって、何も言えなかった。あなたが幼なじみのルビーじゃないって知って、すごく悲しかった。私騙されてたんだ、って思ってた……」

ルビーは喉元につかえたものを絞り出そうとするように、口を小刻みに動かした。しかし、いくら待っても、そこからは何も発せられなかった。

ルビーは申し訳ないことがあったとき、それを言葉にするまでしばしの時間を要する。長い間一緒だった。だから、彼が今どのような心境にいるか、手にとるようにわかる。

「でもね、私思ったの。幼なじみのルビーはあのとき死んでしまったけど、その後の私を支えてくれたのはあなたなんだ」

「フブリ……」

フブリは小さく頷いた。

「銀の騎士に村が襲われたときも、旅の途中も、私のこと、助けてくれたよね？　一緒に笑って、泣いてさ……シルヘットのことを思い出して辛いときも、いつも傍にいてくれた。私たち、いつも一緒だった」

遠い記憶を思い出し、フブリは目頭が熱くなるのを感じた。もう、答えは出ている。

「あなたが幼なじみのルビーでも偽者のルビーでも、私にとって大切な人だつてことに変わりはないんだよ！ 私の大好きなルビーなんだよ！」

体中から滲み出た叫びだった。思い出の中の彼ではない。今、こうして対峙しているルビーに伝えたかった。

「だけど、ぼくは、クイルビーじゃ……」

ルビーが揺らく視線をフブリから逸らし、しかしフブリはそれを許さなかった。咄嗟に彼の腕を引き寄せる。

「私の大事な人なんだ」

弾かれたように、ルビーが顔を上げた。泣き出しそうな少年の瞳の奥に、わずかな温かさを見つけ、フブリは一筋の涙を流した。

「リラ、ツバルも……もうやめよう？ こんなことに意味はないんだよ」

しんとした回廊に、フブリの声と足音だけが反響した。

「初めまして、リラ。私、あなたの姪のフブリ・トリバンドラムです」

近づいても、リラはびくりとも動かなかった。できる限り柔和な笑顔で、彼女に歩み寄る。

「私、あなたと話したいの。話し合いませんか？ 私はあなたを殺そうなんて思つてはいない」

フブリは、頬を伝う熱いものをぬぐうこともせず、彼女をしっかりと見据えた。

リラ・コスモレド。自分の母を殺した叔母。カラアの王。だけど今は、ただのちつぽけな一人の人間に見える。

「話し合いなんて……できるはずがない。私はあなたの母親を殺したのよ？」

かすかな笑いを孕んだ声で、リラは吐き捨てた。数日前なら、こうして笑えるリラが憎らしく思えたことだろう。けれど今は、とても哀しい仕草に思えてならないのだ。哀しい人だ、と思う。ずっと母の亡霊に怯え、人を疑い生きてきた国王……

「それでも、あなたは私の叔母さんだもの。私の血のつながった家族だもの」

「……でも、私は、もう……」

リラは、信じたくないというようにしきりに首を横に振った。フブリが彼女にそつと手を差し伸べた瞬間

音がした。何か軽いものが落ちたような、トン、という小気味よい音。と同時に、リラの体が一瞬大きく前に揺れる。

「あ……？」

最初は何が起こったのかわからなかった。リラが小さく呟き、目を見開いたまま動かなくなり　フブリは差し伸べた手を彼女の背中に回すことさえできなかった。

目の前の白い衣服が朱に染まっていくのを、フブリは立ち止まったまま見ていた。リラは胸を押さえ、自身の手にごびりついた赤いものを虚ろな瞳で見つめた。

リラの背後で、人影が薄い笑い声を漏らした。細い背に突き立てられた剣は、リラの生命を一刻も早く奪い去ろうと彼女の肉に深く食いこんでいく。

鮮血が真っ白な床を濡らし、フブリはわななく唇で叫んだ。

「リラ！」

第六章 六

「お前……確か」

ベルイヤールという名の、侍女だった。女は誇らしげに笑った。

「私も心の中ではずっと旧女王派の一人だったのよ……。バレッタさまがご健在だった頃からリラに仕えていたから気づかれなかったけど、信用させておいて、裏切つてやりたかったの。いつかこうして殺してやるつもりで傍に残ったのよ……。あはは……。いい気味だわ！」

甲高い笑い声を上げ、ベルイヤールは剣を手放した。落ちた金属の鈍い音が回廊に響く。

クルージュが彼女を拘束し、後ろ手に縛り上げた。ベルイヤールは抵抗もせず、ただ笑うばかりだった。

「……人を疑う生き方しかできない私には……。当然の結末だわ……。リラの身体が傾いで、落ちる。膝を着いたリラは、虚ろな瞳で口元を歪めた。

「私が信じてないもの……。信じてもらえるはずが……。ないわよね……。」

苦しいだろうに、彼女は微笑みを作ろうとしていた。自分に向けられたその笑みに、フブリは胸を締めつけられるような感覚を覚える。「よかつたわね、オーガスタ……。ツバルも……。こうなることを、望んで……。」

言葉が途切れたと思うや否や、リラは前のめりに倒れこんだ。オーガスタが彼女の身体を支え、仰向けに横たわらせる。

「リラ……。私は、君を殺したいと思ったことはない。憎みはした……。けれど、君は清い人だ。犯した罪の重さをわかることができる人だ……。」

オーガスタは、ひざまずき、リラの手を祈るように握り締めた。だが、彼女は虚ろに天井を眺めるばかりで、ぴくりとも動かない。

「リラ！ リラ！」

顔中を涙でぐしゃぐしゃに歪めたフブリが駆け寄る。

「オーガスタ、魔法で何とかならないのか？」

クルージュは、応急処置をしようとして手持ちの医療器具ではどうにもならないと判断したのか、オーガスタに問うた。しかしオーガスタは静かに首を横に振るだけだ。

「人体の傷にも魔法は効く……。しかし、それはあくまで自然治癒の範囲だ……」

苦悶の表情を浮かべ彼女を見下ろす面々に、フブリは絶句した。

もう、何一つなすすべはないのだ。

何もできない自分が心底呪わしい。リラを救えなかった。自分はまだ、何も伝えていない。向き合って話し合ったことすらないというのに。

それだけが頭の中をぐるぐる回って、涙となつてあふれ出る。

やっと叔母のことがわかったような気がした矢先に、自分は唯一の肉親を喪う。また、大切なものを喪う。死んでしまう。

また

「リラア！！！」

少女が、私の名を呼んだ。

そのとき、私の意識は不思議とはつきりしていた。

私の手を痛いくらい握り締める男も、しがみついて離れない少女も、立ち尽くしたまま私を見下ろす男も、彼らの動きはスローモーシヨンのようにしつかりと私の目に焼きついた。

いや、もしかしたらこれは、気を失った私が見ている夢なのかもしれない。

「ごめんなさい……姉さん。ごめんなさい」

夢ならばいい、と思った。緩やかに口をついて出る謝罪に、私は自分で驚いた。

そう、こんなにも自然で、簡単なことだったのだ。

「オーガスタ……私、ずっと謝りたかった……。どうして今……私……どうして、あのとき謝れなかったんだろう……」

「リラ、わかつている。大丈夫だ、バレッタは君を恨んではないよ。大丈夫……」

「姉さん……ごめんなさい……。ごめんなさい、ごめんなさい……。私は薄らいできた意識の中で、口の端から呟いた。もはや身体は鉛のように重く、指先一つ動かせなかった。

だが痛みはなく、苦しくもなかった。むしろとても心地がいい。

私は最後の力を振り絞って、姉さんの腕を掴んだ。

私の顔を覗く姉さんの顔が見える。姉さんは、私のために涙を流してくれている。

あなたが私を殺しに来るなんて、有り得ないのに。

姉さん、私、ずっと謝りたかったのよ。

姉さん、ごめんなさい……

「姉さん、ごめんなさい……」

リラは、フブリから視線を逸らすことなく呟いた。しかしその強い瞳に反して、フブリの腕を掴んでいた手からは、徐々に力が抜けていく。フブリはたまらず、落ちかける彼女の手を握り締めた。

力なき腕がだりりと下がる。蒼白な頬を涙が伝う。

「り、リラ！ やだあ！」

「フブリ、落ち着いて！」

ルビーが、暴れるフブリを抱きすくめた。

「いやだ、いやだ！ せつかく会えたのに！ 私の、たった一人の血のつながった家族なんだよお……！！」

しばらくリラの顔を覗きこんでいたクルージュが、静かに首を横に振った。

「やだあ

「！！」

ツバルは、少女の慟哭を聞きながら、一同の背後でぼんやり立ち尽くしていた。

望んでいた結末は、こんなものだったのだろうか。

自分は、何のために何年も隠れてきたのだろうか。リラを憎み続けてきたのだろうか。フブリを哀しませるためでは決してない。そもそも、バレッタは人を憎めと言うような女ではなかったはずだ。結局、自分は自己満足のためにリラを憎み続けてきた。

フブリも、リラを憎んでくれればいいと思った。

いや、そう仕向けたはずだった。何も知らないフブリをカラアへ連れてきて、その現実に落胆させ、自然とリラを憎んでくれるように

初めからそういう計画だったはずだ。

それがどうだ。

フブリは、憎むどころか彼女を愛している。

憎しみは何も生み出さないとオーガスタが言っていた通りだった。

そんなことはわかりきっていた。わかっていて、見ない振りをした。憎む以外に、何もできなかったからだ。

「ツバル、いい加減気づけ……。フブリはバレッタじゃないんだよ」
クルージュが立ち上がり、ツバルの肩を叩いた。

ツバルの視線はゆっくりと宙を舞い、虚ろにフブリの背に向けられた。

真っ白な回廊に、フブリの泣き声だけが響き渡る。それはいつまで経ってもやむことはなかった。

「フブリ」

しばらく沈黙していたオーガスタが口を開いた。静かに泣いていたのか、彼の頬には涙の跡が見て取れた。

「これは、私の個人的なお願だから、君には断る権利がある」
静かな声が少女の耳元を通り過ぎる。

「彼女に、大魔法を使つて欲しい」

フブリは涙でぼやける視界の中に、オーガスタの真摯な瞳を見つけた。

同時に、自分の身体から淡い光が漏れ、それがリラへ向かって伸び

第六章 七

両手に余る大きな鉢植えを抱えた少女が、広い廊下を駆け抜ける。それはもう、顔全体を覆い尽くすほどの大きさだったから、少女は前もろくに見えなかった。おまけに鉢植えの重さといったら……いやいや、愚痴はやめておこう。自分で運ぶと言った手前、今更ツバルの手は借りられない。

途中すれ違ふ侍女たちの、くすくす笑う声が聞こえて、フブリは少しだけ恥ずかしくなった。

「リラ！ 具合はどう？」

扉を勢いよく開けて、フブリはひと際明るく彼女に話しかけた。

そよ風が頬をくすぐる。開け放たれた窓から入りこんだ風が、カーテンを静かに揺らした。ベッドに上半身だけを起こしていたリラは、その少女の訪問を待ち望んでいたように満面の笑みを浮かべた。

「もうずっといいのよ。オーガスタが私をベッドに縛りつけているの」

リラは少女のように微笑んだ。隣に座っているオーガスタが、少しだけ困ったように頬を掻いた。

「あら、ライラックの花が咲いたのね。ありがとう」

鉢植えの横から顔を半分だけ出しているフブリに苦笑しながら、リラは手を差し伸べた。鉢植えを受け取ると、彼女は陶然とした瞳で花の香りを嗅いだ。

「昨日咲いたんだ。あとシラーも蕾を出しはじめてたんだよ」

「ごめんなさいね。温室の世話もフブリに任せきりにしちゃって」
フブリは無言で首を横に振った。笑って、早くよくなってね、とだけ答える。

外に出ると、扉の脇に潜むように、ツバルが立っていた。

「どうだった？」

フブリの歩幅に足を合わせながら、ツバルは静かに問うた。

「うん。いつもどおり。やっぱりまだ思い出すには時間がかかるかも、ってオーガスタが言ってた」

「記憶が戻らないほうがいいとも思っけど……。気がついたときには、姉は他界していてその娘が傍にいた……。悪くねえ世界だ」

「そうだね……」

フブリは歩きながら、遠くを見つめた。

リラがベルイヤールに刺されてから、二月が経った。旧女王派が王に反旗を翻したという世紀の大事業は、すぐに民衆の中でセンセーショナルな話題となった。更に、王城に忍んでいた旧女王派の侍女が国王を殺害しようとした、そのシヨックで国王は十数年間の記憶を失ってしまった、というニュースが流れると、それはもう民の興味を惹きつけるに十分なものだったのだ。

だから、先代国王を殺めた罪で国を追われていたツバルたちが戻ってきたことに、民衆の多くは無関心であった。三人の近衛は自分たちの身の潔白を証明した。しかしそれを喜んだのは、今は無き旧女王派の残党くらいで、結局、誰が先代の王を殺したのかはうやむやのまま、国民の記憶から忘れ去られていくことだろう。

リラには大魔法の副作用と思われる記憶の欠如が見られたが、それ以外は至って健康であるし、胸には傷跡一つ残っていない。むしろ、罪の呵責に苛まれ続けていた数年間が彼女の記憶から抜け落ちたこととは、ツバルの言う通り幸せなことなのかもしれない。

いつかは思い出す日が来るかもしれない、と思う。けれど、フブリはそのときも今と変わらず彼女の傍にい続けることができるかと確信していた。

「明日、フブリのお披露目パーティーだろ」

ぼうつとしているフブリの頭を小突き、ツバルはいたずらっぽく笑った。

「お披露目って……言っておくけど、私は王さまになんかなるつもりはないよ。明日は単なるリラの快気祝い。私は一般客として出るつもり」

もとより、王になるためにカラアへ来たわけではない。リラが記憶を失った以上、今は彼女を支えることだけが自分の役目だとフブリは思う。先のことはわからないが、大切な叔母を守りたい。そう思った。

「そう言うと思ってたよ」

ツバルは、今度は声を出して笑った。

「でも、お前は人の上に立つのが向いてると思うぜ？」

ひょうひょうとした、能天気ないつものツバルだ。フブリは安堵感を覚え、破顔した。真剣な彼も悪くないが、やはりツバルはこうでなければ。

「……おれは、リラを憎むことを何年も生き甲斐にしてきた。憎むことでああ、バレッタを守れなかった自分を擁護してたんだな、多分」

「そっか」

隣でツバルがぼつりと漏らした。フブリは、彼がどれだけバレッタのことを守りたかったのかを知っていたから、素っ気なく返事を返した。

「でもさ、フブリはリラを愛してやれたろ？ 『バレッタのため』なんて言って何年もリラを傷つける計画を練ってきたおれなんかよ、よっぽどすごいことだと思うんだ」

うん、とツバルは一人大きく頷いて見せた。だが、自分はそんな聖人のような考えはできない。

「私、リラのすべてを愛せるような人間じゃないよ」

フブリは小さく首を横に振った。

「本当は最初、リラのことが憎くてたまらなかった。シルヘットの思い出を奪ってお母さんを殺した人だ、って。私も殺してやりたいと本気で思った」

母を殺し、最果てを生け贄によって閉ざし、あまつさえ姪の命をも奪おうとした女。そう、その話を初めて聞いたときは、とんでもない国王だと思った。彼女を殺せと声高に言う旧女王派の気持ち

わかったのだ。

「だけど、憎いけど、認めなきゃいけないと思った。だって、リラはあんなに苦しんで、あんなにちっぽけな人だった。私が信じなきゃ、誰がリラを信じるの？」

バレッタと仲がよかったというリラ。それが本当の彼女であると信じなかった。

「そうだな……。うん、さすがおれの見こんだ女だ。絶対フブリは将来イイ女になるって」

ツバルは、歯を見せて笑った。

「やつぱ、お前すごいよ」

真顔で心底感心しているツバルに、フブリは思わず吹き出した。

「さっ、パーティーの準備しないとね！ ほらツバル早く！」

突然早足で駆け出した少女を見送りながら、ツバルは困惑したように頭を掻いた。フブリが焦れて彼の腕を掴み、回廊を走り出す。

「あゝ、若いもんは元気だねえ」

呟くツバルの背中が、どこか嬉しそうだった。

翌日は朝から大忙しだった。

兵士も侍女も総出で、広間にこつた返す各地の権力者をもてなしている。顔を見せないと失礼に当たるからか、兵士たちは重い兜を脱ぎ、それを脇に抱えて駆け回っていた。城門は更に悲惨で、リラの見舞いにやって来た者からただの野次馬まで、とにかく城中を囲うほどの民衆がそこに集っていたのだ。その現状に頭を抱えたのはオーガスタや文官たちだ。ツバルは外のことなど素知らぬ顔で、お祭りのようにはしゃいでいたため、オーガスタに雑用を押し付けられていた。

オーガスタはこれほどの大事にするつもりはなかったらしいのだが、民衆の噂話が各地の貴族方に伝わったらしく、リラの快気祝いは国を上げての大々的なものとなってしまったのである。

慌しく駆け回る臣下たちの隙間を縫って、フブリは広間に面した庭

園に逃げこんだ。

「す、すっごい人……！」

「私も驚いたわ」

リラは胸に手を当てながら、そわそわと辺りを見回している。いつもより装飾の多いドレスに身を包んでいる彼女は、別人のように美しかった。

「リラのお話はもう終わっちゃった？」

パーティーの主役、国王陛下のスピーチだ。これを聞きたくてずっと広間で待っていたのに、あまりに人が多いためたまりかねて外に出たのだ。

「これからよ。あ、そうだわ、フブリ」

リラは思い出したようにフブリの肩を叩いた。

「やっぱり貴女のことを紹介しましょう。こんな機会滅多にないし……本来なら王になるはずの貴女が名乗り出ていないなんて、あまりにも不自然よ」

フブリが王女であることは公言していない。それはバレッタの、娘を王族にしたいわけではないという要望によるものであり、フブリは侍女シルヘットの養女として育てられた。だからバレッタの死後、国王に即位したのはリラ・コスモレドである。それが、今のリラが知る真実だった。

リラは、十五年前からこれまでの記憶をすっかり失っている。だが、こちらからわざわざ辛い真実を語ることはない。フブリはオーガスタと話し合って、そういう結論に達したのだ。

「私は、フブリ・トリバンドラムとして十五年、生きてきたの。だから私はお城のこともよく知らないし、今更王族になりたいとは思わない。それに今の王さまはリラなんだよ」

「信じられないわ……。私は王なんて、そんな器じゃないのに……」
スピーチの原稿が彼女の手の中で皺になっているのに、フブリはすぐ気づいた。そっと彼女の手を両手で握り締めると、リラは恐る恐る顔を上げた。

「でも十五年、あなたは立派に王としてカラアを引っ張ってこれたんだよ。……自信をもって、リラ」

「……ありがとう、フブリ」

フブリが広間へ促すと、リラは一息深呼吸をして、最奥の壇上上がった。

その後ろ姿を、フブリは隅のテーブルからじっと見守っていた。拍手が広間全体を覆い、リラは怯えたような瞳で壇上の下を見下ろしていたが、やがて拙い口調でスピーチを読みはじめた。

「結局、自分の命を脅かすと思っていた大魔法に命を救われるとは、皮肉なものだな」

クルージュがリラの姿を眺めながら、呟いた。いつの間にか広間の隅には、三人の近衛が集まっていた。ツバルはフブリにグラスを手渡し、自身はオードブルの皿を貪っている。

「蘇生魔法だったとはな。確かにとんでもねえ大魔法だ……。オーガスタ、それでおれには教えなかったんだろ」

大きな海老に頭からかぶりつき、ツバルは口をモゴモゴさせながら言った。

「おれが、バレッタを蘇生させるためにフブリを利用するから」
スピーチに耳を傾けていたオーガスタが、少しだけ顔をツバルに向けた。

「いや、大魔法は、もとより誰もその正体を知ってはいけないものはずだった。誰も使うことのできないように、王が保管し大魔法使いが守るものだった。だが……すまない、ツバル。私は自分の一存であっても、リラを生かしてやりたかった。……大魔法使いとして決してあってはならない大罪だ」

その声はあまりに小さく、か細かったため、フブリは彼が消え入ってしまったような気がした。

「大魔法を使ったのは私だよ。オーガスタは何も悪くない。それに……」

うまく言葉が出なかったから、フブリはグラスの中身を一気に喉に

流しこんだ。喉元を通る冷たい感触が、気持ちの後押ししてくれる。「うまく言えないけど、私はリラに魔法を使ったとき、これでルビもシルヘットもアリカも、お母さんだって生き返らせられると思っただ」

フブリは手のひらに視線を落とした。今でも、自分に大魔法が使えするなど信じられなかった。まして、リラを生き返らせたという自覚があるわけでもない。

「でも……お母さんが生き返るのとリラが生き返るのって何か違う気がするよ」

口調はいつしか強いものになっていた。オーガスタが目を丸くしているのがわかる。

「リラは、生きなきゃいけない人だったんじゃないのかな……。だって、ずっと謝りたかったって言った」

フブリは、オーガスタを見据えた。

「リラにはまだ、やらなきゃいけないことがあると思うんだ」

ぼん、とフブリの頭に大きな手のひらが置かれた。フブリが驚いていると、ツバルが頭を乱雑に掻き乱した。フブリは嬉しいような、

困ったような顔で笑い、オーガスタを見上げた。

「私間違ってる？」

「いや……、間違っていたのは私のほうだ」

素っ気ない答えだったが、男がわずかに微笑しているのをフブリは見逃さなかった。

「……おれさ、蘇生魔法のことを知っても、バレッタを蘇生させようとは思わなかったかもなあ」

ぼつり、ツバルが咳く。

「何で？」

だってよー、と相変わらず間の抜けた声が彼の口からこぼれる。

「こんなバレッタそっくりのフブリがいるんだから、それだけで充分だって思っちまうよなあ」

かすかに笑っていたのかもしれない。ツバルは何が可笑しいんだ、

とでも言いたげにフブリを覗きこんだ。あまりに純粹な男の眩きが、フブリには何より嬉しかった。

「……ねえ、オーガスタ。ものは相談なんだけど、大魔法って壊せないのかな」

ごく自然に滑り出た言葉だったのだが、三人の近衛は皿を落としたり飲み物を吹いたり、言ったフブリが驚くほどのリアクションを返した。

「はあ!？」

「お前何言ってるかわかってるのか!？」

そんなに自分はおかしなことを言ったのだろうか。ごほごほ、むせているツバルの背をさすってやる。

「だってそんなものがあるから、カラアは閉ざされた。大魔法がなくなれば、カラアが襲われる心配も、最果てを閉ざす理由もなくなるでしょ？」

涙目のツバルは、フブリを凝視したまま動かなくなった。しかし、そんな状況の中で一人あっけらかんとしているフブリには、何故彼らがこんな反応をするのかわからない。

「大魔法を壊す……か。とんでもないことを言う。歴代の王の中にも、そんなことを考えた者はいなかった。かのバレッタですら、次元の穴の警備を緩めたくらいだったのに」

「この国を離れたフブリだからこそ、気づいたんだろう。狭い城内しか見えてない王には、何もわかるはずがないさ」

オーガスタが感心したように頷き、クルージュもそれに賛同した。

「いいだろう。壊してみようか、大魔法」

しばし腕組みをしていたオーガスタが、意気揚々と言い放った。

「本気かよ、お前!」

「っていうか、そんな簡単に壊せるものなのか!？」

ツバルとクルージュは食ってかかる勢いで驚愕の声を上げたが、

「さあ……、やったことないからなあ」

オーガスタが笑って首を揺らすと、盛大なため息をついてうな垂れ

た。

大魔法は代々国王が保管する。だとすれば、もしや……

「例えば……もし、王家の血が途絶えたら、大魔法はどうなるの？」

「使える者がいなくなるわけだから、当然消えるね」

案外さらりと答えられて、フブリは少しだけ驚いた。予想通りだったが、しかしそれを実行するには問題もある。

「フブリ……！ お前まさか」

滅多に見ない、焦るツバルの言葉を慌てて遮る。

「ううん、私一人いなくなったところで、リラがいる。血は途絶えない。それに私にはリラが必要だし、リラには私が必要だったこと、わかってるから。えーと、結婚しなければいいのかな？」

ツバルは大きく息を吐いて胸を撫で下ろした。

一生独身で子どもを作らずにいれば、自分たちの代で王族の血は途絶える。そう遠くない親戚もいるようだが、あくまで大魔法を有する資格を持つのは直系の子孫だけ、という話をオーガスタから聞いていたため、そうなるのだろう。だが、それでは自分たちが死んだ後、カラアを統治するものがいなくなってしまうという問題もある。

「王がいなくなればカラアは国として機能しなくなってしまうさ。カラアがなくなっては本末転倒だ」

オーガスタが微笑み、フブリは腕組みをして唸った。

「そっか……じゃあやっぱり」

「壊すしかねえな」

恐ろしく楽観的に言うツバルであったが、今は誰も咎めなかった。

やがて広間に拍手喝采が鳴り響き、フブリが振り向くと、壇上で頭を地につけそうなほどお辞儀していたリラが、こちらに向かって微笑んだ。壇上を降りるリラの周りには、たくさんの人が押し寄せたけれど彼女は聴衆の波にもみくちゃにされながら、名のある貴族たちの長話を断り、隅のテーブルに向かってくる。

王がこんな隅っこに来てどうするよ、とツバルが突っこんだが、リラがようやくたどり着くとそっぽを向いて黙ってしまった。

「お疲れさま」

フブリは優しく微笑んで、大切な叔母を迎え入れた。

鳴り止まない拍手と歓声の中、ルビーは一人、庭園から中の様子を眺めていた。

スピーチを終えた国王が、真つ先にフブリのもとに駆け寄る。リラを迎えるフブリは、それはとても幸せそうな笑みを浮かべていた。フブリに、言いたいことがある。けれど、それは自分が言っている言葉ではないし、それを言ったことで彼女の今の幸せを少しでも揺らがせてしまうことは耐えがたかった。

ルビーは、じつと少女を見ていた。

久しぶりにこぼれそうな笑顔を見せるフブリを見られただけで、もうよかった。叔母が、そしてあの頼もしい近衛たちがいれば、彼女はずつと笑っていられるだろう。

彼らに囲まれてこれから先、何年も笑っている彼女が想像できた。

それは、彼が最も望んだ光景だった。

ルビーはグラスをそつと置いて、静かに会場を後にした。

エピローグ - Epilogue

フブリは、幾分か会場が落ち着いてきた頃合いを見計らい、そつと広間を抜け出した。

それというのも、朝は一緒に会場設営を手伝っていたルビーの姿が見えなかったからだ。広間は民衆でごった返していたから、あまり人ごみの得意でない彼のこと、人の波に押されて会場の隅に追いやられているのではないかと思った。

しかし、ツバルたちと離れ広間を一周してみるも、彼の姿は見当たらなかった。自分が見逃しただけかもしれない、と思ったが、この広間の中で再度一人の少年を捜し出すのは骨だ。そこで、フブリは見知らぬゲストたちにルビーを見なかったかと聞いて回った。ルビーのことなど知る者はいないだろうが、そこはそれ、美貌の少年、と言えば大抵は通じる。フブリの読みは的中し、ルビーが庭園から城内へ戻っていくところを見たという情報を手に入れることができた。

外はひっそりと静まり返り、広い回廊全体が冷たい空気に包まれていた。朝はまだ料理やテーブルを運ぶ臣下たちで廊下も騒がしかったのだが、今は数人の侍女が空になったオードブルの皿を持って往復しているくらいで、落ち着いている。

彼女たちが厨房に向かうのを尻目にし、フブリは階段を上った。上には、オーガスタが用意してくれた自分たちの個室がずらりと並び、その一つのドアが数センチ開いているのを見つけ、フブリはそつと中を覗いた。

「ルビー……？」

見慣れた少年の後ろ姿を発見し、フブリは部屋に入った。大きなほころびだらけのリュックに、ルビーが粗雑にものを詰めこんでいる。そのリュックには見覚えがあった。一緒に旅をしている間、ずつと彼が背負っていた荷物袋だ。

「フブリ……。ええと……。ちょっと今、忘れ物を、思い出して
最初は驚いたような顔をしたルビーだが、微笑んで言った。

「嘘だ。ルビー、嘘をついてる」

「嘘じゃないよ」

ルビーはフブリに背中を向けて、はつきりと言った。

「出て行くつもりなんだ。私に何も言わず、逃げる気なんですよ」
その丸まった背中に、フブリは冷たく言い放つ。これくらい強く言
わないとわからないのだ、この少年は。

「違うよ……。ぼくは、どこにも行かないよ」

「嘘。私、わかるんだから。ルビーは、自分がルビーじゃないから、
私に申し訳ないから、逃げるんだ」

追いつめるように、突き刺すように口調を強める。

「違う」

ルビーは、深呼吸を一つして静かに首を横に振った。

「ぼくは……。確かに、出て行こうと思った。でも、それがフブリの
ためだと本気で思ったからだ。ぼくがクイルビーでないことが知れ
てから、ずっと考えてた……。ぼくの居場所は、ここにはないんだ」
無性に腹が立った。『フブリのため』？ その行為が自分のために
なるなんて、本気で思っているのか。結局居場所を否定しているの
はルビー自身ではないか。

「あなたの居場所はここだ！」

たまらず、フブリは叫んだ。ルビーの肩を強引に掴み、自分のほう
を向かせる。辛そうに眉をひそめる少年の表情を見ているのが切な
くて、フブリは顔を歪めた。

「前にも言ったよね。あなたが、幼なじみのルビーじゃなくても、
私にとってあなたはルビーでしかないんだよ。幼なじみのルビーも、
今のルビーも私にはかけがえのない大切な人なんだ」
諭すように言うも、ルビーは首を横に振るばかりだ。

「辛いんだよ、やめてくれよ。ぼくは長い間フブリを騙して傷つけ
ていた卑劣で最低な男だ。誰かに大切だなんて思われる資格なんて

ない。フブリと同じ道はもう歩けないんだよ！」

ついに、ルビーも大声を出した。その勢いに、フブリは思わず息を呑む。彼がこのように怒声を張り上げるのは、大樹の穴の中で言い合ったとき以来だ。けれど、フブリはもう彼の癩癩も怖くはなかった。

「嘘つき」

低く呟くと、ルビーの体が小さく動いた。

「もうわかってるんだから。私たち何年一緒にいると思ってるんだ。本当はここにいたいくせに」

「違う」

「あなたが一人で出て行って、それで私が喜ぶなんて本当は思っていないくせに！」

「違う！」

「どうして自分の気持ちを否定するんだ！ 馬鹿ルビー！ バカ、

バカ！ 大バカ！」

フブリは、ルビーに抱きつくくと、わんわん声をあげて泣きはじめた。

ルビーは自分にしがみついて泣き出した少女の肩に触れようとして躊躇した。胸元で彼女が切ない嗚咽を漏らすたび、胸が締めつけられるような痛みを感じてたまらなくなる。

こうなるのが嫌だった。

自分が何もかも悪いのに、そんな自分のためにフブリが泣くのが、何よりも辛かった。自分はそうされるに値しないのに。

「泣くなよ……」

口にして、何て偉そうなことを、とルビーは言葉を続けられなかった。喉元に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。いつの間にか、自分も泣いていたのだ。しかしフブリは、ルビーがそれを押さえこもうとしているのを見通していたように追い討ちをかける。

「一緒にいるのに資格なんて要らないでしょ！？ そんなわかりきってること、どうしてわからないふりするの！」

涙で潤んだ瞳をルビーに向け、フブリは叫んだ。

「私に言ってもらいたいでしょ！？ここにいて欲しいよって言うて欲しいんだ！自分の気持ちだけは棚に上げて卑怯だよ！」

「わかってるよ！」

これ以上大声を出すつもりはなかったのに、押さえ切れない想いが爆発してしまった。体中が興奮で熱くなっていくのがわかる。

「フブリがどれだけぼくを本気で引きとめようとしてるのか……ぼくのことをどれだけわかってくれてるのか……！ぼくは、出ていくって言って自己満足に浸っているだけなんだ！ぼくは、ぼくはぶわっ、と感情が大粒の涙になってあふれ出した。

興奮が早々と冷えていくのに比例して、声のトーンが一気に下がる。「一緒にいたいよ。ぼくは、ひとりが……クイルビー・ヴォルケツトである自分を失うのが……」

声が喉に詰まって、震えた。

「怖いんだ」

ヒツ、としゃくりあげる合間に本音が漏れた。

泣きながらフブリの背中に恐る恐る腕を回すと、彼女の手も強く抱きしめ返してくれた。

「クイルビーじゃない、本当の自分としてフブリに会いたかった……。本当のぼくは誰なのかわからない……。クイルビーでなくなったら、ぼくは本当に何者でもなくなってしまうような気がして、怖いんだよ」

「自分が誰だかわからないの？」

ルビーが頷き、フブリは首を傾げて微笑んだ。

「誰でもいいじゃない」

あっけないほど簡単に答えは出た。そういうことをさらりと伝える少女に、ルビーはいつものことながら閉口してしまう。もう、フブリの傍にはいられないと思った。クイルビーでない自分が、ここにいることは許されないと、そう思っていた。だがそうした負の感情すべてを、目の前の少女は何でもないことのように棄てることで

きるのだ。

「誰でもいいよ」

耳元に囁かれる言葉はくすぐったくて、けれどとても温かくて、ルビーは口元を、への字に歪めた。

しばらく、二人で昔話をした。夕日の影が色濃く浮き出る真っ白な廊下の隅に並んで座り、フブリはルビーに寄り添いながら足を無造作に投げ出した。

シルヘットの思い出が燃やされ、村を出てから随分長い時間が過ぎたように思える。

「……懐かしいな……村を出てからもう一年になるんだね」

フブリは、窓越しに暮れる夕日を恍惚として見つめた。

「ぼくが止めるのも聞かずに、フブリは出て行ったんだよね」

「そうそう！」

広い回廊に二つの笑い声が響く。

銀の騎士が火を放つてから、逃げるように村を出たのを覚えている。院長先生やパン屋のおばさん、小麦畑のおじさんも、旅に出ようとする自分たちを一晩中説得してくれた。フブリは悪くない、シルヘットが罪人なんて何かの間違いだから

フブリは目頭が熱くなるのを感じ、慌ててまなじりをこすった。

「……ぼくが、クイルビーになって君を監視してたのはさ……」

「ルビー、無理しなくていいんだよ」

ルビーは静かに首を横に振った。

「いいんだ。フブリには本当のこと、知ってほしい」

何かを決意したような少年の瞳に囚われる。フブリは何も言わずに頷いた。

「ぼくは、気づいたときにはカラアにいて、ここがどこなのかも、自分が誰かもわからなかった。ぼくを拾ってくれたオーガスタさんが言うには、きっとぼくが何か強いシヨックを受けて記憶を失ってしまったんだらう、って話だった」

ルビーが横目で笑うと、フブリは素直に相槌を打つ。まるでお互いの気持ちを何度も確認し合っているかのようだ。

「記憶のないぼくはクイルビーと年恰好も似ていたから、死んだ彼の代わりになってフブリっていう女の子を守ってくれと頼まれた。ぼくは混乱していたから何が何だかわからなかったけど、カラアを出て村に行ったとき、墓地で泣きながら眠っている君を初めて見て子供心に可哀そうだな、って思った。何でこの子はこんなに泣いているんだろう、って……」

ルビーが転落死してから、自分は毎日毎日、それこそ大人たちが心配するくらい墓地へ通っては泣いていた。思い出す幼き日の自分は、とても小さく無力な子どもだったと思う。

「ぼくは、その夜みんなに魔法をかけた。記憶の魔法をね……オーガスタさんに教わったその魔法で、死んだクイルビーになりすました。ぼくはひとりだったから、自分が誰かもわからない子どもだったから、誰かになりたくてしょうがなかった。誰かにぼくっていう存在を証明してもらいたかった」

「うん……」
胸がすく思いで、フブリは話を聞いた。ルビーが本当の自分を語ってくれることが嬉しかった。

「陛下が襲撃者たちを、暗殺者として仕向けたらどう？ あれはオーガスタさんにとってはまったく想定外の出来事だった。でもオーガスタさんは陛下の下を離れられず、ぼくに連絡を取ることもできなかった……だから、ぼくは何が起こっているのかわからないまま、君と一緒に村を出たんだ」

「そうだったんだ……」
ルビーが襲撃者の仲間だとしたら、命がけでフブリを守っていたことに疑問が残る。しかしイエリコのような襲撃者を放ったのは、あくまでリラだ。リラの下にいたオーガスタ、そしてその下にいたルビーは、リラの味方であると同時に、フブリの味方でもあったのだ。「カラアの居場所を知るツバルさんが怪しいってことにはすぐ気づ

いた。旧女王派の人間が、フブリを捜していつか村にたどり着くかもしれない。だけど、彼らに従ってフブリをカラアへ行かせるようなことがあってはならない、ってオーガスタさんに言われていたからね」

「じゃあ、ツバルとクルージュが旧女王派の人間だつてこと、ルビ―は気づいてたの？」

「そうだとすれば、最果てに至るまでの、ツバルに対するルビ―の異常な不信感にも頷ける。」

「それを確信したのは最果てに着いてからだつたけど。でも、ぼくは自分が本物のクイルビ―じゃないつてことをフブリに知られるのが怖くて、あのときははっきり言えなかった」

「気持ちが悪らいでいくのを感じる。別人のように見えていたルビ―が、今はもうとても近い、いつものルビ―に戻っている。それがとてつもなく幸せで、何よりもかけがえのないことに感じられた。」

「ルビ―は私を守ってくれていたんだね」
瞳を伏せて、フブリは呟いた。心の中に沈んでいたわだかまりが、一度に消えてなくなった気がした。

「……二人に、大魔法使いが最高の魔法をプレゼントしてあげよう」
突然の背後からの声に驚いて振り向くと、そこにはいつの間にか灰髪の魔法使いが立っていた。フブリは立ち上がり、ルビ―もそれに続いた。

「君は、私がどうやって君を捜し出したかわかるかい？」

首を傾げるフブリは、わずかに微笑んでいた。

「オーガスタは返事を待たずに話し続ける。」

「私は、大魔法の波動で君の存在に気づいた。君が大魔法を使わなければ、私は君が生きていることすら知らなかった」

フブリの表情が一瞬で強ばる。

「大魔法を使った……私が？」

「別に、責めているわけじゃない。君は何も知らなかった。そう、五年前の秋、每晚墓地の前で泣きじゃくる君は、無意識のうちにそ

れを使った」

急に頭の中が空になったように、目の前が白くなった。

「その波動に私が気づき、すぐにフブリのもとへ向かい、ルビーを連れてカラアへ戻った。一度死んだ人間が生き返ってピンピンしてたら村中が混乱するからね。リラの監視があつたから、村中に魔法をかけている時間もなかった」

信じられない。夢物語を聞いているかのようだ。だが、オーガスタの言葉はそれが現実であることを指し示すかのように、耳の奥にゆっくり響く。

「ルビーは大魔法の副作用で、今まで生きてきた記憶がすべて消えていたから、真実を語れなかった。大魔法の正体をルビーに知られるわけにもいかないからね。……と、この辺りは蛇足だったかな」
ぽかんと口を開ける二人にオーガスタは微笑んだ。

「はつきり言えるのは、君が紛れもないクイルビー・ヴォルケツトだということだ」

「ルビー！」

フブリは、立ち尽くすルビーに抱きついた。

ルビーがかすれた涙声で何かささやき、フブリの背に腕を回し力強く抱きしめた。その抱擁はきつく強すぎるものだったし、胸の中もいっばいで苦しかった。

抱きしめあつた体温から、腕の強さから、フブリはルビーがそこにいる喜びを感じ取った。

ひとりでは感じることでできない喜びだった。感謝だった。

それを彼に伝えたかったが、言葉では到底表せなかった。むしろ声に出すことで価値が壊れてしまうような気がした。

嬉しいのか悲しいのかわからない。ただ、二人が同じ気持ちでいることだけは間違いなかった。お互い同時に顔を見合わせて、笑った。やがて二人分の笑い声は廊下中に響き渡り、侍女や兵士たちが不思議そうな顔で集まってきた。ツバルやクルージュも広間から顔を出した。それを遠くから見つめていたリラは、やがてツバルに強引に

引き出され、輪の中に入った。

誰かが二人につられて笑い出し、いつしか城内は彼らの笑顔に満たされた。

幸せそうなそれを背に受けながら、オーガスタは夕暮れの陽だまりの中に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4296e/>

Magic of Kingdom

2010年10月17日16時51分発行